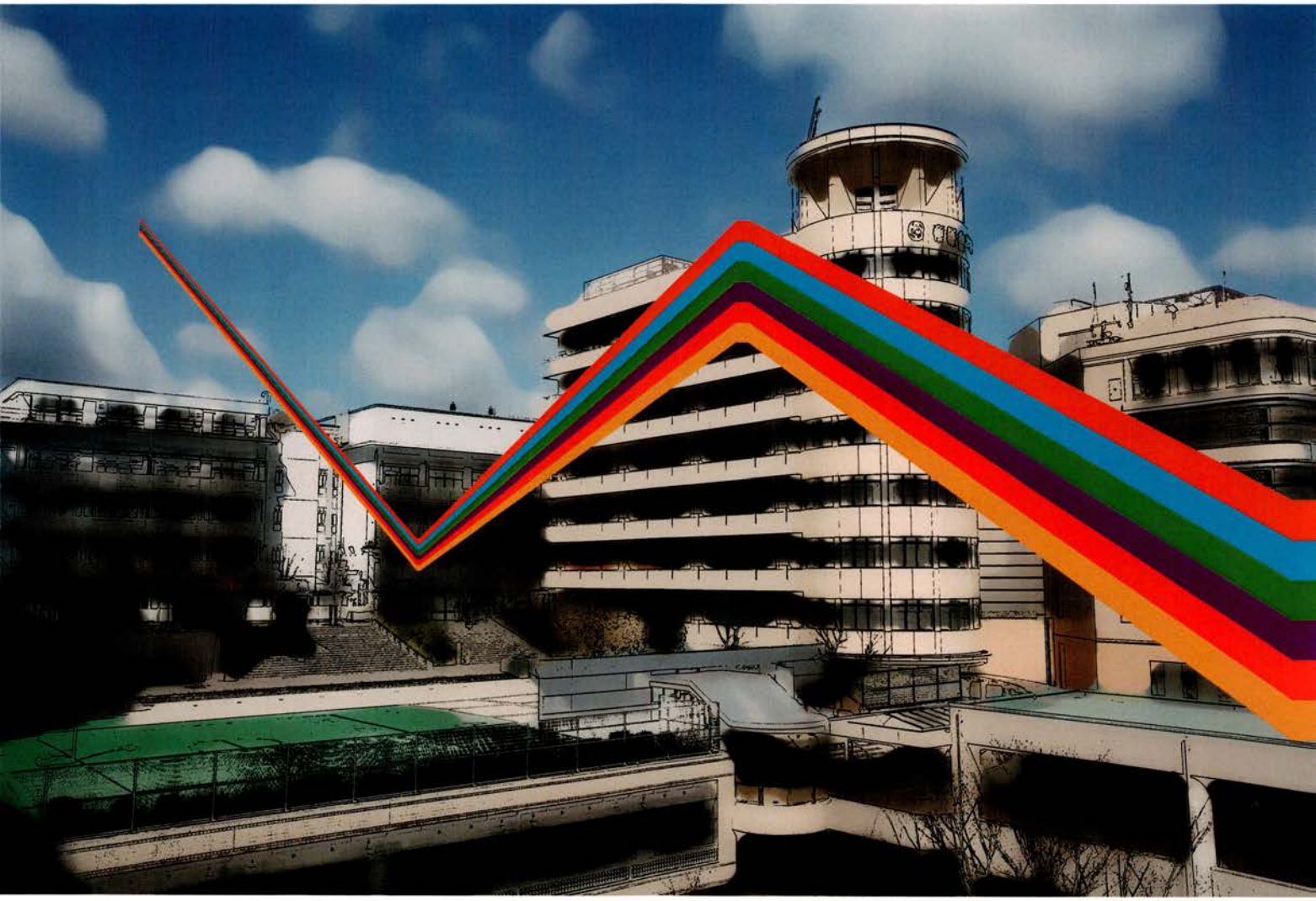
日本応用心理学会
第90回大会発表論文集

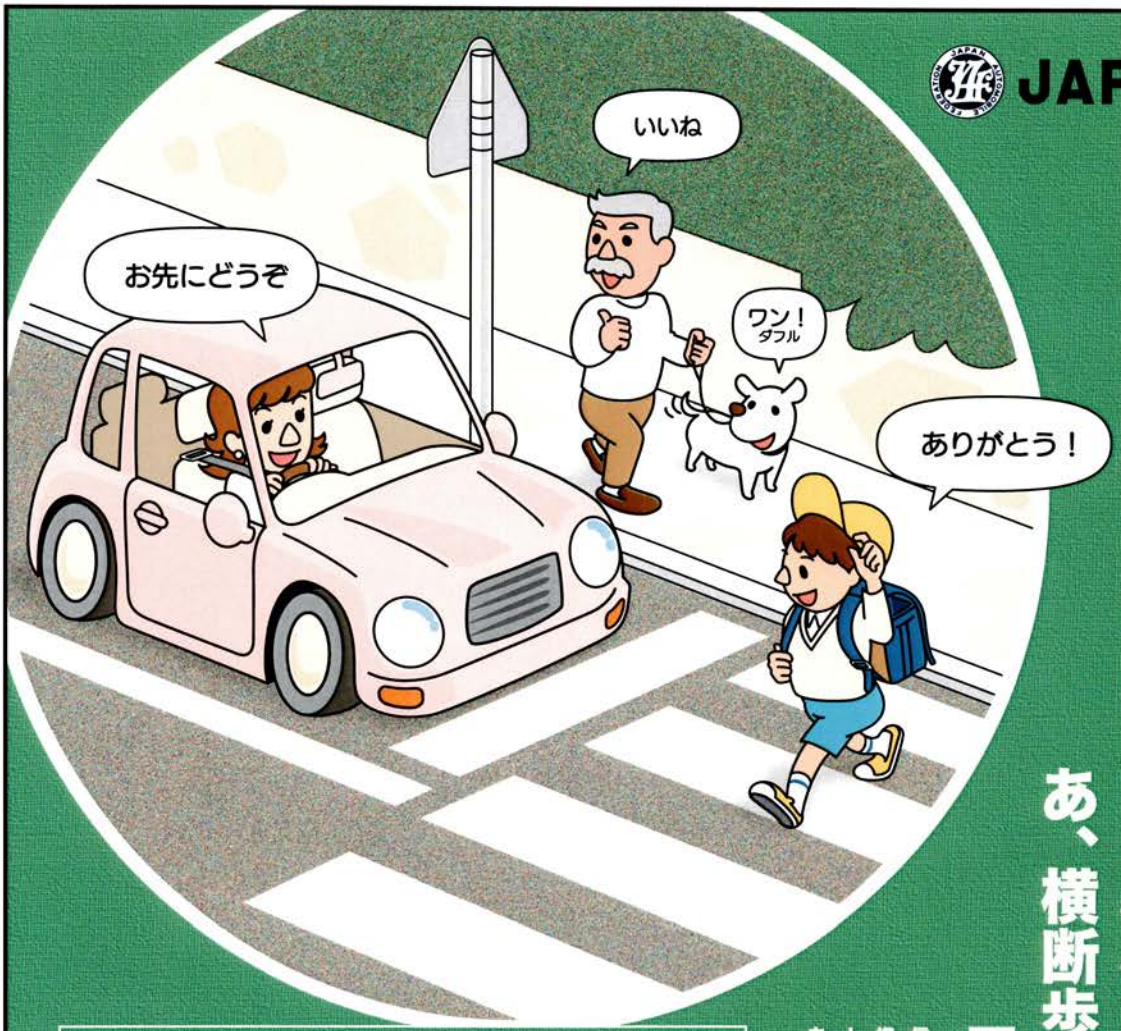


2024年8月27日（火）～28日（水）

帝塚山大学
TEZUKAYAMA UNIVERSITY

教養、歩み続けて
SINCE 1964
60th

JAF



あ、横断歩道にも（ここ）思いやりティ。

信号機のない横断歩道。みなさんのご近所にもあるのでは？
横断歩道を渡ろうとしている小学生を見てクルマが一時停止。
人は小さな「思いやり」に触れた時、
自然と笑顔になるのかもしれません。

こんな光景をもっと増やしていきたいという想いから生まれた
JAFの『思いやりティドライブ』プロジェクト

2016年から続けているこの活動も今年で9年目を迎えました。うれしいことにイラストのような場面で一時停止するクルマは年々増加中ですが、未だ半数程度に過ぎません。私たちJAFが目指す「安全で、笑顔あふれる交通社会」を実現するためには、みなさんのご賛同とご協力を必要としているのです。

歩行者が待つ信号機のない横断歩道で一時停止したクルマの割合

※調査方法・結果の詳細は
JAFのWebサイトをご確認ください。



一人ひとりの心の中に、『思いやりティドライブ』

Omoiyalty Drive
思いやりティドライブ

詳細は特設ウェブサイトをご覧ください
JAF 思いやりティ 検索

目次

館内案内図・タイムテーブル i

特 別 講 演 vi

大会企画シンポジウム vii

大会企画特別セミナー viii

研修会 ix

自主企画ワークショップ xii

ポスター発表演題リスト xviii

一般発表原稿 ..... 1～97

教育発表要旨 100

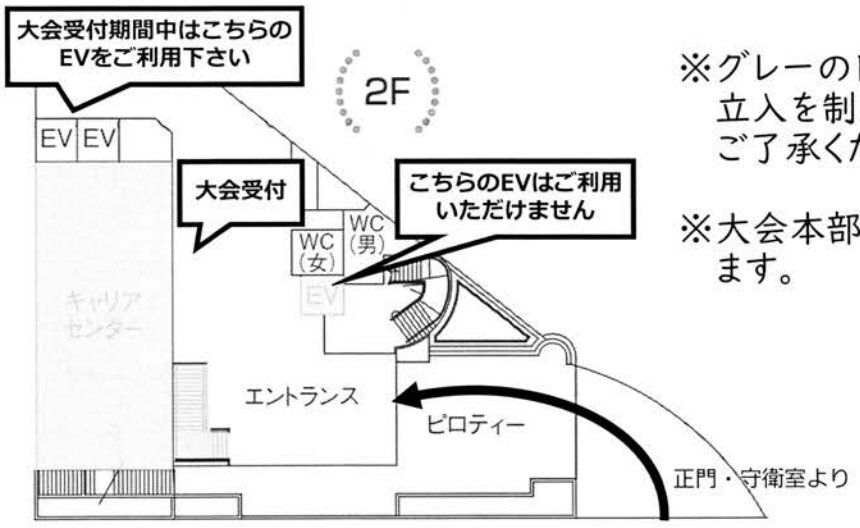
索引

日本応用心理学会第９０回大会 賛助団体等御芳名

日本応用心理学会第 90 回大会 大会委員

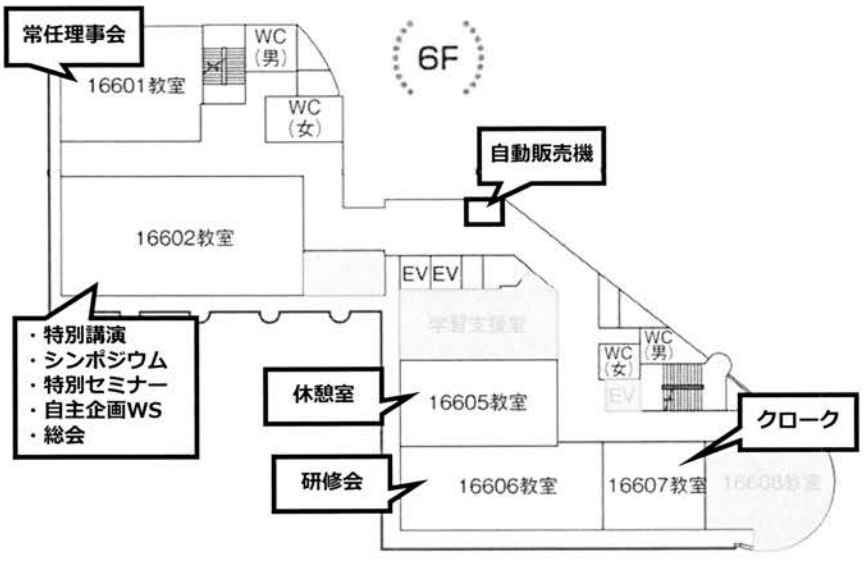
館内案内図・タイムテーブル

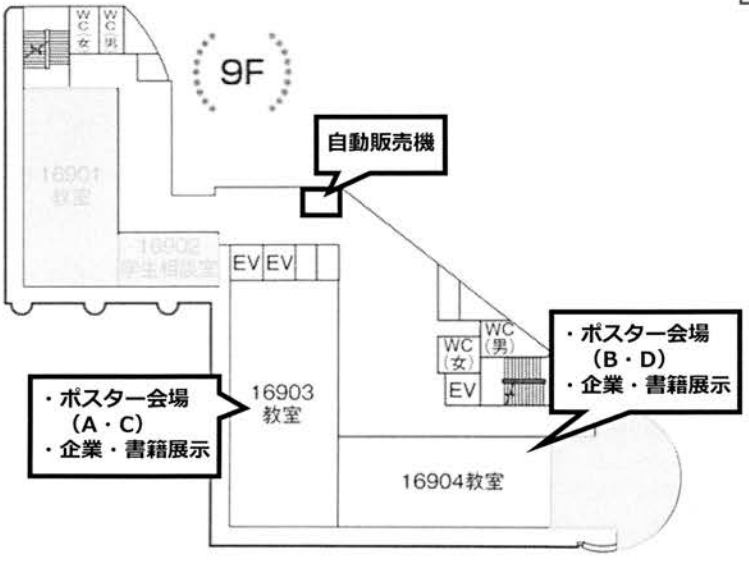
館内案内図



※グレーの区画は、スタッフ以外の立入を制限する区画です。ご了承ください。

※大会本部は 16501 教室にあります。





タイムテーブル 8月27日(火)

大会受付　9:00～17:30
〔16号館2階〕

研修会A　9:45～10:45
【乳幼児期の発達の魅力をとらえた保育・子育て～子どもたちの「言葉にならない言葉」を受けとめる～（仮）】
〔16号館6階16606教室〕

ポスター発表1A
9:45～11:15
スポーツ・医療・災害
〔16号館9階16903教室〕

ポスター発表1B
9:45～11:15
社会・文化
〔16号館9階16904教室〕

総会
11:30～13:00
※昼食をご用意しております
〔16号館6階16602教室〕

大会企画特別講演
13:15～14:15
【交通心理学における地域でのフィールド研究の実践】
〔16号館6階16602教室〕

自主企画WS①
14:30～16:00
【交通社会の諸問題を質的・個性記述的に解決する意義と方法】
〔16号館6階16602教室〕

ポスター発表1C
14:30～16:00
教育・健康・看護
〔16号館9階16903教室〕

ポスター発表1D
14:30～16:00
原理・人格・福祉
犯罪・文化・産業
〔16号館9階16904教室〕

大会企画特別セミナー
16:15～17:30
【奈良酒を知る／伝える～酒販店経営者と研究者の対話～】
〔16号館6階16602教室〕

懇親会
〔14号館　地下食堂〕

クローク〔16号館6階16607教室〕

企業展示〔16号館9階16903・16904教室〕・**休憩所**〔16号館6階16605教室〕

タイムテーブル 8月28日(水)

大会受付　9:00～16:00
〔16号館2階〕

研修会B
10:00～11:00
【AI技術と心理学による融合：心理学の社会実装を目指して】
〔16号館6階16606教室〕

自主企画WS②
10:00～11:30
【マインドフルネス体験の海外発信】
〔16号館6階16602教室〕

ポスター発表2A
10:00～11:30
社会・産業
感情・交通
〔16号館9階16903教室〕

ポスター発表2B
10:00～11:30
社会・感情
認知・発達
〔16号館9階16904教室〕

常任理事会
11:45～12:45
〔16号館6階16601教室〕

大会企画シンポジウム
13:00～15:00
【大学と地域の協働― 帝塚山大学におけるグループ・アプローチ実践 ―】
〔16号館6階16602教室〕

自主企画WS③
15:15～16:45
【ロビンフッドたちの青春
～「もみじ・あざみ」での生活と療育の発達的・臨床的意義～】
〔16号館6階16602教室〕

ポスター発表2C
15:15～16:45
教育・産業・交通
〔16号館9階16903教室〕

ポスター発表2D
15:15～16:45
産業・認知・臨床
〔16号館9階16904教室〕

クローク〔16号館6階16607教室〕

企業展示〔16号館9階16903・16904教室〕・**休憩所**〔16号館6階16605教室〕

第 90 回大会企画

特別講演

シンポジウム

特別セミナー

特 別 講 演

8 月 26 日（火）13:15～14:15　16 号館 6 階 16602 教室

交通心理学における地域でのフィールド研究の実践

講演者：

蓮花 一己（帝塚山大学 名誉教授・客員教授）

司会：

谷口 淳一（帝塚山大学心理学部 教授）

交通心理学では、交通状況の多様性により、フィールド研究に必要性が高い。フィールド研究の意義は高いが、研究業績になかなか結び付かないこともあり、若手研究者がフィールド研究に参加するハードルが高く、研究者の層が薄い。しかし、交通事故を防止し、国民の安全と安寧をもたらすために、研究の意義や達成感も高く、研究への若手の積極的な参加を期待する。本講演では、私が仲間と一緒に実践してきた、奈良県及び関西でのフィールド研究を概説する。

講演では、最初に、“フィールド（場）”の意味と役割について解説する。さらに、交通心理学分野の具体的な研究として、1)阪奈道路や名阪国道の研究と 2)高齢自転車利用者の研究を紹介する。交通事故は道路と人間(交通参加者)の相互作用で発生することが多く、道路側の影響の強い場合と人間側の影響が強い場合の双方を取り上げる。

何らかの安全策を実施した場合に、その効果の有無やその程度を調べる「効果研究（有効性研究）」も重要である。効果研究に必要な条件を述べたのちに、ドライバーへの訓練手法や道路対策を中心に、効果研究の事例を紹介する。

【蓮花先生ご略歴など】

帝塚山大学客員教授・名誉教授。京都府出身。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程。帝塚山大学教養学部講師、心理学部教授、心理学部長等を経て、2017 年 4 月より帝塚山大学学長。2023 年 3 月退職。交通心理学を専門として、ドライバー行動や事故多発地点の分析、交通参加者への教育手法の開発等の研究を実施。近年は、高齢ドライバーの運転行動や対策の研究を実施中。ドイツ、フィンランドに留学及び在外研修。内閣府第 7～11 次交通安全基本計画専門委員/日本交通心理学会会長/日本応用心理学会理事/（一社）日本自動車連盟副会長/（公財）国際交通安全学会理事/科学警察研究所顧問等。

大会企画シンポジウム

8月28日(水)13:00~15:00 16号館6階16602教室

大学と地域の協働 ―帝塚山大学におけるグループ・アプローチ実践―

大学は長く「知の拠点」としての役割を地域社会の中で果たしてきた。しかし,近年のさまざまな社会的課題の解決のために大学はより地域社会の課題に積極的に取り組む姿勢が求められている。臨床心理学の中でも,カール・ロジャーズにより創始されたパーソンセンタード・アプローチでは,エンカウンター・グループをはじめとして,さまざまなグループ・アプローチを用いて地域支援を行っている。本シンポジウムでは,エンカウンター・グループ研究の第一人者である野島一彦先生により「地域支援とグループ・アプローチ」というテーマでご講演いただく。

次に,話題提供第一部(担当:中地,小西)として,帝塚山大学でこれまで行われた地域支援のためのグループ・アプローチやプロジェクトに関して,現在までに実際にどのような大学と地域との協働がなされてきたのかを紹介する。話題提供第二部(担当:山口,心理学部学部生)では,現在帝塚山大学で行われている教育現場をフィールドとするプロジェクトや具体的なグループ・アプローチを紹介し,大学が地域で果たす役割について検討したい。

最後に,指定討論者の野島一彦先生からコメントをいただき,フロアも交えた積極的な意見交換の場としていきたい。

話題提供者:

中地 展生(帝塚山大学心理学部)

小西 浩嗣(帝塚山大学)

山口 祐子(帝塚山大学心理学部)

帝塚山大学心理学部生

指定討論者:

野島 一彦(九州大学名誉教授)

【野島先生ご略歴など】

九州大学名誉教授・跡見学園女子大学名誉教授。九州大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得後退学。博士(教育心理学),九州大学。公認心理師,臨床心理士,日本集団精神療法学会認定スーパーバイザー。主な著書として『エンカウンター・グループの新展開 学びの書』,『エンカウンター・グループの新展開 出会いの書』(共著,木立の文庫,2020),『臨床心理学中事典』(監修,遠見書房,2022),『臨床心理学概論 第2版』(共編,遠見書房,2023)ほか多数。

メールアドレス nojimakazuhiko{at}yahoo.co.jp ※[at]はアットマーク

野島一彦スーパービジョンルーム https://sv.live-now.jp

YouTube「野島一彦のカウンセリング小話」(毎週金曜日 17時発信)

大会企画特別セミナー

8 月 27 日（日）16:15～17:30　16 号館 6 階 16602 教室

奈良酒を知る／伝える～酒販店経営者と研究者の対話～

話題提供：

登　和哉（株式会社登酒店）

河口　充勇（帝塚山大学文学部）

奈良の地には、大神神社（桜井市）や正暦寺（奈良市）など「酒の発祥」をめぐる歴史文化資源が豊富に備わっている。県内各地（山間部も含む）に約 30 の酒蔵が広範囲に散在しており、それゆえ「奈良酒」と総称される酒は非常に多様性に富んでいる。県内の日本酒生産量は多くないが（全国の 1%程度）、近年、小規模かつ個性豊かな地酒ブランドが数多く台頭し、業界内外で大いに注目を集めるようになっている。

こうした近年の「奈良酒ルネサンス」と形容すべき活況はいかにして可能になったのか。奈良酒造業への社会学的なアプローチを通して、河口は、1990 年代以降の奈良において①事業承継を契機とした経営革新（危機的状況下での「脱常識」的発想にもとづく様々な新規事業）、②個性化戦略の遂行（「発祥地」ブランド化、菩提酛造り、木桶造り、無濾過生原酒、地元産酒米の積極的活用など）、③異業種間協力ネットワークの構築（「奈良酒」振興にかかわる様々な地域連携事業、酒蔵と酒米生産農家や酒販店の「顔の見える関係」の構築など）の 3 つが相互に連関しながら起こり、これにより近年の活況が導かれたのではないか、との仮説を立てるにいたった。

この数年、河口は、上述の「奈良酒ルネサンス」実現において多大な貢献をなした地元の地酒専門酒販店経営者へのライフヒストリー調査を実施しており、特に彼らが「造り手」と「飲み手」の間で果たしてきた「つなぎ手」としての多面的役割に着目している。

今回のセミナーでは、こうした「つなぎ手」的役割を率先して担ってきた酒販店経営者（登）との対話を通して、奈良酒の魅力創造・発信の軌跡を振り返るとともに、その未来への可能性について検討する。

【話題提供者ご略歴など】

登　和哉（のぼり　かずや）

株式会社登酒店 4 代目。奈良県天理市出身。専修大学商学部卒業。大学卒業後、アパレルメーカーに販売員として約 8 年間勤務した後、2006 年に登酒店入社。以来、両親とともに家業を切り盛りしながら、地元奈良をはじめとする全国各地の醸造元との独自のネットワーキング、店頭販売方法の改善、若年世代向け「酒の会」の企画・運営、奈良酒の PR など様々な活動に取り組んできた。

河口　充勇（かわぐち　みつお）

帝塚山大学文学部教授。奈良県桜井市出身。同志社大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程修了。博士（社会学）。専門は比較社会学、社会調査。関心領域は「越境」と「継承」にかかわる様々なこと。好きが高じて日本酒の研究に着手してもうすぐ 20 年。関連研究業績として「奈良酒造業への社会学的接近ー暫定的な研究枠組みー」『奈良学研究』第 24 号（単著、2022 年、帝塚山大学奈良学総合文化研究所）、『産業集積地の継続と革新ー京都伏見酒造業への社会学的接近ー』（共著、2010 年、文眞堂）などがある。

研修会

※ 研修会の会場は、いずれも 16 号館 6 階 16606 教室です

研修会A　　8 月 27 日（火）9:45～10:45

乳幼児期の発達の魅力をとらえた保育・子育て
～子どもたちの「言葉にならない言葉」を受けとめる～

講師：田中　真介（京都大学国際高等教育院）

概要：

国際連合は、21 世紀に入った 2001 年から 2010 年までを「世界の子どもたちのための平和の文化と非暴力の 10 年」と提起しました。その後、「すべての人びとによりよい健康と教育を」と各国に呼びかけてきました。

子どもたちの生命・健康・発達を大切にしたいい保育実践は、性能のよい一眼レフカメラで鮮明な美しい写真を撮影することにたとえられます。「フイルム」は保育内容、「シャッター」を切るのは保育者。「発達を見る」とは、対象に正確に焦点を合わせる営みといえるでしょう。ファインダー（私の眼）から見える子どもは、私たち次第で変化します。「発達を学ぶ」ことによって、私たちの眼は豊かになり、子どもは新たに発見されます。そして私たちは子どもだったのだから、子どもの発達の理解は、私たち大人自身の未来を新たに発見することにつながるでしょう。過去が新たに発見され、未来が新たに構想されていきます。

本研修では、子どもたちの「自己信頼性」（自分の価値を発見し尊重する力）と「社会性交流性」（自分と世界とのつながりをつくり尊重する力）の育ちが発達をどのように支えているかに焦点をあてます。子どもたちの発達の重要なポイントと、発達を支える保育・子育てのよりよいあり方を学び、子育てに悩むクライアントを励ます新たな観点と具体的な手立てを考えていきましょう。

研修会B　　8 月 28 日（水）10:00～11:30

AI 技術と心理学による融合：心理学の社会実装を目指して

講師：紺野　剛史（富士通株式会社コンバージングテクノロジー研究所　プロジェクトディレクター）

概要：

複雑化する社会課題に対し，AI 技術や心理学などの単一分野の知見だけで解決することは困難となっている．例えば、特殊詐欺は，巧妙かつ新たな手口が次々に導入されるため，AI 技術や心理学などの単一技術だけでは解決することは困難です．特殊詐欺の解決において，AI 技術と心理学の知見を相互に取り入れた融合技術（コンバージングテクノロジー）の開発が求められます．

特殊詐欺防止において，従来手法は，加害者側（詐欺師）の音声をキーワード解析することで詐欺検知を行っていた．しかし，新たな手口が次々に変化する毎にキーワードを更新することは運用側の負担が大きく現実的ではない．そこで，本提案では手口が変化しても被害者（高齢者）の「騙される」という心理状態は共通と仮定し，我々は高齢者のバイタル情報から不安な感情を推定することで，「騙される」という心理状態を判定する特殊詐欺検知 AI の開発を目指している．

本研修では，2022 年に開始した尼崎市実証で現在進行中のコンバージングテクノロジーの研究を紹介しながら，心理学研究の可能性を検討してみたい．

自主企画ワークショップ

交通社会の諸問題を質的・個性記述的に解決する意義と方法

企画・話題提供者：大谷　亮（(一財) 日本自動車研究所）
司会・話題提供者：小菅英恵（(公財) 交通事故総合分析センター）
話題提供者：中西　誠（株式会社電脳）
話題提供者：中野友香子（科学警察研究所）
話題提供者：横井川美佳（京都市児童療育センター「なないろ」）
キーワード：道路交通社会・質的/個性記述的研究・実践と理論

【企画趣旨】

道路交通心理学の研究目的として，人的要因に基づく交通事故の分析や機序の解明，運転適性検査の開発と運転者の選択，交通参加者への教育や啓発，人間特性に基づく自動車や道路交通環境の設計，法規や基準または標準の制定等への貢献があげられる（宇留野，1972）。

上記の目的に対して，一般の交通参加者，または子ども（大谷，2021）や高齢者等の特定母集団の心理的特性を量的かつ実証的に解明し，普遍的な事実を導き出す法則定立的なアプローチが主流となっており，適性診断機器の開発，一般および特定母集団への教育・啓発，さらには自動車や交通環境の設計等に資する資料が得られている。一方，交通参加者一人一人の悩みや課題等に対して，質的かつ解釈的に理解する個性記述的なアプローチの研究は必ずしも多いとはいえない。

交通事故死者数が減少する中，更なる低減に向けたきめ細かな対策の構築や，発達障がいや高次脳機能障がい，常習飲酒運転者等の臨床的対応等が求められる現場の状況を鑑みると，質的・個性記述的なアプローチに基づく研究の重要性は，今後も益々大きくなると考えられる。

本企画では，小菅英恵氏，中西誠氏，中野友香子氏より，交通社会の諸問題に内在する質的・個性記述的研究の必要性や意義等についてご紹介いただく。また，横井川美佳氏より，臨床領域における質的・個性記述的研究の実践例をご報告いただく。以上のご講演を通して，交通社会の具体的な諸問題を例として，質的・個性記述的研究の意義や課題を抽出するとともに，話題提供者間の質疑応答の後，フロアの皆様との領域を超えた議論を行う予定である。

【話題提供】

●小菅英恵（(公財) 交通事故総合分析センター）

高齢者の健康，安全，モビリティ維持は，我が国の重要な社会課題であり，近年，教習所と共同で，認知機能が低下した高齢者個人への安全運転指導の介入研究を行なっている。

高齢運転者は，独自の運転経験と個別の加齢変化の相互作用から個人差が極めて大きい。そのため，運転者教育の現場では，ヒューマンファクタの普遍法則だけでは，高齢運転者の理解や，個別対応となる問題改善に当てはめることが出来ない。

事故を起こさない運転を行うのは一人一人の運転者である。介入した相手の体験や意識にも目を向け記述することは，実学を目指す交通心理学において，介入相手の理解だけでなく，どのような介入手法が効果的なのかの見極めや，別の事例の行動等改善の具体の手がかりを得ることにもつながるのではないか，と考えている。

●中西誠（株式会社電脳）

近年，飲酒運転による事故は減少傾向にあるものの，酒気帯び運転で検挙されている者は年間2万件前後（内閣府，2023）と後を絶たず，飲酒運転で検挙された場合，その多くは運転免許取消処分か長期停止処分を受ける事となる。飲酒運転を繰り返す背景には常習飲酒者の存在が言われており（内閣府，2007），違反処分者講習カリキュラムの中にある特別学級では，飲酒運転違反者を対象とした飲酒学級が行われている。筆者が担当している飲酒学級では，長期運転免許停止処分者を対象とし，カウンセリングスキルを用いた受講生との対話を通して，再犯を防ぐための臨床的アプローチを行っている。その中で，飲酒運転者に対するアプローチの有用性と，長期停止処分を受けた飲酒運転者の類型化について，質的・個性記述的研究の意義を考えてみる。

●中野友香子（科学警察研究所）

本報告では，幼児の親を対象とした交通安全教育に関する研究事例を取り上げる。就学後に子どもだけで出掛ける機会が増えることを踏まえると，就学前から親とともに徒歩で移動する機会を活用して家庭教育を繰り返すことは，子どもが交通ルールを遵守した歩き方を習得するために有益だと考えられる。そこで，この研究では親による主体的な家庭教育を促すことを目指し，親向けの教育プログラムを試作して介入実験を行い，試作した教育プログラムの効果を検証した。

この研究事例では，量的データの統計分析を行うことにより，当該教育プログラムが想定通りの効果をもつことを確認した。さらに補足的に収集した質的データから，教育プログラムが想定外の効果をもつ可能性や，想定通りの効果を確認できなかった参加者の特徴について示唆を得られた。本事例を通して，質的・個性記述的アプローチの意義を考えたい。

●横井川美佳（京都市児童療育センター「なないろ」）

幼児期の子どもたちは，活動や興味の範囲を広げ，自らの世界を探求していく。保護者から離れ，主体的な行動が増えていく時期である。交通安全の基本的な知識やルールも，この時期から身につけていくことになるが，理解したルールをうまく遂行できない場合も多いと考えられる。

本報告では，発達に支援が必要な幼児期の子どもたちの「飛び出し」への対応について事例を取り上げる。「飛び出し」は「衝動性」のような子ども自身が持っている特性だけでなく，保護者の関わりや環境条件が大きく影響する。子ども・保護者・環境の視点から状況を整理し，どのような対応をすると，子どもたちと保護者の方が気持ちよく安全に帰路につけるかについて検討した。この事例を通し，実践による理論検証や仮説生成のあり方を提起し，理論と実践をつなげるための質的・個性記述的研究の意義について考えたい。

【参考・引用文献】

宇留野藤雄．(1972)．改定 交通心理学 技術書院．
大谷亮(2021)．歩行者事故低減に向けた子どもに対する安全教育および周囲の監視に関する研究．2021年度運用益事業（研究事業）に関する研究報告書．https://jibai-info.jp/result/pdf/2019-2021_seika.pdf（参照 2024.04.22）

（おおたに あきら・こすげ はなえ・なかにし まこと・なかの ゆかこ・よこいがわ みか）

マインドフルネス体験の海外発信

VR×茶道の可能性

○岩崎和子 1) 相島淑美 2) 益田恵美子 3)来田宣之 1)
1 京都工芸繊維大学　2 神戸学院大学　3 茶和益田屋合同会社　1 京都工芸繊維大学
キーワード：VR　茶室　日本文化　ユニバーサル

【問題の所在】遠隔技術、AI 技術が発達し、膨大な情報の中に我々は日常をすごしている。スピード社会ゆえのストレスをいかに軽減するかは、今日きわめて重大な問題であると考えられる。その文脈で注目されているのが茶道によるマインドフルネス体験である。従前は茶道といえば点前体験と捉えられていたことも多かったが、現在ではより広義の精神性、禅仏教をふくむ文化体験として、海外のビジネスパーソンにもより深い影響を与えるようになった。そのような海外の茶道経験者からは、ストレスを軽減しリラックスできたという言葉はよく聞かれている。しかし、本格的な茶室で茶道経験をすることは物理的に容易ではない。

【目的】本プロジェクトは、マインドフルネスと前述の遠隔技術、情報通信 VR（拡張現実）をコラボレーションすることで、マインドフルネスのユニバーサル化の可能性を探る。具体的には、いままで日本文化を体験することのなかった人、したいけれど、日本に来ることができない人、物理的な問題から体験が難しかった人に仮想現実で茶室や茶道体験を可能にすることで心理面にどのような変化・期待できるのかを明らかにする。

【背景】

1) マインドフルネス・日本文化体験が注目されている
2) AI の進歩（とくにコロナ禍により、既存の文化にも影響）
3) 茶道（伝統保守文化）＝「不立文字」リアル、対面での伝承、コミュニケーションが不可欠）とされる関係性を VR で再現が可能か？
4) 仮想現実により、物理的移動の制限、体験の時間制限がなく、視覚と聴覚に情報を与えることが可能。

【方法】マインドフルネス体験の場としての茶室を 3D 化した。その手順は以下の通りである。

実在する茶室内を約８００枚撮影し、デジタル加工を施した。

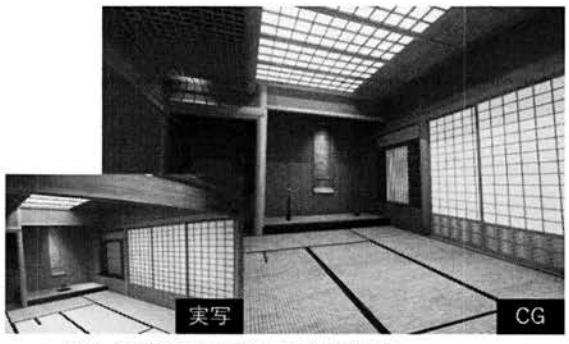
フォトグラメトリによる、現実世界のデジタルアーカイブの作成 ・フォトグラメトリ技術を用い、画像ベースで複数枚の写真から点群(3 次元情報を持つ点)を作成。・点群をメッシュ(面)化。情報量を削減。・無地の壁など、特徴点がなく点群が乱れている部分をモデリングツールで修復。・テクスチャー情報の追加。・Game Engine(Game の開発ツール)でライティングとリアルタイムレンダリング(絵の作成)を実施。



茶道の 1 シーン

【課題】今回、箱である茶室を作成したが、データー量を抑えて、スマートフォンなどで視聴できるサイズであったため、視覚情報的にその中に存在するような感覚に陥ることはむずかしかった。マインドフルネ体験を実感していただくようにするには多くの課題がある。第一に技術的に 3D や VR で茶室再現の精度を上げていくことが課題である。VR 上でのマインドフルネス体験と実際の茶道での乖離はまだ大きい。さらにギャップをどううめていくのか、更に研究を進めていきたい。今回のワークショップでは、成果物をご覧いただき。会場の皆さんからのご意見をいただきたいと考えている。





３D 空間内の京都市役所内茶室



海外の方へのおもてなし（前京都市長）

【引用文献】

1) 相島淑美・佐藤善信「オンライン茶の湯における価値共創のイノベーション」『日本マーケティング学会 2021 年プロシーディングス』　pp85-97.
2) 相島淑美・佐藤善信「ポストコロナ時代における日本の伝統文化産業のグローバル化－－茶の湯を中心として」『日本商業学会第 72 回全国研究大会報告論集』,pp. 48-57.

ロビンフッドたちの青春

～青年期・成人期障害療育施設「もみじ・あざみ」での療育実践の発達的・臨床的意義～

田中真介[1]、張貞京[2]、川岸育子[3]、玉村公二彦[4]
([1]京都大学、[2]京都文教短期大学、[3]育つ人育てる人のための相談室、[4]京都女子大学)

キーワード：青年期・成人期・中高齢期の発達、知的障害、演劇療育、自己信頼性、社会的交流性

【企画の趣旨】

糸賀一雄（1914～1968）は、1946年に滋賀県大津市に児童養護施設「近江学園」を設立し、戦災孤児や知的障害のある子どもたちを受けとめてきた。その後、18歳で成人期に達する児童のために、1952年に信楽寮、1953年に入所更生施設あざみ寮、1969年に入所授産施設もみじ寮を立ち上げた。もみじ寮とあざみ寮は、のちに「もみじ」「あざみ」と命名され、2024年現在、もみじ41名（20～80歳代、平均年齢64歳8か月）、あざみ26名（同58歳6か月）、計67名が仕事と生活をともに暮らしている。職業教育（織物、陶芸、調理、クリーニング、農園、園外就労など）に取り組み、また伝統的に演劇、音楽、絵画、スポーツ等の多彩な活動を取り入れた先駆的な生活療育を実践して、知的障害・発達障害を含む多様な心身障害を担う寮生たちの健康と発達を支えている。

筆者らは、寮の行事（文化祭、運動会、演劇公演）への支援的参加とともに、寮生と面談を行い、新版K式発達検査をもとに独自に考案した課題で寮生の発達の魅力と特徴をとらえてきた。このワークショップでは、療育実践の貴重な成果、また2015年度の演劇公演の前後に実施した面談の記録について話題提供を受け、青年期・成人期・中高齢期の発達を大切にした新たな生活支援と療育実践のあり方を考える。

【話題提供１】

張 貞京「もみじ・あざみの療育実践の発達的意義　～演劇公演での面談調査をもとに～」

もみじ・あざみでは、仲間とともに取り組む生活と仕事、そして演劇などの表現活動を通して、一人ひとりの発達を保障することを大切にしてきた。障害の種類や程度に違いがあっても、仲間と支えあって生き、働く大人としての日常を大切にし、様々な表現活動が日常を豊かにしている。

寮生たちが担う仕事の一つに織物づくりがある。織物工房で始められたホームスパンは、1台の織機を動かすために18人の力が必要となる。織物を制作する力の差を越え、この仕事が一人も欠けることのできない作業であることをみんなが認めあう。その姿勢は生活全体に広がり、身近にいる仲間と共感しあい、時には憧れ、互いの人柄や発達を認め受けとめあう日常を積み重ねてきた。

演劇活動は、大津のあざみ寮の時代に、クリスマス会での発表会で始まった。1969 年石部町への移転後、あざみ寮、男子寮、女子寮の3棟に分かれた各寮が3月のひな祭りの時期に劇を発表し、「ひなまつり劇」として本格的な演劇活動につながった。

1979年あざみ寮25周年、もみじ寮10周年の創立記念の年に、全員で一つの劇をしようと取り組んだ演劇活動が「ロビンフッド寮生劇」と呼ばれる。以後、プロの劇団員など多様な関係者の参加と支援を得て稽古を重ね、公共のホールでの公演を続けてきた。演劇を通して、自分の思いを非日常の劇の中で表現する喜びを感じながら、自分や仲間の変化をより深くとらえている。こうした経験が自他の理解を深め、次の活動への見通しを持ち、将来の生き方を充実させていく意欲につながっている。

ロビンフッド劇の前後に実施した個別インタビューの結果を紹介し、仲間とともに取り組んできた寮生活での貴重な発達的変化を報告する。

【話題提供２】

川岸育子「主体的な暮らしの営みを支える療育実践」

生き物がもつ“子育て”という機能を“サービス”や“商品”として“外注”することが当たり前になり、“子育て”という機能がまとまりを失ってバラバラな断片になっている。そんな時代に、もみじ・あざみでは『ともに暮らしを営む』ことが大切にされてきた。

寮生たちには「知的な幼さ」と「コミュニケーションのとりにくさ」というハンディキャップがあり、一人ひとり異なる家庭的背景がある。そのため職員は寮生の体験世界をイメージしにくく、その行動の意味の理解は容易でない。その中で寮生ひとりひとりを“わかろう”と努力し、寮生が“主体的に暮らしを営むこと”を目指す取り組みを実践してきた。

暮らしとは、食べる、寝る、働く、遊ぶことなどの多彩な組合せによって成り立ち、人が世の中に順応しつつ生きていく営みでもある。怒り、悲しみ、喜び、願いを織りなす中で、きれいごとや理想だけでなく、時に互いに疲れて投げやりになることもありながら、寮生たちが暮らしをともにする日々は、単なる順応にとどまらず、自発的・能動的・主体的に自分の生き方を新たに開拓していく貴重な時間となってきた。

秋の『文化祭』、また春の『ひな祭り劇』や5年に一度の『ロビンフッドの冒険』の舞台は、寮生活のそうした営みの「発表の場」となる。文化祭での展示作品には日々の仕事と誇り、ロビンフッド劇からは、自分がこの世界に存在し自分の願いを素直に表現する喜びが伝わってくる。演劇という“晴れの場”は日々の営みと地続きでありながら“壮大なごっこ遊び”の舞台となり、“非現実的な現実”の世界の中に丁寧に配慮された枠が準備され、舞台は守られた特別な場となって“心の中にわだかまっている何かを安全に表現できる場”となる。これらすべてが『暮らしを営む』ことであり、「暮らし」は、職員と寮生の血の通った生々しい育ち合いの営みとなる。寮での暮らしを支えた療育実践の臨床的意義を考察する。

【指定討論と総合考察】

１）田中真介「演劇実践の発達的・臨床的意義　～自己信頼性と社会的交流性の発達を支えた実践～」

寮生活での多様な取り組み、また総合芸術としての演劇実践を通して、寮生たちが自己信頼性（自分の価値を感受し尊重する力）と社会的交流性（自分とまわりの世界とのつながりを作る力）をどのように啓培してきたかを検討し、青年期から中高齢期の新たな発達的・臨床的な援助の観点を示す。

２）玉村公二彦「もみじ・あざみの療育実践の意義と展望」

もみじ・あざみでは、寮生劇をはじめとして、これまで成人の人たちの憲法学習、講師を招いた各種の学び、絵画教室など多面的な療育実践を行ってきた。それらの実践け、専門家を交え、継続的に行うこと等を特徴としていた。施設外の専門家と寮生が交流することによってもたらされるものの意義、そして将来のよりよい療育のあり方を考えてみたい。

（たなかしんすけ、ちゃんちょんきょん、かわぎしいくこ、たまむらくにひこ）

一般研究発表

ポスター発表演題リスト

ポスター発表 1A　8月27日(火)　午前の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階903)　実施時間 9:45~11:15

スポーツ

1A-1	日体大版剣道イメージ尺度(NIKS)の作成(4)— 指導者を対象にして —	○古澤伸晃1 新里知佳野1 八木沢誠1 井上雄貴1 百田尚史1 軽部幸浩2 藤田主一1	(1日本体育大学) (2日本大学)	1
1A-2	大学剣道女子部員の心理的特性と身体的特性の研究	○新里知佳野1 古澤伸晃1 八木沢誠1 井上雄貴1 百田尚史1 軽部幸浩2 藤田主一1	(1日本体育大学) (2日本大学)	2
1A-3	大学剣道女子部員の心理的特性と身体的特性の研究(2)	○井上雄貴1 新里知佳野1 古澤伸晃1 八木沢誠1 百田尚史1 軽部幸浩2 藤田主一1	(1日本体育大学) (2日本大学)	3
1A-4	武道のイメージに関する研究— 大学生は武道をどのようにとらえているのか —	○井上航人1 軽部幸浩2 藤田主一3	(1東京富士大学) (2日本大学) (3日本体育大学)	4
1A-5	新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法導入による試合変容に関する研究	○百田尚史1 古澤伸晃1 新里知佳野1 八木沢誠1 井上雄貴1 軽部幸浩2 藤田主一1	(1日本体育大学) (2日本大学)	5
1A-6	大学運動部活動における集団雰囲気測定尺度作成の試み	○橋本育実1 種ケ嶋尚志1	(1日本大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻)	6
1A-8	大学生競技者の多重役割間におけるネガティブ・スピルオーバーと自己調整学習について	○髙井美莉衣1 種ケ嶋尚志1	(1日本大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻)	7

ポスター発表 1A　8月27日(火)　午前の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階903教室) 実施時間 9:45~11:15

スポーツ

1A-9	リバウンドジャンプへの言語教示が運動実施者の意識へ与える影響-テキストマイニングによる分析-	○中山雅斗1 森祐貴2 来田宣幸3	(1大阪体育大学非常勤講師) (2園田学園女子大学人間健康学部) (3京都工芸繊維大学基盤科学系)	8

医療

1A-10	医療における多職種連携のチーム機能-成果モデルの構築と診療科別の特徴の検討-	○異儀田はづき1 古屋健2	(1立正大学大学院心理学研究科博士後期課程) (2立正大学心理学部)	9
1A-11	自傷行為傾向尺度Ⅱ作成の試みとその信頼性・妥当性の検討-自傷発生までの経路モデルを経て-	○波平乃衣1 土居正人2	(1吉備国際大学大学院心理学研究科) (2吉備国際大学人間科学部心理学専攻)	10
1A-12	精神科病院におけるスポーツ療法に関する研究 ― テニスプログラムの効果測定(ストレス反応と自尊感情) ―	○小畑周介	(医療法人養心会国分病院)	11

災害

1A-13	被災者の生活再建状況に関する研究ー福島県大熊町の被災者との面接調査からー	○山田瑶人1 大森哲至2 大森美路子3 田宮憲4 稲葉佑貴5　(非会員)	(1上智大学) (2帝京大学) (3東京海洋大学) (4帝京大学短期大学) (5株式会社サンオータス)	12
1A-14	防災リュックに常用薬を入れる意識とは?	○上田真由子	(追手門学院大学経営学部)	13
1A-15	フォントの違いが他者の感想に対する印象に及ぼす影響-東日本大震災・原子力災害伝承館に対する感想を用いて-	○静間健人	(東日本大震災・原子力災害伝承館)	14

社会

1A-16	チョコレート菓子を用いたコミュニケーション向上アイデアの効果検証	○中村早希1 大本浩司1(非会員) 玉越勢治1(非会員)	(1帝塚山学院大学)	15
1A-17	ソーシャルスキル・トレーニングの効果検討ー通信教育課程における短期プログラムと通学課程における中期プログラムの比較ー	○日向野智子1 磯友輝子2 藤後悦子1 山極和佳2 髙橋一公2 角山剛3	(1東京未来大学こども心理学部) (2東京未来大学モチベーション行動科学部) (3東京未来大学名誉教授)	16
1A-18	感染脅威は見知らぬ食べ物への態度に影響するのか?-感染脅威が食物新奇性恐怖に及ぼす影響-	○井上裕珠	(日本大学商学部)	17

ポスター発表 1B　8月27日(火)　午前の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階904教室) 実施時間 9:45~11:15

社会・文化

1B-1	少年事件のネット記事の犯人に対するコメント分析	○富永日向子	(立正大学大学院心理学研究科)	18
1B-2	容姿(顔)評価の高低によるメイク行動及び性格特性の違い	○九島紀子	(ビューティ&ウェルネス専門職大学)	19
1B-3	理想思考、義務思考が社会的相互作用の量に及ぼす影響ー仮想世界ゲーム電子版を用いた研究展開ー	○柿本敏克1 細野文雄1(非会員)	(1群馬大学情報学部)	20
1B-4	孤独に対する認識は世代間で異なるか?ー幼児から高齢者までの「孤独」に関する概念的探究ー	○ザンソニア1 伴碧2	(1ニュースクール大学人類学部) (2大阪大学大学院基礎工学研究科)	21
1B-5	家庭内暴力に関する意識ー日本人大学生と中国人留学生の比較ー	○王晋民	(千葉科学大学危機管理学部)	22
1B-6	親密な関係における非人間化が脆弱性の自己開示に与える影響	○黄瑶1 謝新宇1 相馬敏彦1	(1広島大学大学院人間社会科学研究科)	23
1B-7	中国出身の日本永住者における日本人との親密化に関する事例的研究ー 3人の元留学生を対象にー	○鄧娟1 田中共子2	(1岡山大学社会文化科学研究科) (2岡山大学社会文化科学学域)	24
1B-8	対人関係形成スキルを高める教育プログラムー関係形成段階から呼称で呼び合うルールの導入効果ー	○谷田林士	(大正大学人間学部)	25
1B-9	アイシャドウの色印象とアイシャドウの派手色選好者のメイク行動と性格傾向に関する検討 【教育発表】	○羽富千夏1 森川実柚1 児玉みくる1 渡邉祐太1 後藤衣月1 九島紀子1	(1ビューティ&ウェルネス専門職大学)	100
1B-10	バストサイズについての誤情報による自尊感情操作が高級品に対する女性の購買意欲に及ぼす影響 【教育発表】	○西村美音1 三木綾華1 福井義一1	(1甲南大学)	100
1B-11	対人距離における認知的負荷と感情覚醒が及ぼす影響 【教育発表】	○小松駿1 土屋遥菜1 佐藤寛晟1 時田学1	(1日本大学)	101

ポスター発表 1B　8月27日(火)　午前の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階904教室) 実施時間 9:45~11:15

社会・文化

1B-12	外見に対する満足度が気分や状態自尊感情に及ぼす影響 【教育発表】	○須藤美歩1 福井義一1 中谷智美3	(1甲南大学) (2甲南大学大学院人文科学研究科)	101
1B-13	大学生におけるソーシャルメディアが平均以上効果に与える影響-平均的他者の抽象性を考慮して- 【教育発表】	○山﨑裕巳1 橋場綾香1 時田学1	(1日本大学)	102
1B-14	大学生の好むSNS広告を分析する 【教育発表】	○浅岡陽1 齋藤拓心1 佐々木大輔1 前田直太郎1 宮優作1 井上裕珠1	(1日本大学商学部)	102
1B-15	VRを用いた高ストレス環境が感覚へ与える影響-触覚・痛覚閾値の変化に着目して- 【教育発表】	○瀬川育実1 前野紗幸1 永石高敏1	(1帝塚山大学)	103
1B-16	共生感覚尺度作成の試みと自傷傾向に及ぼす影響の検討	○遠藤まな1 土居正人2	(1吉備国際大学大学院心理学研究科) (2吉備国際大学人間科学部心理学専攻)	26

ポスター発表 IC　8月27日(火)　午後の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階903教室) 実施時間 14:30~16:00

看護

IC-1	反すう傾向と性格特性および日常の活動との関連に関する研究	○近藤三由希1 石井秀宗1	(1名古屋大学大学院教育発達科学研究科)	27
IC-2	危険予測場面における看護師と学生の注意過程の比較	○稲野辺奈緒子1,2 古屋健3	(1東京女子医科大学看護学部) (2立正大学大学院心理学研究科) (3立正大学心理学部)	28

教育

IC-4	幼児期の宗教教育が道徳性の発達に与える影響についての研究	○大門耕平1 来田宣幸2	(1東北学院大学文学部) (2京都工芸繊維大学)	29
IC-5	小中学生の自己有用感を高める要因の検討—階層線形モデルを用いた対人関係要因の影響—	○能渡綾菜1 能渡真澄2	(1筑波大学大学院人間総合科学研究科) (2株式会社ビジネスリサーチラボ)	30
IC-6	「正信念仏偈」の頻出語に関する実証的分析ー親鸞の宗教的信念をさぐる(1)ー	○伊藤令枝1 藤田主一2	(1日本大学理工学部) (2日本体育大学)	31
IC-7	保育施設での複数管理職との会話における<訂正>と<同意>の日英比較□	○山本睦	(常葉大学保育学部)	32
IC-8	ロール・プレイングの可能性ー教育現場をささえる取り組み(2)ー	○時田学	(日本大学商学部)	33

健康

IC-9	花を用いた心理療法で作成された生け花画像の評価に関する検討 第2報	○内田誠也1 田中英明1 本村明嘉2(非会員)	(1一般財団法人MOA健康科学センター) (2一般社団法人MOAインターナショナル)	34
IC-10	日本人成人のスポーツと運動に対する動機付けの違い	○大橋恵1 藤後悦子1 井梅由美子1	(1東京未来大学こども心理学部)	35
IC-11	成人期(社会人以降)の人間関係での嫌がらせ被害経験と孤独感—職場と職場外嫌がらせ被害経験—	○藤後悦子1 井梅由美子1 大橋恵1	(1東京未来大学こども心理学部)	36

ポスター発表 1C　8月27日(火)　午後の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階903教室) 実施時間 14:30~16:00

健康

1C-12	日本語版SNS(Social Networking Service)依存尺度の試作—因子構造と内的整合性の再検討—	○澤田戒1 中谷智美1 福井義一2 堀孝司1 加堂生織3(非会員)	(1甲南大学大学院人文科学研究科) (2甲南大学) (3大阪経済大学大学院人間科学研究科)	37
1C-14	自律的動機づけおよび統制された動機づけとMetS関連指標の関連—健康のために運動を行う動機づけに注目して—	○加藤佳子1 村田康徳1 小島亜未2(非会員)	(1神戸大学大学院人間発達環境学研究科) (2福井県立大学看護福祉学部看護学科)	38
1C-15	体重測定による心理的健康への影響 【教育発表】	○石黒加菜1 川田悠介1 清水純花1 余語優大1 井上裕珠1	(1日本大学商学部)	103

ポスター発表 1D　8月27日(火)　午後の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階904教室) 実施時間 14:30~16:00

原理

1D-1	高嶋正士と偉大性心理学— 鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について(3) —	○藤田主一	(日本体育大学)	39
1D-2	高校女子バレー指導における選手のコンディションを可視化する支援体制が与える影響	○伊藤将史1 大門耕平2 山本ちさと3 権野めぐみ4 来田宣幸5	(1近江兄弟社高等学校) (2東北学院大学) (3丸太町リハビリテーションクリニック) (4名古屋女子大学) (5京都工芸繊維大学)	40

産業・人格

1D-3	サステナビリティ化している高級ブランドの浸透-誇らしさと感謝感情によってロコミは増加するのか?- 【教育発表】	○伊藤哲平1 川村直輝1 對馬明日香1 花輪礼奈1 井上裕珠1	(1日本大学商学部)	104
1D-4	ポジティブイラショナルビリーフ尺度日本語版の作成(第1報)	○森本康太郎	(福井県立大学キャリアセンター)	41
1D-5	日本人大学生における自尊感情と被援助志向性の関連	○アニーシャニシャート	(東日本国際大学グローバル人財育成研究所)	42
1D-6	ダークトライアドと短期戦略恋愛傾向	○山岡重行	(聖徳大学心理学科)	43
1D-7	Dark Triadが自己愛的甘えに及ぼす影響 【教育発表】	○小鹿柚祐1 今井田貴裕1	(1人間環境大学心理学部)	104

犯罪

1D-8	電車内痴漢被害時の対処行動の生起に関わる状況要因の検討	○大髙実奈1	(1東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)	44
1D-9	心霊現象に意味づけた経験の有無と犯罪不安との関連の検討——般健常群を対象としたパイロットスタディ—	○皿谷陽子1 今井田貴裕1	(1人間環境大学心理学部)	45
1D-10	カスタマーハラスメントと精神健康および働きがい・活力との関連	○島田恭子1,2 桐生正幸1,2	(1東洋大学) (2一般社団法人ココロバランス研究所)	46

ポスター発表 ID　8月27日(火)　午後の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階904教室) 実施時間 14:30~16:00

犯罪

ID-11	業種業態によるカスタマーハラスメント類型と特徴ーカスハラ行為者の属性,態度・言動と要求内容についてー	○桐生正幸1,2 島田恭子1,2	(1東洋大学) (2一般社団法人ココロバランス研究所)	47
ID-12	高齢者による特殊詐欺体験中のリスク行為と性格特性の関連ー生成AIを活用した特殊詐欺訓練AIツールを用いた検証ー	○井手健太1 近野恵1 紺野剛史1 桐生正幸2	(1富士通株式会社) (2東洋大学)	48
ID-13	ママ活の実態と背景要因を探るための基礎研究 【教育発表】	○大門渚紗1 桐生正幸1	(1東洋大学)	105
ID-14	大学生における電車内痴漢への被害意識について 【教育発表】	○出塚恭央1 桐生正幸1	(1東洋大学)	105

福祉・文化

ID-15	介護・福祉共生型サービスの満足度、およびその実態について— 広島県の介護事業所における予備的調査 —	○木村友昭1 伊坂裕子2	(1MOA健康科学センター) (2日本大学国際関係学部)	49
ID-16	大学生の心的外傷後成長に関連するライフスタイル因子について	○田中英明1 伊坂裕子2 伊藤令枝2 木村友昭1	(1一般財団法人MOA健康科学センター) (2日本大学)	50

ポスター発表 2A　8 月 28 日（水）　午前の部

ポスター発表（教育発表）（会場：16 号館 9 階 903 教室） 実施時間 10:00～11:30

感情

2A-1	看護系大学における臨床判断育成のための教育方法について－教員へのインタビュー調査の分析－	○近藤奈緒子1 松浦均2 古壕典洋2	(1神奈川県立よこはま看護専門学校・星槎大学大学院教育学研究科博士後期課程) (2星槎大学大学院教育学研究科)	51
2A-2	日本語版キュートアグレッション尺度作成の試み	○日髙舞子	(東洋大学大学院)	52
2A-3	攻撃的ユーモアの受け取り方の性差について―漫画による場面想定法を用いて―	○村田康徳1 加藤佳子1	(1神戸大学大学院人間発達環境学研究科)	53

交通

2A-4	同乗者がペーパードライバーのハザード知覚に及ぼす影響 【教育発表】	○村田亮1 森泉慎吾1	(1帝塚山大学心理学部)	106
2A-5	運転免許の有無と自転車事故のリスク認知との関連 【教育発表】	○菅春妃1 森泉慎吾1	(1帝塚山大学心理学部)	106

産業

2A-6	組織でのサポートはパワーハラスメントを低減させるのか?―自尊感情の高い労働者の自己愛タイプに注目したインターネット調査―	○仙波亮一	(京都橘大学経営学部)	54
2A-7	「○○らしさ」の主観評価と機械学習を用いたデザイン一貫性の解析	○下條朝也	(コニカミノルタ株式会社)	55
2A-8	安全に関わる作業で陥りやすい認知バイアスや対策に関する知見の整理	○武内寛子1 寺澤孝彦1（非会員） 今井武文1（非会員） 和田一成1	(1西日本旅客鉄道株式会社安全研究所)	56
2A-9	心理的安全性リーダーシップの現状－化学工場の課長に対する半構造化面接調査に基づく考察－	○重森雅嘉	(静岡英和学院大学短期大学部)	57
2A-10	コンピテンシーモデルの構築におけるインタビュー技法	○片岡大輔	(株式会社日本能率協会マネジメントセンター)	58
2A-11	組織社会化過程における新規学卒者の同僚への自己呈示行動の役割－縦断的データによる媒介モデルの検討－	○竹内倫和	(学習院大学経済学部)	59

ポスター発表 2A　8月28日(水)　午前の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階903教室) 実施時間 10:00~11:30

産業

2A-12	アイデンティティを実感できる仕事の特性ー仕事に関する意識調査データの二次分析ー	○能渡真澄1 田中圭2 能渡綾菜3	(1株式会社ビジネスリサーチラボ) (2聖徳大学) (3筑波大学大学院人間総合科学研究科)	60

社会

2A-14	「推し活」における活動実態とポジティブおよびネガティブ経験ー「推し活」におけるジャンルとHSP傾向の観点からー	○菅野智子1 山村豊2	(1立正大学) (2桜美林大学)	61
2A-15	恋愛に対するネガティブな態度の規定因の検討(1)-好きな季節と運動経験、運動能力に注目して- 【教育発表】	○池内智美1 北方夢渚1 高橋佑吉1 橋本惇平1 増尾蓮斗1 谷口淳一1	(1帝塚山大学)	107
2A-16	恋愛に対するネガティブな態度の規定因の検討(2)-現在の生活への満足度に注目して- 【教育発表】	○池田梨乃1 上垣晴奈1 鈴井秀章1 丹澤実夢1 西平愛美1 谷口淳一1	(1帝塚山大学)	107
2A-17	恋愛に対するネガティブな態度の規定因の検討(3)-束縛拒否と自尊心、充実感に注目して- 【教育発表】	○大林夕真1 北村詩織1 原木優透1 平松航汰1 谷口淳一1	(1帝塚山大学)	108

ポスター発表 2B　8月28日(水)　午前の部

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階904教室) 実施時間 10:00~11:30

社会

2B-1	スマートフォン利用アプリによる適応・依存傾向の違い-中学生・高校生を対象にして-	○三島浩路	(中部大学現代教育学部)	62
2B-2	アタッチメントとマンガ読書に関する日中比較調査ーマンガ読書を情動焦点型コーピングとして用いようとする意図やその頻度についてー	○中尾達馬1 李同归2,3 (非会員)	(1琉球大学教育学部) (2北京大学心理与认知科学学院) (3行为与心理健康北京市重点实验室)	63
2B-3	男女の友情関係が成立する人の特徴-外向性と衝動性に注目して- 【教育発表】	○市成将士1 児玉天馬1 下田樹菜1 藤田詩月1 溝口梨里花1 山津慶1 谷口淳一1	(1帝塚山大学)	108
2B-4	2種類のプライドが他者との関わりに及ぼす影響-嫌なプライドと熱血なプライド- 【教育発表】	○髙田あい1 ニ宮万美1 樋口礼華1 山田遥登1 吉田一翔1 谷口淳一1	(1帝塚山大学)	109
2B-5	視覚的要素とキャラクターの印象-まんがタイムきららの作品群における「きららしさ」の研究- 【教育発表】	○安井亮太1 来田宣幸1	(1京都工芸繊維大学)	109

認知

2B-6	現代の大学生の購買行動に関する意思決定-文脈効果の検討- 【教育発表】	○山中葵1 吉村玲香1 富田瑛智1	(1帝塚山大学)	110
2B-7	待ち時間を分けることにより知覚時間は短くなるのか? 【教育発表】	○中野真佳1 水垣萌苗1 富田瑛智1	(1帝塚山大学)	110

発達

2B-8	保育所の預け時における子どもの不安低減要因についての考察-母親のアタッチメント傾向との関連を中心に-	○山口舞	(東京大学大学院教育学研究科)	64
2B-9	幼児における身振りと空間認知能力が歌唱に及ぼす影響	○金山英莉花1,2 内山伊知郎3	(1同志社大学大学院心理学研究科) (2独立行政法人日本学術振興会) (3同志社大学心理学部)	65

ポスター発表 2B 8月28日(水)午前

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階904教室) 実施時間 10:00~11:30

発達

2B-10	幼児期の子どもたちの「願い」と自己認識――保育群と支援群の「3つの願い」への応答をもとに――	○横井川美佳	(京都市児童療育センター「なないろ」)	66
2B-11	夫婦関係と幼児期のアタッチメント安定性との関連	○福田佳織1 森下葉子2 尾形和男3	(1東洋学園大学) (2文京学院大学) (3放送大学)	67
2B-12	2歳児クラスの幼児の気質と従順性と,母親としての自己効力感との関連	○岡村歩果1 内山伊知郎2	(1同志社大学大学院心理学研究科) (2同志社大学心理学部)	68
2B-13	和菓子の色彩と形状から探る四季の知覚-幼児,成人,高齢者を対象とした発達的検討-	○伴碧1 内山伊知郎2	(1大阪大学大学院基礎工学研究科) (2同志社大学心理学部)	69
2B-14	幼児期の鏡像反応における縦断的研究の発達的特徴について-発達に課題のある幼児の鏡像反応と発達検査課題との関係性-	○高木玉江	(大阪成蹊大学教育学部)	70
2B-16	月経随伴症状の種類とコミュニケーションとの関係ー女子大学生を対象とした検討ー	○蔵永瞳1 佐野未来2(非会員)	(1滋賀大学教育学部) (2滋賀大学教育学部(在学当時))	71

ポスター発表 2C　8 月 28 日（水）　午後の部

ポスター発表（教育発表）（会場：16 号館 9 階 903 教室） 実施時間 15:15～16:45

教育

2C-1	知能と英語力の暗黙理論が大学生の英語学習における困難への反応に及ぼす効果	○柳瀬真紀1 竹橋洋毅1	(1奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科)	72
2C-2	目標達成に向けた力の育成―小学生を対象とした目標設定および学習方略の体験型講座の提案―	○磯友輝子1 小林寛子1	(1東京未来大学モチベーション行動科学部)	73
2C-3	学校での諸経験が実習でのプロアクティブ行動に及ぼす影響―職務的接続性の違いに着目した探索的検討―	○三保紀裕1 松尾智晶2（非会員） 寺田盛紀3（非会員）	(1京都先端科学大学経済経営学部) (2京都産業大学) (3京都先端科学大学客員研究員)	74
2C-4	工科系修士課程学生の修士課程進学における進学動機への知的好奇心，批判的思考態度および結果期待からの影響-高度専門技術者養成を目的とした私立大学における検討-	○石田拓矢1 庄司正実2	(1目白大学大学院心理学研究科) (2目白大学心理学部)	75
2C-5	教職課程における福祉教育のカリキュラム編成に関する基礎的研究（3）－教職課程学生の特別支援教育等調査の特別支援教育等の項目を中心として－	○石橋裕子1 林幸範2	(1帝京科学大学) (2学研アカデミー保育士養成コース)	76
2C-6	教職課程における福祉教育のカリキュラム編成に関する基礎的研究（4）－教職課程学生の特別支援教育等調査の虐待等の項目を中心として－	○林幸範1 石橋裕子2	(1学研アカデミー保育士養成コース) (2帝京科学大学)	77
2C-7	大学生の親子関係とゲーム依存の関連	○澄岡美羽1 奥村由美子2	(1帝塚山大学大学院心理科学研究科) (2帝塚山大学心理学部)	78
2C-8	英語学習における動機づけ始発方略尺度の作成	○山内春佳1 谷口淳一2 森泉慎吾2	(1帝塚山大学大学院心理科学研究科) (2帝塚山大学心理学部)	79

交通

2C-9	交通場面に対応した手つなぎと保護者の養育スタイルとの関係－ 手つなぎの意味の多義性に基づく考察 －	○大谷亮	((一財)日本自動車研究所自動走行研究部)	80
2C-10	無信号横断歩道での一時停止に関わるドライバー特性の地域差	○森泉慎吾1 臼井伸之介2	(1帝塚山大学心理学部) (2大阪大学)	81

ポスター発表 2C　8 月 28 日（水）　午後の部

ポスター発表（教育発表）（会場：16 号館 9 階 903 教室） 実施時間 15:15〜16:45

交通

2C-11	脅威喚起は列車乗降時における隙間転落への意識変容を促すか-防護動機理論にもとづく啓発メッセージの効果検証-	○前田楓1 橋本博文2	(1立教大学現代心理学部心理学科) (2大阪公立大学大学院文学研究科)	82
2C-12	高齢歩行者のセルフ・レギュレーション（安全ゆとり歩行）	○松浦常夫	(実践女子大学名誉教授)	83
2C-13	無信号交差点出会い頭事故の道路交差角と高齢運転者の特性	○矢野伸裕	(科学警察研究所交通科学部)	84

産業

2C-14	炭酸水と水におけるフレーバーの違いが印象に与える影響-感性評価を用いた香料の効果検証- 【教育発表】	○丸山花音1 来田宣幸1	(1京都工芸繊維大学)	111
2C-15	XRによる自宅トレーニング支援システム 【教育発表】	○吉尾陸汰1 来田宣幸1	(1京都工芸繊維大学)	111
2C-16	筆記具の書字動作における個人特性-ペンの三次元モーションデータを用いて- 【教育発表】	○杉山聡一1 来田宣幸1	(1京都工芸繊維大学)	112

ポスター発表 2D 8月28日(水)午後

ポスター発表(教育発表)(会場:16号館9階904教室) 実施時間 15:15~16:45

産業

2D-1	テレビゲームでフロー体験は引き起こされるのか?-フロー尺度・生理指標・主観的時間を用いて検討- 【教育発表】	○東原早千絵1 清水柊花1 永石高敏1	(1帝塚山大学)	112
2D-2	メイクの濃さが与える印象と外見と内面の不一致による印象の変化について 【教育発表】	○久保光里1 玄彩楓1 永石高敏1	(1帝塚山大学)	113

認知

2D-3	乱数生成課題に反映される視空間特性について-拮抗する形態知覚と空間知覚-	○板垣文彦1 須永範明2 鹿内菜穂3(非会員)	(1国立病院機構東京医療センター・臨床研究センター) (2日本大学文理学部) (3亜細亜大学経営学部)	85
2D-4	催眠の一般的な使用場面・用途についてのイメージ—自己組織化マップを用いた追加的検討—	○中谷智美1 福井義一2 今井田貴裕3 磯和壮太朗4 堀孝司1 大浦真一5	(1甲南大学大学院人文科学研究科) (2甲南大学) (3人間環境大学) (4名古屋芸術大学) (5東海学院大学)	86
2D-5	飽きたと感じたときに見ていた刺激への評価の個人差-単純接触パラダイムによる検討-	○富田瑛智1 栗延孟2(非会員)	(1帝塚山大学心理学部) (2浦和大学社会福祉学部)	87

臨床

2D-6	心霊信奉尺度の作成ー信頼性と妥当性の検討ー	○今井田貴裕1 皿谷陽子1	(1人間環境大学心理学部)	88
2D-7	高校生の自殺リスクと自我同一性およびインターネット行動に関する研究-抑うつ・不安・防衛機制・多次元自我同一性とインターネット行動の視点から-	○岸竜馬1 滝谷寿美2(非会員) 塚本伸一3	(1福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター) (2桜の聖母短期大学) (3東京未来大学)	89
2D-8	ACTにおける言語化による価値の明確化プロセスの効果に関する研究	○洞出翼1 河越隼人2(非会員)	(1帝塚山大学大学院心理科学研究科) (2帝塚山大学心理学部)	90
2D-9	思春期の子を持つ母親の悩み	○井梅由美子1 大橋恵1 藤後悦子1	(1東京未来大学こども心理学部)	91
2D-10	長期目標への取り組みが自己嫌悪感に与える影響	○白樫花奈1 河越隼人2(非会員)	(1帝塚山大学大学院心理科学研究科) (2帝塚山大学心理学部)	92

ポスター発表 2D　8月28日（水）　午後の部

ポスター発表（教育発表）（会場：16号館9階904教室）実施時間 15:15～16:45

臨床

2D-11	大学生における援助要請スタイルと愛着及びソーシャルサポートの関連	○松原小夏1 永野浩二2（非会員）	(1帝塚山大学大学院心理科学研究科) (2追手門学院大学心理学部)	93
2D-12	大学生の心理的敏感さとレジリエンス及び首尾一貫感覚との関連	○下茂翔太朗1 永野浩二2（非会員）	(1帝塚山大学大学院心理科学研究科) (2追手門学院大学心理学部心理学科)	94
2D-13	アバター×心理カウンセリング-リアルタイムキャプチャを用いた心理カウンセリングの事例発表-	○岩﨑和子1 来田宣幸1	(1京都工芸繊維大学)	95
2D-14	神経性やせ症患者へのマインドフルネス介入の効果の検討ー脳機能の観点からー	○野田智美	(京都大学医学部附属病院)	96
2D-15	Yahoo!知恵袋への質問内容から読み取る心理専門職のイメージ-臨床心理士と公認心理師の比較- 【教育発表】	○江見かほり1 澤田戒2 中谷智美2 福井義一1	(1甲南大学) (2甲南大学大学院人文科学研究科)	113
2D-16	保健室登校の高校生の時間的展望の特徴-サークル・テストによる分析-	○和田万紀1 小野村樹美2 須永範明3	(1日本大学法学部) (2神代高等学校) (3日本大学文理学部)	97

日体大版剣道イメージ尺度（NIKS）の作成（4）

― 指導者を対象にして ―

○古澤伸晃[1]　新里知佳野[1]　八木沢誠[1]　井上雄貴[1]　百田尚史[1]　軽部幸浩[2]　藤田主一[1]
([1]日本体育大学　[2]日本大学)

キーワード：剣道　イメージ　NIKS

【目的】

これまで我々は、剣道イメージについて研究を進め、その知見をもとに剣道イメージの構造を明らかにしてきた（古澤他，2023a,2023b）。さらに、研究を進める過程で、剣道を「習う者」と「指導する者」との立場からその心理的構造を測定するために、日体大版剣道イメージ尺度（NITTAIDAI Image of KENDO Scale；NIKS）を新しく作成した。本研究の目的は、調査対象者を剣道指導者（中学校及び道場）にまで広げ、NIKS の妥当性を確認することである。

【方法】

1.調査対象者　調査は、埼玉県にある道場指導者と関東の中学校剣道指導者（初段～教士七段）の合計 146 名男女を対象として、2023 年 11 月から 2024 年 1 月に実施した。

2.調査内容　質問用紙（A4 用紙 1 枚）は、フェイスシート（年齢、性別、剣道の段位、剣道の指導歴）に続き、調査は 72 項目の質問について、回答方法を 4 件法（4 非常にそう思う，3 そう思う，2 そう思わない，1 まったくそう思わない）とし、実施した。

3.手続き　調査への協力依頼は、「先生方が剣道をどのように思っているのかを調査するものです。回答いただいた結果については、数量的に処理し回答者のプライバシーなどを侵害することはありません。安心して、回答してください。もし、回答したくなかったら記入しなくてもよいです。正しい回答や間違った回答はありません。 先生が思っていること、感じていることをお気軽に回答してください」のように教示し同意を得て進められた。

4.倫理的配慮　調査の実施等については、日本体育大学倫理審査委員会へ、「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書（研究課題名:剣道イメージの構造に関する分析的研究）」ならびに「説明書」「同意書」を提出し、審査の結果、承認された（承認番号 020-H172）。なお、本研究の利益相反はない。

【結果と考察】

NIKS を構成する因子　調査結果を因子分析したところ、剣道に対するイメージは 4 因子で構成されていたことが明らかになった(Table1)。因子Ⅰは、「剣道は礼儀作法が身に付く武道である」などの 14 項目から構成されていた。因子Ⅱは、「剣道は筋力トレーニングをした方がよい」などの 5 項目から構成されていた。因子Ⅲは、「剣道は夏に稽古をするのはやめたほうがよい」などの 5 項目から構成されていた。因子Ⅳは、「剣道は時代や民族を超えて継承される武道である」などの 4 項目から構成されていた。今後は、NIKS の標準化を進める予定である。

【参考文献】

古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2023a）剣道イメージ尺度の作成と応用の可能性. 応用心理学研究、49(1)，52-53.

古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2023b）日体大版剣道イメージ尺度（NIKS）の作成（3）―剣道部員と一般学生―. 日本応用心理学会第 89 回大会発表論文集，69.

（ふるさわのぶあき・しんざとちかの・やぎさわまこと他）

Table 1　因子分析の結果

	質問内容	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
1	剣道は礼儀作法が身に付く武道である。	**0.83**	0.06	-0.06	-0.23
2	剣道は礼儀が身に付くようになる。	**0.81**	0.03	0.11	0.04
3	剣道は姿勢が良くなる武道である。	**0.79**	-0.12	0.15	0.08
4	剣道は日本の心である。	**0.78**	-0.08	-0.03	0.08
5	剣道は礼節を重んじる武道である。	**0.76**	-0.18	-0.18	-0.07
6	剣道は正しい姿勢が養われる。	**0.75**	-0.04	-0.03	0.12
7	剣道は心身を鍛錬する武道である	**0.69**	0.10	-0.13	-0.11
8	剣道は相手を敬う心を養う武道である。	**0.64**	-0.17	-0.24	0.10
9	剣道は挨拶ができるようになる。	**0.62**	0.20	-0.14	0.02
10	剣道は剣道具姿がかっこいい。	**0.61**	0.10	0.10	0.13
11	剣道は人間形成を目指す武道である。	**0.59**	-0.13	-0.31	-0.05
12	剣道は健康増進に効果的である。	**0.57**	-0.10	-0.04	0.14
13	剣道は剣道着・袴姿がかっこいい。	**0.54**	0.21	0.09	0.18
14	剣道は技が決まると感動する。	**0.54**	0.01	0.19	0.23
15	剣道は筋力トレーニングをした方がよい。	-0.08	**0.69**	0.03	-0.15
16	剣道はとても難しいスポーツである。	0.04	**0.58**	-0.03	-0.14
17	剣道は殺人剣から活人剣へ変化した武道である。	0.02	**0.53**	-0.10	0.00
18	剣道は暑中稽古と寒稽古で精神を鍛えることが大切である。	-0.08	**0.52**	-0.42	0.10
19	剣道は大声を出すのでストレス発散になる。	0.13	**0.51**	0.10	0.06
20	剣道は夏に稽古をするのはやめたほうがよい。	-0.04	-0.02	**0.71**	0.04
21	剣道は勝利することがもっとも大切である。	0.19	0.09	**0.70**	0.10
22	剣道は冬は寒く夏は暑いので子どもたちには向かない。	-0.08	-0.07	**0.69**	0.05
23	剣道は冬に稽古をするのはやめたほうがよい。	0.18	-0.11	**0.67**	0.04
24	剣道は発声がうるさい武道である。	-0.05	0.32	**0.52**	-0.22
25	剣道は時代や民族を超えて継承される武道である。	-0.03	-0.06	-0.27	**0.67**
26	剣道はオリンピック種目にするべきである。	0.05	-0.04	0.32	**0.61**
27	剣道は競技人口を増やすためにプロ化した方がよい。	0.01	-0.14	0.34	**0.60**
28	剣道は武道の中でも芸術的である。	0.08	0.39	-0.10	**0.53**

大学剣道女子部員の心理的特性と身体的特性の研究

○新里知佳野[1]　古澤伸晃[1]　八木沢誠[1]　井上雄貴[1]　百田尚史[1]　軽部幸浩[2]　藤田主一[1]
（[1]日本体育大学　[2]日本大学）

キーワード：大学剣道女子選手　心理的特性　身体的特性

【目的】

これまでに我々は、本学会において大学剣道に関する理論的側面、競技的側面等について具体的・実践的研究を積み重ねてきた（新里他, 2022a, 2022b 等）。身体的側面について、例えば打突開始動作の違いによる選択反応時間・打突動作時間の研究が報告されている（椿他, 2009）。そこで、本研究は、大学剣道女子部員の心理的特性と身体的特性について選手と非選手で比較検討し、その結果に基づいて今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

【方法】

1. 対象者：都内 A 大学剣道部女子部員 22 名（平均年齢 20.6 歳, *SD*=1.4）。このうち選手（令和 5 年度関東・全日本剣道優勝大会出場者）は 6 名、非選手は 16 名であった。

2. 指標：心理的特性を測定するために YG 性格検査、TAIS（スポーツ特性－状態不安診断検査）、DIPCA（心理的競技能力診断検査）、新版 STAI を使用した。身体的特性を測定するために次の指標を用いた（Table1）。

Table 1　測定指標

①　反応時間（光刺激, 全身反応；踏み込み）	②　反応時間（光刺激, 部分反応；キー押し）
③　反応時間（音刺激, 全身反応；踏み込み）	④　反応時間（音刺激, 部分反応；キー押し）
⑤　動体視力（ランドルト環の判別）	⑥　タッピング（心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し）

3. 手続き：2024（令和 6）年 3 月 6 日に、女子剣道部員に各種心理検査ならびに反応時間（RT）の測定を実施した。RT は、全身反応測定器Ⅳ型（竹井機器工業；T.K.K.1264p）を使用し、音（1000Hz, 60dB）と光（赤色）を要反応刺激とし、実験参加者にできるだけ早く反応させた。反応は全身反応（踏み込み）と部分反応（キー押し）であった。全身反応の測定時は、剣道着・袴、剣道具（胴・垂）を着用し、実際に竹刀を持たせ、より実戦を想定しておこなわせた。動体視力は、対象者から 5m 離れたコンピューターのモニター上に左から右にランドルト環（視角 1'）を移動させ、切れ目を判断させた。タッピングは心地良い速度、利き手および非利き手で 1 分間にできるだけ早く打叩させた。

本研究は、A 大学倫理審査委員会の承認（024-H006）を受け、女子部員に研究計画を説明し参加の同意を得て実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果と考察】

Table2 は、動体視力の正答数（上下左右の方向判断）である。選手（7.5, *SD*=1.04）と非選手（5.4, *SD*=2.80）の正答数の平均値について *t* 検定をおこなった結果、選手の正答数が非選手のそれよりも有意に高かった（$t_{(20)}$=2.51, p< .05, d=0.97）。心理検査と身体測定データの相関係数を求めたところ、相関値は低く、無相関検定をおこなった結果有意な差は認められなかったが、今回の動体視力では選手と非選手の間で正答数に有意な差が認められた。剣道の「一眼二足三胆四力」という教えから考えると、選手の方が感覚を研ぎ澄まし、ランドルト環の切れ目を正しく認識する「眼の働き・能力」が非選手より高いと考えられる。選手は視覚で捉えた情報の処理能力が高く、咄嗟の判断や反応が非選手と比較して優れているのではないかと推察できる。

剣道の試合では、相手を眼で捉えながらも、同時に相手が何を考えているのか予測し的確に状況判断をしなければならない。選手と非選手の違いはこの「動体視力」の差によるものと思われる。剣道で一番重要な要素である「眼」を鍛え、動体視力をトレーニングすることが剣道選手育成（選手個々の能力を高めること）へ繋がるのではないだろうか。

今後は、動体視力のトレーニングにより、剣道の競技力（剣道力と称する）が向上するかについても検討していきたい。

【参考文献】

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2022a）. 大学剣道女子選手の試合前後における心理的変化. 日本応用心理学会第 88 回大会発表論文集, 40.

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2022b）. 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性―特に反応時間について―. 日本応用心理学会第 89 回大会発表論文集, 70.

椿武・下川美佳・前阪茂樹・前田明　(2009). 大学トップレベル剣道選手の全身選択反応時間、移動時間、動作時間の特徴. 武道学研究, 40(2), 35-41.

（しんざとちかの・ふるさわのぶあき・やぎさわまこと他）

Table 2　女子部員の測定結果

選手・非選手	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目	11回目	12回目	13回目	14回目	15回目	16回目	正解数
選手	1	1	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	－	1	0	7
選手	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	7
選手	0	1	0	1	0	1	0	1	1	1	0	0	1	0	1	0	8
選手	1	1	0	1	1	1	0	0	1	0	1	0	0	－	1	1	9
選手	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	6
選手	0	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	8
非選手	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4
非選手	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
非選手	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
非選手	0	1	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	7
非選手	－	1	－	1	0	1	－	0	1	1	－	0	0	－	1	1	7
非選手	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1	1	9
非選手	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	－	2
非選手	0	1	0	1	0	1	1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	9
非選手	0	0	0	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	7
非選手	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	－	2
非選手	0	1	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	5
非選手	－	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	－	0	0	1	6
非選手	－	1	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	7
非選手	0	1	0	1	0	1	0	1	1	0	1	0	1	0	1	0	8
非選手	1	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	8
非選手	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4

大学剣道女子部員の心理的特性と身体的特性の研究（2）

○井上雄貴[1]　新里知佳野[1]　古澤伸晃[1]　八木沢誠[1]　百田尚史[1]　軽部幸浩[2]　藤田主一[1]
（1日本体育大学, 2日本大学）
キーワード：大学剣道女子選手　心理的特性　身体的特性

【目的】

これまでに我々は，本学会において大学剣道に関する理論的側面，競技的側面等について具体的・実践的研究を積み重ねてきた（新里他，2022a, 2022b 等）。身体的側面について，例えば打突開始動作の違いによる選択反応時間・打突動作時間の研究が報告されている（椿他，2009）。そこで，本研究は，大学剣道女子部員の心理的特性と身体的特性について選手と非選手で比較検討し，その結果に基づいて今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

【方法】

1. 対象者：都内 A 大学剣道部女子部員 22 名（平均年齢 20.6 歳，*SD*=1.4）。このうち選手（令和 5 年度関東・全日本剣道優勝大会出場者）は 6 名，非選手は 16 名であった。

2. 指標：心理的特性を測定するために YG 性格検査，TAIS（スポーツ特性－状態不安診断検査），DIPCA（心理的競技能力診断検査），新版 STAI を使用した。身体的特性を測定するために次の指標を用いた（Table1）。

Table 1　測定指標

①	反応時間（光刺激，全身反応；踏み込み）	②	反応時間（光刺激，部分反応；キー押し）
③	反応時間（音刺激，全身反応；踏み込み）	④	反応時間（音刺激，部分反応；キー押し）
⑤	動体視力（ランドルト環の判別）	⑥	タッピング（心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し）

3. 手続き：2024（令和 6）年 3 月 6 日に，女子剣道部員に各種心理検査ならびに反応時間（RT）の測定を実施した。RT は，全身反応測定器Ⅳ型（竹井機器工業；T.K.K.1264p）を使用し，音（1000Hz，60dB）と光（赤色）を要反応刺激とし，実験参加者にできるだけ早く反応させた。反応は全身反応（踏み込み）と部分反応（キー押し）であった。全身反応の測定時は，剣道着・袴，剣道具（胴・垂）を着用し，実際に竹刀を持たせ，より実戦を想定しておこなわせた。動体視力は，対象者から 5m 離れたコンピューターのモニター上に左から右にランドルト環（視角 1'）を移動させ，切れ目を判断させた。タッピングは心地良い速度，利き手および非利き手で 1 分間にできるだけ早く打叩させた。

研究は，A 大学倫理審査委員会の承認（024-H006）を受け，女子部員に研究計画を説明し参加の同意を得て実施した。なお，本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果と考察】

Table 2 は，光刺激の全身・部分反応時間，音刺激の全身・部分反応時間の標準得点の平均値と標準偏差，タッピング（心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し）の打叩回数の平均値と標準偏差を示したものである。反応時間に関しては，非選手よりも選手の反応時間が短かった。*t* 検定をおこなったところ，有意差は認められなかった。タッピングに関して，心地良さ，利き手 1 分間早押し，非利き手 1 分間早押しの打叩回数を選手と非選手で比較したところ，心地よさに関しては，選手は非選手よりもゆっくりと打叩していたことが明らかとなった。

また，利き手 1 分間早押しと非利き手 1 分間早押しの打叩回数を選手と非選手で比較したところ，選手は非選手よりも打叩回数が多いことが明らかとなった。タッピングの打叩回数の結果について，選手と非選手の間で *t* 検定をおこなったところ，有意差は認められなかった。

Table 2　測定結果

	選手		非選手	
	M	*SD*	*M*	*SD*
全身反応時間（光）	-0.37	0.512	0.14	0.883
部分反応時間（光）	-0.10	0.441	0.03	0.818
全身反応時間（音）	-0.15	0.683	0.15	0.638
部分反応時間（音）	-0.24	0.479	0.08	0.841
タッピング				
心地良さ	80.2	43.38	107.1	57.89
利き手 1 分間	369.8	27.59	357.1	53.99
非利き手 1 分間	307.3	37.55	501.6	50.63

YG 性格検査，TAIS，DIPCA，新版 STAI について，選手と非選手の得点の間で *t* 検定をおこなったところ，有意差は認められなかった。

反応時間と YG 性格検査，TAIS，DIPCA，新版 STAI，またタッピングと YG 性格検査，TAIS，DIPCA，新版 STAI の間で相関分析を行ったところすべての組み合わせにおいて非常に弱い相関が認められたが，無相関検定をおこなったところ有意な差は認められなかった。

選手と非選手において，心理的特性にその違いが見られなかったことは，A 大学剣道部女子部員は選手と非選手の差は僅かであり，誰もが選手になりうることができる剣道力を有していたことが考えられる。また，身体的特性に関しても同様に，誰もが選手になりうることができる能力があったことが考えられる。なお，反応時間に関しては，選手の方が非選手よりも若干ではあるものの，その測定時間が早かったことが選手の選出に繋がっていたのではないかと考えられるが，このことを言及するにはさらなる研究が必要である。

【参考文献】

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2022a）. 大学剣道女子選手の試合前後における心理的変化. 日本応用心理学会第 88 回大会発表論文集,40.

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一(2022b). 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性 —特に反応時間について—. 日本応用心理学会第 89 回大会発表論文集,70.

椿武・下川美佳・前阪茂樹・前田明（2009）. 大学トップレベル剣道選手の全身選択反応時間,移動時間,動作時間の特徴. 武道学研究,40(2),35-41.

（いのうえゆうき・しんざとちかの・ふるさわのぶあき・他）

武道のイメージに関する研究

― 大学生は武道をどのようにとらえているのか ―

○井上航人[1]　軽部幸浩[2]　藤田主一[3]
([1]東京富士大学,[2]日本大学,[3]日本体育大学)

キーワード：武道イメージ　武道必修化　大学生

【目的】

1987年、日本武道協議会によって制定された「武道憲章」によれば、「武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した伝統文化である。」と説明されている。また、2008年に同協議会は「武道の理念」を、「武道は、武士道の伝統に由来する我が国で体系化された武技の修錬による心技一如の運動文化で、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道を修錬して心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、国家、社会の平和と繁栄に寄与する人間形成の道である。」と制定している。このように、武道には深淵な歴史が流れている。

武道は、2008年に「中学校学習指導要領」に保健体育で必修になることが明記され、2012年より完全実施された。しかし、2009年から2013年までの5年間で柔道の授業中に発生した負傷事故は21,562件であった（藤澤,2015)。また、日本武道館が2021年に実施したアンケート調査では、武道を専門とする保健体育科教員が授業を行っている割合は32.7%である。このように、中学校の武道授業は怪我や事故、指導者不足といった様々な問題を有している。

本研究では、「武道」が包含している本質を知るために学生への意識調査を行い、そこから得られた知見を基にして、武道発展の一助としたい。

【方法】

1. 対象者：A大学の学生104名（男性58名、女性46名)。

2. 調査材料:Kuhn（1954）が開発したTwenty Statements Test（TST）を利用し、「武道は…」という刺激語を与えた。

3. 手続き:調査は、2024年5月9日 ～ 2024年5月17日の間に実施した。対象者に目的や内容を説明した後、承諾を得たうえで無記名にて実施し回収した。

4.分析方法：学生から得た1,070行の回答を基にテキストマイニングソフト（KH Coder 3.01 official-package）を使用し、描画する共起関係の選択は、Jaccard係数を基にして上位60を指定し行った。

本研究は、A大学研究倫理委員会の承認（2024-1）を受け、大学生に研究計画を説明し、参加の同意を得て実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果】

クラスター分析では、学生から得た1,070行の回答を非階層クラスタリングにより8つに分類した。出現頻度の多い単語は「スポーツ」「人」「強」「心」「イメージ」「日本」「自分」「競技」であった。また、共起ネットワークによる分析の結果、一番出現頻度の多い単語は「スポーツ」であり、関連するフレーズとして「行う」が挙げられる。次に出現頻度の多い単語は「人」であり、関連するフレーズとして「守る」や「戦い」「心」「体」「鍛える」が挙げられる。それ以外では、「日本」とそれに関連する「伝統」「文化」、また、「競技」とそれに関連する「個人」「オリンピック」、「礼儀」とそれに関連する「大切」「必要」といったフレーズが多く出現した。

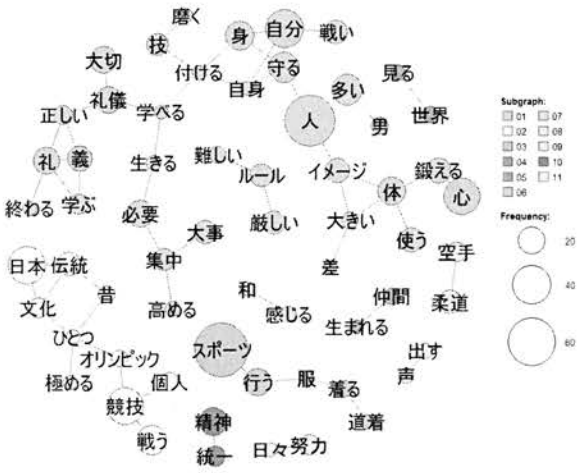


図1.「武道は…」の刺激語に対する共起ネットワーク

【考察】

分析結果から、大学生の多くは武道をスポーツの一種と考えており、球技や陸上競技・水泳等と同様のとらえ方をしていると考えられる。また武道を「日本の伝統・文化」と考えており、「自分や人を守る力が身に付く」「心や体を鍛えることができる」「礼儀が学べる」と考えていることが推察できる。

また、吉川（2021）が全国の教育委員会に対し実施した中学校武道必修化第6回アンケート調査結果について、武道授業の充実に向けた取り組みとして、武道の特性を指導しているという回答が見られたと報告しており、本研究における学生からの回答に多かった「礼儀」や「日本の伝統」「心」といったワードは、全国の中学校でそのような指導が行われている結果によるものと推察できる

今回の研究では「武道は…」という刺激語を与えた20答法による意識調査を実施したが、今後はこれを「柔道は…」や「空手は…」という他の種目を刺激語に置き替えることで、各種目に対するイメージの比較を行っていきたい。

【引用文献】

Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. (1954). An Empirical Investigation of Self-Attitudes. American Sociological Review, 19(1), 68-76.

藤澤健幸（2015）．中学校における柔道の負傷事故に関する研究スポーツ科学研究 12,84-100.

吉川英夫（2021）．中学校武道必修化第6回アンケート調査結果について 月刊「武道」12月号 148-154.

（いのうえ こうと・かるべ ゆきひろ・ふじた しゅいち）

新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法導入による試合変容に関する研究

○百田尚史[1]　古澤伸晃[1]　新里知佳野[1]　八木沢誠[1]　井上雄貴[1]　軽部幸浩[2]　藤田主一[1]
（[1]日本体育大学　[2]日本大学）

キーワード：新型コロナウイルス感染症　高校剣道　審判法

【問題と目的】

全日本剣道連盟は、2019年12月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受けたことにより、2020年4月5日に「対人稽古自粛のお願い」を発令した。その後、複数のガイドラインが策定され、剣道稽古の自粛や剣道マスク・シールドの導入、暫定的な試合・審判法（以下、暫定的審判法）が制定された。その影響で試合内容と技に大きな変化がもたらされた。

これまでに、大学生や全日本剣道選手権大会に出場している選手を対象にした暫定的審判法の研究が見られる（池田他,2021）。そこで本研究は、高校剣道におけるこれらの変化を考察することを目的とする。

【方法】

1. **対象者**：高校生男女、高校の剣道部指導者
2. **方法**：インタビュー、アンケート調査、試合分析、史資料を用いた文献調査
3. **手続き**

インタビューは、2023年1月5日、3月22日～24日に高校生男子1名、指導者40～50歳代男性2名に実施した。アンケートは、2023年1月4日～5日に高校1・2年生男女計40名、指導者男女計4名に実施した。

試合の分析は、コロナ前の2019年3月26～28日に行われた「第28回全国選抜剣道大会」とコロナ後の2020年12月27日～28日に行われた「全国高等学校選抜『高校生想代』剣道大会」の団体戦、男女ベスト8以上、計14試合を対象とした。分析は、試合の記録映像から、香田（2023）の分析項目を参考に、①しかけ技（引き技は含まない）、②しかけ技（引き技）、③応じ技、④反則の項目ごとに分類し、それらの頻度についてカイ二乗検定を行った。

本研究は、日本体育大学倫理審査委員会に「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書」を提出し、審査の結果、承認された（承認番号022-H135）。

【結果と考察】

分析の結果、暫定的審判法制定の前後で試合内容に大きな変化が見られた（表1）。応じ技に関しては、コロナ前の大会よりもコロナ後の大会で増加した。引き技に関しては、コロナ後の大会において半数に減少した。このように、コロナ前とコロナ後では応じ技と引き技の本数に注目すべき変化が見受けられた。コロナ前の大会では、しかけ技（自身から相手に技をしかけていく技）が主体である中、コロナ後の大会では応じ技（相手が技を出してきたものを応じて攻撃に転じる技）が増加し、引き技は減少した。これは、暫定的審判法によって鍔競り合い（つばぜりあい）が一呼吸（目安としておよそ3秒）で解消されるルールが導入され、鍔競り合い主体から立ち合いの攻防が増加したと考えられる。

引き技の本数が減少した背景には、鍔競り合いの時間制限が短縮されたことが影響している。以前は10秒以内に解消しなければならなかった鍔競り合いが、暫定的審判法では短くなり、引き技の減少に繋がっていると考えられた。反則に関しては、総数に大きな変化は見られなかったものの「不当な鍔競り合い」の反則が減少したことに繋がった（表2）。

インタビューやアンケート調査から得られた情報では、「不当な鍔競り合いがなくなった、前技が増えて正々堂々戦えるようになった」と暫定的審判法に対する肯定的な意見が多く挙げられ、試合内容の変化より、鍔競り合いでの時間空費や不当な鍔競り合いが減少し、構え合った間合いでの攻防が増加したことが好評であった。ただし、審判法のラインが曖昧である場面も指摘され、試合者と審判員の両方に課題があることも明らかとなった。

このように、暫定的審判法の導入により、高校剣道の在り方を変え、従来の試合内容よりも積極的な試合展開に資するものとされているためであると考えられる。

【技分類】（表1）

第28回全国選抜剣道大会（コロナ前）

	面	小手	胴	突き	合計
しかけ技	22本	9本	1本	0本	32本
引き技	11本	2本	1本	0本	14本
応じ技	3本	1本	1本	0本	5本
合計	36本	12本	3本	0本	51本

全国高等学校選抜「高校生想代」剣道大会（コロナ後）

	面	小手	胴	突き	合計
しかけ技	24本	7本	1本	1本	33本
引き技	4本	1本	2本	0本	7本
応じ技	9本	16本	4本	0本	29本
合計	37本	24本	7本	1本	69本

【反則分類】（表2）

第28回全国選抜剣道大会（コロナ前）

時間空費	3回
不当な鍔競り合い	8回
場外	3回
竹刀落とし	4回
鍔競り合いから分かれない	5回
分かれ方が正しくない	0回
防御姿勢での接近	1回
合計	24回

全国高等学校選抜「高校生想代」剣道大会（コロナ後）

時間空費	2回
不当な鍔競り合い	2回
場外	4回
竹刀落とし	0回
鍔競り合いから分かれない	12回
分かれ方が正しくない	4回
防御姿勢での接近	2回
合計	26回

【参考文献】

池田孝博他（2021）. コロナ禍において策定された暫定的な剣道試合・審判法は大学生レベルの試合にどう影響したか？武道学研究, 1-12.

香田郡秀・有田祐二（2023）. コロナ禍での剣道試合・審判法の策定に携わって，筑波大学体育系紀要, 46, 27-36.

（ももたなおひと・ふるさわのぶあき・しんざとちかの他）

大学運動部活動における
集団雰囲気測定尺度作成の試み

○橋本 育実　　種ケ嶋 尚志
（日本大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻）

キーワード：大学運動部活動，集団雰囲気 ，尺度

【目的】

運動部活動では，チームを取り巻く雰囲気の重要性が言及されている．しかし，スポーツの現場では雰囲気に当たる概念を組織風土として研究が行われている．組織風土の定義をLitwin(1974)は「仕事環境で生活している人が，直接的あるいは間接的認知し，メンバーのモチベーションや行動に影響を及ぼすと考えられる一連の仕事環境の測定可能な特性」としまた，角(1978)は「比較的持続するもの」であると述べている．しかし，大運動部活動における組織風土の先行研究では組織風土尺度の構成概念の不十分性を示唆している．また，大学運動部活動は，1 年ごとで学年や役割変化が生じ，さらに試合期や移行期，準備期など 1 年の中でも環境が一定ではないという特徴がある．そのため，組織風土というような概念では全てを包括することはできない．三島ら(2004)の学級雰囲気の定義を参考にすると集団雰囲気は「部活動構成員の相互作用によって部活内に醸成される一定の気分であり，部活動全般にわたる総合的，全体的な特徴」と定義することが出来る．よって本研究は大学運動部活動における集団雰囲気測定尺度を開発することを目的とした．

【方法】

1，調査対象者　調査は，大学運動部に所属する学生を対象とし，2023 年 12 月に実施した．対象者は，男子 97 名女子 66 名計 163 名であった．

2，調査内容　質問紙はフェイスシート(性別，学年，所属部活動，最高成績，練習頻度，役割・役職)，また，事前に所属するそれぞれのチームの雰囲気について感じていることの自由記述と，集団についての既存尺度を参考に 90 の質問項目を設定した．90 の質問について 6 件法として調査を行った．

3，分析方法　90 の質問項目を因子分析した．分析結果を基に本研究者とスポーツ心理学分野の研究者 2 名にて因子の解釈可能性を検討し，探索的因子分析を実施した．（SPSS Ver27.0）

【結果と考察】

Table1　因子分析の結果

項目	因子負荷量 F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	M	SD
F1　品位(α=.904)										
16 われわれのチームは上品である	.915	-.028	-.078	.026	.072	.021	-.017	-.085	3.951	1.252
17 われわれのチームは気高さを持っている	.855	-.065	.046	.009	.041	-.067	.046	.084	4.209	1.216
18 われわれのチームはキリッとしている	.767	.052	.093	-.064	-.023	.026	-.025	.056	4.104	1.271
F2　規律(α=.895)										
62 活動中の服装が部活に相応しくなければ厳しく注意する	-.034	.924	.006	.021	.017	-.064	.025	-.052	3.963	1.605
61 部活に遅れたり，怒って休んだりすると厳しく注意する	.078	.884	.001	-.007	-.033	-.045	.072	-.001	4.025	1.665
63 態度が悪いときには注意する	-.041	.798	-.008	-.045	.028	.099	-.119	.061	4.239	1.383
F3　情熱(α=.853)										
24 レギュラーとして活躍したいから一生懸命練習している	-.004	.037	.881	-.022	-.018	.065	.022	-.026	5.055	1.120
25 部活動には積極的に参加している	-.052	-.037	.818	.213	.042	-.163	-.037	.032	5.239	1.032
23 部員の誰よりも上手になろうと真剣に努力している	.138	-.009	.653	-.141	.003	.215	-.009	.032	4.620	1.194
F4　親密(α=.866)										
47 先輩と後輩は仲が良い	.021	-.039	.066	.979	.003	-.072	-.046	-.113	4.957	1.017
48 先輩と後輩は積極的に関りを持とうとしている	-.102	.007	.032	.688	.105	.072	.035	.103	4.791	1.148
83 先輩と後輩はお互いのことを理解しようとしている	.089	.075	-.100	.558	-.078	.250	-.006	.160	4.613	1.220
F5　結束(α=.877)										
43 われわれのチームの仲は親密である	.021	-.061	.040	-.020	.972	.008	.092	-.018	4.502	1.179
42 われわれのチームはメンバー間の人間関係は良い	.161	.070	-.047	.069	.757	.057	-.013	-.185	4.515	1.164
45 われわれのチームはチーム活動以外でも，メンバーはお互いうまくやっていける	-.085	.049	.018	.034	.650	-.118	-.089	.300	4.583	1.067
F6　尊重(α=.750)										
74 監督（先生）は，なにごとにも努力する部員を大切にする	-.035	-.024	.077	-.085	-.057	.801	.020	.004	4.448	1.371
64 他におけるあなたの認められかたについて満足している	.026	-.012	-.098	.222	.079	.595	.063	-.004	4.393	1.246
76 がんばった人は，たとえ結果がよくなくてもみんなから評価される	.018	-.018	.062	.022	.118	.553	-.054	.046	4.577	1.248
F7　放任(α=.754)										
85 われわれのチームはネチネチしている	.019	.077	.107	.072	-.132	-.122	.752	-.048	2.951	1.477
58 練習中，自分勝手なことをする	-.123	-.015	-.064	-.118	.203	.104	.728	.035	2.454	1.428
54 われわれのチームはギスギスしている	.102	-.039	-.044	.017	-.028	.011	.692	.068	2.883	1.442
F8　矜持(α=.768)										
12 われわれのチームは格調高いチームである	.181	-.026	-.051	.001	-.067	-.094	.029	.976	4.540	1.126
3 われわれのチームは，相手チームよりも良いプレイができる	.032	-.008	.008	-.020	.048	.068	-.048	.650	4.374	1.167
5 部員のだれもがチームの中に，ライバルがいる	-.156	.029	.096	-.005	-.013	.193	.092	.479	4.601	1.256
因子間相関		.462	.317	.391	.524	.485	-.154	.618		
			.216	.385	.406	.369	-.147	.496		
				.357	.310	.361	-.336	.397		
					.606	.548	-.382	.629		
						.652	-.354	.629		
							-.313	.635		
								-.286		

大学運動部の集団雰囲気を構成する因子は F1「品位」，F2「規律」，F3「情熱」，F4「親密」，F5「結束」，F6「尊重」F7「放任」，F8「矜持」と命名した．内的整合性を検討するために，Cronbach’ｓα を算出したところ，品位は．90，規律は．90，情熱は．85，親密は．87，結束は．88，尊重は．75，放任は．75，矜持は．77 を示した．これらの結果より，内的整合性が十分であることが確認された．今後は，信頼性の更なる検証，並びに妥当性の検討が求められる．

【利益相反】

本研究に関して開示すべき利益相反はありません．

【引用文献】

角 隆 司 (1978) 組 織 風 土 の 概 念．福 岡 大 学 経 済 学 論 業，22，(4)，433 - 460

三島美砂・宇野宏幸(2004)学級雰囲気に及ぼす教師の影響力 教育心理学研究，52，414－425

（はしもと いくみ・たねがしま ひさし）

大学生競技者の多重役割間における ネガティブ・スピルオーバーと自己調整学習について

髙井　美莉衣　　種ケ嶋　尚志
日本大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻
キーワード：志向性，競技傾倒性，自己調整学習

【目的】

競技者の置かれている環境は「異常」といっても過言ではなく，その影響は心にも受けている（立谷,2018）．それに加え，大学生競技者は学生としての側面も持ち合わせており，大学生と競技者の両立は決して簡単なことではない．

そんな多重役割に従事している大学生競技者が抱える抑うつ等の心理的問題の要因の１つに，多重役割間で負の影響を及ぼし合うとされる『ネガティブ・スピルオーバー（Negative Spillover；NSP）』が挙げられる．A-S-NSP（Athlete to Student NSP：競技者役割から学生役割へのNSP）と S-A-NSP（Student to Athlete NSP：学生役割から競技者役割へのNSP）の２つの方向性があり，それぞれに心理的現象（A-S-PsNSP，S-A-PsNSP）と物理的現象（A-S-PhNSP, S-A-PhNSP）があると考えられているため，４つの方向性から成る．これらは大学生競技者における競技傾倒性の具体的内容について評価することが可能であるともいえる．

山田他（2009）の研究から，大学生競技者の NSP は競技に対する「価値」と関係しており，その価値は所属先の志向性や役割ごとの影響も受け，変化してくると考えられる．

そこで本研究で用いる尺度は，前述した大学生競技者の過酷な環境下における競技継続の過程において，自ら能動的・積極的に競技へ関与していく態度を評価する尺度として，５つの方略から成る，計画，自己効力感，セルフモニタリング，エフォート，評価・内省の『自己調整学習』である．競技性・勝利志向性かつ大規模で監督などを中心とした運営体制をとる大学競技部に所属する現役選手（以下，競技者群）と，比較的娯楽志向性かつ参加や脱退が自由意志のもと決定できる学生主体の運営体制をとる体育系のサークルやクラブに所属する非競技者（以下，サークル群）において，それぞれの志向性などから起因する競技に対する価値の違いを，NSP と自己調整学習の関係から比較することで，競技性・勝利志向性を持つ競技者における適応的な心理方略の傾向を明らかにする．以上を明示することは，過酷な環境で競技と向き合う大学生競技者の，より適応的な競技環境の構築を目指すことに寄与する．

【方法】

大学生・大学院生であり，大学競技部に所属する現役選手109名と，体育系のサークルやクラブに所属する非競技者75名を対象に，授業・部活動の一部の時間を利用して，質問紙調査を実施した．内容・書式を統一した紙媒体とインターネット媒体の２種類を用意し，適宜使用した．数量的処理によって匿名性などの保護されることについて説明した．

NSP 項目　山田他（2009）が作成した，NSP の評価基準を発生頻度に限定し，A-S-NSP と S-A-NSP それぞれ８項目ずつ，計 16 項目から構成されている．

スポーツ版自己調整学習　幾留他（2017）が作成したスポーツ場面に限定した自己調整学習尺度である．計画，自己効力感，セルフモニタリング，エフォート，評価・内省，から成る５因子計 41 項目から構成されている．

競技者プロフィール　学年，性別，競技名，競技継続年数，競技レベル，レギュラー経験の有無，役職の有無（該当者のみ）から構成され，記述式と選択式で回答を求めた．

【結果】

分析結果は，ピアソンの積率相関係数（r）を用いて相関を求めた．有意水準は $p<0.05$ とした．競技者群は自己調整学習方略における，計画，セルフモニタリング，評価内省について A-S-PsNSP が正の相関，S-A-PhNSP が負の相関であった．エフォートは，上記に加えて S-A-PsNSP も負の相関であった（Table1）．

サークル群においては，自己効力感，セルフモニタリングにおいて A-S-PsNSP と A-S-PhNSP が正の相関であり，それ以外は無相関であった（Table2）．

【考察】

競技者群は計画，セルフモニタリング，エフォート，評価・内省の方略が高いとプライベートの時間に競技の悩み事について考える傾向が高く，プライベートの事情で練習を休むことや，競技活動を中途半端にしないことが示された．特にエフォートが高いと，プライベートでの悩み等を競技に持ち込まず，競技傾倒性の高さや限定的時間の中で効率的に競技力向上を図る内省的な振返りを行っていると考えらえる．

サークル群は自己効力感，セルフモニタリングの方略が高いと，プライベートの時間に競技のことを考えたり，自主練習をしたりする傾向が高く，競技のためにプライベートを心理的にも時間的にも費やす傾向が見られた．

以上から，現状として競技者群とサークル群の志向性や役割による心理方略に違いがあることが明らかとなった．しかし，これらに明確な正解は無く，　今後は大学生競技者の志向性や役割ごとに自認するアイデンディティや抱えている心理的問題と合わせた，より実践的な研究が必要となる．

【利益相反】

本研究に関して開示すべき利益相反はありません．

【引用文献】

幾留沙智·中本浩揮·森司郎·藤田勉（2016）．スポーツ版自己調整学習尺度の開発　スポーツ心理学研究 2017 44（1）1−17.

立谷泰久（2018）．トップアスリートの心理サポートにおけるスポーツメンタルトレーニングと心身医学の関係　第15回日本心身医学会総会並びに学術講演会（札幌）58 166−173.

山田奉行·岡康大·川田裕次郎·水野基樹·広沢正孝（2009）．大学生競技者に生起するネガティブ・スピルオーバーと抑うつの関連性 順天堂医学 2009　55　502-510.

（たかい　みりい　・　たねがしま　ひさし）

Table1　大学生競技者群の自己調整学習とNSP

	計画	自己効力感	セルフモニタリング	エフォート	評価・内省
A-S-PsNSP	0.41*	0.15	0.34*	0.37*	0.46*
A-S-PhNSP	-0.01	-0.09	0.03	0.09	0.04
S-A-PsNSP	-0.16	-0.12	-0.14	-0.25*	-0.12
S-A-PhNSP	-0.27*	-0.06	-0.29*	-0.32*	-0.24*

*p<0.05

Table2　大学生サークル群の自己調整学習とNSP

	計画	自己効力感	セルフモニタリング	エフォート	評価・内省
A-S-PsNSP	-0.15	0.30*	0.34*	0.12	-0.09
A-S-PhNSP	-0.05	0.29*	0.33*	0.20	0.02
S-A-PsNSP	-0.03	0.04	0.08	0.11	0.19
S-A-PhNSP	-0.04	-0.08	-0.09	-0.08	0.19

*p<0.05

リバウンドジャンプへの言語教示が運動実施者の意識へ与える影響

-テキストマイニングによる分析-

○中山雅斗[1]　森祐貴[2]　来田宣幸[3]
([1]大阪体育大学非常勤講師　[2]園田学園女子大学 人間健康学部　[3]京都工芸繊維大学 基盤科学系)
キーワード：言語教示・リバウンドジャンプ・テキストマイニング

【目的】

本研究の目的は、リバウンドジャンプ(以下RJ)を実施する際に与えられた言語教示により、運動実施者がどのような意識をしたか調査することである。

【方法】

被験者は、大学女子バレーボール選手 47 名(年齢：19±1.8 歳、身長：165.7±6.2cm 、競技年数：11.1±2.8 年)であった。被験者には本研究の主旨、内容ならびに安全性について事前に説明し、十分な理解を得た上で参加の同意を求めた。調査の手続きは、被験者に対して、RJ の説明を行い、5 回連続の RJ の試技を行わせた。その後、質問紙への回答を求めた。質問内容は、「RJ を行う時に、接地時間を短くかつ、高くジャンプしてください。その時にどのようなことを意識すると良いと思いましたか？」とし、回答は自由記述の方式とした。

回答の分析には、KH Coder(Ver3.0 Base Ver)を使用した。KH Coder は、テキストマイニングの分析手法を用いた研究で実用されており(1)、研究者の恣意的な分析を排除し、客観的に自由記述での回答の内容を分析するには適切なツールである。分析の内容については、回答のデータから、頻出語の抽出を行い、出現回数の算出をした。また、抽出語同士の関連性を要約し、提示するために共起ネットワークの描画を行った。

【結果】

質問紙調査から、204 件の自由記述データが得られた。次いで頻出語の抽出を行い、助詞や助動詞など語句単一では意味を持たない語を除外した。最終的に、総頻出語数は 768 語、異なり語数 148 が抽出された。出現回数が 5 回以上の抽出語に関しては表 1 に示した。出現回数が 30 回を超えている語は、「腕」(67 回)、「跳ぶ」(49 回)、「速い」(33 回)であった。

共起ネットワーク図を図 1 に示した。図中には、各頻出語の出現回数を記載し、8 つのサブグラフ(①～⑧グループ)ごとに破線で囲む処理を施した。①グループでは「腕」「速い」「振る」などのキーワードが示された。同様に、②グループでは、「着地」「地面」「蹴る」③グループでは、「跳ぶ」「上」④グループでは、「足」「つま先」「足裏」、⑤グループでは、「使う」「足首」「反動」⑥グループでは、「膝」「曲げる」。⑦グループでは、「意識」「リズム」。⑧グループでは、「力」「入れる」などのキーワードが示された。

【考察】

本研究では、リバウンドジャンプ実施時に、「接地時間を短くすること」と「高くジャンプすること」を目指す教示を与えた際の、運動実施者の意識を調査することを目的とした。分析の結果から、グループ①では、「腕の使い方」、グループ④では「足・足裏の使い方」、グループ⑤では「足首の使い方」、グループ⑥では「膝の使い方」への意識が読み取れる共起ネットワークを示した。このことから、要約されたグループのうち、半数が身体部位へ向けられた意識であったということが分かる。特にグループ①の「腕の振り方」については共起関係にあるキーワードの出現回数の多さからも、多くの被験者が意識を向けたことが考えられる。(2)北尾ら(2018)は、高い運動パフォーマンスを発揮するには、身体外部の環境を到達目標とすることが有効であると明らかにしている。今回の調査においては、グループ②では「地面」、グループ③が「上」への意識が読み取れる共起ネットワークを示し、これらは身体外部の環境へ意識が向いていることが考えられる。しかし、調査結果では、身体部位へ意識を向けていることが読み取れるグループが半数であり、今回の教示の表現であれば身体部位への意識が強くなる可能性が示唆された。

表 1 回答における頻出語と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
腕	67	足	16	足首	10
跳ぶ	49	意識	15	裏	10
速い	33	蹴る	15	タイミング	8
振る	24	大きい	15	振り上げる	8
振り	23	曲げる	14	接地	8
使う	19	つま先	13	上げる	6
地面	17	力	13	入れる	6
着地	17	上	11	反動	6
膝	17	強い	10	リズム	5

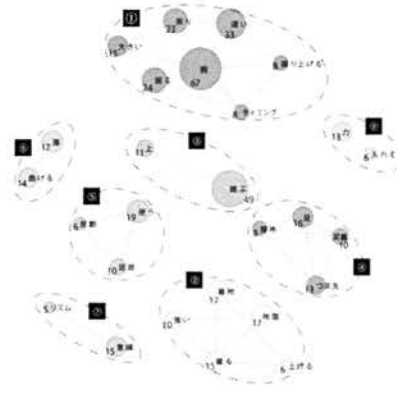


図 1 回答における共起ネットワーク

【利益相反】

なお本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

(1)西嶋雅樹(2023)心理専門職の養成における職業倫理教育による職業倫理イメージの変化 - 架空事例を用いた授業実践の KH Coder による分析 - , 26 .
(2)北尾浩和・来田宣幸・深田智・中本隆幸・小島隆次・荻原広道・野村照夫(2018)言語的な動作指示の違いがパフォーマンスに及ぼす影響 -ジャンプ動作における関節角度, 動作時間および跳躍高の変化について- , 日本感性工学会論文誌 Vol.17 , No2 , pp257-265.

医療における多職種連携のチーム機能-成果モデルの構築と診療科別の特徴の検討*

○異儀田はづき[1]　古屋健[2]
([1]立正大学大学院心理学研究科博士後期課程　[2]立正大学心理学部)

キーワード：多職種連携，チームワーク，Interprofessional Collaboration

【目的】近年，医療における多職種連携（Interprofessional Collaboration 以下 IPC）が推進されている。IPC の先行研究のレビューでは，最も完成された理論的枠組みは，インプット（物的・人的環境）・プロセス（提供される治療やケア・チームの凝集性）・アウトプット（ケアの効果）というシステムアプローチを用いていることが報告されている（D'amour et al, 2005）。この枠組みを用いた調査では，IPC のアウトプットはプロセスによって直接的に規定されることが示された（Sicotte et al, 2002）。我々も同様の枠組みで，精神科 IPC に関する看護師を対象とした面接調査を行った。その結果，患者やチームの属性より，チーム内の意思決定過程や凝集性といった IPC のチーム機能が成果を直接規定していることが示された（異儀田・古屋，2022; 異儀田・古屋, 2023）。この研究は対象を精神科 IPC に限定していたため，本研究では他の診療科を含めて調査を行い，以下の仮説を検証する。

仮説 1. IPC のプロセスはアウトプットに直接影響する。
仮説 2. IPC のインプットはプロセスへの影響を介して，アウトプットに間接的な影響を与える。
仮説 3. 診療科の違いによって，プロセスからアウトプットへの影響の仕方が異なる。
仮説 4. 診療科の違いによって，インプットからプロセスに及ぼす影響の仕方が異なる。

【方法】Web 調査会社と研究者のネットワークを通して 2022 年 10 月に調査を実施し，1)精神科，2)リハビリテーション（地域包括ケア病棟，回復期リハビリテーション病棟を含む）・緩和ケア（以下リハ・緩和），3)内科，4)脳神経外科，整形外科（以下，脳外・整形）病棟に勤務する看護師から得られた有効回答 470 名（有効回答率 85.9%）を分析対象とした。分析に用いた項目は，インプットとしての IPC の問題 28 項目，プロセスとしての IPC のチーム形成準備 12 項目と IPC のチーム機能 15 項目，アウトプットとしての IPC の成果 6 項目である。本研究は立正大学心理学研究科研究倫理委員会の承認を受け実施した（承認番号：G2022006）。

【結果】　**1．IPC の問題，プロセス，成果の下位尺度**

確認的因子分析の結果，IPC の問題は，コミュニケーション問題，カンファレンス問題，連携不全，医師問題，チーム外問題，対患者家族関係の 6 因子，チーム形成準備は，目標，計画，役割分担の 3 因子，チーム機能は，適切な意思決定，点検評価，凝集性の 3 因子，成果は 1 因子構造が確認された。

2．IPC のチーム機能 - 成果モデルの構築

IPC の問題，プロセス，成果の因果関係を明らかにするために共分散構造分析を行った結果，十分な適合度を持つ IPC のチーム機能 - 成果モデルが構築された（図 1）。

3．4 種の診療科群の比較

4 種の診療科間での差異の検証を目的に，IPC のチーム機能 - 成果モデルを用いて，多母集団分析を行った。配置不変性の確認後，診療科間のパス係数の差の検定を行った。その結果，チーム機能から成果に至るパスには診療科による有意差は認められなかった。しかし，IPC の問題から連携不全へのパスには有意な差が見られた。まず，チーム外問題からのパスは精神科(.37)のみ有意な正の影響が認められ，内科(.01)，脳外・整形(.07)との間に有意差があった($p<.05$)。医師問題からのパスは，全診療科で有意な正の影響が認められ，脳外・整形(.44)と精神科(.15)，リハ・緩和(.20)との間に有意差があった($p<.05$)。また，連携不全からチーム形成準備へは，精神科，内科で有意な負の影響が認められ，精神科(-.39)と脳外・整形(-.11)との間に有意差があった（$p<.05$）。

【考察】IPC のアウトプットに至る因果関係を検討した結果，アウトプットに直接影響を与えるプロセスの中心的要素はチーム機能であり，インプットに該当する個別の問題は，連携不全に集約され，チーム機能に影響を及ぼしていたため，仮説 1，2 は支持された。また，各診療科の差は，全て IPC の問題因子にまつわるパスで有意差が認められたため，仮説 3 は支持されず，仮説 4 は支持された。つまり診療科の特徴はインプットがプロセスに及ぼす影響の違いに表れやすいと考えられる。

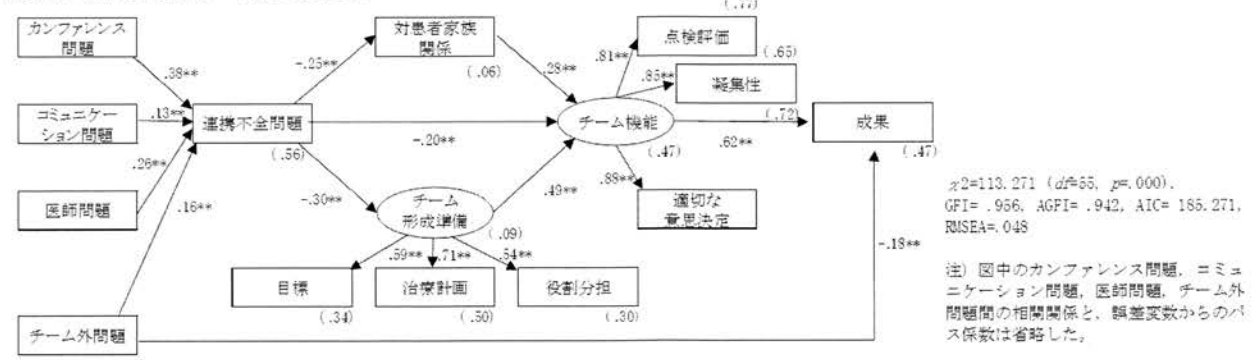
【利益相反】本研究で開示すべき COI はない。

【引用文献】D'amour et al. (2005) The conceptual basis for interprofessional collaboration, Journal of Interprofessional Care, 19(1), 116-131.
Sicotte et al (2002) Interdisciplinary collaboration within Quebec community health care centres, Social Science & Medicine, 55, 991-1003
異儀田はづき・古屋健（2022）精神科医療における多職種連携のチーム属性と成果との関連，立正大学心理学年報，13，35－46.
異儀田はづき・古屋健（2023）精神科医療機関における多職種連携の成果に影響を及ぼすプロセスの検討，立正大学心理学年報，14，31-40.

*本研究は JSPS 科研費 JP22K10823 の助成を受けた。

（いぎた　はづき・ふるや　たけし）

Figure 1 医療におけるIPCのチーム機能-成果モデル



χ^2=113.271 (df=55, p=.000), GFI= .956, AGFI= .942, AIC= 185.271, RMSEA=.048

注）図中のカンファレンス問題，コミュニケーション問題，医師問題，チーム外問題間の相関関係と，誤差変数からのパス係数は省略した。

自傷行為傾向尺度Ⅱ作成の試みとその信頼性・妥当性の検討

自傷発生までの経路モデルを経て

○波平乃衣[1]　土居正人[2]
([1]吉備国際大学大学院心理学研究科　[2]吉備国際大学人間科学部心理学専攻)

キーワード：自傷行為，尺度構成，軽度自傷行為

【目的】自傷行為は近年増加している若者の問題行動である。現在，海外で頻繁に使用されている自傷行為尺度は，疫学的調査で用いることができても，重篤な自傷方法についてたずねているため，教育現場で扱うには難しい。

そこで国内の自傷研究では，一般の学生や生徒を対象に調査を行っていくために，直接的，あるいは重篤な自傷についてたずねない質問紙の開発を行ってきた。しかし現在の尺度には，損傷度の高い項目が含まれており，間接的な表現の自傷行為尺度としては不十分であった。そこで，土居・三宅・園田（2013）は，直接的な自傷方法を用いず，自傷をしている者の心理社会的状況をたずねることで，その人の自傷をする可能性の高さを示す，自傷行為尺度を作成した。しかし，この尺度項目中に自傷に関する内容が一つも含まれていないことから，実際の自傷を測定できているかどうかといった尺度の妥当性に問題があるとの指摘がされていた（佐野，2020)。そこで，自傷行為傾向尺度を作成するにあたって，自傷行為に関する項目を含める必要性があった。そこで，福島・安田（2012）の研究結果より，自傷の度合いが軽度であったとしても，自傷経験の有無を測定できる可能性があるとされた為，尺度項目に損傷度の低い自傷行動の項目（軽度自傷行動）を含めた。以上のことから，本研究の目的は，新しい自傷行為尺度（自傷行為傾向尺度Ⅱ）を作成し，その信頼性と妥当性を検討することである。

先行の尺度である自傷行為尺度（土居他, 2013）よりも，精度を高める方法として，軽度自傷行動を含めること，分析開始時点で t 検定を行い，効果量が高い項目のみを選別した上で，尺度作成を行うといった工夫を行った。また，調査対象者は一般の大学生だけではなく，医療機関の患者も含めて比較を行った。また，自傷経験有無をたずねる際は，ネットによる回答方法を用いることで，倫理的問題をクリアし，より安全な環境下で回答してもらえる仕組みにした。

【方法】研調査は，大学生 239 名，医療機関の患者 6 名を対象とし，有効回答数は 223 名（有効回答率 93.3%），平均年齢は 20.99 歳，SD=4.88 であった。用いた尺度について，自傷行為傾向尺度Ⅱの試作版等を質問紙，自傷の方法や経験頻度についてはGoole フォームを用いて回答を求めた。手続きについて，本調査は自由意志であること，個人情報の遵守等について伝えた。 本研究は，吉備国際大学の倫理審査委員会の認証を受けた上で実施している(No. 23-08)。

【結果】自傷傾向尺度Ⅱの試作版に対して項目分析を行い，その後，各項目事を従属変数とし，自傷 3 種（自己切傷，自己殴打，対象物強打）有無を独立変数とした t 検定の結果 20 項目が残った。なお軽度自傷行動の項目と自傷心性の項目を分けた上で分析を行っている。この 20 項目に対して，最尤法，Promax 回転による探索的因子分析を行い，因子負荷量が大きい項目（.40 以上）を抜粋した結果，「依存的対人関係」「不信的感情抑制」「悲観的思考」「軽度自傷行動」の 4 因子 18 項目が抽出された（表 1)。

構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行った結果，4 因子 15 項目にまとまりモデルの適合度は，$\chi^2(84)$= 170.35, *n.s.*, GFI=.83, AGFI=.75, NFI=.78,CFI=.87, RMSEA=.10, AIC=242.35 であった。基準関連妥当性について，自傷傾向尺度Ⅱと各因子における，健常群及び自傷群と医療機関の患者の一要因分散分析の結果，自傷傾向の健常群に比べて，自傷群，患者群は高かった（F=23.68, p<.001)。軽度自傷行動の自傷群に比べて，健常群は低く，患者群も低かった(F=30.56, p<.001)。

本尺度のカットオフ値を算出するため，ROC 分析を行った。自傷傾向では、平均値 2.63 点の時に正診率が 81.4%（曲線下面積.85, p<.001，感度 65.5%，特異度 86.9%，陽性的中率 63.3%，陰性的中率 88.0%）であり，軽度自傷行動では平均値 2.75 点の時に正診率が 85.0%（曲線下面積.82, p<.001，感度 48.3%，特異度 97.6%，陽性的中率 87.5%，陰性的中率 84.5%）であった。

自傷発生までのプロセスモデルについて，母親不承認とHSP が推論の誤りと自傷傾向を通して自傷行為を生じさせるという過程を想定し，それぞれにパスを引いた上で共分散構造分析を行った。各自傷行為を二つの自傷要因として、直接要因（自己切傷，自己殴打，対象物殴打，自己刺傷）と間接要因（過食，拒食，過食嘔吐）に分けて分析を行ったところ，適合度は $\chi^2(73)$=169.45, *n.s.*, GFI=.83, AGFI=.75, NFI=.75, CFI=84, RMSEA=.11, AIC=233.45 であり適合度が最も高かった。

本尺度では，軽度自傷行動が含まれており，その因子は自傷行動を測定するものであり，かつ自傷経験者を抽出するためのスクリーニングとしても使用することもできる。全体を合わせて自傷傾向として調査研究を行うことも可能であり，自傷者の心理社会的状態をアセスメントすることもできるツールであるといえる。

【利益相反】本研究において，利益相反はなかった。

【引用文献】土居正人・三宅俊治・園田順一 (2013). 自傷行為尺度作成の試みとその検討 心身医学, **53(12)**, 1112-1119

福島裕人・安田めぐ美 (2012). 高校生の自傷行為とアレキシサイミア傾向および性格特性との関連 こころの健康, **27(2)**, 93-101.

佐野和規 (2020). 高校生を対象とした自傷傾向尺度の作成と検討 兵庫教育大学教育実践学論集, **21**, 1-10.

(なみひら のい・どい まさひと)

表 1　探索的因子分析の結果

項目番号	項目内容	因子負荷量			
	Ⅰ. 依存的対人関係 α=.83	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Q31	私は，自身が困った時，必要以上に他者の助けに頼らざるを得ないことが多い	.83	-.10	.01	.00
Q27	私は，生活面において，他者に頼らざるを得ないことが多い	.83	-.08	-.07	-.09
Q41	私は，他者に評価してもらわなければ自分の状況・状態がよく分からなくなってしまう	.69	.02	.06	.16
Q42	私は，他者からの称賛や尊敬されたいと必要以上に強く願う方だ	.64	-.03	.18	.05
Q28	私は，周囲の人と上手に人間関係をつくることができない	.51	.23	-.25	-.07
	Ⅱ. 不信的感情抑制 α=.76				
Q8	私は，どんなに仲の良い人でも信用することができない	.01	.77	.15	.11
Q12	私は，自分のことを他者に話したくないと思う	.06	.75	.03	-.03
Q4	私は，他者に心を開かない方だ	.05	.68	-.10	-.17
Q11	私は，自分の感情を非常に強く抑える	.08	.51	.02	.10
Q32	私は，友達を全面的に信用することができる（逆転）	.30	-.48	.11	-.06
	Ⅲ. 悲観的思考 α=.78				
Q43	私はいつも，ものごとはプラスの方向に考える方だ（逆転）	-.02	.11	.81	-.04
Q44	私は，自身の将来を楽しみにしている（逆転）	.14	-.04	.77	-.01
Q45	私のことを認めてくれる人が多くいる（逆転）	-.02	-.07	.65	-.01
	Ⅳ. 軽度自傷行動 α=.71				
Q33	私は，自分の手や足，顔をつねることがよくある	-.02	.03	.03	.86
Q25	私は，皮膚を引っ掻いたり爪を立てたりすることがよくある	.16	.01	-.19	.54
	寄与率（%）	32.30	8.89	6.66	4.67
	累積寄与率（%）	32.30	41.19	47.84	52.51

精神科病院におけるスポーツ療法に関する研究

― テニスプログラムの効果測定（ストレス反応と自尊感情） ―

○小畑周介
（医療法人養心会　国分病院）

キーワード：精神科デイケア，スポーツ療法，自尊感情

【目的】

これまでの多くの研究や報告より，規則的な運動の心理的効果として，不安の低減，軽度から中程度のうつレベルの低減など，様々なストレス指標の改善があるとされている。精神疾患に対する運動療法は，身体機能だけではなく，精神機能の回復も期待できる。さらには，人間関係を再体験し，社会性を高めていくことにもなる。運動療法によって，身体機能の回復，心理的効果，コミュニケーション，自己への気づきが期待できる。

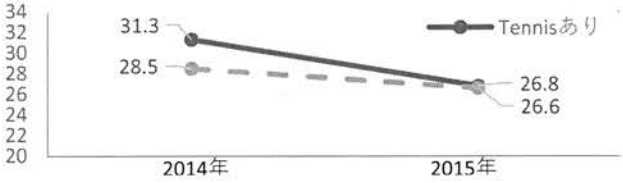
【方法】

1．調査対象：当院のデイケア通所者。
2．調査期間：2014 年・2015 年の各 5～6 月。
3．調査方法：質問紙調査およびバウムテスト。質問紙の主な構成は，①Rorsenberg 自尊感情尺度 RSES（10 項目），②ストレス反応尺度 SRS-18（18 項目），③テニスに関する項目（12 項目）である。いずれも 4 件法で回答を求めている。バウムテストは，「実のなる木を 1 本描いてください」と教示して A4 用紙にイメージのまま鉛筆で描いてもらう。
4．倫理的配慮：調査協力者に対して研究調査の実施内容，プライバシー保護の約束に関する説明を行い，同意を得られた方のみを対象に調査を実施している。また，調査途中においても本人の希望で取りやめが可能であること，参加しないことで不利益が生じないことを説明している。

【結果】

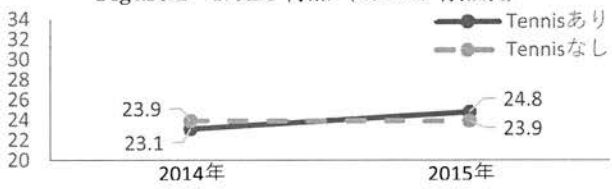
1．調査協力者の属性： 2014 年が 44 名（男性 27 名，女性 17 名），2015 年が 34 名（男性 24 名，女性 10 名）で，全体の平均年齢 51.2 歳（*SD*=13.4）であった。2 年連続での協力者は，21 名（男性 12 名，女性 9 名）であった。
2．1 年間での心理的側面の変化：2 年連続での調査協力者を対象に，テニスあり群（12 名）とテニスなし群（9 名）に分け，それぞれの平均スコアを比較・検討した。まず，ストレス反応は，Figure 1 の通り，テニスあり群で 31.3 から 26.8 に変化した（5%水準で有意）。

Figure 1　SRS-18 得点（Tennis 有無別）



次に，自尊感情の変化を見ると，Figure 2 の通り，テニスあり群でわずかに上昇傾向が示されたが，統計的には有意差は確認されなかった。

Figure 2　RSES 得点（Tennis 有無別）



3．睡眠や食事，充実感の変化：テニスあり群において，「生活に充実感がある」の項目で 1.75 から 3.00 に上昇していた。睡眠と食事には、大きな変化は見られなかった。
4．テニスに関する項目の変化：12 項目のうちテニスのスキルに関する項目では，「スムーズにラケットが振ることができる」が 0.25 上昇した以外，大きな変化は見られなかった。スキル以外の面では，「プレー中の健康管理を自分で行うことができる」（0.38 上昇），「テニスを楽しむことができる」（0.25 上昇）の項目で変化が示された。
5．バウムテストの比較：バウムテストの描画について，1 年間の変化を検討すると，木の基本構造に大きな変化は見られないが，木全体のサイズが大きくなったもの，枝や葉の数が増えたもの，幹が伸びたもの，地面線が足されたものなど，それぞれ異なる形で変化していることが確認された。

【考察】

1．テニスプログラムよる効果：テニスプログラム参加者において，1 年後のストレス値の低下が認められた。他のプログラムの要因も考えられるが，テニスがストレス軽減に一定の効果があったと考えられる。自尊感情について，改善傾向は示されたものの統計的には有意差は見られず，ストレス反応よりも変化しにくいことが推測される。一方で，参加者の中には値が上昇している人も見られ，活動継続により今後の改善が期待できると言える。睡眠や食事について，スコア上大きな変化は見られなかったが、充実感に関してスコア上も上昇しており，テニスプログラムへの参加が生活の充実に繋がっていると考えられる。
2．バウムテストから読み取れる変化：バウムテストの描画はまさに人それぞれであり，変化の仕方も個性的であった。全体的印象としては，精神的エネルギーが高まり，表現する力も豊かになっており，ポジティブな内的変化が起こっていることが推測される。
3．行動観察から読み取れるテニスのメリット：1 つ目に，テニスが性別や対象年齢を問わないことが挙げられる。テニス未経験の高齢者でも確実に上達し，楽しみを享受できることにある。2 つ目に，人間関係面である。言語的コミュニケーションが苦手な人にとっても一緒にプレーすることで，自然な交流が生まれ，他者への配慮や役割分担ができるようになる。3 つ目に，健康管理，安全管理，活動への意識が高まることである。準備体操や休憩，水分補給など，テニスをするためには自己管理が必要であることを自然に理解できる。活動を継続することによって，身体機能および認知機能が改善し、心身の健康が回復し，自信が培われ、次の活動に繋がることは，スポーツ療法の大きなメリットと考えられる。

【利益相反】本稿の執筆に関してすべき利益相反（conflict of interest; COI）はない。

【引用文献】

桜井茂男（2000）．ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討，臨床心理学研究，*12*, 65-71.
坂中尚哉（2009）．精神科デイケアにおける運動療法の効果に関する実践的研究，関西国際大学研究紀要，*10*, 117-126.

（おばたしゅうすけ）

被災者の生活再建状況に関する研究

―福島県大熊町の被災者との面接調査から―

○山田瑶人[1]　大森哲至[2]　大森美路子[3]　田宮憲[4]　稲葉佑貴[5](非会員)
([1]上智大学　[2]帝京大学[2]　東京海洋大学[3]　帝京大学短期大学[4]　株式会社サンオータス[5])

キーワード：福島第一原発事故，被災者の精神的健康，災害後の生活再建状況

【目的】

2011年3月11日に発生した東日本大震災における福島第一原子力発電所の放射性物質漏洩事故の影響により、避難を余儀なくされた福島県双葉郡大熊町の住民は、長期にわたる避難生活や故郷の喪失により深刻な精神的負担を抱えることとなった。以上のような大熊町の被災者を対象に、災害の発生から2年5ヶ月後の被災者の精神的健康についてGHQ28を用いて行われた大森（2019）の調査では、78.4%にハイリスク者が認められている。一般成人を対象としたハイリスク者の割合14%と比較しても高い数値が認められている。また、2011年度に福島県民を対象に実施されたK6を用いた、こころの健康度・生活習慣に関する調査によれば、災害の発生から10年が経過した202時点でもハイリスク者の割合は6.1%となっており、一般成人を対象としたハイリスク者の割合（3%）と比較しても3ポイント程度高いことが認められている。さらに復興庁（2022）によると、東日本大震災における震災関連死は3,794人が認められている。そのうち福島県民は2,337人であり、その他の被災地域、宮城県（928人）や岩手県（489人）などと比較しても多くなっている。このような震災関連死に至る背景には、避難生活による疲労やストレス、生活再建における課題が引き金になっていることが多いことが認められている。

これらの先行研究を概観すると、東日本大震災、福島第一原子力発電所事故から10年以上が経過しても福島県の被災者は精神健康の問題を抱えていると考えられる。しかしながら、被災者が災害後にどのような生活再建における課題に直面しているのか、その課題の解消ためにどのようなニーズがあるのかなど、個人に焦点を当てた研究がほとんどされてこなかった。

以上の問題提起を踏まえて、本稿では、福島第一原子力発電所事故の発生から13年が経過した現在、被災者が直面している生活再建状況における困難や悩みを明らかにする。具体的には、原発事故の被害を受けた福島県大熊町の被災者が避難生活や新たな居住地での生活をどのように再建し、その過程で直面する課題についての実態を把握することである。これにより被災者支援の現状と課題を明確にし、今後の支援に寄与することを目的とする。

【方法】

実施期間　本調査は、2024年5月7日、5月14日に実施した。

面接対象者：本調査では、東日本大震災発生時に福島県大熊町に居住していた20歳以上の住民を調査対象とした。面接を行なった対象者は計10名であり対象者の年齢は何歳から何歳まで。（男性：2名　女性：8名）
平均年齢68,7歳（SD＝9,8）

面接の手続き：面接は対面で行い、面接は1名あたり約1時間とした。面接内容は対象者に承諾を得た上でICレコーダーに録音し、その内容について逐語録を作成し分析を行なった。

面接内容：面接は半構造化面接で行なった。質問の内容については、面接対象者の個人的特性に加えて、災害直後から現在に至るまでの生活再建における問題、不安、悩みなどについて質問した。

倫理的配慮：面接調査の実施にあたって、質問への回答は本人の自由意志を尊重し、回答を強制することはしなかった。

【結果】

本研究の面接結果では、被災者の直面している生活再建に関する問題、不安、悩みとして「経済的な問題」、「コミュニティの分散」、「社会的支援の欠如」が見出された。具体的な面接内容は以下の通りであった。

・68歳女性：東日本大震災後、避難生活を続けていますが、未だに大熊に戻れません。帰還の見通しもたっていません。生まれも育ちも大熊町。震災前には必ず毎日会って挨拶をしていた友人や近所の人ともなかなか会えなくなってしまった。避難してから10年以上が経っているけど、避難先での人間関係にもなかなか馴染むことができない。違和感を抱えながら生活を続けている。

・60歳男性：震災の影響で家と仕事を失いました。新しい職場を探しましたが、経済的に安定しているとは言えない状況です。支援金、助成金などを頼りにしていますが、それもいつまで続くのかわからない。大熊町に戻れることなら戻りたいが、経済的なことを考えると難しい。

・76歳女性：避難先での生活を続けて、行政の対応が不十分で画一的だと感じることがよくあった。避難した後は自分でという感じがあった。避難先での生活は慣れないことばかりで自分だけの力で生活を立て直すのは困難だった。

【考察】

本研究の目的は、東日本大震災における福島第一原発事故の被災者の生活再建における課題、不安、悩みについて明らかにすることであった。調査の結果、被災者の精神的健康の回復が一般成人の数値まで未だに回復していない背景には「コミュニティの分散」、「経済的な問題」、「社会的支援の欠如」があることが考えられる。

今後の課題としては、上記の3つの項目について検討し、被災者の生活再建における課題、不安、悩みなどを軽減することができるような支援を模索していくことである。

【利益相反】

本稿に関して、開示すべき利益相反（conflict of interest; COI）はない。

【引用文献】

大森哲至（2019）.福島第一原子力発電所事故による長期避難生活者の精神健康の問題―福島県大熊町被災者と会津若松市民の比較からの検討―.日本応用心理学会, 45(2), 95-104
福島県（2023）. 県民健康調査「こころの健康度・生活習慣に関する調査（ここから調査）」について
https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/kenkocyosa-kokoro.html
復興庁（2022）. 東日本大震災における震災関連死の死者数.
https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-6/20220630_kanrenshi.pdf

（やまだ ようと・おおもり てつし・おおもり みちこ・たみや けん・いなば ゆうき）

防災リュックに常用薬を入れる意識とは？

○上田 真由子
（追手門学院大学　経営学部）

キーワード：防災意識　防災行動　常用薬

目　的

日本は災害大国であるため，国民一人一人が積極的に防災行動を取る必要がある。その防災行動には，家具の固定や災害時の避難計画の策定等，様々な種類があるが，非常用持ち出し品一式を準備しておくこともその一つである。

非常用持ち出し品として，水や非常用食料，懐中電灯等の備蓄に関する先行研究はある程度行われているが（Onumaら,2017など），常用薬を防災リュックに入れているかどうかについて調査した研究はほとんど存在しない。しかしながら，常用薬の備蓄の有無は，時に生死に関わる問題であり，食料等の備蓄と同様に非常に重要である。そのため，本研究では，実際に常用薬を防災リュックに入れている人に面接調査を行い，どのような経緯から，常用薬を備蓄する行動に至ったのかを検討した。この研究結果から、防災活動促進のために、具体的にどのように国民に訴えかければ良いのかを理解する、ひとつのきっかけとなるだろう。

研究１　防災行動の実態把握

目的：常用薬を防災リュックに入れている人を見出すために、防災行動の実施ぶり等について質問紙で回答を求めた。

調査対象者：10代から50代までの一般男女188名。

質問紙：防災行動評価尺度（古山・冨永,2020）を参考に、「背の高い家具や家電が倒れないように、家の人と取り組んでいる」等の防災行動の実施ぶりの程度や、防災リュックに常用薬を入れているか等について回答を求めた。

結果：防災行動の実施ぶりの程度によって、高・中・低の3群に分けて分析を行ったところ、調査対象者の各群の割合は以下の通りとなった。なお、防災リュックを準備している回答者は高群に属した。

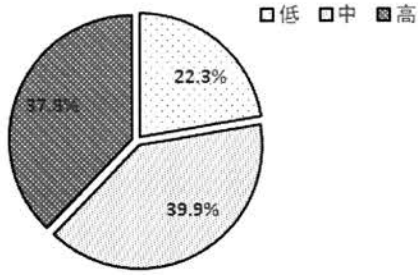


図１　防災行動の実施ぶり割合

また、防災行動高群のうち、日常的に服用している常用薬があり、更にその薬を防災リュックに入れている回答者割合はおよそ20%であり、調査対象者全体のうちでは、7.4%であった。

研究２　防災リュックに常用薬を入れる意識

目的：常用薬を防災リュックに入れている人は、どのようなことがきっかけでその防災行動を行おうと考えたのか等を調査するために、面接法でその意識について調査した。

調査対象者：研究１の回答者のうち、面接調査への協力を承諾した一般男女14名。

群わけ：その防災行動に至った理由を調査するため、上記の調査対象者14名を、常用薬の有無と、防災行動の実施ぶりの程度（高・中・低）で群わけした（表１参照）。

表１　調査対象者の群わけ

		常用薬			
		なし	人数	あり	人数
防災行動	低	防災行動一切なし	2	防災行動一切なし	1
	中	防災行動はある程度行っているが、防災リュックなし	3	防災行動はある程度行っているが、防災リュックなし	3
	高	防災行動をある程度行っており、防災リュックも準備	3	**防災行動をある程度行っており、防災リュックも準備し、常用薬も備蓄**	2

本研究では、**常用薬あり防災行動高群**の意識を明らかにするとともに、その他の群との比較を検討した。

調査内容：各群間である程度質問項目は変更したが、「防災行動をする/しない理由」や「常備薬を備蓄する/しない理由」を中心に回答を求める半構造化面接を行った。

結果と考察：常用薬あり防災行動高群は、自然災害を自分ごとのように感じる等、災害に対する危機感が高く、常用薬がないことによる強い不安や困りごとを実際に体験したことがあった。よって、万が一の避難の想定を具体的に想定できることから、常用薬を備蓄していることがわかった。一方、常用薬なし群は市販薬の必要性も意識しておらず、防災行動低群は、避難そのものを想定していない回答が多かった。

更に、常用薬あり群のうち、防災行動中群と高群の比較を行ったところ、高群では、回答者の常用薬の必要性がより高く、回答者の子どもへの悪影響を考慮している点に違いが見られた。

総合論議

本研究の結果から、常用薬を防災リュックに入れている人の意識とその他の群との意識には大きな違いがあることが示された（図２参照）。意識の比較結果から、常用薬の備蓄の促進のためには、避難所生活での環境の変化から、あらゆる人が心身に不調をきたす可能性を考慮し、常用薬および市販薬を準備しておく必要があることを周知する必要があると考えられる。



図２常用薬を備蓄する人とその他の群の意識比較

（うえだ　まゆこ）

フォントの違いが他者の感想に対する印象に及ぼす影響

-東日本大震災・原子力災害伝承館に対する感想を用いて-

○静間健人[1]
([1]東日本大震災・原子力災害伝承館)
キーワード：他者の感想に対する認知，手書きフォント，非手書きフォント

【目的】

東日本大震災及び原子力災害の被災地である福島県においては，様々な伝承施設が，未曽有の複合災害の記録や教訓と，そこから着実に復興する過程を後世に継承・発信している。このような取り組みに対して，実際に伝承施設を訪れる人々が何を求め，どのような体験をしているのかを明らかにするとともに，情報発信のあり方を検討することが求められる。

しかしながら，静間（2023）は，東日本大震災・原子力災害伝承館の来館者を対象としたアンケートの自由記述を分析した結果，同一の展示を見た来館者であっても，正反対の感想を持つ人がいることを指摘している。このことは，来館者は自身の知識・経験，社会・文化的背景を用いて，情報を理解（解釈，意味づけ）していることを示唆している。

来館者の知識の偏り等を考慮した展示のあり方の一つとして，感想コーナーに寄せられる来館者の感想を用いることが考えられる。付箋等を用いた感想コーナーを設けることで，来館者が他者の感想を通じて，展示テーマ等について考える機会を提供することが可能である（寺農，2024：静間2022)。静間（2022）は，このような来館者の感想コーナーが設けられている施設として「東日本大震災・原子力災害伝承館」を取り上げて分析を行っている。東日本大震災・原子力災害伝承館に訪れた来館者が，ノートに記述した感想を分析した結果，来館者アンケートで記述される内容と類似していること，ノート上で来館者間のコミュニケーションが行われていることを明らかにしている。

一方で，静間（2022）は，ノートを開かなければ他者の感想が読めないこと，手書き文字であるため可読性に難があること等を課題として挙げている。後者の課題に関しては，手書きの感想をワープロで打ち直し，利用することで可読性を高めることが可能であると考えられるが，手書き文字が持つ情報（新美，1998）が損なわれる可能性がある。そこで，本研究では，手書きフォントと非手書きフォントを用いて，東日本大震災・原子力災害伝承館に対する感想の印象が異なるか検討する。

【方法】

調査対象：関西の専門学校の学生46人（平均年齢18.8歳）に対して，質問紙実験を行った。
調査時期：2024年6月7日の授業時間中に実施した。
条件：いずれかのフォントの種類で作成された感想を含んだ質問紙（手書きフォント条件，非手書きフォント条件，手書きフォントと非手書きフォントを併記した条件）に割り当てられた。
感想：ポジティブな感想（短文と長文）とネガティブな感想（短文と長文）の4つの文章が質問紙内に含まれていた。用いた感想については，実際の感想を参考にして作成した。
手続き：「文章を読むこと」と「ストレス評価」の関連についての調査として質問紙実験を実施した。はじめに，現在のストレス状態を評価してもらい，その後，個人属性への回答を求めた。震災伝承施設に来館した人の感想を4人分提示することを示した後，ポジティブな感想（短文），ポジティブな感想（長文），ネガティブな感想（短文），ネガティブな感想（長文）の順に感想文を読んでもらい，それぞれに対しての印象を尋ねた。最後に，もう一度ストレス状態を評価してもらった。

感想文に対する印象指標：「人間味がある」「感情や気持ちが伝わる」「心のこもった」「正直な」「好感が持てる」「情緒的な」「迫力がある」「わかりやすい」「読みやすい」「知性的な」「かたくるしい」の12項目を用いて，“1．そう思わない”から“5．そう思う”の5段階で評価をしてもらった。

【結果と考察】

「読みやすい」「わかりやすい」については，手書きフォント条件よりも，非手書きフォント条件で点数が高かった。一方，非手書きフォント条件では「かたくるしい」の点数も高かった。また，感想文の長さが「感情や気持ちが伝わる」の点数に影響していることが示唆された。詳しい数値は，ポスター発表時に示す。

手書きフォントと非手書きフォントの違いによって，他者の感想に対する印象に影響を及ぼすのか検討した。その結果，非手書きフォントでは，読みやすさ等に違いが現れた。一方で，感想文の長さによる影響も示唆されたため，実験条件を再検討した上で，追加の実験を行うことが求められる。

【利益相反】
利益相反（conflict of interest; COI）あり。

【引用文献】

村田麻里子　2003　来館者研究の系譜とその課題-日本における博物館コミュニケーションの展開のための一考察-，日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要，**7**，95-104.
新美明夫　1998　課題レポートの評価と学生に対する印象形成に及ぼすワープロ文字の効果-手書きのレポートとワープロで印刷されたレポートの比較-，愛知淑徳短期大学研究紀要，37，191-207.
静間健人　2022　災害伝承施設来館者の想いの変化-自由記述の分析-，日本応用心理学会第88回大会
静間健人　2023　災害伝承施設における来館者体験の分析―東日本大震災・原子力災害伝承館の2022年度までの来館者アンケートを用いて―，日本応用心理学会第89回大会
寺農織苑　2024　ミュージアムにおける感想カードの価値：分類のプロセスと結果の捉え方，研究論集，**23**，107-138.

（しずま たけと）

チョコレート菓子を用いた コミュニケーション向上アイデアの効果検証

○中村早希[1]・大本浩司[1]（非会員）・玉越勢治[1]（非会員）
（1 帝塚山学院大学）
キーワード：菓子の共食、自己開示、対人関係の親密化

【目的】

本研究では、チョコレート菓子の「ポッキー」を用いた「もっとシェアハピになるアイデア」の1つとして考案された「ポッキータイマー」の効果検証を行う。このアイデアは帝塚山学院大学の産業心理学実習（スイーツ心理学）の一環として提案されたものである。授業では毎年製菓会社とコラボレーション企画を実施しており、2022年度は江崎グリコ株式会社の主力商品の「ポッキー」を対象に価値分析を行い、分析内容や心理学の知見に基づいて、「ポッキーを用いたもっとシェアハピになるアイデア」を37件考案した。

「ポッキータイマー」とは、初対面場面での緊張をほぐし、関係構築やコミュニケーションの促進を目的とした自己紹介ワークで、タイマー係となった他者がポッキーを1本食べ終わるまでの時間で自己紹介を行うというものである。自己紹介の話し手は、タイマー係がポッキーを1本食べる様子を見て、その残量によってエピソードに補足を加えたり、関連エピソードを追加したりするなどして、発話の内容や量を調整しなければならない。タイマー係は、話し手の様子を見ながら、食べるスピードを緩めて話を引き延ばしたり、早く食べて話を切り上げさせたりすることができる。ただ受け身で話を聞くのではなく、相手を思いやりながら聴く姿勢が必要となる。

一般に自分のことをより多く伝えることができれば、聞き手は開示されただけ話し手のことをよく知ることができ、話し手への緊張が解け、好意が高まるため、関係の形成・発展につながるとされる。また相手の話を聴く力は対人関係の形成・維持の主要なスキルの1つで、相手の話に関心を示し、理解し、それらを相手に伝えることが重要だとされる（相川, 2000）。ポッキータイマーを使うことによって自然に話し手に自己開示を増やし、聞き手に相手の話を積極的に聴く姿勢を促すことで、その後のコミュニケーションを円滑化させ、関係構築を促すことができるかもしれない。

そこで本研究ではポッキータイマーの効果を検証するべく、ポッキータイマーを用いて自己紹介を行う群（ポッキータイマー群）と通常の自己紹介を行う群（統制群）を設定し、自己紹介とその後の集団課題および関係性を評価させる実験を行う。ポッキータイマーを用いることで、自己紹介時のコミュニケーションが促され、その後の課題に対する評価・成績、メンバーとの関係性がより肯定的に評価されると予測した。

【方法】

分析対象者　4名グループ32集団の128名で、平均年齢は18.71（SD＝0.51）歳で、うち男性が36名、女性が91名、答えたくないが1名であった。ポッキータイマー群と統制群ともに16集団64名ずつであった。

手続き　本研究は心理学の実習授業内で実施された。事前にランダムにグループ分けを行った。参加者は指定されたテーブルに4名ずつ着席させた。まず同じグループのメンバーとの面識を尋ねた。次に自己紹介を行った。白紙1枚を直角4つ折りにし、4面に名前とトピック（好きなもの・こと）3つを記入し、それぞれ簡単に話すように指示した。この時ポッキータイマー群では、自己紹介前にポッキー1袋を皿の上に開けさせ、自己紹介する人はタイマー係がポッキーを食べている間は話し続けるように指示した。1つのトピックにつき1本分のタイマーが設定され、次のトピックに移る際にタイマー係を交代させ、1人の自己紹介につき、グループの他者全員が1回タイマー係になるように設定した。自己紹介の後、情報共有課題を行った。16枚の情報カードを1枚ずつ配り、カードの内容を口頭で共有し、正解を求める課題であった。ポッキータイマー群では、できる限り課題中に皿に開けたポッキーを食べきるように指示した。情報共有課題終了後、自己紹介や情報共有課題、グループの他者との関係性について評価を行った。

【結果】

自己紹介に関する評価　自己の開示、他者理解、自己紹介ワークの評価の3つの指標で検討を行った。指標ごとにポッキータイマー群と統制群の平均値についてWelchのt検定を行った。自己紹介ワークの評価のみポッキータイマー群（M=4.42）のほうが統制群（M = 4.12）よりも得点が高かった（$t(113.19) = 2.04$, $p = .04$, d =0.36[0.01; 0.72]）。その他の指標については統計的に有意な差は見られなかった（$ps > .16$）。

情報共有課題に関する評価　課題中のコミュニケーション、課題の評価、課題中のチームワークの3つの指標で検討を行った。指標ごとにポッキータイマー群と統制群の平均値についてWelchのt検定を行った。いずれの指標も統計的に有意な差は見られなかった（$ps > .12$）。また情報共有課題の成績について正解数を比較したところ、2群の間に有意差は見られなかった（$p = .72$）。

関係性に関する評価　関係継続意図、関係継続意図の変化、グループの評価3つの指標で検討を行った。指標ごとにポッキータイマー群と統制群の平均値についてWelchのt検定を行った。いずれの指標も有意差はなかった（$ps > .58$）。

【考察】

本研究の結果から自己紹介ワークの得点に差があったことから、ポッキータイマーというワークそのものを楽しく感じていることが分かった。しかし、その他の指標では2つの群で顕著な差は見られなかった。自己紹介を行う際の教示として3つのトピックを話すように指示していたことで開示量や他者理解の評価で差が小さくなった可能性や、情報共有課題そのものが関係形成を促す課題であったため、ポッキータイマーによる効果がつぶれてしまった可能性がある。教示や課題内容を変更して再検討を行う予定である。

【利益相反】本研究は江崎グリコ株式会社との共同研究として資金援助を受けた。

【引用文献】相川 充（2000）. 人づきあいの技術―社会的スキルの心理学― サイエンス社

付記：本研究は帝塚山学院大学の中井花南さんのアイデアを採用して検証を行ったものである。本研究は帝塚山学院大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会の承認を受けて実施された（2022-09）。

（なかむら　さき・だいもと　ひろし・たまこし　せいじ）

ソーシャルスキル・トレーニングの効果検討

——通信教育課程における短期プログラムと通学課程における中期プログラムの比較——

○日向野智子[1]　磯　友輝子[2]　藤後悦子[1]　山極和佳[2]　髙橋一公[2]　角山　剛[3]
([1]東京未来大学こども心理学部　[2]東京未来大学モチベーション行動科学部　[3]東京未来大学名誉教授)

キーワード：ソーシャルスキル　体験型学習　短期・中期プログラム

【目的】 円滑でよりよい人間関係を築くために必要不可欠なソーシャルスキルは，ソーシャルスキル・トレーニング(以下SST)などの学習によって向上させることができる。後藤・大坊(2005)は，放送大学における2日間の面接授業において，社会人学生を対象にSSTを実施し，非言語的表出性と日本文化特有のスキルである対人感受性，自己抑制の尺度得点が有意に向上したことを報告している。また，栗林(2007)は，大学授業で約3か月間実施したSSTにおいて，後藤・大坊(2005)と同様のスキル尺度の他，全体的なソーシャルスキルやコミュニケーションの基礎的なスキルである記号化および解読スキルが有意に向上したことを報告している。東京未来大学においてもソーシャルスキルに関する知識の獲得とスキル向上を目指し，通学課程における中期SSTと通信教育課程の対面スクリングにおける短期SSTを実施しているが，短期SSTの効果検討はされたものの (Daibo et al.,2019)，両者の効果の比較検討はなされていない。そこで，本研究では，大学の演習科目における短期・中期SSTの効果検証を目的とする。

【方法】

実施期間：中期プログラム（以下MP）は，4月上旬から7月中旬の毎週1コマ100分を14回，短期プログラム（以下SP）は，6月第2週と第3週の土日4回，1コマ90分を3コマの12回であった。

プログラムの内容：後藤・大坊(2005)や栗林(2007)などを参考に，参加者自身のコミュニケーションに対する気づきとコミュニケーションを円滑にするための効果的なスキルの向上を目指す体験型学習で構成した。各回のテーマは，①自己理解と他者理解（自己概念や価値観の相違など），②1対1や少人数でのコミュニケーション（視線と発話の連動，アサーション，観察力など），③集団討議（正解のある課題，正解のない課題におけるコンセンサスなど）に大別できる。基本的に，個人，少人数，集団と徐々に対象を広げていった。実施回数や期間などの理由から，SP・MPの内容は部分的に異なる。

スキル尺度の測定時期：初回授業時に，本研究について説明し，研究への参加を求めた。SP・MPのいずれの参加者も，初回授業の冒頭(Time1)とすべてのSSTを終えた最終授業時(Time2)にスキル尺度に回答した。また，SST終了の約5か月後(Time3)に，Googleフォームによるスキル尺度への回答をメールにて依頼した。

調査項目：非言語的表出性を測定するACT(Affective Communication Test)日本語版13項目（大坊，1991），コミュニケーションの基礎スキルを測定するENDE2(堀毛，1994)の逆転項目を肯定文になるよう改変した尺度15項目(小川他，2008)，日本人の文化に即した対人行動を実行する能力を測定するJICS（Japanese Interpersonal Competence Scale: Takai & Ota, 1991）22項目を使用した。

分析対象者：研究同意者のうち，Time1とTime2のスキル得点が得られた学生を分析対象とした。参加者は，MPは通学課程の男性10名，女性12名の22名 (age M=20.09, SD=0.29)，SPは通信教育課程の男性4名，女性36名の40名(age M=43.60, SD=12.74)であった。

【結果】Time1とTime2におけるスキル得点の変化　SP・MPにおけるTime1とTime2の各スキル得点について，t検定を行った。その結果，MPにおけるACTとENDE2の記号化得点は，Time1よりもTime2の方が有意に高かった(Table1)。SPでは，Time1とTime2のスキル得点に有意な差はみられなかった。

Table1
通学課程におけるソーシャルスキル得点の変化

スキル	Time1		Time2		t検定	
	M	SD	M	SD	tとp値	d
ACT	59.91	13.44	67.59	11.09	$t(21)=5.79, p<.001$,	0.63
記号化	17.23	3.19	19.55	2.54	$t(21)=5.01, p<.001$,	0.81

Time1からTime3にかけてのスキル得点の変化　すべての測定に回答した対象者の各スキル得点について，一要因分散分析を行った。その結果，SP参加者(10名)では，ACT得点における測定時期の主効果が有意であった（$F(2,18)=4.94$, $p<.05$, 偏$\eta^2=0.35$)。Holm法による多重比較の結果，Time1 (M=66.60, SD=18.62)よりもTime3(M=73.10, SD=20.10)の方がACTは有意に高かった（$p<.05$)。

【考察】 MPにおいては，SST実施後に非言語的な表出性であるACTと言語的・非言語的な表出性である記号化が向上した。また，SPについては，実施5か月後のACTの向上がみられた。SST後に，Daibo et al.(2019)，後藤・大坊（2005）と栗林（2007）ではACT，栗林(2007)では記号化の向上が見られている。表出性は，認知的側面よりも行動的側面として現れやすく，本研究におけるプログラムは，そのようなスキルの獲得に効果をもつと考えられる。後藤・大坊（2005）では2日間のSPでもスキル得点に向上が見られたが，本研究におけるSPでは，SST終了時には変化がみられず，終了から数か月後の非言語的表出性が向上していた。本学のSPでは期間内のスキル得点の向上は難しいとも考えられるが，一方では，SSTが徐々に日々の生活に汎化し，数か月後にスキルとして定着し得る可能性が示唆される。このような結果から，中・長期的なSSTへの参加が難しい参加者を対象とした授業や研修では，SP終了後の持続的なスキル定着を促すようなアフタープログラムの提供が効果的であると考えられる。

【引用文献】

大坊郁夫(1991)．非言語的表出性の測定:ACT尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, *28*, 1-12.

Daibo, I., Iso, Y., & Hyugano, T. (2019). Social skills scores change along Social Skill Training. *The 13th Bienial Asian Association of Social Psychology* (*AASP*2019).

後藤　学・大坊郁夫(2005).短期間における社会的スキル・トレーニングの実践的研究　対人社会心理学研究, *5*, 93-99.

堀毛一也(1994)．恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル　実験社会心理学研究, *34*, 116-128.

栗林克匡(2007).大学生における社会的スキル・トレーニングの成果と評価　北星論集, *44*, 15-26.

小川一美・磯　友輝子・木村昌紀（2008).「会話における話し上手（じょうず）尺度」作成の試み　日本グループ・ダイナミックス学会第55回大会発表論文集, 118-119.

Takai, J. &Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence, *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, *33*, 224-236.

【利益相反】本研究に関して開示すべき利益相反事項はない。
【研究助成】本研究はJSPS科研費18K18672の助成を受けた。
（ひゅうがの ともこ・いそ ゆきこ・とうご えつこ・やまぎわ わか・たかはし いっこう・かくやま たかし）

感染脅威は見知らぬ食べ物への態度に影響するのか？

感染脅威が食物新奇性恐怖に及ぼす影響

○井上裕珠
（日本大学商学部）

キーワード：感染脅威，食物新奇性恐怖，性差

【目的】

見知らぬ食べ物を食べることに抵抗がある状態として定義される食物新奇性恐怖(Dovey, et al., 2008)は、人間以外の動物にもひろくみられる。人間においても、病原性の脅威をも可能性のある食品を体内に入れないように進化的に獲得された心の働きであるとされている(e.g., Fessler, 2002; Rozin, 2003)。

先行研究では、食物新奇性恐怖の背後にある心的プロセスとして嫌悪感の存在が指摘されてきた(e.g., Nordin, et al., 2004)。嫌悪感という感情は、病原菌や寄生虫に対する進化した心的プロセスであり、食物回避の動機づけとして重要な要因として考えられている(e.g., Haidt, McCauley, & Rozin, 1994)。ただし著者が知る限り、病原菌への感染嫌悪が高まった状況で、新奇性の高い食品への回避が高まるのかどうかは直接的に検討がなされていない。実際、食物新奇性恐怖の心的メカニズムの解明は未だ不十分であることが指摘されている(for a review. Lafraire, et al., 2016) 。そこで、本研究では感染脅威が食物新奇性恐怖に及ぼす影響について検討する。

感染脅威が高まると、行動免疫システムによって感染源を避ける傾向があることが知られている。たとえば、Ackerman, et al. (2009)では、感染脅威が顕現化すると、進化から予測される潜在的な感染源である、顔に紫色のあざや斜視など、平均的容貌から外れている人からは注意を逸らしづらいことが示されている。同様に、感染脅威が高まると外国人(Faulkner, et al., 2004)など感染源としての可能性がある対象に対する偏見が高まることが知られている。したがって、感染脅威が高い状況においては、病原菌を避ける心の働きが強くなっているため、見知らぬ食べ物を避けるような心の働きが生じやすい可能性がある。

ただし、そのような心の働きには性差があると考える。人間は男女で異なる適応課題を持ち、それぞれの適応課題にとって必要な心の働きを進化させてきた。女性は、子どもを生み、育てることが重要となるため、病原菌感染を避ける傾向が男性よりも強いことが知られている。実際、Navarrete, et al. (2007) は，免疫機能が低下している妊娠初期の女性において、病原菌の原因の可能性のある外集団への評価が低くなることを示した。また、横田・結城(2010)も、女性においてのみ、感染脅威が高まると、最小集団における差別行動を行うようになることを示しており、これらの知見は、女性に備わっている病原菌への感染脅威への適応心理メカニズムの存在を示唆している。これらの知見を踏まえると、感染脅威が高い状況においては、病原菌を避ける行動免疫システムの働きにより、女性においてのみ見知らぬ食べ物を避けるようになるだろう。

仮説：女性においては、感染脅威が高い場合には、低い場合と比較して食物新奇性恐怖が高まるだろう。他方で男性では、感染脅威の程度によって食物新奇性恐怖に違いは見られないだろう。

【方法】

参加者　大学生 161 名(男性 102 名、女性 57 名、性別回答拒否 2 名、平均年齢 20.35 歳)。

実験計画　1 要因 2 水準(感染脆弱意識尺度の回答順番：先条件・後条件)参加者間計画とした。

条件操作　感染脆弱意識尺度日本語版(福川・小田・宇佐美・川人. 2014)の回答順番を条件間で変えることによって、条件操作を行った。(回答)先条件では、デモグラフィック項目への回答直後に感染脆弱意識尺度への回答を求め、後条件では、従属変数のあとに感染脆弱意識尺度に回答させた。

従属変数　食物新奇性恐怖を測定する個人差尺度(今田・米山, 1998)への回答を 7 件法で求めた。14 項目の合算平均値(α =.94, M=3.54, SD=1.30)を食物新奇性恐怖得点として分析に使用した。

手続き　2021 年 7 月にオンライン上で「大学生の消費行動に関する調査」を実施した。調査の冒頭には、調査の説明が書かれており、調査への回答が自由であることと、個人の回答は問題とされないことが説明されたうえで、調査の回答に同意できる人のみが回答を行った。参加者には 2 条件のいずれかの条件がランダムに割り当てられた。デモグラフィック項目に回答させたのち、感染脆弱意識尺度や食への好み、コロナウイルスに対する考え方について尋ねて、調査は終了した。後日、授業時間内にディブリーフィングを実施した。

【結果】

性別、回答順番を独立変数、食物新奇性恐怖得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を実施したところ、性別の主効果(F(1,154)=5.12, p=.025, η^2=.032; 図 1 参照)および回答順番の主効果(F(1,154)=4.49, p=.036, η^2=.028)が見られ、性別と回答順番の交互作用効果が有意傾向で見られた(F(1,154)=3.79, p=.053, η^2=.024)。単純主効果検定の結果、男性においては、先条件(M=3.41, SD=1.15)と後条件(M=3.37, SD=1.39)に新奇性恐怖得点に違いが見られなかったが(F(1,154)=0.02, p=.885, η^2=.000)、女性においては、先条件(M=4.30, SD=1.08)のほうが後条件(M=3.44, SD=1.38)よりも新奇性恐怖得点が有意に高くなっていた(F(1,154)=6.36, p=.013, η^2=.105)。したがって仮説を支持する結果が得られた。

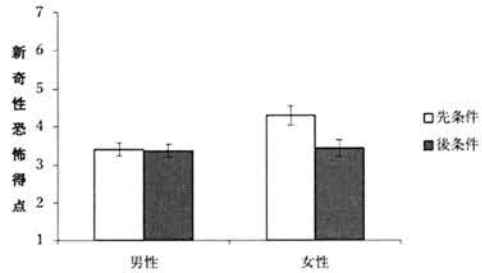


図 1: 順番条件と性別の効果

【考察】

予測通りに、感染脅威が高まる条件では、そうではない条件と比較して、女性においてのみ、新奇性恐怖の高まりが見られた。したがって、男性よりも女性のほうが感染脅威に対して敏感に反応し、それによって食物新奇性恐怖が高まっていることが示唆された。

【主な引用文献】 Lafraire, J., Rioux, C., Giboreau, A., & Picard, D. (2016). Food rejections in children: Cognitive and social/environmental factors involved in food neophobia and picky/fussy eating behavior. *Appetite*, 96, 347-357.

（いのうえゆみ）

少年事件のネット記事の犯人に対するコメント分析

富永日向子
（立正大学大学院心理学研究科）

キーワード：少年非行　犯人　ネットニュース

【目的】社会は少年非行を実態以上に凶悪に認識しており(世論調査, 2015)，出所者に対する否定的な社会の態度が出所者の社会復帰を妨げることが明らかにされている(菅原, 2014)。政府は再犯防止対策として社会復帰支援を行う方針を示しており，こうした社会の否定的な態度は，再犯を予防し社会から犯罪を減少させることの妨げになりかねない。

少年非行に対する社会の認識や態度について，メディア分析の観点から研究がいくつか行われている。例えば大庭(2010)は少年事件を報道した新聞記事を分析し，少年事件の「凶悪化」や「個人化」などの言説の変化を明らかにした。しかし犯罪報道を対象とした研究は見られるものの，報道に対する読者の反応を対象とした研究はあまり見られない。非行少年に対する社会の態度を直接的に分析し正確な実態把握を行うことで，態度変容の研究へ発展させられると考える。

そこで本研究では，少年事件の犯人に対する社会の反応をネット記事のコメントから分析する。分析には，読者がコメントを書き込むことができ，かつ新聞・通信各社が配信するニュースが広く掲載されていることから，Yahoo!ニュースサイトを使用した。

【方法】

調査対象　2023年の少年事件の中で報道回数が多く注目度が高かったニュースとして，銀座時計店への強盗事件に注目した。本事件を扱った記事の中で，最もコメント数の多かった日テレNewsの記事に対するコメント(全1180件, 2024年5月1日時点)を対象とした。

分析方法　まずコメント全件から，コメントの対象が犯人であるものを抜き出した(592件)。次にコメントを時間軸で，①犯行前／犯行時，②犯行後の犯人への対応，③犯人への対応後の犯人や社会への影響，と3つの大カテゴリーに分類した。最後に大カテゴリー内で類似したコメントをまとめていき，中カテゴリーと小カテゴリーを作成した(Table 1)。

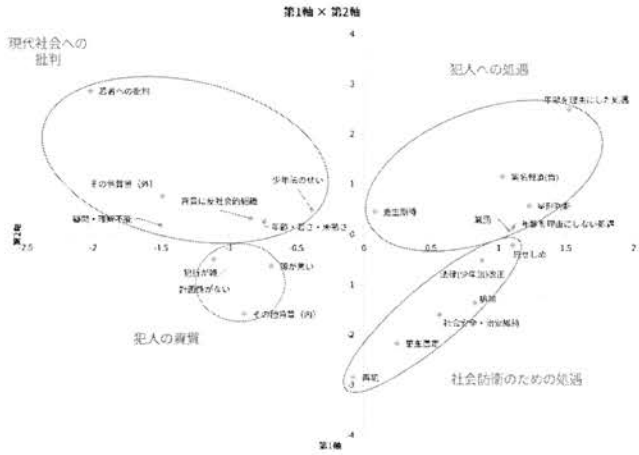
Table 1　少年事件のネット記事の犯人に対するコメント分析結果

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
犯行の背景・状況・対処の理由	犯行の背景（内的）	頭が悪い（82：14%）
		犯行が雑／計画性がない（56：9.3%）
		その他背景（内）（36：6%）
	犯行の背景（外的）	背景に反社会的組織（120：20%）
		若者への批判（16：2.7%）
		その他背景（外）（63：11%）
		少年法のせい（16：2.7%）
	犯行の状況	疑問・理解不能（110：18%）
		若さ・未熟さ（30：5%）
	対処の理由	社会安全・治安維持（8：1.3%）
		更生否定（27：4.5%）
犯人への処遇・対処	犯人への刑罰処遇	量刑判断（42：7%）
		実名報道に肯定的（88：15%）
		実名報道に否定的（2：0.3%）
		厳罰（69：12%）
	犯人への刑罰以外の対処	排除（61：10%）
		社会的制裁（27：4.5%）
	処遇の対象年齢	年齢を理由にしない処遇（74：12%）
		年齢を理由にした処遇（24：4%）
	犯人以外への対処	親への処遇（32：5.3%）
		法律（少年法）改正（53：8.8%）
処遇の結果、犯人・社会へ与える影響	犯人の未来	再犯（15：2.5%）
		更生期待（11：1.8%）
	社会の未来	見せしめ（46：7.7%）
その他	その他	その他（68：11%）

【結果】読者のコメントを分析した結果，3つの大カテゴリー，11の中カテゴリー，25の小カテゴリーに分類できた。

カテゴリー同士の関連を確認するため，小カテゴリーについて数量化Ⅲ類の分析を行った。その際，コメントの割合が全体の1%未満である「実名報道に否定的」を除いた。分析の結果，「社会的制裁」「親への処遇」の2つのカテゴリースコアが他カテゴリーと極端に離れていた。そのため，この2つを除いて再度分析した(Figure 1)。その結果，≪現代社会への批判≫≪犯人への処遇≫≪社会防衛のための処遇≫≪犯人の資質≫の4つのまとまりに分けることができた。

Figure 1　小カテゴリーの数量化Ⅲ類分析結果



【考察】少年事件の犯人に対するコメントを分類した結果，事件が起きた際に原因に注目するコメントと，犯人への処遇に注目するコメントに分かれていた。原因に関しては≪現代社会への批判≫と≪犯人の資質≫のまとまりに分かれており，社会などの環境に原因を求める人と，犯人の内面に原因を求める人がいることが確認された。処遇に関しては≪犯人への処遇≫と≪社会防衛のための処遇≫のまとまりに分かれており，従来の心理学研究で考えられてきたような量刑判断的なコメントと，社会の安全のために犯人を排除するようなコメントに分かれることが明らかになった。

また，カテゴリー同士の関連を確認した結果，「社会的制裁」と「親への処遇」が他のカテゴリーとは異なる判断基準のもとコメントされていることが推察された。理性的な判断ではなく，感情的にコメントされた可能性が考えられる。

本論文において開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

Yahoo!ニュース（2023. 5. 9）.【独自】銀座時計店強盗　逮捕現場近くで約30点の時計が入った黒い袋押収 https://news.yahoo.co.jp/articles/b86d8f8ee374eb70c6a77c12318fb687ae734196（2024年5月1日時点）

内閣府（2015）. 少年非行等に関する世論調査.

大庭絵里(2010). メディア言説における「非行少年」観の変化, 国際経営論集, 39, 155-164.

菅原好秀(2014). 刑務所出所者等の社会復帰支援に向けて――平成24年版犯罪白書の保護司の意識調査の意義・効果について――, 東北福祉大学研究紀要, 38, 1-16.

（とみなが　ひなこ）

容姿(顔)評価の高低によるメイク行動及び性格特性の違い

○九島紀子[1]
([1]ビューティ＆ウェルネス専門職大学)
キーワード：容姿　自己評価　メイク行動

【目的】 これまで容姿（顔などの見た目)に関する調査は他者評価によるものが多かったが，近年、容姿に関する自己評価と他者評価には一致性があることが明らかにされてきている。また容姿への自己評価が高い程、美容への投資が多いことなども明らかになっている(小林,2020)。しかし、このような容姿の自己評価と美容行動に関する研究は十分とは言えない。そこで本研究では、自己評価による容姿の評定を行い、その評価の違いによりメイク行動や性格傾向に差異が生じるのかを検討する。

【方法】

調査 1　複数の大学の男子大学生 76 名女子大学生 288 名の計 364 名 (*M*19.40, *SD*.94)を対象に，質問項目への回答を求めた。

容姿(顔)に関する自己評価についての質問項目は小林(2020)を参考に作成した。「仮に顔(ルックス)でグループに分かれ，「上」が 5，「中間」が 3，「下」が 1 としたらあなたはどれに入ると思いますか。」について 1～5 の 5 件法で回答を求めた。

メイク行動については、メイク頻度、メイクの開始時期、メイク化粧品 21 品目の使用の有無、化粧行動 8 項目、化粧意識 19 項目についてそれぞれ「全く当てはまらない 1」から「とてもあてはまる 5」までの、5 件法で回答を求めた。

性格特性については、日本語版 TIPI-J を使用し、「まったく違うと思う 1」から「強くそう思う 7」までの 7 件法で回答を求めた。

調査 2　美容系大学の男子大学生 22 名女子大学生 171 名の計 193 名（*M*=18.74, *SD*=1.68）を対象に，調査 1 と同様の質問項目への回答を求めた。

【結果】

調査 1　分析に先立ち、容姿(顔)への自己評価の高低により群分けをし、自己評価「中間」を選択した者を除いた自己評価高群 84 名、低群 122 名の計 206 名を分析対象とした。

容姿(顔)への自己評価の高低の違いによるメイク頻度、メイクの開始時期、メイク化粧品の使用アイテム、メイク行動、メイク意識、性格特性の違いを検討するため，*t* 検定を行った。

その結果，メイク頻度では自己評価の高低群間の差は無く($t(204)=1.39, n.s.$)，メイクの開始時期では自己評価高群が低群よりも早い時期からメイクを開始していることが明らかになった($t(204)=2.51, p<.05.$)。メイクアイテムについては、自己評価低群が高群よりもアイブロー($t(204)=2.77, p<.01.$)，アイシャドー($t(204)=2.45, p<.05.$)，アイライナー($t(204)=2.48, p<.05.$)を使用していることが明らかになった。

メイク行動とメイク意識については、Table1. に示した通り、自己評価の高低群間に有意差があった項目すべてにおいて、自己評価低群の方が高得点であった。

性格特性については、自己評価高群が低群よりも外向性($t(204)=6.42, p<.001.$)，協調性($t(204)=3.27, p<.001.$)，勤勉性($t(204)=4.15, p<.001.$)，開放性($t(204)=3.27, p<.001.$)が高いことが明らかになった。

調査 2　分析に先立ち、調査 1 と同様に容姿(顔)への自己評価の高低により群分けをし、自己評価高群 51 名、低群 67 名の計 118 名を分析対象として調査 1 と同様の分析を行った。

その結果，メイク頻度($t(116)=.27, n.s.$)，メイク開始時期($t(113)=1.04, n.s.$)共に自己評価の高低群間の差は無いことが明らかになった。またメイクアイテム使用についても全アイテムにおいて自己評価高低群間の違いはみられなかった。

続いてメイク行動とメイク意識については、自己評価の高低群間に有意差があった項目全てにおいて、自己評価高群の方が高得点であった(Table1.)。

性格特性については、自己評価高群が低群よりも外向性($t(116)=2.99, p<.01.$)，開放性($t(116)=3.05, p<.01.$)が高く、自己評価低群が高群よりも神経症傾向($t(116)=2.02, p<.05.$)が高いことが明らかになった。

Table1. 調査 1 と 2 それぞれの自己評価高群と低群のメイク行動とメイク意識の違い

調査1	自己評価低群 n=122		自己評価高群 n=84		N=206
調査2	自己評価低群 n=67		自己評価高群 n=51		N=118
調査NO.	M	SD	M	SD	*t*値
1 チャームポイントを強調するメイクをしている 1	2.76	1.43	2.60	1.78	.71
1 チャームポイントを強調するメイクをしている 2	2.79	1.17	3.51	1.04	3.43 ***
2 顔の欠点をカバーするメイクをしている 1	3.52	1.68	3.07	1.94	1.74
2 顔の欠点をカバーするメイクをしている 2	4.14	.98	4.31	.92	.95
3 女性らしく見えるメイクをしている 1	3.15	1.53	2.74	1.90	1.64
3 女性らしく見えるメイクをしている 2	3.61	1.07	3.92	1.04	1.57
4 他の人のYouTube等のメイクを参考にしている 1	3.30	1.58	2.64	1.91	2.61 **
4 他の人のYouTube等のメイクを参考にしている 2	3.76	1.23	3.47	1.49	1.11
5 会う人によってメイクの仕方を変えている 1	2.57	1.60	2.33	1.75	1.00
5 会う人によってメイクの仕方を変えている 2	3.03	1.39	3.14	1.44	.42
6 出掛ける所によってメイクの仕方を変えている 1	3.18	1.62	2.65	1.89	2.08 *
6 出掛ける所によってメイクの仕方を変えている 2	3.68	1.27	3.49	1.43	.76
7 若々しく見えるメイクをしている 1	2.61	1.42	2.46	1.63	.66
7 若々しく見えるメイクをしている 2	2.69	1.13	3.04	1.06	1.66
8 大人っぽく見えるメイクをしている 1	2.81	1.41	2.52	1.65	1.30
8 大人っぽく見えるメイクをしている 2	3.33	1.11	3.43	1.06	.46
1 自分に自信が持てるから 1	3.72	1.60	3.43	2.06	1.10
1 自分に自信が持てるから 2	4.55	.64	4.63	.60	.74
2 周りの人がしているから 1	3.30	1.68	2.56	1.78	3.02 **
2 周りの人がしているから 2	2.79	1.44	2.55	1.34	.90
3 異性から魅力的に思われたいから 1	2.82	1.58	2.93	1.93	.43
3 異性から魅力的に思われたいから 2	3.27	1.24	3.76	1.35	-1.99 *
4 同性から魅力的に思われたいから 1	3.34	1.61	3.23	2.01	.45
4 同性から魅力的に思われたいから 2	3.86	1.20	4.08	1.19	.97
5 人から女性らしいと思われたいから 1	2.78	1.60	2.68	1.91	.39
5 人から女性らしいと思われたいから 2	3.33	1.23	3.47	1.43	.55
6 人の目を引きたいから 1	2.27	1.41	2.51	1.80	1.03
6 人の目を引きたいから 2	2.88	1.30	3.94	1.22	4.46 ***
7 人に対して積極的になれるから 1	3.06	1.67	2.92	1.95	.54
7 人に対して積極的になれるから 2	3.70	1.15	4.18	.99	2.38 *
8 欠点をカバーしたいから 1	3.86	1.66	3.24	2.00	2.35 *
8 欠点をカバーしたいから 2	4.45	.92	4.39	.84	.40
9 化粧をしないと落ち着かないから 1	2.93	1.70	2.57	1.86	1.42
9 化粧をしないと落ち着かないから 2	3.48	1.46	3.47	1.34	.06
10 素顔の自分とは違う自分になりたいから 1	3.07	1.63	2.50	1.82	2.29 *
10 素顔の自分とは違う自分になりたいから 2	3.77	1.28	3.43	1.35	1.39
11 人に悪い印象を与えたくないから 1	3.32	1.72	2.68	1.83	2.56 **
11 人に悪い印象を与えたくないから 2	3.63	1.32	3.51	1.37	.48
12 身だしなみだから 1	3.67	1.63	3.00	1.95	2.59 *
12 身だしなみだから 2	3.91	1.20	4.06	.99	.73
13 社会的立場上必要だから 1	3.13	1.61	2.56	1.83	2.31 *
13 社会的立場上必要だから 2	3.15	1.38	3.04	1.38	.42
14 悪い印象を与えたくないから 1	3.50	1.59	2.71	1.85	3.17 **
14 悪い印象を与えたくないから 2	3.77	1.26	3.65	1.33	.49
15 良い印象を与えたいから 1	3.63	1.56	3.18	1.99	1.75
15 良い印象を与えたいから 2	4.21	1.00	4.35	.99	.72
16 気に入っている部分を強調したいから 1	2.72	1.47	2.92	1.87	.80
16 気に入っている部分を強調したいから 2	3.12	1.17	3.69	1.28	2.50 *
17 かわいく（きれいに）見られたいから 1	3.57	1.66	3.46	2.08	.40
17 かわいく（きれいに）見られたいから 2	4.52	.75	4.78	.47	2.29 *
18 若く見られたいから 1	2.61	1.54	2.44	1.79	.73
18 若く見られたいから 2	2.92	1.22	3.10	1.28	.76
19 大人に見られたいから 1	2.84	1.57	2.58	1.87	1.05
19 大人に見られたいから 2	3.45	1.16	3.53	1.26	.37

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

【考察】 本研究では，自己評価による容姿(顔)の評定を行い，その評価の違いによりメイク行動や性格傾向に差異が生じるのかを検討した。その結果、調査 1，2 共に自己評価高群低群間でのメイク行動や性格特性に違いがあることが明らかになった。ただし、メイク行動・メイク意識に関しては、調査 1 においては、自己評価低群が消極的なメイク行動・意識の得点が高かった一方で、調査 2 では自己評価高群において積極的なメイク行動・意識の得点が高かった。これは、調査対象者の属性の違いが要因として考えられる。調査 2 の対象者は美容系の大学生であったことから、より積極的な美容行動・意識があったものと推察される。属性の違いによるメイク行動・意識及び性格特性の検討も今後の課題としたい。

【利益相反】 利益相反無し

【引用文献】 小林盾(2020).美容資本.勁草書房.

（くしま・のりこ）

理想思考、義務思考が社会的相互作用の量に及ぼす影響

－仮想世界ゲーム電子版の用いた研究展開－

○柿本敏克　細野文雄（非会員）
（群馬大学情報学部）

キーワード：仮想世界ゲーム電子版，理想思考，義務思考，地域単位の割り当て

【目的】制御焦点研究（Higgins, 1997）の中で促進焦点と予防焦点の実験操作として用いられてきた，「理想について考えること」（以下，理想思考）と「義務について考えること」（以下，義務思考）を求める手続きが，実験参加者の社会的相互作用の量に及ぼす効果について再検討する。仮想世界ゲーム電子版（cSIMINSOC）を用いた先行研究では，前者が後者よりも，発言回数や発言量を増やす作用のあることが見出された（柿本・細野，2023）。しかしそこでは，これらの手続き２条件への実験参加者の割り当てがゲーム単位で行われたため，ゲーム単位での何らかの違いがこの結果に影響した可能性を排除できない。本研究ではこれら２条件への割り当てを同一ゲーム内の地域単位の割り当てに変更して同様の結果が得られるかを確認する。本研究は仮想世界ゲーム電子版（cSIMINSOC）を用いた研究展開の一つである。

【方法】研究法の授業の一環として，64 人の学生が cSIMINSOC の２つのゲームの各４地域（豊かな地域２，貧しい地域２）のいずれかに無作為に割り当てられた。各ゲームの豊かな地域１，貧しい地域１では促進焦点の，別の豊かな地域１，貧しい地域１では予防焦点の操作がゲーム開始直前に加えられた。操作方法は柿本・細野（2023）と同様であった。

実験場面として用いられた仮想世界ゲームは，地球規模の環境問題や南北問題をシミュレートする教育・研究ゲームとして開発されたものである（広瀬，1997）。プレーヤーは地域内・地域間の競争や協働を経験しつつ，経済格差や貧困問題への対処，開発やそれに伴う環境問題への対応を迫られる。ゲーム開始時には「資産を増やすこと」等の個人目標への重み付け決定が求められる。ゲームには個人・団体・世界の各レベルのルールがあり，プレーヤーはこれらのルールに従いつつ個人目標を達成するよう求められる。生存のために農園で生産される食糧の入手が，資産獲得のために企業への就労や株券の購入が必要であるが，これらはすべて当事者間の交渉により行われる。プレーヤー間には他にも多様なやりとりがなされる。

このゲームに，接続されたコンピュータ上からプレーヤーが参加できるように開発されたのが仮想世界ゲーム電子版である（柿本・細野，2010）。そこでは，プレーヤー間の会話（「チャット」を使う）や取引などの社会的相互作用（メッセージを送る・受け取る，モノを売る・買う，雇用する・される等）を含むゲーム上の活動が全て電子的に記録される。

【結果】ゲーム内での社会的相互作用の代表例として，プレーヤー間の会話のうち，各プレーヤーの発言回数・発言量をゲームの電子記録から抽出し，データ利用の承諾を得られた63名に関して，条件（理想思考・義務思考）ごとに整理した。別の指標として，ゲーム内の取引等のアクション数についても同様にした（Table 1）。

実験操作の効果は，発言回数（Mann-Whitney の U 検定，U =349.500，p =.044，r =-.25）と発言量（同 U =376.00，p =.099，r =-.21）で有意または有意傾向であった。両者ともに義務思考条件で理想思考条件よりも大きかった。アクション数についても実験操作の効果は同方向で有意傾向であった（同 U =370.500，p =.084，r =-.22）。また実験参加者によるゲーム内個人目標の決定作業は，理想思考・義務思考の実験操作後であったため，そこに実験操作の影響が見られるかを確認した（Table 2）。「人気を得る」の重み付け値は義務思考条件で理想思考条件よりも大きい傾向にあった（Mann-Whitney の U 検定，U =311.500，p =.056，r =-.25）。「資産を増やす」（Mann-Whitney の U 検定，U =540.000，p =.102，r =.21）と「権力を獲得する」（Mann-Whitney の U 検定，U =447.500，p =.844，r =.03）には，条件間で違いが認められなかった。

Table 1　理想思考・義務思考ごとのゲーム内発言回数，発言量，アクション数の平均値（標準偏差）

計測項目	理想思考(n=32)	義務思考(n=31)
発言回数（回/人）	63.56 (34.02)	96.61 (64.71
発言量（字数/人）	1,035.47(660.81)	1,484.16(1,001.85)
アクション数（/人）	57.53(33,59)	70.61(36.87)

Table 2　理想思考・義務思考ごとの個人目標（当初）の重み付け平均値（標準偏差）

個人目標内容	理想思考(n=31)	義務思考(n=30)
「資産を増やす」	5.14 (2.31)	4.07 (2.24)
「権力を獲得する」	2.21 (1.39)	2.10 (1.23)
「人気を得る」	2.66 (1.58)	3.83 (2.56)

（重み付け値の範囲は 0～10。ただし３つの合計値が 10 と指示。）

【考察】地域単位で制御焦点を操作した本研究では，柿本・細野（2023）の結果が再現されず，むしろ義務思考が理想思考よりも発言回数や発言量を増大させる傾向にあった。アクション数についても同様であった。これは柿本・細野（2023）でアクション数について条件間の違いが見られなかった結果とも異なる。個人目標ついては「人気を得る」の重み付け値が義務思考条件で理想思考条件よりも大きい傾向にあった。その理由について体系的な解釈は困難であるものの，これが発言回数・発言量・アクション数に影響を与えたとも考えられる。先行研究と異なる結果が得られたことから，これらを統合的に説明する未知の変数が関係する可能性もある。ゲーム事例を積み重ねるとともに，そうした変数の確定が求められる。

【利益相反】利益相反のある団体・組織はない。

【引用文献】

Higgins, E.T. (1997). Beyond pleasure and pain. American Psychologist, 52, 1280-1300.

広瀬幸雄編（1997）.シミュレーション世界の社会心理学: ゲームで解く葛藤と共存 ナカニシヤ出版

柿本敏克・細野文雄（2010）.状況の現実感尺度の再検討：２つの仮想世界ゲーム実験から 実験社会心理学研究，*49*, 149-159.

柿本敏克・細野文雄（2023）. 理想について考えること、義務について考えることが社会的相互作用の度合いに与える影響について－仮想世界ゲーム電子版を用いた研究展開－ 日本応用心理学会第 89 回大会発表論文集.

（かきもと　としかつ・ほその　ふみお）

孤独に対する認識は世代間で異なるか？

－幼児から高齢者までの「孤独」に関する概念的探究－

ザン・ソニア[1]　伴碧[2]
([1]ニュースクール大学人類学部　[2]大阪大学大学院基礎工学研究科)

キーワード：孤独　世代間比較　テキストマイニング

【目的】

近年，孤独は公衆衛生上の脅威として世界的に注目されている。日本では2021年に「孤独・孤立対策担当室」が設立されるなど，多くの国民が深刻な孤独を感じていると報告されている（内閣府，2021）。そのため，日本における孤独の実態調査は急務である。

孤独感を調査する際，心理学ではUCLA孤独感尺度（Russell et al.，1978）を用いることが多いが，上記の尺度はアメリカ版を翻訳したものであるため，日本独自の孤独に対する認識と孤独についての経験を，詳細かつ明確に理解する必要がある。また，世界の大規模な孤独調査は多くの場合，16歳以上を対象としている（Victor et al.，2019; 内閣府，2021）が，UNICEF（2020）の報告では，OECD加盟38カ国中，日本の「子どもの幸福度」は20位にとどまった。そのため，子どもを対象にした検討も必要だと考える。さらに，Malli et al.（2021）は，孤独は，その属性によって異なるものであり，さまざまな立場から検討することが必要だと指摘している。

そこで本研究では，年齢という属性に着目し，子どもから高齢者までの幅広い年代の孤独について，日本独自の孤独感を調査することを目的とした。

【方法】

本研究は，幼児63人（男児29人，女児34人；平均年齢＝6.00，SD＝0.41），成人91人（男性41人，女性49人，回答しない1人；平均年齢＝25.76，SD＝3.00），高齢者104人（男性79人，女性25人；平均年齢＝67.31，SD＝2.63）の3つの群を対象に，調査を実施した。

調査では，「孤独という言葉を知っていますか？」および「孤独とはどのようなものですか？」の2つの質問を行い，実験参加者が孤独をどのように認識しているか尋ねた。また，幼児は「孤独」という言葉を知らない・理解していない可能性があったため，孤独の類似語である「一人」と「寂しい」に関する質問を設けた。具体的には，「一人でいる時に何をしますか？」，「どんな時に寂しいと感じますか？」，「寂しいと感じる時に何をしたいですか？」の3つの質問を設け，すべての実験参加者に対して回答を求めた。成人と高齢者群については，クラウドソーシングを用いたオンライン調査を実施し，参加に同意した実験参加者に対して，自由記述での回答を求めた。なお，幼児に対してはオンライン調査が困難であったため，幼稚園の一室で実験者が直接，対面で質問を行った。

【結果と考察】

回答に不備があるなどの不完全な回答データを除外した結果，幼児58人，成人83人，高齢者89人のデータを分析対象とした。まず，得られた自由記述の回答データについて「孤独をどのように認知しているか」について，「肯定的」「否定的」「中立的」「判別不能」の4つの感情価のラベル付けを行った。その結果をTable1に示す。カイ二乗検定を実施した結果，有意な関連が示された（$\chi^2(6)=208.529$，*Cramer's V* $=.673$）。残差分析の結果，孤独の認識に関して，幼児群では，孤独が「わからない」という回答が92.06%と有意に多かった（$p<.01$）。今後，幼児を対象とした孤独に関する調査の実施には，「孤独」という言葉の類似語の使用が必要であることが示唆された。また，成人群および高齢者群では，71.43%および80.00%の人が，孤独を有意に多く「否定的」と捉えていることが示された（$ps<.01$）。なお，成人群においては，孤独を「中立的」と捉える人も有意に多いことが示された（$p<.01$）。

Table 1　「孤独」対する感情価（世代別）

	幼児	成人	高齢者	合計
肯定的	0	3	3	6
否定的	2	61	74	137
中立的	2	19	11	32
判別不能	54	0	1	55
計	58	83	89	230

注: Table中の数字は人数を示す

さらに，「寂しいと感じる時に何をしたいですか？」という質問への回答について，自由記述の回答を「社交」，「非社交」というカテゴリーに分類し，孤独感に対する行動や対処法について世代間でどのように異なるかを検討した。その結果，社交的行動を望む割合は，成人群では39.76%，高齢者群では30.34%であり，幼児群では12.07%であった。ただし，幼児群の場合は「遊ぶ」という回答が多数であった。これまでの心理学における孤独の先行研究では，孤独を解消するために，人に会うなどの社交的活動を重視することが指摘されていたが（Smith et al.，2021），今回の調査結果より，寂しさを感じる時には，趣味や鑑賞（映画鑑賞，読書）など，人と会うことが必要ではない「非社交的な活動」を望む割合が高いことが明らかとなった。

今後は，対象者の複数の属性（結婚の有無，居住形態，収入他）を踏まえたうえで，孤独をどのように認識しているかについて明らかにしたいと考える。また，幼児に対して，本実験では対面で直接質問を行ったが，村上・西村（2012）および西村他（2015）の方法を参考に，幼児でも理解，回答しやすい質問項目を作成，実施することが望まれる。

Table 2　「さびしい」と感じる時の対処行動（世代別）

		幼児	成人	高齢者	合計
社交	知り合いと会う・連絡を取る	0	22	14	36
	親友・恋人と会う・連絡を取る	3	5	7	15
	家族と会う・連絡を取る	4	3	6	13
	SNS発信	0	3	0	3
非社交	趣味	21	8	11	40
	鑑賞	4	15	20	39
	外出	1	10	10	21
	仕事・勉強	1	2	2	5
	食べる・飲む	0	6	7	13
	寝る	1	6	4	11
	しない	10	0	7	17
	わからない	13	3	1	17
	計	58	83	89	230

注: Table中の数字は人数を示す

【利益相反】利益相反はない

家庭内暴力に関する意識

日本人大学生と中国人留学生の比較

王　晋民
（千葉科学大学 危機管理学部）
キーワード：家庭内暴力　態度　留学生

【研究の目的】

大学生に対する家庭内暴力(DV)防止教育は、留学生を含む大学生の意識や考えを理解したうえで行う必要がある。本研究の目的は、日本の大学で学ぶ日本人学生と中国人留学生のDVに対する意識と対応方法の違いを調べることである。

【方法】

対象者　千葉県にある私立大学に在学する日本人学生と中国人留学生計205名。

調査票の構成　(1)回答者の年齢、性別、学年、所属する学科、日本人学生/中国人留学生などの人口統計学的項目計6項目。(2)千葉県（2021）を参考にDVに関する知識と経験の4項目（例：「あなたはDVについて知っていますか」選択肢として「内容まで知っている」などが用意した)。(3)赤澤他（2021）のDV暴力行為項目の34項目（例：「相手が意に沿わないと無視する」「腕や髪を引っ張る」「無理矢理キスしたり、身体に触れたりする」)。各項目に対してDVの深刻度の評定は7件法を用いた。(4)DVに関する個人的対策に関する項目（「我慢する」、「友人に相談する」、「警察に相談する」などの7種類の選択肢から複数選択させた。(5)DV防止に関する社会的対策について千葉県（2021）を参考して8項目を用意し、各項目に対する回答は5件法を用いた（例：「DVの加害者に対して、もっと厳しく処罰すべきだ」)。調査票は日本語と中国語二言語で作成され、日本人学生には日本語版、中国人留学生には中国語版を使用した。

手続き　調査は2023年7月に実施された。複数の教室で授業の受講者に対して調査説明と協力依頼を行い、回答させた。

【結果と考察】

回答状況　有効回答者は計193名。日本人学生が112名（男性74名、女性38名，平均年齢19.68歳)、中国人留学生が81名（男性53名、女性28名，平均年齢22.54歳)。留学生全員は来日1年以上で、来日3年以上のが69.5%であった。

DV暴力行為に対する評定について　34項目に対する因子分析（主因子法、プロマックス回転。以下同様）を行ったところ、5因子が得られたが、因子の解釈は困難なため、赤澤他（2021）と同様に26項目を用いて再度因子分析を行った結果（R^2=64.85%)、精神的暴力（17項目　α係数=.964)、身体的暴力(5項目　α係数=.902)、性的暴力(3項目　α係数=.867)の3因子が得られた。全回答者の各因子に対応する項目の評定値の平均値を因子の評定値として算出し、国籍（2）×性別（2）の平均値を表1に示し、被験者間分散分析を行った。

精神的暴力に関して　性別主効果の主効果（$F(1, 189)=5.062$, $p<.05$, 偏$\eta^2=.026$)、国籍×性別（$F(1, 189)=6.556$, $p<.05$, 偏$\eta^2=.034$）が有意に認められた。男性より女性の点数が高く、また男性においては中国人より日本人($p<.005$)、中国人においては男性より女性($p<.005$)の点数が有意に高かった。

身体的暴力に関して　国籍主効果（$F(1, 189)=5.107$, $p<.05$, 偏$\eta^2=.026$)、性別主効果（$F(1, 189)=4.446$, $p<.05$, 偏$\eta^2=.023$)、国籍×性別（$F(1, 189)=8.750$, $p<.01$, 偏$\eta^2=.044$）の何れも有意に認められた。中国人より日本人、男性より女子の点数が高く、また男性においては中国人より日本人($p<.001$)、中国人においては男性より女性($p<.001$)の点数が有意に高かった。

性的暴力に関して　国籍主効果（$F(1, 189)=5.057$, $p<.05$, 偏$\eta^2=.026$)、性別主効果（$F(1, 189)=18.174$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.088$)、国籍×性別（$F(1, 189)=7.141$, $p<.01$, 偏$\eta^2=.036$）の何れも有意に認められた。中国人より日本人、男性より女性の点数が高く、また男性においては中国人より日本人($p<.001$)、中国人においては男性より女性($p<.001$)の点数が有意に高かった。

DVに関する個人的対策について　DVを長期間受けた場合の各対策選択のそれぞれを目的変数、国籍と性別を説明変数としてロジスティクス回帰分析を行った。その結果、「友人に相談する」では国籍要因が認められ(Exp(B)=.293, 95%CI[0.159, 0.538], $p<.001$)、中国人より日本人の選択傾向が高く、また「警察に相談する」では国籍要因が認められ(Exp(B)=2.761, 95%CI[1.529, 4.985], $p<.001$)、日本人より中国人は選択傾向が高かった。性別要因の影響は認められなかった。

DV防止に関する社会的対策について　8項目に対して因子分析（R^2=38.10%）を行った結果、加害者厳罰（3項目　α係数=.734）と法対応可能（5項目　α係数=.646）の2因子が得られた。この2因子の各項目での評定値の平均値を算出し、国籍（2）×性別（2）の被験者間分散分析を行った。加害者厳罰因子において、主効果と交互作用のいずれも認められなかった。法対応可能因子においては、国籍主効果のみが認められ（$F(1, 186)=14.027$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.070$)、中国人よりも日本人の点数が有意に高かった。以上の結果から大学生のDV暴力行為に対する認識は日本人・中国人によって、また性別によって相違があること、そして日本人・中国人留学生のDVに対する行動傾向も異なることが確認された。家庭内暴力(DV)防止教育において特に留学生の特徴について考慮する必要があろう。

表1 日本人大学生と中国人留学生のDV暴力行為深刻度評定

国籍		日		中	
性別		男 (*N*=74)	女 (*N*=38)	男 (*N*=53)	女 (*N*=28)
精神的暴力	*Mean*	4.80	4.74	4.16	5.20
	SD	1.19	1.27	1.82	1.25
身体的暴力	*Mean*	5.45	5.32	4.69	5.43
	SD	0.61	0.57	1.51	0.64
性的暴力	*Mean*	4.86	5.11	4.09	5.17
	SD	0.79	0.64	1.55	0.62

【引用文献】

赤澤淳子他（2021）．デートDVにおける被害観と加害観の差異 福山大学人間文化学部紀要，*21*，46-56.

千葉県（2021）．DV（ドメスティック・バイオレンス）に対する県民意識について
https://www.pref.chiba.lg.jp/jika/dv/shiryou/r2dv-internetanke-to.html

【利益相反】本研究には開示すべき利益相反はない。

【謝辞】本研究は千葉科学大学張美琪氏の卒業研究（2023年度）の調査データを再分析したものである。記して感謝を申し上げます。　（おう　しんみん）

親密な関係における非人間化が脆弱性の自己開示に与える影響

○黄瑶・謝新宇・相馬敏彦
（　広島大学大学院人間社会科学研究科　）

キーワード：非人間化・自己開示・開示に対する受容

【目的】人が，しばしば他者の人間らしさ，人としての本性を否定することは非人間化(dehumanization)として研究されている。本研究は非人間化される側を対象者と呼び、非人間化する側を行為者と呼ぶ。

一般に、非人間化には「人間性の否定」と「独自性の否定」という二つの側面があるといわれる（Haslam, 2006）。これに対して、Pizzirani et al.(2019)は、この2側面をベースとしながらも、親密な関係では各側面がさらに細分化し4因子によって非人間化を捉えられると説明し検証を重ねている。「未熟化」、「粗悪化」、「道具化」、「機械化」である。

そのなかで、親密な関係という独特な文脈では、未熟さという点での被人間化が関係の進展を促す可能性ある。本研究では、非人間化された側の視点から、非人間化されることが対象者の脆弱性の自己開示を促すかどうか、また非人間化した行為者が相手を非人間化することでその相手からの開示に受容的に反応しようとするかどうかを検証する。

Cordova（2001）は、「親密さ」概念を分析した結果、脆弱性の開示が、親密な関係の発展に特は有の役割を果たしていると述べている。つまり、友達や同僚などの前で自身の脆弱性を開示することは、通常屈辱や恥ずかしさなどネガティブな感情を生じさせ関係の深化には影響しないか抑制的な影響をもつ。しかし、親密な関係では相互に脆弱性を開示し、相手の未熟さを包容することが関係の絆を強化することがあるという。Kanter et al.（2020）も、レビュー論文において、このような開示は親密な関係の継続性に正の影響を与えていると指摘ている。同様に、黄・相馬（2024）でも、これを裏付ける知見が得られている。相手からなされた被人間化4因子のうち、未熟化だけは、それが高いほど対象者の関係に対するコミットメント、満足度を上昇させていた。したがって、未熟さにおいて、相手から非人間化される、すなわち被非人間化の程度が高いほど、普段の相互作用の中で対象者は脆弱性についての自己開示をしやすくなるだろう(予測1)。また、脆弱性の開示によって関係の絆が強化されるとすれば、対象者からの開示は行為者の受容的反応を促すだろう（予測2）。

また、対象者を非人間化することは行為者の介護システム（caregiving system）を活性化させるかもしれない。介護システムは他者が苦痛を経験したり、介護や助けが必要なときに活性化され、そして、他者に援助、慰め、支援を提供する（Canterberry & Gillath, 2012）。そして、対象者を未熟化すると、行為者は対象者をより弱く、自立できない助けを必要とすると思うようになるだろう。よって行為者の介護システムが活性化しやすくなった結果として、より受容的態度や行動を取りやすくだろう。したがって、相手を未熟化するほど、行為者から対象者に対する受容的反応も促されるだろう（予測3）。

【方法】本研究は調査会社に通じて、異性の夫婦関係でかつ同居している91組の登録者に、事前調査、14日間の日常（経験サンプリング）調査、事後調査の順で行った。有効回答は77組（男性平均年齢＝48.10歳、SD＝12.08、女性平均年齢＝46.40歳、SD＝11.05）であり、平均交際期間は21.56±12.06年であった。

事前調査と事後調査では、相手への非人間化ならびに相手からの被非人間化（Pizzirani et al., 2019）が測定された。日常調査では、1日に（10時から21時まで）4回、ランダムなタイミングで回答要請のシグナルが送信され、回答者は回答直前の自己開示の有無、開示内容（脆弱性の開示・積極的開示・中立的開示；Miler et al., 1984）、開示が受容された程度の知覚について回答した。事後調査では、事前調査と同じ項目に加えて、この2週間（日常調査期間中）に相手からの開示に対してとった反応（Keith, 2010）が測定された。他にも測定した項目があったが、ここでは特に報告しない。

【結果】始めに、事前調査の被非人間化（個人間レベル）が、日常調査における脆弱性の自己開示（以下、開示；個人内レベル）を、予測するかどうかを検証するため、識別可能なペアに対するマルチレベルモデル分析を行った。回帰式を以下に示す。y_{ti}は脆弱性の自己開示とする（男女同構造のモデルで分析）。

$$y_{ti} = \beta_{0i} + r_{ti}$$
$$\beta_{0i} = \gamma_{00} + \gamma_{01}(\text{未熟化}) + \gamma_{02}(\text{粗悪化}) + \gamma_{03}(\text{道具化}) + \gamma_{04}(\text{機械化}) + u_{0i}$$

開示を従属変数にして、被非人間化の4因子を同時に投入した分析の結果、女性の開示に対して、被人間化の4因子のうち未熟化が有意に予測し、日常調査前に未熟化されていると認識していたほど脆弱性の開示を行っていた（b＝0.34、p＜.01）。一方、男性の開示に対して、被非人間化のいずれの因子も有意には影響していなかった。

次に、受容的反応について（以下、受容）、それを従属変数、相手の開示と非人間化の4因子（相手をどれぐらい非人間化したか）を独立変数とするSEMで分析した。回帰式は以下である。添え字のmは男性を表し、wは女性を表す。

$$y_m = \beta_{m0} + \beta_{wk}(\text{開示}) + +\beta_{m1}(\text{未熟化}) + \beta_{m2}(\text{粗悪化}) + \beta_{m3}(\text{道具化}) + \beta_{m4}(\text{機械化}) + r_m$$
$$y_w = \beta_{w0} + \beta_{mk}(\text{開示}) + \beta_{w1}(\text{未熟化}) + \beta_{w2}(\text{粗悪化}) + \beta_{w3}(\text{道具化}) + \beta_{w4}(\text{機械化}) + r_w$$

結果、男性の非人間化4因子のうち、未熟化と男性の受容に正の関連があった（b＝.361、p＜.05）。女性の非人間化4因子のうち、道具化と女性の受容と正の関連があり（b＝.43、p＜.05）、粗悪化、機械化は負の関連があった（b＝−.45、p＜.05；b＝−.44、p＜.05）。男女ともに相手の開示と受容の間に有意な結果が得られなかった。

【考察】

予測1について、女性では相手から未熟化されるほど、脆弱性の開示行為が促されていた。男性ではそのような結果は示されなかった。予測2について、男女いずれにおいても、相手の開示と回答者の受容の間に有意な関連が見られなかった。また、予測3について、開示に対する受容的反応について、男性は相手（女性）を未熟化という点で非人間化するほど、相手からの開示に対して受容的反応を取りやすかった。一方、女性は相手（男性）を道具化という点で非人間化するほど、受容的反応が取りやすく、相手を粗悪化、機械化するほど、受容的反応が取りにくかった。

今回の結果から、男性と女性では、非人間化や被非人間化のもつ機能が異なることが示唆される。特に予測1の結果のように、女性が未熟化されるほど脆弱性の開示しやすくなることから、伝統的な性役割意識が女性の被非人間化の知覚に影響を与えている可能性がある。また、予測2が支持されず予測3が部分的に支持されたことから、相手の開示に対する受容は、相手からの実際の開示の程度にかかわらず、受容する側の相手に対する非人間化の知覚により大きく影響されるのかもしれない。

【引用文献】

Haslam, N. (2006). Dehumanization: An Integrative Review. Personality and Social Psychology Review, 10(3), 252-264.
Pizzirani B...Mullins ER. (2019) The Development and Validation of a Dehumanization Measure Within Romantic Relationships. Front Psychol.
Cordova, J. V., & Scott, R. L. (2001). Intimacy: A behavioral interpretation. The Behavior Analyst, 24, 75-86.
Canterberry, M. and Gillath, O. (2012). Attachment and Caregiving. In The Wiley-Blackwell Handbook of Couples and Family Relationships (eds P. Noller and G.C. Karantzas).
黄瑶・相馬敏彦（2024）非人間化は親密な関係の継続性にどのような影響を与えるか―非人間化の4因子モデルを用いた検討―

（こう よう・しゃ しんう・そうま としひこ）

中国出身の日本永住者における日本人との親密化に関する事例的研究

3人の元留学生を対象に

○鄧娟[1]　田中共子[2]
([1]岡山大学社会文化科学研究科　[2]岡山大学社会文化科学学域)

キーワード：中国人、日本人、親密化

【目的】　近年日本に住む外国人の数は急増している。令和5年6月末には322万3,858人と過去最高を記録し（出入国在留管理庁，2023)、今後とも増加が見込まれる。在日外国人の最大集団は中国人だが、その中では国籍を変えずに在留期間の制限なく滞在できる日本永住者（以下、永住者）が最多である(出入国在留管理庁，2023)。これら永住者は、日本人との対人関係に困難を抱えているとの報告がある（松永ら，2012；張，2020)。本研究では、永住者として長期に渡って日本で生活することを選択した中国出身者において、日本人との親密な関係性が構築されていく、あるいは滞ってゆく過程を尋ね、その機序を探ることを目的とする。

【方法】　研究協力者：中国出身の元在日留学生で、日本では永住者であるAさん（40代女性、滞日20年、非常勤職、日本人配偶者、子どもなし)、Bさん（40代女性、滞日15年、常勤職、中国人配偶者、子どもあり)、Cさん（30代女性、滞日7年、常勤職、独身、子どもなし)。

手続き：縁故法で協力者を募集し、研究の目的と研究倫理の説明後に、協力を承諾した人を対象として、日本語で1時間程度の半構造化面接を行った。趣旨への賛同と厚意から謝礼は遠慮された。主な質問は「日本人との交流全般の様子」、「自分が大事にしている特定の日本人との関係」、「自分の交友に関して、来日後に変わった／変わらなかったこと」とし、日本人との親密な関係ができた／できなかった経緯、それについての考え方や感じ方、行動の仕方を聞き取った。

分析方法：分析テーマを「中国出身の日本永住者と日本人の関係形成プロセス」とし、分析焦点者を「中国出身の日本永住者」として、最も詳細な語りを得た1名のデータからM-GTAを用いて概念生成とカテゴリ化を行い、続いて残りの2名のデータを加え分析した。それをもとに注目すべき概念を見出し、語りを読み解いていった。

【結果と考察】　分析の結果、日本人との関係の持ち方・作り方に関する語りから、22個の概念が生成された。これらは大きく2つに分けられる。一つは、日本文化に対する理解と配慮の実行を表す『日本文化に気を付ける』であり、いわば日本文化に歩み寄る動的な関わり方を反映している。相手との距離感に気を配る、適切な距離を保つ、相手に頼り過ぎない、相手の反応を見て近づくか判断する、日本のルールに合わせて妥協するなどの語りが含まれる。もう一つは、自身や周囲の日本人に関する文化的・個人的な特徴への気づきを述べる『永住者や日本人自身の気質』であり、いわば静止的な評価を反映している。異質さへの気づきとしては、親しい友達との食事代の清算への抵抗感（中国ではおごりあう習慣がある)、日本の交際ルールの明確さ（祝い金などに金額の目安があって便利)、中国の癖でメール返信を忘れた（中国では仕事でもWeChatやLineが多い）などがある。同質性への気づきには、相手も自分も同様に綺麗な心持ちを重視（変わりはない）などがある。個の特徴には、自分は関係作りを積極的に働きかける（それが自分のやり方）などがある。この分岐を読み解くため、関係形成に関する語りを辿ると、「距離感」を巡る相違が注目された。なお生成した概念のうち10個は対人的な「距離感」に関するものだったことから、これが関係性を巡るコア概念であると判断された。

特定の日本人との大事な関係として、Aさんは学生時代の先輩を挙げ、15年来親しいという。Cさんは現在の職場の同僚を挙げ、深い会話ができる、一番仲のいい日本人の友達だという。しかしBさんは、中国人の友達のような、「何でも言うとか家に誘うとか」できる親密な関係性は作れていない、日本人との関係は「友達っぽい」程度でいいという。

AさんやCさんの「距離感」に関する語りを辿ると、彼らはまず「日本人との距離感に気をつける」が、「反応を見て近づくか判断」し、「時間をかけて関係性をほどよく保つ」ようにした後で、「距離感を超える信頼関係を築く」。つまり日本での距離の取り方を認識し、その調整を図りながら次第に関係性を構築する。この実践は、彼らが日本生活の中で会得した対人関係の規範であり要領である。語りでは、相手の日本人との間で「ここまで話す」などの判断に慣れ、「仕切りが見えてくる」と距離が測れるようになると述べ、「お互いの領域に出入り自由な中国人の親密すぎる関係性」は客観視していた。日本人の関係性は「気を遣う」ものとしたうえで、「私は私、あなたはあなた」との線引きの要領がつかめたなら、日本人の人間関係はむしろ「簡単」だと気づくという。一方でBさんの方は、関係の作り方を観察したり深く理解しようとする発想はみられず、距離感を調整する語りはない。中国人のような親密さがないことを冷たいとみて、「日本人と関係性が作れない」という思いが続く。中国人同士の関係の持ち方は、お互いの領域にわりと出入り自由で、あまり気を使わない、「自然な関係性」だとして、それを望んでいる。日本人とは、たまにご飯を食べるなどの「その程度の関係性」はあるが、そのくらいで止めるという。家庭や職場では中国人と接する場面が多く、日本での「仕事の規則は面倒で形的なものが多い」との受け止め方がみられる。

【総合考察】　今回の3事例の分岐点を探すなら、新たなつきあい方の流儀の理解と調整を試みたかどうかが該当するように思われる。今回見てきた在日中国人永住者と日本人の関係形成は、日本の対人的な距離の考え方をどう理解し、どのように使いこなすかによって、分岐していくとの仮説が考えられよう。日本に長期滞在する永住者は、言語の障壁を乗り越えた者も多く、社会の知識も増えているが、異文化適応の困難が消滅しているわけではない。しかしAさんやCさんのように、日本人との間で「程度よく」距離をとりながら、関係構築していく仕組みに気付いてそれに取り組み、試行錯誤を経ながら実践していく人もいることがわかった。彼らの対応は、認知行動的な異文化間ソーシャルスキルの獲得と実践としてみることができよう。

【利益相反】本研究に申告すべき利益相反はありません。

【引用文献】

出入国在留管理庁 2023　令和5年6月末現在における在留外国人数について」(2024年2月15日閲覧 https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00036.html)

松永典子・麻生迪子・季江静・永嶋洋一・他　2012「外国人「生活者」のための日本語教育と多文化理解教育の現状と課題：伊都地区から考える多文化化する地域における社会連携モデルの模索」九州大学学術情報リポジトリ，比較社会文化，18，9-23

張月，2020,「日本の都市部に嫁いだ中国人女性の社会的ネットワーク：時代による変化の視点から」北海道大学大学院教育学研究院紀要，137，127—239

（トウ　ケン・たなか　ともこ）

対人関係形成スキルを高める教育プログラム

関係形成段階から呼称で呼び合うルールの導入効果

谷田林士
（大正大学人間学部）

キーワード：対人コミュニケーション、関係形成スキル、初年次教育

【目的】

近年、中央教育審議会の答申に基づいて大学教育改革が進行しており、その中でも能動的学修、すなわちアクティブラーニングの推進が提言されてきた。その結果、能動的学修によって汎用的能力を育成することを意図した講義形式が採用されており、講義内でディスカッションやグループワークを取り入れることが一般的となった。このようなアクティブラーニング型の授業の教育効果も報告されているが、一方で、アクティブラーニングにおいては、他の受講生と授業内で討論することや、協働的な課題に取り組むことが多いため、他の受講生と良好な対人関係を形成・維持できるような支援を行うことが課題とされている（亀倉，2015）。

本研究では、学生がアクティブラーニングにおいて、円滑な対人関係を形成し、ディスカッションを深め、協働的に取り組むことができない要因の一つとして、距離感のある呼称の使用を取り上げる。日本社会では、相手との関係性によって呼び方が変化するため、大学生の初期の関係形成段階においても、相手からネガティブに思われないように、まずは一定の距離感を保持するような、「さんづけ」や「君づけ」の呼び方が用いられることが多い。ただし、これらの継続的な使用は、友好的な関係の形成を阻害する一つの要因として考えられる。本研究では「さんづけ」から友好的な呼称で呼び合あうことを支援すること、すなわち、相手から呼称で呼んでもらえるような働きかけや、相手を気軽に呼称で呼ぶことができる対応力を養成することが可能となるグループワークで構成された教育プログラムを開発することを目的としている。

本研究では、クォーター制で運用される初年次生の講義科目の受講生を対象とする。受講生は男女混合の8~10名のグループとなり、毎週（7週）呼称を呼び合うことを促進するグループワークを体験する。呼称に関しては、名字の呼び捨て以外の呼称を自身で決め、毎週のグループワーク時には他のメンバーに自身の呼称が他のメンバーに見えるように、呼称が書かれたネームプレートを首にかける。

呼称で呼び合うグループワークでは、アイスブレイクとして使用されることの多い「となりのとなり」や「隊長の点呼」、「ボールトス」というゲームを改良したグループワークを用いる。グループメンバーの呼称を皆の前で声にするという初期の段階から始まり、プログラムの後半には、グループのメンバーに対して呼称を用いて直接呼びかけることが求められるグループワークを実施する。これらのグループワークに共通しているのは、メンバーで楽しみながらゲームを行っている際中に、そのゲーム内で呼称を使うことが求められる点にあり、全てのグループワークで呼称を呼び合うルールが導入されている。

呼称以外には、自己開示を支援するグループワークが行われる。例えば、自己の内面について「私は～」で始まる短文を複数記述するというWho am Iシートを作成し、これらを用いて自己紹介を行い、メンバー間での相互理解を深める。

【方法】

対象者

T大学86名（男性37名、女性48名、その他2名）、平均年齢は18.67歳（*SD* = 0.89）であった。

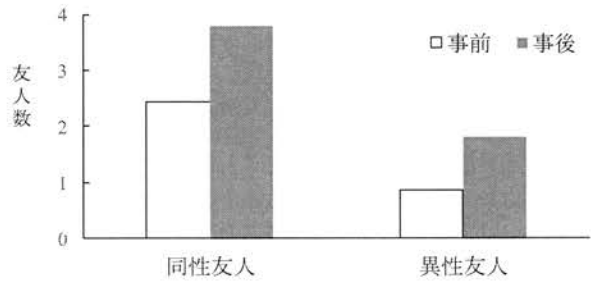
質問紙調査

同級生との関係性を尋ねる質問紙調査をプログラム前後の2度にわたり実施した。質問紙では、同じ学科の同級生に限定して、仲が良かったり、親近感を感じたりする順に10名の同級生のイニシャルを同性、異性ごとに記入することが求められた。心理的な距離が近いような同級生が10名に満たない場合は、その順位以下の欄を未記入のままにするように教示した。記入した同級生との関係性を調べるために、その人物との親密度への回答を求めた。親密度に関しては5段階に区分し、1：挨拶を交わす程度、2：大学で一緒に授業を受ける程度、3：グループで遊びに行く関係、4：2人で遊びに行く関係、5：深い絆がある関係の中から一つを選択させた。

【結果】

プログラム開始前の事前質問紙調査において、同性の同級生の友人数は2.45人（*SD* = 1.86）、異性友人数は0.86人（*SD* = 1.19）であった。事後質問紙調査では、同性友人数は3.79人（*SD* =2.34）、異性友人数は1.80人（*SD* = 1.79）となった。プログラム前後の友人数の変化についての t 検定を行った結果、同性友人（$t(86) = 7.71, p < 0.01, r=0.62$）、異性友人（$t(86) = 5.31, p < 0.01, r=0.50$）とも有意な上昇がみられた。

Figure 1
対人関係形成プラグラム前後の友人数



【考察】

授業の一環として7週にわたり、呼称で呼び合える関係を支援するグループワークを実施した結果、同性、異性とも友人数の増加がみられた。ただし、この友人には、挨拶だけの関係も含んでおり、また、この増加した友人の内訳は、学内で一緒に過ごす関係に留まっている。今後は、協働的な課題を取り組むアクティブラーニングによって、親密な友人関係を形成できるような対人関係の維持や発展・深化を可能とするコミュニケーション・スキルを向上させるプログラムが必要になると思われる。

【利益相反】

本発表に開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

亀倉正彦（2015） 失敗マンダラを活用したアクティブラーニング授業の失敗事例分析とその知識化－学生の『やる気』を引き出す観点から－ *NUCB Journal of Economics and Information Science,* 59, 123-143.

（たにだ　しげひと）

共生感覚尺度作成の試みと自傷傾向に及ぼす影響の検討

○遠藤 まな[1]　土居 正人[2]
([1]吉備国際大学大学院心理学研究科　[2]吉備国際大学人間科学部心理学専攻)

キーワード：自傷行為，共生感覚，間人主義

【目的】思春期・青年期の若者の間で流行している問題の一つとして自傷行為がある。自傷発生のリスクについては，過去に親から不承認的態度をとられ続けてきたこととの関連が指摘されている(土居・三宅, 2020)。他にも自傷傾向者は，実存性が低く(土居・山本・川内, 2023)，周囲の人達からのサポートが少ないことから，孤立状態にあるとされている(森岡・土居, 2023)。そのため，自傷傾向者は実存性を持つことに疑問を感じており，自己の存在を確かめるために自傷が行われていることが推測される。

一方で日本社会全体を見てみると，近年は個人主義化が進んでおり，自由と自律性が確保されやすくなった(鷹田, 2020)。その代わりに人々の関係は分断され，自傷をする者が孤立しやすくなっている。このような個人主義化していく中でも自己の存在を確認するためには，近代化前の日本社会に存在していた日本式集団主義，すなわち利他行動による助け合いが必要であるとされる(鷹田, 2020)。浄土宗の高僧である椎尾弁匡氏は，人々の「共生」について，全てのものは互いに影響しあいながら存在しているため，自己を生かすには他者を生かすことであるとしている(早川・早川, 2023)。これらの知見を基に本稿では，他者を生かし自己を生かすことで，他者とのつながりを感じ，「他者と共に生きている」という感覚を「共生感覚(Co-Existence Sensory: CES)」とよぶことにし，これと自傷傾向との関連を調べることにした。以上のことをまとめると，自傷傾向者は，個人主義化する社会の中で孤立した状況にあり，助けを求めづらい状態に陥っている。だからこそ他者に対して利他行動を行い続ければ，周囲の人達とのつながりが増え，共生していくことの視点が増え，他者からも自身の存在が確認され，自己の存在が確認できるようになる。そうなれば，自身の存在を確かめる行いである自傷の度合いは，低まるのではないかと考えられた。そこで本研究の目的は，共生感覚が自傷傾向軽減に及ぼす影響について検討することを目的とした。まず，共生感覚に関する尺度が見られなかったことから，共生感覚尺度(Co-Existence Sensory Scale: CESS)の作成とその妥当性の検討を行う。次に，共生感覚を感じることが自傷傾向を減少させるのかについてパス解析を用いて検討する。

【方法】対象者について，大学生 263 名，有効回答数 244 名（率 92.8%），平均年齢 20.43 歳±1.72 歳であった。使用した尺度について，共生感覚尺度の試作版（36 項目，4 件法）等であった。手続きについて，参加は自由であること，個人情報の遵守等について伝えた。本調査は，吉備国際大学の倫理審査委員会の認証を受けた上で実施している(No.23-20)。なお，利益相反は無かった。

【結果及び考察】共生感覚尺度試作版の項目に対して，項目分析を行った上で，最尤法，Promax 回転による探索的因子分析を行った。結果，「善意的利他行動」，「陰徳的利他行動」，「身近な人との共生感覚」，「地域の人との共生感覚」，「自分の存在確認」の 5 因子 22 項目が抽出された（表 1）。基準関連妥当性の検討について，間人度と共生感覚尺度の相関係数は有意であった(r=.52, p<.001)。構成概念妥当性について，相関係数を求めた結果，共生感覚尺度に対して，向社会的行動尺度は r=.57, p<.001，共同体感覚尺度は r=.78, p<.001 であった。

共生感覚尺度下位因子が自傷傾向下位因子に与える影響について検討するため，構造方程式モデリングによるパス解析を行った。共生感覚尺度下位因子の間接効果が最も高くなるパス図を作成した結果，適合度は $\chi^2(15)=7.82$, *n.s.*, GFI=.98, AGFI=.94, NFI=.98, RMSEA=.00, AIC=67.82 を示した（図 1）。結果として，善意的利他行動及び陰徳的利他行動は，地域共生感覚(善意：β=.41, p<.01, 陰徳：β=.35, p<.01)と身近共生感覚(善意：β=.43, p<.001, 陰徳：β=.26, p<.05)を経て，自分存在確認を高め(地域：β=.42, p<.001, 親近：β=.53, p<.001)，自傷傾向下位因子を低めていた(抑圧：β=−.46, p<.001, 自責：β=−.51, p<.001, 承認：β=−.26, p<.05, 親子：β=−.23, p<.001)。

以上のことから，人が善意的，陰徳的に利他行動をとることは，身近な人や地域の人達との交流が増え，それぞれの存在を確認し合うことにつながる。そして，自分の存在が確認できることで，自傷傾向が低まると推定された。

【引用文献】土居正人・山本南利・川内三奈美 (2023). 自傷者はここに「いる」のか 自傷傾向者の実存感の検討を通して. 国際教育研究所紀要, 33, 23-31.
土居正人・三宅俊治 (2020). 非自殺的自傷行為 (NSSI) を生起させる感情情報伝達過程の機制 親子関係の歪みと感情調節の不調を基礎とするプロセスモデルの検討. 自殺予防と危機介入, 40, 60-66.
早川昌志・早川卓志 (2023). 4 つの共生論 共生を「ともいき」「シンバイオーシス」「エコシステム」「インクルージョン」の 4 つの視点から整理する. 未来共創, 10, 75-131.
森岡慶光・土居正人 (2023). 自傷発生リスクがある中で自傷傾向が低い者のレジリエンスとは 周囲の関係者（縦・横・斜め）からのサポートの検討を経て. 岡山心理学会第 71 回大会大会発表論文, 17-18.
鷹田佳典 (2020). 現代社会における悲嘆の個人化 「悲嘆の共同化」に向けての一試論. 現代宗教, 83-109.
（えんどう まな・どい まさひと）

表 1　探索的因子分析の結果

項目番号	項目内容	因子負荷量 I	II	III	IV	V
	I. 善意的利他行動					
Q16	他者に優しい言葉がけができている方だ	.79	−.09	−.09	.02	.10
Q22	他者に対して，気遣いや心配りができている方だ	.77	−.06	−.08	.09	.06
Q29	他者が苦しそうにしている時，他者側の立場に立ってその苦しみを理解しようと努力する方だ	.62	.20	.13	−.14	−.09
Q28	困っている人がいる時，傘を貸してあげたり，お菓子をあげたり，労を労ったりする等，安全な状態を提供することができている方だ	.53	.06	.04	.10	.01
Q19	困っている人がいる時，自身の労力を要する場合（掃除する，世話する，話聞く等）でも手助けできている方だ	.47	.15	.12	.04	−.01
	II. 陰徳的利他行動					
Q7	他者から感謝されなくても，他者や社会のためになる行いができている方だ	−.11	.77	−.05	.15	−.02
Q1	他者のためになる行いを，積極的にしている方だ	.12	.75	−.10	−.04	−.02
Q31	身近な人々（家族，友達，学校等）のためになる行いを，積極的にできている方だ	.04	.58	.23	−.23	.24
Q4	知らない人でも，困っていたら手助けできている方だ	.12	.51	−.07	.24	−.04
	III. 身近な人との共生感覚					
Q15	私は，身近な人々（家族，友達，学校等）との交流を通して，「他者と共に生きている」と強く感じる	.06	−.08	.73	.17	−.01
Q9	身近な人々（家族，友達，学校等）との助け合いを通じて，「他者と共に生きている」と強く感じる	−.13	.04	.71	.10	.03
Q33	身近な人々（家族，友達，学校等）との交流を通して，自分の存在が受け入れられていると強く感じる	.07	−.19	.61	.02	.34
Q10	他者の行動を，否定せず肯定的な気持ちで見ることができている方だ	.25	.07	.40	.02	−.06
	IV. 地域の人との共生感覚					
Q3	社会（家族，友達，学校，地域等）での助け合いを通じて，そこに所属できていると強く感じる	.00	−.05	−.02	.79	.05
Q6	私には，とても信頼できる社会（家族，友達，学校，地域等）がある	.06	.03	.13	.72	−.17
Q12	社会にいる人々（家族，友達，学校，地域等）との助け合いを通じて，「社会の一員である」と強く感じる	−.01	.11	.18	.61	−.01
Q36	社会にいる人々（家族，友達，学校，地域等）との交流を通して，自分の存在が受け入れられていると強く感じる	.00	.05	−.09	.58	.35
Q18	私は，社会にいる人々（家族，友達，学校，地域等）との交流を通して，「他者と共に生きている」と強く感じる	.00	.08	.16	.52	.11
	V. 自分の存在確認					
Q21	自分らしい行動や自分の良さを十分に見つけられている方だ	.11	−.04	−.13	−.03	.95
Q24	身近な人々（家族，友達，学校等）との交流を通して，今の私は自分らしさや自分の良さをしっかりと確認できる	−.07	.08	.21	−.09	.74
Q30	自分が「ここにいる」と強く感じる	−.01	−.05	.19	.11	.57
Q27	社会にいる人々（家族，友達，学校，地域等）との交流を通して，今の私は自分らしさや自分の良さをしっかりと確認できる	.01	.12	−.01	.25	.55
寄与率(%)		13.11	9.61	10.31	13.45	12.95
累積寄与率(%)		13.11	22.72	33.03	46.48	59.43

反すう傾向と性格特性および日常の活動との関連に関する研究

○近藤三由希[1]　石井秀宗[1]
([1]名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

キーワード：反すう，日常活動，性格特性，Big Five，軽減

【目的】 反すうは，人の心理・身体に様々な影響をもたらず受動的・反復的な思考や行動である。反すうには抑うつと関係する非適応的な側面と，抑うつ気分を調整しようとする適応的な側面の2つの側面があるとして研究が進められている。また，近年の研究において，反すうは介入により軽減させる可能性があることが示唆されている。日常の活動について，実行する活動に影響を与える要因として，性別や性格特性が関連する可能性がある。反すうと性格特性の関連について，Big Five 尺度を用いた調査では，反すうと情緒不安定性（神経症傾向）および開放性との関係が明らかにされている（高野・丹野，2008）。また，性格特性と活動の関連では，外向性が高い人は，内向性の高い人と比べて社交的で，人と交流する活動をより好んで行うなど，性格特性は，活動による反すう傾向への影響が異なる要因である可能性が考えられる。したがって，本研究では反すう傾向と性格特性，および日常の活動との関係を検討し，反すう軽減の示唆を得ることを目的とする。

【方法】 日本国内の企業等の在籍者，その関係者 297 名（平均年齢 43.42 歳，SD= 12.5，男性 134 名，女性 160 名，その他・無回答 3 名）を分析対象とした。先に予備調査を行い，活動に関する質問内容を検討した。本調査では，個人属性，2 つの反すう尺度，性格特性（Big Five），日常の活動や習慣について調査した。反すうは，Hasegawa (2013) が作成した日本語版 Ruminative Responses Scale（RRS）の反すうに関する 2 つの下位因子「考え込み」「反省的熟考」各 5 項目を 4 件法で回答を求めた。松本（2008）が作成した拡張版反応スタイル尺度の反すうに関する下位因子「ネガティブな内省」7 項目「問題への直面化」6 項目を 4 件法で回答を求めた。性格特性は，並川他（2012）の Big Five 尺度短縮版を使用した。情緒不安定性，外向性，開放性，協調性，誠実性の 5 つの因子 29 項目について 5 件法で回答を求めた。日常の活動や習慣は，反すうとの関連が検討された活動と予備調査で得た回答から，計 19 の活動について調査した。実施頻度 6 件法，実施時間，好き嫌いは各 5 件法で回答を求めた。実施の頻度と時間をかけたものを活動量とした。

手続き・倫理的配慮：説明文書を用いて研究目的，所要時間，参加は自由意志であること，不参加の場合でも不利益が生じないこと，個人情報の取り扱いについての説明を行った。回答は，Web アンケートシステム（Qualtrics®XM）もしくは質問紙の郵送を依頼した。著者が所属する機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 22-1804）。

【結果】 各尺度のクロンバック α は，0.74～0.85 であり十分な信頼性が示された。

反すう傾向と Big Five 性格特性の相関：RRS の考え込みと，情緒不安定性には正の相関がみられ，外向性，誠実性，調和性とは弱い負の相関がみられた。反省的熟考との相関は，情緒不安定性，開放性と弱い正の相関がみられた。拡張版反応スタイル尺度のネガティブな内省と情緒不安定性との間には正の相関，協調性とは弱い負の相関がみられた。問題への直面化と情緒不安定性は有意な相関は認めず，外向性，誠実性，開放性と弱い正の相関がみられた。

反すう傾向と性格特性・各活動の重回帰分析：反すう傾向の得点と Big Five 尺度の得点，活動量を標準化し，活動の好き嫌いは尺度中央値である 3 を引き標準化した男女別データを使用し，反すうを従属変数とした重回帰分析を行った。主効果が負の値を示し，p<.10 であった活動は，考え込みでは，男性の園芸/ガーデニング（B= -.28），女性の人と一緒に行う運動/スポーツ（B= -.19），個人で行う運動/スポーツ（B= -.14），好きなものを食べる（B= -.14）であった。ネガティブな内省では，女性の料理（B= -.13）のみが挙げられた。また，各活動の活動量について，交互作用項が |B| ≧.20 かつ p < .05 であった活動は，考え込みでは，男性の飲酒活動量×外向性（B= -.24），飲酒活動量×調和性（B=.27）で，外向性が高い場合は飲酒活動量が増えると軽減するが，調和性が高いと活動量の増加により考え込みが増えることが示された。人と会話する活動量×外向性（B= -.32）は，外向性が低い場合は人との会話は考え込みの軽減にはつながらないことが示された。園芸/ガーデニング活動量×好き嫌い（B= -.33），瞑想/呼吸法/マインドフルネス活動量×好き嫌い（B= -.32）では，好きではない人の活動量が増えることで考え込みが軽減されることが示された。女性ではヨガ活動量×開放性（B= -.29）で，開放性が高いと活動による軽減効果があるが，開放性が低いと逆効果であった。

ネガティブな内省は，男性の人と一緒に行う運動/スポーツ活動量×好き嫌い（B= -.24），個人で行う運動/スポーツ活動量×開放性（B=.22）であり，人と一緒に行う運動/スポーツが好きではない場合は，活動量が増えるとネガティブな内省が増加すること，個人で行う運動/スポーツは，開放性が高い人は活動量が増えるとネガティブな内省が増加することが示された。テレビ/映画/動画視聴活動量×情緒不安定性（B =.34）では，情緒不安定性が高い場合は活動量が増えるとネガティブな内省の増加がみられた。人と会話する活動量×外向性（B= -.25）は，外向性が低い人には活動が逆効果であった。瞑想/呼吸法/マインドフルネス活動量×開放性（B= -.24）は，開放性が高い人の方が活動により軽減につながることが示された。女性ではテレビ/映画/動画視聴の活動量×開放性（B= -.24）で，開放性が低い場合には活動量が増えると軽減につながることが認められた。

【考察】 反すうと情緒不安定性の間の相関は先行研究と同様だったが，外向性，誠実性は非適応的，適応的のどちらの反すう傾向とも正の相関がみられた。2 つの反すうを同時に行っている場合や，尺度間で測定している概念が異なることが示唆される。反すう傾向と性格特性，活動との関係では，非適応的な反すうの軽減につながる活動であっても，活動の好みや性格特性により活動の効果は異なることが示唆された。

【利益相反の有無】 利益相反はない。

【引用文献】

Hasegawa,A. (2013). Translation and Initial Validationoof the Japanese Version of the Ruminative Responses Scale. *Psychological Reports112(3)*, 716-726.

松本 麻友子 (2008). 拡張版反応スタイル尺度の作成 パーソナリティ研究, *16(2)*, 209-219.

並川 努, 谷 伊織, 脇田 貴文, 熊谷 龍一, 中根 愛, 野口 裕之 (2012). BigFive 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, *83(2)*, 91-99.

高野 慶輔, 丹野 義彦(2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, *16(2)*, 259-261.

（こんどう みゆき・いしい ひでとき）

危険予測場面における看護師と学生の注意過程の比較

○稲野辺奈緒子[1・2]　古屋健[2]
([1]東京女子医科大学看護学部 /[2]立正大学大学院心理学研究科　[2]立正大学心理学部)

キーワード：観察、臨床推論、看護師、学生、発声思考

【目的】看護の基本は観察とされ，患者の心身状態に関する情報を得る有力な手段である。看護ケアにおける観察は，ニューカッスル大学(2009)の臨床推論サイクルにおける状況把握，情報収集，情報処理，問題確認の４つのプロセス，つまり的確な手がかりに注意を向け，判明した事実と自分の知識を使って解釈，判別，関連付け，推論，照合，予測といった情報処理を行い，解決すべき問題を見出す過程を指す。本研究では熟練看護師の観察過程の特徴を明らかにするために，危険予測が求められる場面における観察過程について発声思考（think aloud）による言語報告を求め，看護学生および一般学生の結果と比較した。プロトコルデータはデータマイニングの語彙分析の手法で分析し，観察中の認知過程の特徴を抽出した。

【方法】参加者：人文・社会科学系の学部の大学生 24 名（男性 14 名，女性 10 名），看護学部または看護専門学校の看護学生 26 名（男性 4 名，女性 22 名）と看護師 26（男性 6 名，女性 20 名）である。看護師の平均経験年数は 11.04 年(SD8.37)であった。

課題：医学映像教育センターの看護教育 DVD「事例で学ぶヒヤリ・ハット」から「排泄介助（3m04s)」（点滴台を持たず抜針）と「状態把握（4m58s)」（売店までの付添い歩行中の転倒）の２つの課題を利用した。

手続き：参加者は一人ずつ個室に呼ばれ，研究主旨の説明を受けた。次に，動画を視聴しながら発声思考するよう求められた。発声思考については心の中で考えたことすべてを声に出すことだと説明し，まず研究者が見本を見せ，参加者も練習用動画で練習試行を行ってから，本実験に入った。課題動画を視聴している時の同時報告と，視聴後に参加者のプロンプトによって生起した回顧的報告が録音された。

分析方法：発声思考中の発言はすべて逐語記録に書き起こされ分析された。

語彙分析：User Local により品詞別（名詞，形容詞，動詞）語彙分析を行い，その出現回数をカウントした。出現した語彙の内容については，さらに正解とされた発言内容との関連性の有無を判定した。正解数，語彙分析の結果は IBM SPSS Statistics.Ver29 でコレスポンデンス分析を行った。

正解数：制作会社の作成した模範解答に準拠して正解とする内容を事前に定めておき，看護教員２名が採点し，判定が一致した内容だけを正解とした。

倫理的配慮　立正大学大学院心理学研究科研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 G2023-01 号）

【結果】正解数：各課題の正解数の参加者属性別平均と標準偏差を表１に示した。一要因分散分析の結果，「排泄介助」（F (2,73) ＝ 43.706, p＝＜.001, η^2＝.545）と「状態把握」（F(2,73) ＝15.190, p＝＜.001, η^2＝.294）のいずれにおいても有意な属性間の差が認められた。また多重比較（Tukey 法 5%水準）の結果，どちらの課題においても看護師は大学生，看護学生より有意に正解数が多く，大学生と看護学生との間に有意差は認められなかった。

語彙分析：各課題頻出語彙をコレスポンデンス分析した結果を図１・図２に示す。まず，排泄介助課題では「点滴台・患者・履く・靴」には，３群とも注意を向けていた。「位置・車椅子・倒れる」には，看護師と大学生が注意を向け，「点滴・抜ける」には，看護師と看護学生が注意を向けていた。そして，看護師のみが「引っ張る・できる・置く」に注意を向けていた。「引っ張る」では，点滴ラインに関連した注意，「できる」では，対応ができる，確認ができるが抽出された。「置く」では，ナースコールの置き忘れ，点滴台の配置に対して注意を向けていた。次に，状況把握課題では「サンダル・歩く・患者・靴」には，３群とも注意を向け，「踵」には大学生のみが注意を向け，「履く・危険・糖尿病・確認」には看護師と看護学生が，「車椅子・選択・何・買う」には看護師のみが注意を向けていた。

【考察】本研究では大学生，看護学生，看護師の注意過程の比較を行った。その結果，看護師のみ注意を向けている手がかりがあることが明らかになった。その特徴として，大学生と看護学生の観察範囲が患者とその周辺環境に限定されていたのに対して，看護師は視野が広く，患者の置かれた場面全体に注意を向けていた点に違いがあると考えられた。

【利益相反】本研究における利益相反はありません。

【引用文献】School of Nursing and Midwifery Faculty of Health,University of Newcastle(2009).CLINICAL REASONING is this just one part of the process.https://www.utas.edu.au/__data/assets/pdf_file/0003/263487/Clinical-Reasoning-Instructor-Resources.pdf.(June.3,2024)

本研究は 2023 年度東京女子医科大学看護系同窓会研究助成を受けた。

（いなのべ　なおこ・ふるや　たけし）

表1 各課題における正解数の平均値と標準偏差

		「排泄介助」課題	「状況把握」課題
	N	正解Ave(SD)	正解Ave(SD)
大学生	24	2.25(3.42)	5.21(3.45)
看護学生	26	2.77(3.15)	9.58(4.60)
看護師	26	14.04(7.43)	16.62(11.31)

図１　排泄介助課題におけるコレスポンデンス分析

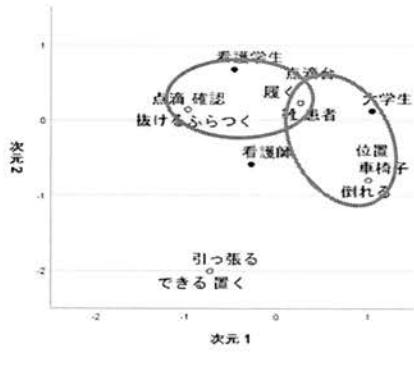
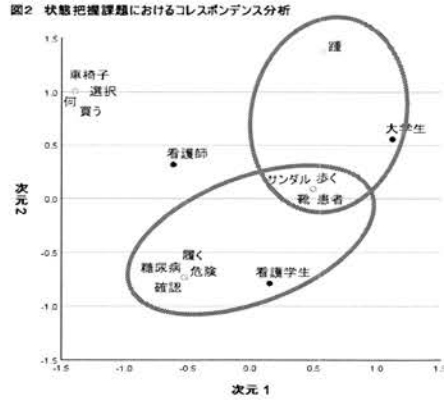


図２　状態把握課題におけるコレスポンデンス分析



幼児期の宗教教育が道徳性の発達に与える影響についての研究

○大門耕平[1]　来田宣幸[2]

([1]東北学院大学文学部　[2]京都工芸繊維大学)

キーワード：道徳性の発達的傾向、幼児教育、宗教教育

【目的】近年，幼児教育が道徳観などの形成に大きな影響を与えることが注目されている。このような、人間形成や道徳観を育むことを目的として実施される教育の一つとして，宗教教育がある。しかしながら，日本の教育機関における宗教教育の実施には制約があり、公立の学校においては，宗教教育は実施されることはない。そのため、私立学校での実施に限られる。ただし、小学校（全体の 1%)、中学校（全体の 8%）においては私立学校の割合が少なく、義務教育機関において宗教教育を受ける機会はほとんどないのが現状である。しかしながら、幼児教育については、私立学校が幼稚園は全体の 68%であり、認定こども園は 86%を示している。これらのうち宗教教育の実施の有無は不明であるが、義務教育機関と比較して、宗教教育を受ける割合が多いと考えることができる。そこで，この研究では，幼児教育において宗教教育を受けた経験が，その後，大学生となった時にどのような影響を与えているかに着目することとする。

【方法】1.参加者：東北圏にある大学 1 校を対象とした。参加生徒は、大学下級生（1,2 年生）が 187 名（男子 114 名、女子 69 名、無回答 2 名）であり、大学上級性（3,4 年生）が 64 名（男子 36 名、女子 28 名)、合計 251 名、であった。また、宗教教育の経験については、経験あり 63 名、経験なし 188 名であり、宗教教育経験者は全体の 25.1%であった。宗教の系列については、キリスト教系 15.1%、仏教系 10.0%、神道系 0.0%であった。

2.調査内容：中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度、ソーシャルスキル尺度、宗教教育の経験の有無（幼児教育）について調査を実施し、分析をおこなった。

【結果】1.道徳性の比較（中学生・大学生）

	中学生	大学生	
	AV ± SD	AV ± SD	t検定
ソーシャルスキル	3.42 ± 0.82	3.55 ± 0.69	**
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.48 ± 1.29	4.47 ± 1.16	
自分自身に関する肯定的な意識	4.92 ± 0.87	4.53 ± 1.03	**
人との関わりに関する否定的な意識	4.03 ± 1.31	3.65 ± 1.27	**
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.74 ± 1.15	3.66 ± 1.19	
集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.21 ± 1.20	5.58 ± 1.02	**

*p <0.05, **p <0.01

中学生と大学生の道徳性について比較をおこなったところ、「自分自身に関する肯定的な意識」については中学生の方が有意に高い値であったが、「ソーシャルスキル」、「人との関わり関する否定的な意識」、「集団や社会とのかかわりに関する肯定的な意識」については、大学生の方が有意に良い傾向を示していた。

また、「自分自身に関する肯定な意識」について、大学上級生徒と下級生を比較したところ、上級生（4.19±1.06）が下級生（4.65±0.99）と比較して有意に低い値であった。

2.大学生の道徳性（男女差）

	男子	女子	
	AV ± SD	AV ± SD	t検定
ソーシャルスキル	3.61 ± 0.68	3.45 ± 0.70	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.57 ± 1.22	4.33 ± 1.06	
自分自身に関する肯定的な意識	4.57 ± 1.00	4.51 ± 1.06	
人との関わりに関する否定的な意識	3.79 ± 1.25	3.37 ± 1.24	*
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.66 ± 1.25	3.62 ± 1.08	
集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.62 ± 1.01	5.50 ± 1.03	

*p <0.05, **p <0.01

道徳性について、性別差を検討したところ、「人との関わりに関する否定的な意識」において、男子が女子と比較して有意に高い値であった。その他については、有意な差はみられなかった。

3.宗教教育の経験が大学生の道徳性に与える影響（全体）

	経験あり	経験なし	
	AV ± SD	AV ± SD	t検定
ソーシャルスキル	3.53 ± 0.68	3.55 ± 0.70	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.68 ± 1.21	4.41 ± 1.14	
自分自身に関する肯定的な意識	4.72 ± 0.95	4.47 ± 1.05	
人との関わりに関する否定的な意識	3.63 ± 1.38	3.65 ± 1.23	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.56 ± 1.07	3.69 ± 1.23	
集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.80 ± 0.88	5.51 ± 1.05	*

*p <0.05, **p <0.01

全体傾向においては、「集団や社会とのかかわりに関する肯定的な意識」において、経験ありが、経験なしと比較して有意に高い傾向がみられた。

4.宗教教育の経験が大学生の道徳性に与える影響（男女別）

男子

	経験あり	経験なし	
	AV ± SD	AV ± SD	t検定
ソーシャルスキル	3.67 ± 0.68	3.58 ± 0.69	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.95 ± 1.23	4.43 ± 1.19	*
自分自身に関する肯定的な意識	4.86 ± 0.83	4.46 ± 1.04	*
人との関わりに関する否定的な意識	3.79 ± 1.47	3.79 ± 1.16	*
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.51 ± 1.23	3.72 ± 1.26	
集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.93 ± 0.77	5.51 ± 1.06	*

*p <0.05, **p <0.01

女子

	経験あり	経験なし	
	AV ± SD	AV ± SD	t検定
ソーシャルスキル	3.26 ± 0.62	3.50 ± 0.72	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.15 ± 1.03	4.38 ± 1.07	
自分自身に関する肯定的な意識	4.44 ± 1.15	4.52 ± 1.04	
人との関わりに関する否定的な意識	3.25 ± 1.10	3.41 ± 1.29	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.64 ± 0.73	3.62 ± 1.16	
集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.50 ± 1.00	5.49 ± 1.05	

*p <0.05, **p <0.01

男女別に検討したところ、女子においては有意差が確認できなかった。男子については、経験ありが、経験なしと比較して、「自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識」、「自分自身に関する肯定的な意識」、「人との関わりに関する否定的な意識」、「集団や社会とのかかわりに関する肯定的な意識」において、有意に良い傾向を示していた。

5.宗教教育の経験が大学生の道徳性に与える影響（宗教差）

	キリスト教	仏教	
	AV ± SD	AV ± SD	t検定
ソーシャルスキル	3.74 ± 0.74	3.56 ± 0.58	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.89 ± 1.32	5.04 ± 1.12	
自分自身に関する肯定的な意識	4.88 ± 0.90	4.82 ± 0.72	
人との関わりに関する否定的な意識	3.52 ± 1.61	4.20 ± 1.14	
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.68 ± 1.18	3.25 ± 1.29	
集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.90 ± 0.83	5.97 ± 0.69	

*p <0.05, **p <0.01

宗教教育の実施形態による影響を比較したところ、有意差はみられなかった。

【考察】

幼児期の宗教教育の経験が道徳性の発達に与える影響に調査したところ、いくつかの項目で有意差を確認することができた。今後は、より詳細な調査、および、教育内容についての知見を深めていきたい。

【引用文献】

大門耕平　宇田川千帆 2022「中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度の開発」「宗教と社会」学会機関紙　第 28 号,pp.17-31

菊池章夫、「Social Skill 尺度の作成」、『東北心理学研究 38 号』、東北心理学会、1998、67-68

(おおかど　こうへい・きだ　のりゆき)

小中学生の自己有用感を高める要因の検討

—階層線形モデルを用いた対人関係要因の影響—

○能渡綾菜[1]　能渡真澄[2]

([1]筑波大学大学院人間総合科学研究科　[2]株式会社ビジネスリサーチラボ)

キーワード：自己有用感，対人関係，階層線形モデル

【目的】子どもの学校生活における適応を捉えるにあたり，近年「自己有用感」が注目を集めている。自己有用感とは，他者や集団との関係の中で，自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚を指す（栃木県総合教育センター, 2013）。自己有用感が高いほど，生活満足感が高いこと（鎌田他, 2019），学習への意欲が高く自律的な生活ができること（栃木県総合教育センター, 2013）が明らかにされている。そのような自己有用感を高める教育実践として，学級内の認め合い活動（山岸・赤坂, 2021）や異年齢および同年齢集団活動（信夫他, 2018）の有用性が示されている。

自己有用感が育まれる関係性として，クラスメイトや友人，教師との関係が挙げられるが，それぞれを同時に取り上げて影響力を比較検討した研究は見られない。また，子どもは多くの時間を在籍する学級で過ごすが，学級ごとの子ども同士の関係，教師との関係は一様でなく，学級間に違いがある。そのため，学級間の特徴の違いを加味することで，個人だけでなく集団にも向けた，自己有用感を高める有効なアプローチを明らかにできると考えられる。

また，自己有用感は関係性の中での自己評価の意味合いが強く，成長とともに密に関わり合う相手が変わりゆく子どもにとっては，これまでの対人関係を越えて自己実現に向かえるか，自律的に生活を送れるかという点も重要となると考えられる。櫻井（2016）は，自分の興味関心をベースにしつつ，将来を展望して目標を持つことが自己実現のための学習意欲につながると指摘している。そのため，子どもの今現在の適応としての自己有用感に着目するだけでなく，将来の適応にもつながり得る学習意欲や将来展望についても検討することが重要である。

以上より本研究では，小中学生の自己有用感，学習意欲，将来展望を高める要因について，子どもを取り巻く対人関係の観点から検討することを目的とする。その際，それらの関連が個人・学級レベルによって異なるかも併せて検討する。

【方法】調査対象者　A市内の小学4年生1703名，小学5年生1771名，小学6年生1783名，中学1年生1611名，中学2年生1684名，492学級であった。**質問紙**　学校適応尺度（浅川他, 2003）および自己有用感尺度（石本, 2010）を参考に，教育委員会との協議のもと各下位尺度3項目（4件法）を作成した。**手続き**　2022年6～7月（Time 1），11～12月（Time 2）の2時点で調査を実施した。調査への回答は児童生徒が持つタブレット端末からGoogleフォームを通して回収した。クラスごとに，各自のタブレット端末からGoogleフォームにアクセスする形で実施した。

【結果】Time 1の基準変数，小学校・中学校の種別，Time 1の教師関係・クラス関係・友人関係，およびこれらの交互作用項を予測変数，Time 2の自己有用感・学習意欲・将来展望それぞれを基準変数とし，学級による変量効果を仮定した階層線形モデル分析を行った（Table 1）。なお，Time 2基準変数の級内相関はすべて有意であった（ICCs＝.04～.14）。

すべてのTime 2基準変数に対して，個人レベルの教師関係・クラス関係，学級レベルの教師関係の有意な正の関連が示された。また，Time 2自己有用感に対しては，個人レベルの友人関係，学級レベルのクラス関係の正の関連が有意であった。Time 2学習意欲に対しては，小・中の種別，学級レベルのクラス関係の有意な正の関連があり，小・中の種別と学級レベルの教師関係の交互作用が有意であった。具体的には，中学生において学級レベルの教師関係とTime 2学習意欲の正の関連が小さかった。

【考察】自己有用感については，子どもが日常的に関わる他者のいずれの関係によっても育まれることが示唆された。さらに，クラス全体の子ども同士の関係性や，教師とクラス全体の関係性も影響力を持つことが示された。これらのことから，一対一の関係性を築くことも有用であるが，互いを認め合う雰囲気がクラス全体に醸成されていたり，教師がクラスのどの子どもとも良好な関係を築くような学級づくりが，子ども個々人の自己有用感にとって重要となると考えられる。

学習意欲および将来展望については，子ども個人の教師やクラスメイトとの関係性に加え，教師とクラス全体の関係性の影響が示された。教師がすべての子どもに平等に接するような姿が，子ども個人の着実に学習を進めるモチベーションや，将来に対する期待を培っていくと考えられる。

友人関係に関しては，個人の友人関係が自己有用感にのみに影響を及ぼしていた。友人の存在はその関係性における充実感を高めるが，自己実現を果たしていくためには，教師という大人の視点や，普段の学校生活を共にするクラスメイトと学び合えるような関係性が必要となると考えられる。

Table 1
階層線形モデルの結果

予測変数＼基準変数	Time 2 自己有用感	Time 2 学習意欲	Time 2 将来展望
Time 1　基準変数	.59 **	.56 **	.61 ***
小・中（種別）	-.01	-.12 **	.00
教師関係 (W)	.03 **	.06 **	.03 ***
クラス関係 (W)	.04 **	.04 **	.03 **
友人関係 (W)	.02 **	-.01	-.01
教師関係 (B)	.03 **	.06 **	.02 *
クラス関係 (B)	.03 *	.04 **	.01
友人関係 (B)	.01	-.01	-.01
小・中 × 教師関係 (W)	.01	-.01	.00
小・中 × クラス関係 (W)	.00	-.01	.01
小・中 × 友人関係 (W)	.00	.00	-.01
小・中 × 教師関係 (B)	.00	-.03 *	.00
小・中 × クラス関係 (B)	-.01	-.02	-.01
小・中 × 友人関係 (B)	-.02	.01	.00
クラスの変量効果　切片の分散	0.02 **	0.01 **	0.01 **
残差	0.33	0.53	0.40
Marginal R^2	.44	.44	.38

注）$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$。Wは個人レベル，Bは学級レベルの予測変数を表す。

利益相反

第一筆者は，A市教育委員会との間にこころの支援アドバイザーとして，本研究のデータを含むアンケート調査等に関する業務委託契約を締結していた。

主要引用文献

石本 雄真(2010). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感，自己有用感との関連から—　カウンセリング研究, *43*, 72-78.

(のと あやな・のと ますみ)

「正信念仏偈」の頻出語に関する実証的分析

－親鸞の宗教的信念をさぐる（1）－

○伊藤令枝[1]　藤田主一[2]
([1]日本大学理工学部　[2]日本体育大学)

キーワード：正信念仏偈，光，本願

【目的】

親鸞（1173－1263）は，明日をもしれない時代に，民衆に未来を提示しようとした浄土真宗の宗祖である。彼は幼少期に得度して比叡山にて修行を重ねたが，その後，法然に師事して念仏に帰依し，ひたすらその普及に努めたという。親鸞個人については，信仰や教義上，また，近代文学の中でも，その内面性や求道的性格に目が向けられてきたが（野呂・内手・大澤・亀山，2022），心理学的な研究としては，高嶋（1997など）によって伝記的分析が行われ，親鸞のもつ偉大性が浮き彫りにされた。さらに，一連の高嶋研究の再分析（藤田，2022，2023）から，幼少期の家庭状況が親鸞のパーソナリティ形成に影響を与えたこと，生涯発達において，仏法を弘布して報恩に尽くそうとしたことが明確に示された。

さて，「顕浄土真実教行證分類」（教行信證）は，親鸞が東国布教中に常陸国の「稲田の草庵」にて，その草稿を完成させたものである。本書は浄土真宗の根本とされていると同時に，親鸞自身の信仰告白という性質をもっている（山邊・赤沼，1951）。特に，行巻の巻末所収の「正信念仏偈」（正信偈）は，念仏の正信（信じて疑わないこと）をすすめたものである。この偈文（韻律を伴う経典）は，全120句で構成されるが，厳格に1句7音が守られているために，容易かつ正確に復誦されやすく，真宗門徒にとって，自己の信仰を深める上で重要な要素となっている（青江，2006）。なお，正信偈を教行信證本体から独立させて勤行の様式に完成させたのは，本願寺八代で浄土真宗中興の祖とされる蓮如であり，彼によって，真宗門徒の朝暮の基本的勤行として定められた。

そこで本研究では，正信偈にあらわれる言葉を定量的に分析することによって，親鸞が何を追い求め，民衆に伝えようとしていたのかを明らかにし，親鸞の実像を実証的に検討することとした。

【方法】

分析対象：親鸞が執筆した正信念仏偈について，読み下し文ではなく，原文である漢文を分析対象とした。原文のテキストは山邊・赤沼（1951）に依拠した。なお，旧漢字は適宜，新漢字に改めた。

分析手法：株式会社SCREENアドバンストシステムソリューションズ製のテキスト分析ソフトウェアKH Coder Base Edition Ver.3（樋口，2020）を用いて，頻出語を抽出した。

【結果】

正信偈は，冒頭の2句「帰敬文」，次に弥陀本願のいわれを明らかにして讃嘆する「依経」，龍樹菩薩から法然にいたる7人の高僧の論釈によって念仏を讃嘆する「依釈」，そして，ただ信じることをすすめて偈を締めくくる「結勧」で構成されている。

さて，分析の結果，正信偈の最頻語は，「光」（13回）であった。この語は阿弥陀如来や，阿弥陀如来によって放たれる光を意味している。たとえば，帰敬文「不可思議光」（2句）と依釈分「無碍光如来」（62句）はそれぞれ阿弥陀如来を示し，また，依経分の「無辺光」「無対光」「智慧光」「無称光」「超日月光」「光照」（11～16句），依釈分の「光明」（95句）はいずれも阿弥陀如来によって放たれた光，依釈分「無量光明土」（83句）は無量の光明が輝きわたる国土すなわち浄土を意味している。そして，「心光」（29句）は大悲（慈悲）の心である。ただし，阿弥陀如来に由来しない「光」の使用例も認められた。「たとえば日光の雲霧に覆われるとも，雲霧の下，明らかにして闇なきが如し」（33～34句読み下し文）に含まれる「日光」は，一般的な意味での日の光とも理解され，また，依釈分「光闡」（64句）は「広く暢（のぶ）る」すなわち広く説き述べるという意味の形容詞として用いられている。

「光」の次は「誓」（「誓」「弘誓」「本誓」計8回），「本願」（7回）である。本願とは阿弥陀如来が立てた願，すなわち，生きとし生けるすべての衆生を救済したいという仏の内面的な思いを表し，それを外に現したものが「誓」である（青江，2006）。

頻出4番目の語は「仏」，副詞「唯」，動詞「證（ル）」（いずれも6回）である。巻名ともなっている「證」（さとり）は，涅槃，すなわち常楽（とこしえの楽しみ）と寂滅（しずけさのきわみ）が身につき，体験することを意味する（青江，2006）が，この語に関する実証的考察は別の機会に譲りたい。また，「唯」は「ただ仏を称すべし」「ただ説を信ずべし」など，無条件の信心を説くための語として5回用いられ，1回は，「ただ浄土に通入すべきことを明かす」（86句読み下し文）（他力の一道のみで證りの門内に通ずることができると明示した）として，高僧・道綽禅師の項で登場している。

出現5回の語は「如来」と動詞「入（ル）」，4回は「因」「菩薩」「衆」「悪」「信心」「信（ズ）」であった。

【考察】

正信偈の頻出語を抽出し，その語の用いられかたを確かめた結果，阿弥陀如来と浄土に関わる言葉が顕著に見られ，また，衆生にとって唯信心や念仏が強調されていたことが明らかになった。本願は「老少善悪の人をえらばず」（高森，2008）という無条件の願であり，民衆の「無根の信」も無条件なものであって，ここに仏と衆生との呼応が見られる（青江，2006）。したがって本研究は，親鸞の信仰や念仏に対する考え方と普及の意思が偈文の中に表れていたことを示唆しているのである。

【引用文献】

青江覚明（2006）．正信念仏偈意趣　明日香出版社
藤田主一（2022）．高嶋正士と偉大性心理学－鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について－　日本応用心理学会第88回大会発表論文集，86.
藤田主一（2023）．高嶋正士と偉大性心理学－鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について（2）－　日本応用心理学会第89回大会発表論文集　117.
樋口耕一（2020）．社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－第2版　ナカニシヤ出版
野呂靖・内手弘太・大澤絢子・亀山隆彦（2022）．日本における仏教文化と聖者像に関する総合的研究　龍谷大学世界仏教文化研究論叢，*60*，41-68.
高森顕徹（2008）．歎異抄をひらく　1万年堂出版
高嶋正士（1997）．偉人・天才の心理学　医学出版社
山邊習学・赤沼智善（1951）．教行信證講義　教行の巻　法藏館

【利益相反】本研究に開示すべき利益相反はない。

海老根山浄乗寺住職松岡神龍師に貴重なご示唆をいただきました。ここに記して，感謝の意を表します。

（いとうよしえ・ふじたしゅいち）

保育施設での複数管理職との会話における<訂正>と<同意>の日英比較

○山本　睦
（常葉大学保育学部）

キーワード：管理職間対話、自己訂正、日英比較

【目的】　近年、保育者の不足と就業継続困難が続くなか、マネジメント研修の重要度が高まっている。公立保育所では公務員規定による管理職は園長のみとしている市町も多いが、実際の現場でマネジメントを実施するのは園長だけでなく、副園長、主任も管理職としてマネジメント機能を担っている。そこで本研究では、会話におけるシェグロフ・ジェファソン・サックス（2010/1977）の<訂正>の概念と、対概念である<同意>に着目し、複数管理職の同時インタビューとなった日本4園英国3園のケースを分析した。日英比較によって、特徴的な傾向を見出し、管理職間の関係性について考察することを目的とする。

【方法】　英国においてはコーディネーター、日本においては各市町担当課を通じて調査協力に依頼を行った。本来は管理職1名と子育て中の保育士1名に対して、インタビュアーが1対1でインタビュー調査を実施する予定であったが、各園の施設上の関係で複数管理職による同時参加のインタビューが行われるケースがあった。会話を分けて個人の意見としてカウントするのは妥当でないと判断したため、別途抽出し、「インタビュアーの質問に対する回答」を除いた回答が前の回答を受けて、どのように「修復」つまり「自己訂正・他者訂正」されるのかを分類した。

・対象　日本公立保育所4園、英国就学前施設3園。各園2名ずつ計14名の発話。日本4園計894パラグラフ、英国3園計664パラグラフを対象とした。

・手続き　調査概要の説明及び調査協力同意書への署名といった倫理的手続きを2名同時に行った後、就業継続に関する園内雇用システムに関する質問を半構造化面接によって行った。場所は職員室や面談室など各園の施設内で実施した。会話は許可を得てICレコーダで録音し、後日逐語録におこし、以下のカテゴリにてコーディングした。

・質問（対同僚/対インタビュアー）
・同意を求める（対同僚/対インタビュアー）
・情報付加（対同僚/対インタビュアー）
・否定（自分の前の説明=自己訂正、対同僚/対インタビュアーの発言）
・肯定（対同僚/対インタビュアー）

【結果】　「肯定」のカテゴリ以外のカテゴリの出現数について、各国間で平均しプロファイル比較したのがFigure1である。<訂正>の仕方として「否定」を用いるのは対象が誰であれ圧倒的に日本が多く、「同僚の発言に付加」して説明を加えることは英国が多かった。また「同意を求める」ことも日本に多かった。「対インタビュアー質問」が英国に多いのは、筆者の質問の意図を英語で正確に把握する、つまり発言の理解のための「問い直し」が多かったことによる。

【考察】　日本では、同僚の発言に情報の付加を行うことによって一方が回答した内容を深めることはなく、誰の発言であれ直接前の説明を「否定」することによって、<修復>を図っていることが窺える。直接「否定」するからこそ、その代償として「同意を求める」ことが必要になってくるのだろう。英国では保育実践責任者と経理、人事、書類関係の責任者といった明確な分業を実施している園も多く、同じ質問に対してそれぞれのマネジメント領域からの意見が付加されていた。山本（2024）では、英国の管理職によるカリキュラム・マネジメントの実際が紹介されているが、日本と異なり管理職間の分業が明確なので、保育実践に関する責任者は、カリキュラム・マネジメントにまで手が回るのではないだろうか。日本の管理職の<修復>が自分の前の説明を否定する<自己訂正>が最も多かったことと重ね合わせると、自園のシステムに関して自己決定できる範囲が少なく、分業も曖昧であることが直接的な「否定」と「同意」が必要な関係性につながると考えられる。

【利益相反】　本研究に関してCOIはありません。

【引用文献】

シェグロフ,A. ジェファソン,G. & サックス,H　2010　会話における修復の組織：自己訂正の優先性. 西坂仰（訳）*会話分析基本論集：順番交代と修復の組織*.世界思想社. Pp154-246. (Schegloff,E.A., Jefferson,G & Sacks,H. 1977.　The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*,53(2),361-382.)

山本睦. 2024 指針改訂に伴う英国保育施設管理職の対応：カリキュラム・マネジメントと人的管理の視点から.*常葉大学保育学部紀要*,11,1-12.

（やまもと　ちか）

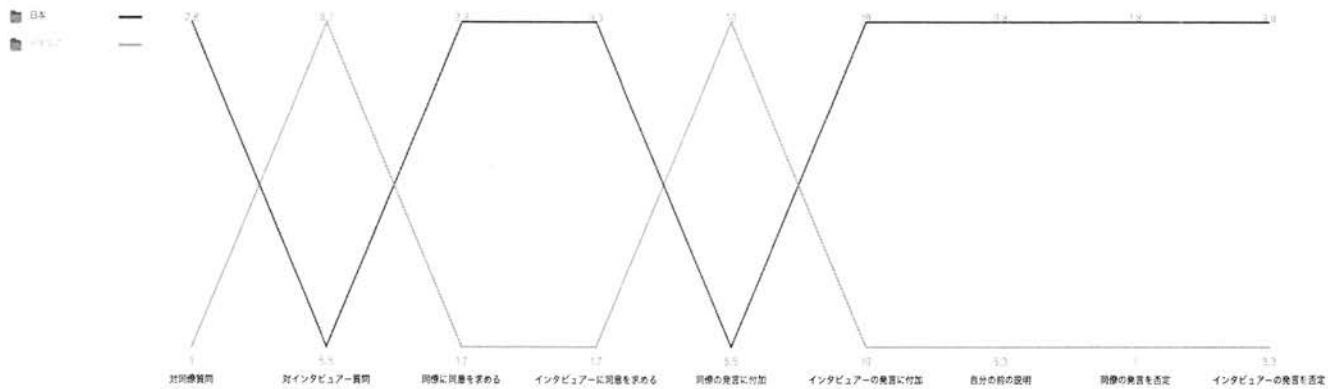


Figure1 質問・同意・情報付加・否定の出現数（国別平均）

ロール・プレイングの可能性

教育現場をささえる取組み（2）

○時田　学
（日本大学商学部）

キーワード：ロール・プレイング・学校教育・教師

【目的】学校における教育的活動の在り方を示す出版物として，生徒指導に関する手引きが刊行されている。文部省は1965年に「生徒指導の手引き」（文部省，1965）を公刊し，教育現場での活用に供していた。この「生徒指導の手引き」（文部省，1965）はその後，1981年に「生徒指導の手引」として改訂され，生徒指導の基本的な指導・資料として供されていた（文部科学省，1981）。さらに，2010年に「児童生徒にかかわるすべての教職員や，教育委員会をはじめその他教育にかかわる多くの関係者などに読まれ，具体的な指導や研修に大いに活用されることで，生徒指導の一層の充実が進められること」（文部科学省，2010）として「生徒指導提要」（文部科学省，2010）が示された。しかし，その後社会状況，法整備の状況変化を背景として「生徒指導提要」（改訂版）と称する改訂版が示された（文部科学省，2022）。この中では，特に「近年，いじめの重大事態や暴力行為の発生件数，不登校児童生徒数，児童生徒の自殺者数が増加傾向にあるなど」（2022，文部科学省）という事態に対する今日的な対応がなされていると指摘されている（高橋，2023）。

一方，今回の改訂の主たる目的の一つと考えられる「いじめ」の記述の中で，「学校においては，道徳科や学級・ホームルーム活動などの時間に，実際の事例や動画などを教材に児童生徒同士で検討したり，いじめ場面のロールプレイを行ったりするなど，体験的な学びの機会を用意することが求められます」（文部科学省，2022，P.132）という箇所が認められた（時田，2023）。中学校道徳指導書（1962）では「生徒を当惑させ,その感情を傷つけるような役割を演じさせることは避けるべきである」との記述が劇化に対する注意として示されており，体験的な学びの実施時に留意が必要と考えられる。

「生徒指導提要」（改訂版）（文部科学省，2022）の趣旨から鑑みると，本書の教育の現場における影響力は大きいと推察される。そこで，上記の記述に関する研究の現状について検討するため，昨年度に続いて，現時点での同書籍に対する研究動向について調査し，基礎的資料収集を目的として，以下の検討を行った。

【方法】「生徒指導提要」（改訂版）（文部科学省，2022）の現在における研究動向，特にロール・プレイング（同書ではロールプレイと表記），と学習指導要領（文部科学省，2017）で使用されている役割演技などの語句について，文献・資料上の出現状況，を確認した。確認対象としては，大学共同利用機関法人　情報・システム研究機構　国立情報学研究所（NII）の提供しているCiNii（NII学術情報ナビゲータ）を用いて行った。検索時期は，2024年5･6月時点の複数回行った。

【結果】はじめに「生徒指導提要」を検索語として検索を行ったところ，すべての著作物：319件，研究データ0件，論文280件，本33件，博士論文0件，プロジェクト6件という結果が示された。

次に，今回の「生徒指導提要」（改訂版）を検索語として検索を行ったところ，　すべての著作物：52件，研究データ0件，論文46件，本6件，博士論文0件，プロジェクト0件という結果が示された。また，昨年度は「生徒指導提要」（改訂版）と「いじめ」を検索語として検索を行ったところ，すべての著作物：1件，研究データ0件，論文1件，本1件，博士論文0件，プロジェクト0件という結果であり，本年度は，同様の検索語で検索を行ったところ，すべての著作物：4件，研究データ0件，論文4件，本0件，博士論文0件，プロジェクト0件という結果が示された。

一方，生徒指導提要と組み合わせて役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング（ロールプレイングを含む）を検索語として検索を行ったところ，いずれの場合も，すべての著作物：0件，研究データ0件，論文0件，本0件，博士論文0件，プロジェクト0件という結果が示された。また，生徒指導提要（改訂版）と組み合わせて，役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング（ロールプレイングを含む）を検索語として検索を行ったところ，いずれの場合も，すべての著作物：0件，研究データ0件，論文0件，本0件，博士論文0件，プロジェクト0件という結果が示された。

【考察】「生徒指導提要」（改訂版）（文部科学省，2022）が刊行された時期を考慮すると，現時点の検索結果としてすべての著作物が，昨年の報告からほぼ2倍の件数を示していることは，引き続き本発行物への教育関係者の関心の高さを示すものと考えられる。また，改訂版が示された後の，いじめとの関連論文数の増加については改訂の1つの理由とも考えられる部分を反映している結果であると推察される。

一方で，検索語として，役割演技・ロールプレイ・ロールプレイング（ロール・プレイングを含む）を検索語に加える形で生徒指導提要（改訂版）との検索を行った結果については昨年度同様，現在有効な著作物は確認されなかった。体験的な学びを取り入れる場合に，十分な配慮，例えば劇化を取り入れる際の注意点（文部省，1962）や，ロール・プレイングを実施する場合，多数の留意点（時田，2019）があることなどを踏まえると，情報がいまだ些少な状況にある現在，速やかにロール・プレイングや役割演技についての有効な活用法や，学校現場での活用にあたって留意すべき点などを具体的かつ明確化し，それらの情報を集積・提供していくことが早急に求められよう。

【利益相反】本研究における利益相反（conflict of interest; COI）は認められない。

【引用文献】

文部省　1962　中学校道徳指導書
文部省　1965　生徒指導の手びき
文部省　1981　生徒指導の手引（改訂版）
文部科学省　2010　生徒指導提要
文部科学省　2017　小学校学習指導要領
文部科学省　2022　生徒指導提要（改訂版）
高橋典久　2023　概要解説「生徒指導提要（改訂版）」の概要　生徒指導提要（改訂版）前文と解説　学事出版　10-13
時田　学（2019）ロール・プレイングを教育現場の中で生かすために　日本応用心理学会第86回大会発表論文集　81
時田　学（2023）ロール・プレイングの可能性　教育現場をささえる取組み（1）日本応用心理学会第89回大会発表論文集　43

本研究の実施時には，日本大学商学部の研究助成を受けた。記して感謝する。（ときた　がく）

花を用いた心理療法で作成された生け花画像の評価に関する検討 第2報

○内田誠也[1]　田中英明[1]　本村明嘉[2]（非会員）
（[1]一般財団法人 MOA 健康科学センター　[2]一般社団法人 MOA インターナショナル）

キーワード：心理療法、花画像、評価法

【目的】アメリカのアートセラピー協会によれば、アートセラピーは対象者の認知機能と感覚運動機能を改善し、自尊心と自己認識を育み、感情的な回復力を養い、洞察を促進し、社会的スキルを高め、葛藤と苦痛を軽減および解決し、社会的および生態学的変化を促進するために使用されると説明している。アートセラピーの研究は、統合失調症、外傷関連障害、躁うつ病、双極性障害（Mathew C, et al、2019）、認知症患者（Bree C, et al、2014）の患者に対して症状の改善効果が報告されている。

都内にある日本統合医療学会認定施設では、精神疾患の患者に対して、花を用いた心理療法がおこなわれている。画材を花に置き換え、花を用いて造形しているのでアートセラピーに類似していると考えられる。花を用いた心理療法では、自然のエネルギーを吸収して育つ花を用いて、人間の自然治癒力を高め、自己成長を促すことを目的としている。具体的に、患者とその保護者がペアとなって、各々が一輪の花をいけ、それぞれがいけた花を一緒に配置して、鑑賞し、語り合いながら楽しむ方法である。本療法について、一輪の花のいけ方による情報だけではなく、患者と保護者がいけた花を配置した位置関係によって、両者の心理状態や関係性を知ることができると考えた。

本研究の目的は花を用いた心理療法で生けられた花の写真画像を評価する方法を検討することである。

【方法】本研究は、当財団の倫理審査委員会から承認され、患者およびその保護者に研究の詳細を書面で説明し、同意を得て実施した。

対象者は3組（A 親子、B 親子、C 親子）の親子であり、精神疾患患者とその保護者が、当施設で花を用いた心理療法を5回から6回体験した。花を用いた心理療法では、まず患者が花を2杯いけ、保護者が花を2杯いけた。次に、患者が4杯の花を配置し、全体を写真撮影し、同様に保護者が4杯の花を配置し、全体を撮影した。

花の写真画像の分析方法について、距離分析と印象評価分析を行った。距離分析について写真画像には4杯のいけ花が写っており、各々の花の距離を計測し、平均距離(MD)を算出した。次に、患者がいけた2杯の中心位置と保護者のいけた2杯の花の中心位置を算出し、それらの距離を患者―保護者間距離(PGD)とした。例えば、患者がいけた花を保護者が挟み込むように配置すると MD に比較して PGD がかなり短くなる。

印象評価分析について、20項目の写真画像の印象を問うアンケートを作成し、回答は「あてはまる」、「少しあてはまる」「あてはまらない」の3択とした。評価者は4名（男性2名、女性2名）であり、患者や保護者と面識がなく、患者の状態の情報を知らない状況で、回答した。4名の平均値を花の写真画像の印象評価(FIS)とした。FIS が高得点である場合はポジティブな印象をもったことを意味する。

セラピストが、毎回の心理療法の体験時に患者の状態、保護者の状態、患者と保護者の関係（PGRS）、セラピー後の患者の状態、セラピー後の保護者の状態を7段階の尺度で評価し、距離分析結果と印象評価分析結果との Spearman 相関を分析した。

【結果】表1に PGRS と PGD および FIS との Spearman 相関の結果を示す。A 親子に関して、PGRS と両者が配置した花の画像の PGD には正の相関がみられた。患者と保護者間の関係が良くなると、患者と保護者の花の距離が長くなることを意味する。PGRS と両者が配置した花の写真画像の FIS とには正の相関の傾向がみられた。患者と保護者間の関係が良くなると、他者はそれらの花の写真を見るとポジティブな印象を受けやすくなることを意味する。

B 親子に関して、PGRS と患者が配置した花の画像の PGD とは正の相関がみられ、保護者が配置した花の画像の PGD とは弱い負の相関がみられた。患者と保護者間の関係が良くなると、患者が配置した花の距離が長くなり、保護者が配置した花の距離が短くなることを意味する。PGRS と両者が配置した花の FIS とには正の相関の傾向がみられた。患者と保護者間の関係が良くなると、他者がそれらの花の写真を見るとポジティブな印象を受けやすくなることを意味する。

C 親子に関して、PGRS が常に高かったため、相関分析ができなかった。表中の“－”は解析不能を示す。

表1　PGRS と PGD および FIS との spearman 相関

	患者が配置した花の写真		保護者が配置した花の写真	
	PGD	FIS	PGD	FIS
A親子	0.866	0.444	0.866	0.444
B親子	0.791	0.527	-0.369	0.369
C親子	－	－	－	－

【考察】本研究の評価法によって、3例中2例はセラピストが評価した患者と保護者の心理状態と、患者と保護者が配置した花の患者―保護者間距離に関連がみられた。患者が言葉で表現できない保護者に対する心理状態が、お花の配置の位置関係に表れた可能性がある。分析できなかった1例に関しては、初めて体験された時から患者と保護者の関係がすでに良好であり、花の配置に影響しづらかった可能性がある。花画像の距離分析と印象評価分析によって、患者と保護者の心理的な関係を客観的に分析できる可能性が示唆されたと考える。今後は、例数を増やして検討したい。

【利益相反】本研究に関する利益相反（conflict of interest; COI）はありません。

【引用文献】

Mathew C., William B. R. & Xiaoduo F.(2019). Creative art therapy for mental illness. Psychiatry Res, 275:129-136.

Bree C., Angel D. & Anjan C. (2014). Art therapy for Alzheimer's disease and other dementias. J Alzheimers Dis, 39(1):1-11.

（うちだ　せいや・たなか　ひであき・もとむら　はるか）

日本人成人のスポーツと運動に対する動機付けの違い

○大橋　恵　藤後悦子　井梅由美子
（東京未来大学こども心理学部）

キーワード：身体活動、動機付け、BREQ

【目的】

身体を動かすこと（身体活動）の重要性が指摘されるようになってきたが、日本語において身体活動は、スポーツと運動という二つの用語で語られる。日本においてのスポーツは運動とあまり区別されず使われる側面があるものの、活動の量や目的など異なる点もある。

本研究では、運動とスポーツの違いについて行う動機から主に検討する。運動動機付けについては、Mullan et al. (1997) が開発した the Behavioural Regulation in Exercise Questionnaire（BREQ）を改良した BREQ-3（Wilson et al.,2006）が広く用いられている。BREQ-3 は、運動にかかわる動機付けとして、同一化、内的統制、投影的統制、外的統制、統合的統制の 5 つを挙げ、これらに加えて運動動機無を測定する。本研究ではこの尺度を用いて、スポーツと運動の動機付けを参加者間要因で測定・比較した。また、年代差もありえるため、20～50 代まで広く調査した。

【方法】

2024 年 3 月、20～50 代の男女 800 名（*M*=40.02 歳、*SD*=11.19）を対象にオンライン調査を実施した。調査は所属大学の研究倫理委員会の審査を受けた上で行われた。回答者たちは自由意志で参加し、謝礼として買い物等で使えるポイントを得た。

主な質問項目は以下であった。

・この半年間の運動/スポーツ実施頻度　週 5 回以上から全くしなかったまでの 7 件法。

・運動/スポーツに対する現在の動機付け　Wilson et al. (2006) を邦訳して使用した。22 項目 5 件法。半分の人には運動、もう半分の人にはスポーツについて尋ねた。

・運動とスポーツの違いについての認識　まず「あなたは運動とスポーツは別のものだと感じますか」と直接的に尋ね、5 件法で回答を得た。次に、先行研究を参考に独自に作成したより具体的な 10 項目について 5 件法で回答を求めた。

・運動/スポーツに対する評価　望ましさ及び楽しさにについて、それぞれ 3 項目 7 件法で尋ねた。

・学生時代の運動部やスポーツ系の習い事経験の有無。

【結果】

運動とスポーツの違いの認識に関しては、どちらとも言えないが 40.5%と多く、当てはまらないが計 27.3%、当てはまるが 32.3%と意見が分かれた。また、具体的な 10 項目については因子分析の結果、質的違い（スポーツの方が運動強度が強く、ルールがあり、競争の面が強い）と目的の違いの 2 因子が得られた。

動機付けについて、下位尺度の信頼性 α は十分に高いことを確認した：同一化（.82）、内的統制（.93）、投影的統制（.81）、外的統制（.88）、統合的統制（.92）、運動動機無（.85）。そのため、関連ある項目の平均値を下位尺度得点として分析に用いた。Table1 に条件ごとにまとめたが、同一化と内的統制が 3 付近で高く、外的統制が最も低かった。

それぞれについて、MANOVA（性別、条件、青年期の運動経験の有無、年齢、現在の運動頻度）を行った。その結果、まず、現在の運動頻度との関連は、外的統制（p=.05）を除き有意であった（p<.001）。年齢との関連は、投影的統制（p=.003）・外的統制（p=.004）・運動動機無（p=.040）において有意だった。

Table 1
運動とスポーツの評価についての記述統計

	運動（n=400）		スポーツ（n=400）	
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)
実施頻度	2.53	(1.85)	2.00	(1.53)
動機付け				
同一化	3.27	(0.95)	2.89	(0.99)
内的統制	2.92	(1.13)	2.99	(1.12)
投影的統制	2.49	(0.96)	2.12	(0.97)
外的統制	2.12	(0.94)	1.98	(0.91)
統合的統制	2.67	(1.09)	2.46	(1.06)
運動動機無	2.26	(0.95)	2.36	(0.99)
望ましさ	4.91	(1.44)	4.61	(1.53)
楽しさ	4.57	(1.66)	4.68	(1.54)

同一化については、経験と条件の主効果のみが有意だった（$F_{(1,790)}$=29.38, p<.001; $F_{(1,790)}$=15.55, p<.001）。経験者の方が高く、スポーツよりも運動でこの動機付けが高かった。

内的統制については、性別と経験の主効果が有意であった（$F_{(1,790)}$=348.58, p<.001; $F_{(1,790)}$=18.01, p<.001）。女性よりも男性が高く、経験者が高いことが示された。

投影的統制については、条件の主効果が見られ（$F_{(1,790)}$=17.84, p<.001）、運動の方が高かった。

外的統制については、性別の主効果と条件と性別の交互作用効果が有意であり（$F_{(1,790)}$=6.24, p=.013; $F_{(1,790)}$=5.12, p=.024）、男性ではスポーツより運動が高いが、女性では差が見られなかった。

統合的統制については、性別と経験の主効果が有意であった（$F_{(1,790)}$=9.96, p=.002; $F_{(1,790)}$=34.07, p<.001）。女性よりも男性が高く、経験者が高いことが示された。

最後に運動動機付け無については、経験の主効果のみが見られた（$F_{(1,790)}$=17.24, p<.001）。経験者の方が低かった。

評価に関する同様の MANOVA から、スポーツの方が運動よりも楽しいと評価されたが（$F_{(1,790)}$=6.11, p=.014）、望ましさに差は見られなかった（$F_{(1,790)}$=2.29, p=.13）。両者とも運動経験と現在の運動頻度の効果は p<.001 だった。

【考察】

スポーツと運動の違いをまとめると、運動の方が同一化と投影的統制から行う度合いが強く、男性に関しては外的統制も運動でより強く働いていることが明らかになった。いくつもの点で差が見られたので、身体活動を推進したい場合、スポーツと運動は分けて考える必要があろう。

【利益相反】

記すべき利益相反はない。

【引用文献】

Mullan, E., Markland, D., & Ingledew, D. K. (1997). A graded conceptualisation of self-determination in the regulation of exercise behaviour. *Personality and Individual Differences*, *23*(5), 745-752.

Wilson, P. M., Rodgers, W. M., Loitz, C. C., & Scime, G. (2006). "It's Who I Am... Really!'The importance of integrated regulation in exercise contexts. *Journal of Applied Biobehavioral Research*, *11*(2), 79-104.

※本研究は科学研究費(20K11346）の補助を受けた。

（おおはしめぐみ・いうめゆみこ・とうごえつこ）

成人期（社会人以降）の人間関係での嫌がらせ被害経験と孤独感

――職場と職場外嫌がらせ被害経験――

○藤後悦子　井梅由美子　大橋　恵
（東京未来大学こども心理学部）

キーワード：嫌がらせ被害，成人期，地域生活

【目的】

社会人以降もメンタルヘルスの問題は深刻である。「令和2年労働安全衛生調査」（厚生労働省，2021）によると，職場の仕事や職業生活に関するストレスが「ある」と答えた人は54.2%となっており，その内容に対人関係を挙げた人は27.0%となった。成人期以降は，学生時代と比べると職場外でも家族内や親族，近所，子育ての親同士など多様な対人関係と関わらざるを得ないゆえに，難しさがある。

いじめを代表とする対人関係のトラブルによる被害経験は，モラルハラスメントやパワーハラスメントなどハラスメントの文脈で語られることが多い。これらハラスメントは，職場の中では徐々に顕在化されているが，職場外の地域や生活の中での実態はあまり明らかになっていない。

また，近年の成人期の問題に「孤独」がある。「令和5年版厚生労働白書」（厚生労働省，2023）では，「孤独」と感じている年齢は男性では50代（47.6%），女性では20代（50.3%）が高かった。対人関係の嫌がらせを受け，孤立し，孤独を感じている可能性もある。そこで本研究では，成人期の孤独感に社会人以降の対人関係の傷つき経験が関連すると仮説を立て検証することとした。

【方法】

1．予備調査：2023年11月に通信制大学の子育てに関する演習授業を受講している社会人24名（M=44.3, SD=16.22；男性3名，女性21名）に成人期以降の嫌がらせ被害経験の有無を尋ねた。その結果，75%が被害経験ありと回答した。被害の発生場所は，職場が最も多く，続いて地域活動，親戚となった。

2．本調査

概要：2024年2月下旬，オンライン調査を実施した。調査に参加した者には，調査会社からポイントが付与された。

調査参加者：4000名（男性1674名；M=44.21, SD=12.43，女性2326名；M=50.60, SD=12.43)であった。内訳は，既婚者60.5%，子どもがいる者52.7%であった。

調査項目：デモグラフィック要因（年齢，性別，結婚状態，子どもの有無），職場及び職場外での嫌がらせ被害経験の有無，職場嫌がらせ被害尺度（10項目）5件法，職場外嫌がらせ経験尺度（15項目）5件法，日本語版short-form UCLA孤独感3項目版(Arimoto & Tadaka,2019)を用いた。

倫理的配慮：東京未来大学の倫理審査の承認を得た。参加者には，匿名性の担保，ネガティブな想起を伴うこと，自由意思，途中での辞退が可能なこと，学術的使用について同意を得た者のみに回答を求めた。

【結果】

成人期の嫌がらせ被害経験の実態

嫌がらせ被害経験なしは2683名（67.1%）であった。嫌がらせ被害経験ありと回答した1317人の内訳（複数回答）を見てみると，職場560名（42.5%），家族248名（18.8%），友人関係217名(16.5%)，近所181名（13.7%），地域の人間関係（12.5%），親同士の関係146名（11.1%），親族123名（9.3%），趣味のコミュニティ95名（7.2%），ネットの人間関係90名（6.8%）となった。

尺度構成と回帰分析

職場嫌がらせ被害経験を因子分析した結果（最尤法，プロマックス回転），関係性攻撃5項目（α=.80），身体的攻撃2項目（α=.84），言語的攻撃3項目（α=.79）の3因子に分類された。職場外嫌がらせ被害経験を因子分析（最尤法，プロマックス回転）した結果，1因子構造（15項目，α=.95）が確認された。

孤独感，職場嫌がらせ被害経験，職場外嫌がらせ被害経験，年齢の順位相関を算出した（Table1）。その結果，孤独感には職場嫌がらせ被害経験，職場外嫌がらせ被害経験，年齢との有意な正の相関が示された。また職場嫌がらせ被害と職場外嫌がらせ被害経験は全てにおいて中程度以上の正の相関が示された。

次に孤独感を目的変数，その他の変数を説明変数としてロバスト回帰分析を実施した。その結果，モデルは有意であり（F(6,689)=.10.89, p<.001），VIFは3以下であり多重共線性も問題なかった。説明率は9%であり，職場嫌がらせ被害経験の関係性攻撃（β=.18 , p<.001）と言語的攻撃(β=.17, p<.001)に有意な結果が示された。すなわち，職場で関係性攻撃と言語的攻撃の被害に遭うほど，孤独感が強まっていた。

Table 1

孤独感，職場嫌がらせ被害経験，職場外嫌がらせ被害経験の順位相関

		孤独感	職場嫌がらせ被害経験			職場外嫌がらせ被害経験
			関係性攻撃	身体的攻撃	言語的攻撃	
職場嫌がらせ被害経験	関係性攻撃	.24 **	−			
	身体的攻撃	.15 **	.57 **	−		
	言語的攻撃	.22 **	.46 **	.44 **	−	
職場外嫌がらせ被害経験		.18 **	.75 **	.63 **	.45 **	−
年齢		-.08 **	-.19 **	-.18 **	-.10 **	-.15 **

** p < .01

【考察】

成人期の嫌がらせ被害経験は職場での被害経験が孤独感に関係していたので，職場のハラスメント予防を積極的に行う必要がある。一方で，職場と職場外嫌がらせ被害経験は相関が強いため，受け止め側の特徴も関係する可能性がある。今後は個人のパーソナリティを考慮して検討する必要が示唆された。

【利益相反】

記すべき利益相反はない。

【引用文献】

Arimoto, A .& Tadaka, E.（2019）.Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale ver 3 for use among mothers with infants and toddlers: a cross-sectional study. *BMC Women's Health*, *19*,105. DOI:10.1186/s12905-019-0792-4

厚生労働省（2021）．令和2年労働安全衛生調査 https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/r02-46-50b.html

厚生労働省（2023）．令和5年厚生労働白書 https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/22/dl/zentai.pdf

（とうごえつこ・いうめゆみこ・おおはしめぐみ）

日本語版 SNS（Social Networking Service）依存尺度の試作

—因子構造と内的整合性の再検討—

○澤田　戒[1]　中谷智美[1]　福井義一[2]　堀　孝司[1]　加堂生織[3]（非会員）
（[1]甲南大学大学院人文科学研究科　[2]甲南大学　[3]大阪経済大学大学院人間科学研究科）

キーワード：SNS 依存，行動依存，信頼性

【目的】

わが国において，Social Networking Service（以後 SNS）の利用者数は増加の一途を辿っており（ICT 総研, 2022），既に我々の日常生活の一部と化している。その一方で，依存が心身や適応に及ぼす悪影響についても取り沙汰されるようになってきた（例，Hashimoto, 2018; Isada & Isada, 2019; Primack, et al., 2017; Schou Andreassen, & Pallesen, 2014）。わが国における SNS の功罪について包括的に研究するには，その測定尺度の整備が必要不可欠である。

SNS 依存は，ギャンブルやゲームへの依存，窃盗癖などと同じく行動依存に分類されるため，同じ枠組みで捉える必要があると考えられる。しかしながら，行動依存を突出，気分変容，耐性，離脱症状，葛藤，再燃の 6 つの構成要素から捉える立場（Griffiths, 2005）から SNS 依存を測定可能な日本語版尺度は，発表者らが知る限り存在しなかった。

そこで，SNS 依存を上述した観点から測定可能な Social Networking Addiction Scale（以後 SNAS; Shahnawaz & Rehman, 2020）の日本語版が試作されたが，原版通りの 6 因子構造が再現されなかったことに加え，ストレス関連の変数との相関関係から，ある程度の妥当性こそ確認されたものの，一部の下位因子の内的整合性が不十分であった（加堂他, 2023a, b（ただし，いずれも学部学生による教育発表））。その背景に，翻訳の精度がやや低い可能性が示唆された。

本研究は，SNAS 日本語版の項目の翻訳を見直した上で，その因子構造と内的整合性を再検討することを目的とした。

【方法】

参加者：平均年齢 20.45 歳（*SD*= 1.26）の大学生 362 名（女性 210 名，男性 151 名，不明 1 名）の協力を得た。

手続き：事前に，研究の概要や参加の任意性，中断の自由，匿名性などについてインフォームド・コンセントを得た上で，無記名による質問票調査をオンラインで実施した。

使用尺度：SNAS（Shahnawaz & Rehman, 2020）の一部の項目の翻訳を見直して，日本語版（21 項目 7 件法）を再構成した。日本語版の作成については，原版の開発者からの承認が得られている。なお，質問票には他の尺度も含まれていた。

【結果】

SNAS 日本語版の因子構造を検討するために，全 21 項目を，1）単一因子で説明する 1 因子モデルと，2）原版と同じ 6 因子構造を有する 6 因子モデル，3）6 因子の上に単一の高次因子を設定した高次 6 因子モデル，4）原版と同じ 6 因子構造に加え，全項目を説明する一般因子からなる階層 6 因子モデルの計 4 モデルについて確認的因子分析を実施し，その適合度を比較した。その結果，階層 6 因子モデル＞6 因子モデル＞高次 6 因子モデル＞1 因子モデルの順に適合度が高いことがわかった。各モデルの適合度指標の値を Table 1 に，階層 6 因子モデルを Figure 1 にそれぞれ示した。信頼性係数は，半数の下位尺度においては高かった（突出：α=.87，耐性：α=.86，再燃：α=.80，全体：α=.93）ものの，残りの半数ではやや低い値が得られた（気分変容：α=.66，離脱症状：α=.73，葛藤：α=.69）。

Table 1 各モデルの適合度比較

No.	モデル名	GFI	AGFI	TLI	CFI	RMSEA	AIC
1	1因子モデル	.775	.725	.787	.808	.103	1002.16
2	6因子モデル	.884	.846	.904	.920	.069	591.31
3	高次6因子モデル	.875	.843	.900	.913	.071	609.19
4	階層6因子モデル	.885	.850	.909	.923	.068	576.86

【考察】

本研究から，SNAS 日本語版の潜在構造は，原版と同様の 6 因子モデルと，それに一般因子を追加した階層 6 因子モデルのいずれによっても近似できるが，適合度は良好とまでは言えないことが分かった。試作版（加堂他, 2023a, b）よりも原版に近い因子構造が再現されたとはいえ，実用に足る尺度であると結論するのは早計である。さらに，依然として内的整合性が低い下位因子があることに加え，一部の下位因子からのパス係数の値が低いことからも，翻訳にさらなる改善の余地が残されている可能性がある。

また，本研究では調査対象者が大学生に限定されていたことも問題点として挙げられる。主要な SNS ツールのユーザー数は 20 代を頂点に，世代が上がるごとに減少するとはいえ，各世代に相当数の利用者がいる（総務省統計局, 2023）ことから，一般母集団に調査対象を拡大し，さらに大きなサンプルサイズを確保した上で，因子構造や信頼性・妥当性について再検討する必要があるだろう。

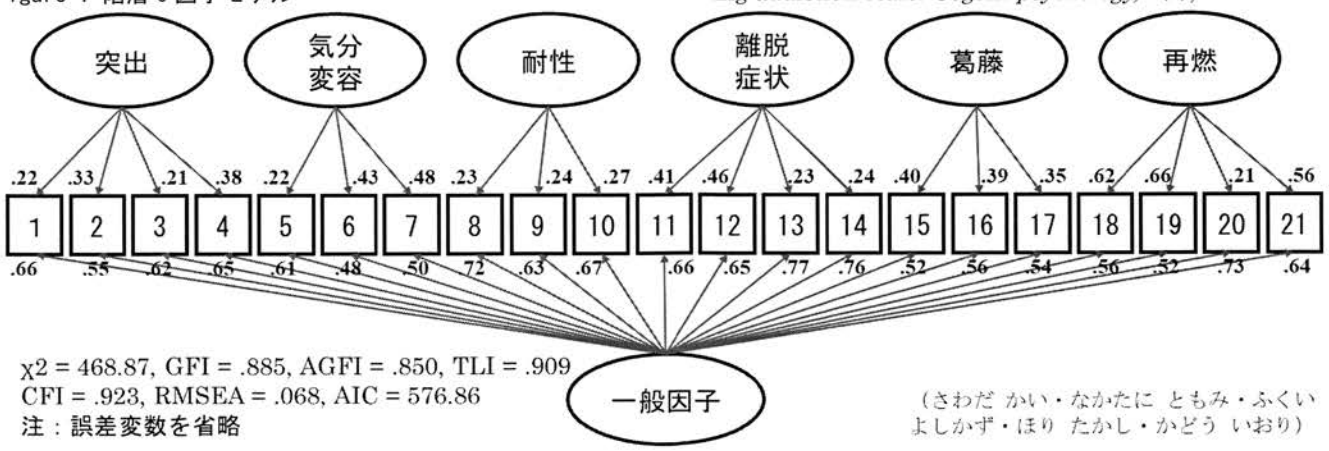
【利益相反】

本研究に関して，開示すべき利益相反はない。

【引用文献】

Shahnawaz, M. G., & Rehman, U. (2020). Social networking addiction scale. *Cogent psychology, 7*(1), 1832032.

Figure 1 階層 6 因子モデル



$\chi 2$ = 468.87, GFI = .885, AGFI = .850, TLI = .909
CFI = .923, RMSEA = .068, AIC = 576.86
注：誤差変数を省略

（さわだ かい・なかたに ともみ・ふくい よしかず・ほり たかし・かどう いおり）

自律的動機づけおよび統制された動機づけと MetS 関連指標の関連

—健康のために運動を行う動機づけに注目して—

○加藤佳子[1]　村田康徳[1]　小島亜未[2]（非会員）
（[1]神戸大学大学院人間発達環境学研究科　[2]福井県立大学看護福祉学部看護学科）

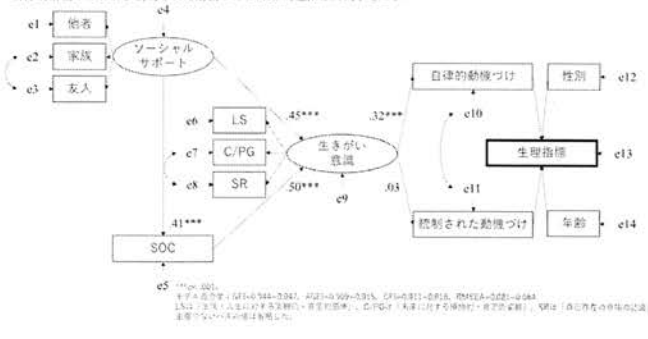
キーワード：メタボリックシンドローム・動機づけ・運動習慣

【目的】

健康のために運動を行うことは，メタボリックシンドローム（MetS）の予防や改善を支援する上で，重要な要素の一つとなる。しかし特定健診の標準的な問診票から得られる回答を見てみると，「1 日 30 分以上の軽く汗をかく運動を週 2 日以上、1 年以上実施している」者の割合は男性 26.5%，女性 19.1%，「日常生活において歩行又は同等の身体活動を 1 日 1 時間以上実施している」者は男性 39.0%，女性 40.3%と報告されており，その運動習慣の状況は良好とはいえない(健康保険組合連合会政策部，2023)。そのため対象者の心情をとらえ，支援を行う必要がある。

特に動機づけは行動の開始と継続に関わることから，これに注目することでより良い支援が期待できる。動機づけには自律的な動機づけ（「価値があるから行う」など）と，統制された動機づけ（「人から言われたから行う」など）がある。自律的な動機づけはより良い成果につながるが，統制された動機づけは必ずしもそうではないことが示唆されてきた。そこで健康のために運動を行う自律的動機づけおよび統制された動機づけを取り上げ，MetS 関連指標との関係について検討した。またこれまでの研究から，動機づけの自律性は生きがい意識や，その背景にあるストレスレジリエンス，ソーシャルサポートと関連があることが報告されている(Kato・Kojima・Hu，2023)。そこで動機づけを規定するこれらの要因との関連についても確認し，MetS 関連指標の予防や改善に至る心的過程の一端を検討することとした。

Figure 1
自律的動機づけおよび統制された動機づけとMetS関連指標に関するモデル



【方法】

分析対象者：S 県職員 1,411 名（男性 1,100 名，女性 311 名；46.8±9.7 歳）

調査内容：健康のために運動を行う動機づけは，Hu ら(2017)が開発した健康のために運動を行う動機づけ尺度を用いた。統制された動機づけとして「外的調整」「取り入れ的調整」の，自律的動機づけとして「同一化的調整」「統合的調整」「内発的動機づけ」の合計得点を算出した。

生きがい意識は，今井ら(2012)が開発した生きがい意識尺度を用いた。この尺度は「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」「未来に対する積極的・肯定的姿勢」「自己存在の意味の認識」から構成される。

ストレスレジリエンスは，Antonovsky(1987)が見出した Sense of Coherence(SOC)により測定した。

ソーシャルサポートは，家族，友人，重要な他者からのサポートについて尋ねた Zimet(1988)により開発された尺度を使用した。

身体状況として，身長，体重，腹囲，血糖，HbA1c，HDL-ch，LDL-ch TG，血圧の測定値を使用した。

モデル(Figure 1)に基づき，共分散構造分析を行い変数間の関連を分析した。

【結果】生きがい意識は，健康のために運動を行う自律的な動機づけ(β=0.32)に有意に関連していたが，統制された動機づけ(β=0.03)には有意に関連していなかった。

一方これらの動機づけ両方と有意な関連があった生理指標の内，BMI，腹囲，HbA1c，拡張期血圧，LDL-ch，中性脂肪は自律的動機づけと負の関連(β= - 0.18 — - 0.04)が，統制された動機づけと正の関連(β= 0.06 — 0.29)があった。HDL-ch は，自律的な動機づけと正の(β = 0.14)，統制的な動機づけと負の(β = -0.17)関連がみられた。さらに収縮期血圧(β = 0.12)と血糖(β = 0.13)は統制された動機づけとのみ正の関連があった。

またソーシャルサポートは直接生きがい意識に関連(β =0.45)するとともに，レジリエンスを介し(β=0.41)，生きがい意識に関連(β=0.50)していた。

Table 1
動機づけから生理指標への標準化偏回帰係数

	BMI	腹囲	収縮期血圧	拡張期血圧	HbA1c	HDL-ch	LDL-ch	中性脂肪	血糖
自律的動機づけ	-.17 ***	-.18 ***	-.04	-.05 *	-.09 ***	.14 ***	-.06 *	-.07 **	-.05
統制された動機づけ	.27 ***	.29 ***	.12 ***	.10 ***	.17 ***	-.17 ***	.06 *	.12 ***	.13 ***

***p< .001, **p< .01, *p< .05.

【考察】

生きがい意識は自律的動機づけには関連していたが，統制された動機づけには関連していなかった。さらに自律的動機づけは，BMI，腹囲，拡張期血圧，HbA1c，LDL-ch，中性脂肪の低減，HDL-ch の増加と関わることが示唆された。つまり健康のために運動を行う支援において，生きがい意識を育み，自律性を尊重した支援を行うことは，MetS の予防や改善に有効である可能性が示唆された。一方，統制された動機づけは，かえって MetS 関連指標の状況を悪くする可能性が示された。要するに対象者自身が運動をすることの価値そのものを理解し，健康のために運動をすることに対して，興味関心を持てるようにつなげることで，MetS の予防や改善に一定の効果が期待できる。

【利益相反】

なお，本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

Hu Chenghong・Kojima Ami・Athenstaedt Urusla・Kato Yoshiko（2017）. Psychometric Validation of Exercise Motivation for Health Scale (EMHS)Open Journal of Social Sciences，05（10），274-287.

Kato Yoshiko・Kojima Ami・Hu Chenghong（2023）. Relationships Between IKIGAI Well-Being and Motivation for Autonomous Regulation of Eating and Exercise for Health – Included the Relevance Between Sense of Coherence and Social Support International Journal of Behavioral Medicine，30（3），376-387.

（かとう よしこ・むらた やすのり・こじま あみ）

高嶋正士と偉大性心理学

― 鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について（3） ―

藤田主一
（日本体育大学）
キーワード：法然上人、親鸞聖人、高嶋正士

1. 研究の背景と目的

高嶋正士（1925-2021：本学会名誉会員）は、人格の偉大性の概念について、その著書『偉人・天才の心理学』(1997)の中で次のように述べている。

「偉大性とは何かについては、今日、心理学でも客観的に明らかにされていない。なぜならば余りにも漠然とした言葉であり、しかも『偉大』とは量的なものか、それとも質的なものか、またなにを基準としているのかなど多くの問題が横たわっているからである。古くは “genius”の研究に、天才人や優秀児の特性などが統計的に扱われていたが、しかし偉人天才を中心にした“greatness”に関するものではなかった。

ゴールトン、ターマン、コックス、キャテル、ホーリングウォースなどは、もっぱらこの種の研究に努力を傾けはしたが、そのいずれもが数量的研究によるものであった。もちろん客観的に実態の把握には、統計的操作は基礎として要求されなければならないからである。事実、人間の偉大さを客観的にとらえ、これを評価することは困難なことである。客観基準をどこにおくか、 なにをもって『偉大』と決めるかが問題である。過去における偉人天才といえども、かれらが遭遇した時代や社会の変化、あるいは個人の生活環境によって、いろいろな様相を示すからである。

今までに出版された偉人天才に関する多くの文献の中には、“eminence”や“gifted”、“superior”という用語がしばしば出現しているが、 “greatness”という用語は出ていない。」

ここで高嶋が偉大性の具体像として宗教的偉人を取り上げたのは、彼自身が浄土真宗本願寺派の僧侶でもあったためにほかならない。そのなかでも、浄土真宗の宗祖である親鸞と、親鸞の師である法然（浄土宗の開祖）を取り上げようとしたことには意味があったといえる。（本文中の敬称略）


法然上人


親鸞聖人


高嶋正士

2. 方 法

人格の偉大性について高嶋が公表した著書や論文、日本応用心理学会や日本心理学会などの年次大会で発表した大会論文集の記録等をもとに、回顧展望する方法を用いた。

3. 結果と考察

（1）法然と極楽浄土：2024年4月16日（火）～6月9日（日）の期間、上野の東京国立博物館（平成館）において、浄土宗の開宗850年を迎えるのを節目に、特別展「法然と極楽浄土」が開催された。平安時代末期は、繰り返される戦乱や災害、疫病の流行によって世に中は乱れ、多くの人びとは疲弊以外の何物でもなかった。このような時代的な背景のなかで、人びとの間に宗教に救いを求める心が強くなってきた。しかし、当時の民衆の要求を満たすような生きた宗教がなかった。僧兵の暴走や幾多の戦いなどは、世の終わりとしか思われなかった。不安に恐れ生活に苦しんでいた民衆や、罪や生死の解決を迫られていた武士たちは、もっと別の新しい宗教の出現を望んでいた。このような人びとの要求に応えて現れたのが、親鸞の師法然であった。


特別展と筆者

中国浄土教（中国浄土宗）を大成した中国唐代の善導（ぜんどう：613-681）の教えに接した法然（1133-1212）は、1175（承安5）年、「阿弥陀仏（あみだぶつ）」の名号（みょうごう）を称（とな）えることによって誰もが（武士は武士のまま、農民は農民のまま、善人でも、悪人でも）等しく阿弥陀仏に救われ、極楽浄土に往生することを説いた。平家の全盛が終わろうとする時代で、人の命を奪う（人を殺す）罪の深さを知る武士は、この新しい教えに心をうたれた。農村に住む武士をとおして、念仏本位の新仏教はさらに地方へと発展していった。

法然の特別展では、国宝「法然上人絵伝」（京都・知恩院蔵）など法然や浄土宗にゆかりの名宝が展示された。また「頭を北、顔を西に向け、念仏して往生した法然のお姿」の絵図などを間近に見ることができた。

（2）親鸞（1173-1262or63）は、師法然の教えをさらに進め、いっそう強い念仏を称えることによって極楽往生できると説いた。親鸞は、僧は結婚してもよいし、俗人はあえて僧になる必要もないし、普通に生活しながら念仏すればよいと説く。親鸞の発達段階については、前報（2023）で述べた。

高嶋は、親鸞を法然や日蓮とならんでわが国中世の偉大な宗教家であると位置づけるが、一方で、親鸞を傑人であるとも評価している。それは、師への態度（師を尊敬する、師の説を信ずる）ところにも見られる。たとえば『歎異抄』に,「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」とある。親鸞は、身体全体を耳にして法然のことばを聞き、その意味を尋ねたという。ここに「よきひと」「信ずる」「別の仔細なきなり」と、師である法然に対する尊敬のほどが顕著に示されたものと解釈できるだろう。

本研究に関する利益相反はありません。

【引用文献】

高嶋正士（1997）．偉人・天才の心理学，医学出版社.
藤田主一（2021）．高嶋正士と偉大性心理学－偉人・天才の偉大性について－，日本応用心理学会第87回大会発表論文集，.27.
藤田主一（2022）．高嶋正士と偉大性心理学－鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について－，日本応用心理学会第88回大会発表論文集，86.
藤田主一（2023）．高嶋正士と偉大性心理学－鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について（2）－，日本応用心理学会第89回大会発表論文集，117.【優秀大会発表賞を受賞】

（ふじた しゅいち）

高校女子バレー指導における選手のコンディションを可視化する支援体制が与える影響

○伊藤将史[1]　大門耕平[2]　山本ちさと[3]　権野めぐみ[4]　来田宣幸[5]

([1]近江兄弟社高等学校　[2]東北学院大学　[3]丸太町リハビリテーションクリニック　[4]名古屋女子大学　[5]京都工芸繊維大学)

キーワード：部活動、コーチング、支援体制

【目的】スポーツ庁は平成 30 年に「運動部活動の在り方に関する総合定なガイドラン」を策定し、その前文において、部活動の教育的意義の大きさを提示しながらも、「各自のニーズに応じた運動・スポーツを行うことができるよう、速やかに、運動部活動の在り方に関し、抜本的な改革に取り組む必要がある。」と指摘し、部活動指導において生徒個々のニーズに応じた支援を実現することの必要性を提言している。そこで、この研究では、高校女子バレー部指導において、医療機関と連携し、生徒のコンディショニングを可視化する取り組みを行い、生徒個々のニーズに応じた支援を継続して実施してきた。この取り組みが顧問のコーチングに対してどのような影響を与えるか、また、チームに対して、どのような効果が見られるかについて検証をおこなった。

【方法】1.参加者：関西圏の高等学校 1 校を対象とした。

2.調査期間：調査期間は、2020 年 12 月から 2023 年 3 月までとした。合計で 948 件（2020 年度：154 件、2021 年度：461 件、2022 年度：333 件）の回答を収集した。

3.調査内容：毎週月曜に項目（1.ブロックストレスチェック、2.スパイクストレスチェック、3.外旋ストレスチェック、4.前屈、5.後屈、6.片足フルスクワット（右・左）、7.片足カーフレイズ（右・左））について、10 段階（0:痛みなし、1-3:軽い痛み、4-6:中程度の痛み、7-10:強い痛み）で痛みチェックを実施し、回答を google form で収集した。加えて、8 つの部位について痛みがあるか、ないかを収集した。また、医療機関から提供された各部位を補強するための練習メニューを選手にデジタル媒体で提供し、個別調整の機会を設けた。

そして、このような取り組みが顧問のチーム状況の把握、コーチング、そして、チームや選手個々のコンディションにどのような影響を与えるかを議論した。

【結果】1.痛みチェックの結果（全期間）

9 項目の痛みチェックについて、すべての調査における分布を表 1 に示した。後屈、片足フルスクワットにおいては、高い得点（痛みアリ）の回答がみられた。

表 1.痛みチェックの結果（全期間）

	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点
ブロックストレス	721	66	83	36	14	5	8	5	6	1	2
スパイクストレス	699	80	88	34	21	8	3	6	5	3	1
外旋ストレス	730	77	70	42	10	5	3	6	3	1	1
前屈	807	34	60	26	13	3	2	1	1	1	0
後屈	653	64	56	52	49	23	29	13	6	3	0
片足フルスクワット（右）	519	27	74	52	50	54	50	47	39	15	21
片足フルスクワット（左）	530	48	74	50	34	49	58	40	34	18	13
片足カーフレイズ（右）	823	26	37	18	16	8	6	3	1	4	6
片足カーフレイズ（左）	819	26	50	21	10	4	4	4	2	1	7

2. 痛みチェックの結果（年度比較）

痛みチェックによるコンディションを可視化する取り組み、また、その結果を基にした個別メニュー、生徒状況を把握したコーチングの効果を検証するため、年度を被験者間要因とする 1 要因分散分析をおこない、主効果が確認されたため、多重比較をおこなった。

その結果、片足フルスクワット（左）においては差がみられなかったが、その他については、有意に良い値に変化していることが確認できた。

表 2. 痛みチェックの結果（年度比較）

	2020	2021	2022	
	平均値 ± 標準偏差	平均値 ± 標準偏差	平均値 ± 標準偏差	多重比較
ブロックストレス	1.19 ± 2.07	0.58 ± 1.29	0.40 ± 1.14	2020>2021,2022 **
スパイクストレス	1.20 ± 2.17	0.63 ± 1.29	0.43 ± 1.07	2020>2021,2022 **
外旋ストレス	0.96 ± 1.83	0.52 ± 1.19	0.37 ± 0.98	2020>2021,2022 **
前屈	0.59 ± 1.35	0.35 ± 0.97	0.26 ± 0.84	2020>2021,2022 **
後屈	1.56 ± 2.42	0.92 ± 1.75	0.96 ± 1.82	2020>2021,2022 **
片足フルスクワット（右）	2.77 ± 3.56	2.05 ± 2.87	2.15 ± 2.72	2020>2021 **
片足フルスクワット（左）	2.04 ± 2.90	1.84 ± 2.88	2.28 ± 2.76	
片足カーフレイズ（右）	0.85 ± 2.36	0.33 ± 1.14	0.41 ± 1.20	2020>2021,2022 **
片足カーフレイズ（左）	0.94 ± 2.27	0.28 ± 0.99	0.37 ± 1.19	2020>2021,2022 **

*p <0.05、**p <0.01

3.痛みチェックの結果（痛みの部分）

痛みの部位について、クロス集計表を作成し、カイ二乗検定を実施した。その結果、「ふくらはぎ」、「すねの前の部分」、「股関節」、「手首」、「足首」において、2021 年度または 2022 年度で有意に減少している事例が確認できた。

表 2. 痛みチェックの結果（痛みの部分）

	2020年度	2021年度	2022年度
ふくらはぎ 度数	24	26	12
調整済み残差	4.8 △	-1.1	-2.6 ▼
すねの前の部分 度数	25	21	34
調整済み残差	3.7 △	-4 ▼	1.4
なし 度数	20	83	72
調整済み残差	-1.8	-0.3	1.7
肩 度数	30	73	47
調整済み残差	1.3	0	-1
股関節 度数	8	24	6
調整済み残差	0.8	1.8	-2.5 ▼
腰 度数	51	119	74
調整済み残差	2 △	0	-1.6
手首 度数	24	33	38
調整済み残差	2.4 △	-2.7 ▼	1
足首 度数	23	33	42
調整済み残差	2 △	-3 ▼	1.6
膝 度数	49	148	117
調整済み残差	-0.3	-0.5	0.8

4.コーチングの変化、および、選手の変化

痛みの可視化により、コーチングにおいて、練習量の調整、リハビリの選択の資料が提供され、それにより予防医療的視点を持った指導の実施が促進されことにつながることが示された。また、医療機関との連携は、コーチングにおける心配や不安について相談することが可能となり、疲労骨折の一次予防や肩の痛みの軽減につなげることができた。特に、偏平足や外反母趾のように練習では気づくことが困難な事例についても発見し、対処することができた。

また、2020 年度から継続して実施しており、日常の練習メニューにも痛みを予防するトレーニングが導入できており、以前よりも痛みを訴える選手が減少しており、コーチングにおいても、選手の状態を可視化することは大きな意義があるといえる。

【考察】

高校女子バレー部指導において、選手の状態を可視化すること、専門機関と連携することによるコーチングや選手の状態の変化について検証した。その結果、未解決な事象もあるが、このような取り組みがコーチングだけではなく、選手の状態やチーム状態に影響が及ぶことが示された。

（いとうまさし・おおかど　こうへい・きだ　のりゆき・やまもとちさと・ごんのめぐみ）

ポジティブイラショナルビリーフ尺度日本語版の作成（第１報）

○森本康太郎
（福井県立大学キャリアセンター）

キーワード：ポジティブイラショナルビリーフ，尺度，日本語版

【目的】

現実の情報を歪めた，自己，コントロール，未来に対する自分にとって都合のよい認知として概念化されたポジティブな幻想（認知的幻想）に関して，精神的健康につながるという方向でこれまでに膨大な数の実証的研究や理論化が展開されてきた。このポジティブな認知的幻想を直接評価するための尺度として，自己，コントロール，未来に対する楽観主義をポジティブイラショナルビリーフとして測定する Positive Irrational Beliefs Scale（PIBS）が，Collard（2009），Collard, Cummins, & Fuller-Tyskiewicz（2016）によって作成されている。PIBS が情動的苦痛と負の関連を持つこと（Collard & Fuller-Tyskiewicz, 2021），主観的幸福感と弱い正の関連を持つこと（Collard, et al., 2016）が明らかにされているが，Collard & Fuller-Tyskiewicz（2021）は，ポジティブイラショナルビリーフが精神的健康に有害な機能を持つ可能性も含めて，今後の詳細な検討が必要であることを指摘している。本邦においてはポジティブイラショナルビリーフを測定する尺度は未作成であり，ポジティブイラショナルビリーフと精神的健康や幸福感がどのような関連を持つかを検討するためには尺度の作成が必要である。本研究では PIBS 日本語版（J-PIBS）を作成し，その信頼性を検討することを目的とした。

【方法】

1. 調査協力者：日本国内の 18 歳から 70 歳までの 797 名（男性 485 名，女性 312 名，平均年齢 37.6 歳，$SD = 14.7$）。
2. 調査時期：2023 年 12 月中旬。
3. 調査材料：日本語版ポジティブイラショナルビリーフ尺度試作版　Collard（2009）によって作成された PIBS を，原著者に日本語翻訳の許可を得た後，翻訳して試作版を作成した。まず，研究者が PIBS 全項目の翻訳を行い，一方で専門翻訳会社ユレイタスによる翻訳を行った。次に，独立して行われた両者の翻訳を比較検討して翻訳内容を調整し，統合版を作成した。この統合された翻訳をもって，ユレイタスの別担当者である逆翻訳専門家による逆翻訳を実施した。逆翻訳後，さらに別のユレイタス担当者（ネイティブスピーカー）による原文と逆翻訳との比較検証を行い，意味の違いを生じさせる表現の相違がないことを確認した。加えて，各項目の日本語表記を研究者と組織行動論を専門とする研究者で確認し，項目 No.18 の表現を微調整した上で全項目を確定させた。
4. データ収集：インターネット調査会社に登録しているパネルより調査協力者を募り，同意を得た者よりウェブ調査を通じて回答を得た。

【結果と考察】

J-PIBS の因子構造を確認するために，原尺度と同じ 4 因子構造モデルを仮定し，確認的因子分析を行った。適合度指標を Table 1 に示す。項目の因子負荷量をみると，項目 No.9, 11, 18 が.31～.43 と低い値であった。そのため，この 3 項目を除外し，再度因子分析を行った。各因子の α 係数を算出したところ，第 1 因子 α =.886，第 2 因子 α =.882，第 3 因子 α =.637，第 4 因子 α =.650 を示した。この結果より，森本（2023）同様に，第 1・第 2 因子に対して第 3・第 4 因子の値がともに低いことを考慮し，改めて探索的因子分析を行うこととした。

最尤法，プロマックス回転による因子分析を行ったところ，固有値の推移からは 3 因子解の採用が妥当であると考えられた。すべての項目が因子に対して.40 以上の負荷量を示し，複数の因子に.25 以上の負荷量を示した項目を除外して分析を繰り返し，最終的に 9 項目から構成される 3 因子解の結果を得た。3 因子での説明できる分散の割合の総和は 58.8%であった。適合度指標を Table 1，各項目と因子負荷量，記述統計量を Table 2 に示す。適合度を比較した結果，3 因子解がデータとの当てはまりが良好であることから，J-PIBS は 3 因子解の採用が妥当であると判断した。

第 1 因子は原尺度と同様に「不完全さの拒否」，第 2 因子も原尺度と同様に「不合理な楽観」とした。第 3 因子については，原尺度の第 4 因子「不合理なコントロール」の 2 項目と共通しているものの，この 2 つの項目内容からは不合理さがさほど強く表現されず，環境や自身の人生に対するコントロール性の認識を表していると考えられたため，J-PIBS では「自己コントロール」と命名した。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ，不完全さの拒否は α =.865，不合理な楽観は α =.789，自己コントロールは α =.660 を示した。今後，J-PIBS の完成に向けて，信頼性および妥当性の検証を重ねていきたいと考えている。

【引用文献】

Collard, J. J. (2009). *The role of positive irrational beliefs in mental health & wellbeing.* Unpublished doctoral dissertation, Deakin University, Melbourne, Australia.

Collard, J. J., Cummins, R. A. & Fuller-Tyskiewicz, M. (2016). Measurement of positive irrational beliefs (positive cognitive illusions). *Journal of Happiness Studies, 17,* 1069-1088.

Collard, J. J. & Fuller-Tyskiewicz, M. (2021). Positive irrational beliefs and mental health. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy, 39,* 335–354.

Table 1　適合度指標

	χ^2	*df*	*p*	GFI	CFI	RMSEA	SRMR	AIC
4因子解	959.300	129	.000	.871	.865	.090	.074	1043.300
4因子解（3項目削除）	497.999	84	.000	.919	.924	.079	.050	569.999
3因子解	91.653	24	.000	.975	.976	.060	.034	133.653

Table 2　確認的因子分析の結果

	項目	*M*	*SD*	因子負荷量	共通性
第1因子：不完全さの拒否					
6	私は状況を見誤ることはない。	1.82	0.70	.89	.76
5	私はミスをしない。	1.52	0.65	.82	.60
7	私は，自分が選んだことに失敗することはない。	1.80	0.69	.77	.69
8	私は決して間違ったことはしない。	1.77	0.75	.65	.48
第2因子：不合理な楽観					
15	私は，自分には良いことしか起こらないと思っている。	1.90	0.78	.91	.74
17	私はこれからも常に幸運だろう。	2.11	0.83	.75	.63
16	私は，最高のものだけを期待している。	2.15	0.81	.58	.38
第3因子：自己コントロール					
12	私は，自分が生きる環境は自分でコントロールする。	2.57	0.71	.73	.56
11	私の人生で起こるすべてのことは，自分で責任をとる。	2.72	0.73	.71	.44

（もりもと　こうたろう）

日本人大学生における自尊感情と被援助志向性の関連

アニーシャ ニシャート
(東日本国際大学グローバル人財育成研究所)
キーワード： 自尊感情,被援助志向性,性差

【目的】

本研究の目的は,日本人大学生における自尊感情と被援助志向性の関連を検討することである。被援助志向性とは,「個人が,情緒的・行動的問題および現実生活における中心的な問題に対して,カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家,教師などの職業的援助者,または友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかに関する認知的枠組み」を指す（水野・石隈，1999)。また,自尊感情については国内外で多くの研究が行われてきており,研究者によってその定義も様々である。Orth et al. (2014) は，自尊感情とは人としての価値に対する個人の主観的評価であると述べており，Rosenberg (1965) は，自尊感情とは，自分に対する肯定的態度や自己受容を意味する概念として捉えている。

また,自尊感情と被援助志向性には 2 つの仮説がある。Bramel（1968）の「認知的一貫性仮説」では,自尊感情の高い人は自己肯定感と矛盾するため援助を求めにくいとされる。一方,Tessler & Schwartz（1972）の「傷つきやすさ仮説」では,自尊感情の低い人は援助要請でさらに自己が傷つくことを避けるため援助を求めにくいとされる。既に,田村・石隈（2002）は中学校教師の自尊感情について検討し,45 歳以下の男性教師の場合,自尊感情が低い人は被援助志向性も低い一方で,41 歳以上の女性教師の場合,自尊感情が高い教師は被援助志向性が低いという結果を得ている。また,脇本（2008）は,自尊心が安定している場合は自尊心と被援助志向性の間に正の相関が見られる一方，自尊心が不安定な場合には自尊感情と被援助志向性の間に負の相関が見られることを示している。以上を踏まえ,本研究では日本人大学生における自尊感情と被援助志向性の関係性を明らかにするとともに,性別による差異が見られるかを検討することを目的としている。

【方法】

1. **調査時期**：2023 年 12 月
2. **調査対象**：日本の 1 大学の 1〜4 年生（18〜23 歳）計 225 名（男性 94 名,女性 131 名）
3. **実施尺度**：①Rosenberg (1965)が作成した（山本・松井・山成による翻訳版,1982）1 因子 10 項目から成る自尊感情尺度,及び,②田村・石隈（2001）が作成した 2 因子（援助の欲求と態度,援助関係に対する抵抗感の低さ）11 項目から成る被援助志向性尺度用いてPearsonの積率相関係数の分析を行った。

【結果】

分析の結果,男女全体において,自尊感情と被援助志向性との間に有意な正の相関が認められた。援助関係に対する抵抗感の低さと自尊感情において（r = .27 ; p<.01）及び援助の欲求と態度と自尊感情において（r = .19 ; p<.05）それぞれ中程度と弱い有意な正の相関が認められた。また,自尊感情と被援助志向性（全体）において（r = .25 ; p<.01）中程度の正の相関が認められた（Table 1)。

Table1. 自尊感情と被援助志向性（N=225）

被援助志向性	自尊感情
援助の欲求と態度	.19*
援助関係に対する抵抗感の低さ	.27**
被援助志向性（全体）	.25**

**= p<.01,*= p<.05

さらに,男女別に被援助志向性と自尊感情との関連について検討した。その結果,女子学生については援助関係に対する抵抗感の低さと自尊感情においてのみ（r = .19 ; p<.05）弱い正の相関が認められた。一方,男子学生の場合,被援助志向性（全体）及び各因子において正の相関が認められた。援助関係に対する抵抗感の低さと自尊感情において（r = .38 ; p<.01）,援助の欲求と態度と自尊感情において（r = .37 ; p<.01)，及び被援助志向性（全体）と自尊感情において（r = .41 ; p<.01）正の相関が認められた（Table 2)。

Table2. 自尊感情と被援助志向性（男女別；男性 N=94 名,女性 N=131）

被援助志向性	自尊感情	
	男性	女性
援助の欲求と態度	.37**	.04
援助関係に対する抵抗感の低さ	.38**	.19*
被援助志向性（全体）	.41**	.12

**= p<.01,*= p<.05

【考察】

本研究の結果は,自尊感情が高い学生が被援助志向性を持つことを示唆しており，Tessler & Schwartz（1972）の「傷つきやすさ仮説」で説明することができる。自尊感情が高いことで,自身の価値を認識し,他者からの援助を求めることに対する抵抗感が低減することが考えられる。性別による分析の結果,女子学生においては援助関係に対する抵抗感の低さと自尊感情にのみ有意な相関が見られた。これは,女子学生が男子学生に比べて対人関係や社会的サポートのスキルが高いことが示されており（Nagai et al., 2023; Nam et al., 2010），自尊感情の影響が直接的に表れにくいためと考えられる。また,Roskar et al. (2017) は,女性は心理的な問題に対してよりオープンであり,援助を求めることで脆弱であるというスティグマを持たないことを指摘している。

一方で,男子学生においては被援助志向性（全体）およびその各因子と自尊感情との間に正の相関が確認された。自尊感情が低い男性は自己スティグマ（例：「自分で対処できなければ弱いと見なされる」）を抱え,援助を求めることにためらいを感じることがある（Corrigan, 1998）としており，本調査の結果は，自尊感情が高い男子学生においては，困難に直面した際に援助を求める態度や欲求において柔軟であることを示しており，自尊感情が高いことが他者からの支援を受け入れる上で重要な役割を果たしている可能性が示唆される。

今後の研究では,性別，年齢や文化的背景を考慮したさらなる調査が必要である。特に,自尊感情を高めるための教育プログラムやカウンセリングの実施が,男子学生の被援助志向性を高める上で有効である可能性が考えられる。これにより,困難な状況においても積極的に援助を求める行動が促進され,学生の精神的健康や学業成績の向上に寄与すると期待される。

【利益相反】本研究に利益相反はない。
（アニーシャ・ニシャート）

ダークトライアドと短期戦略恋愛傾向

○山岡重行
(聖徳大学心理学科)

キーワード：ダークトライアド、短期戦略恋愛傾向、ヤンチャな人たち

【目的】マキャベリアニズム傾向、自己愛傾向(ナルシシズム)、サイコパシー 傾向はDark Triadと総称される社会的に嫌われやすい3 特性である（下司・小塩 ,2017)。マキャベリアニズムは、非道徳性、他者操作性、冷笑的世界観を特徴とする特性である。自己愛傾向は優越感、自己満足、権力、虚栄、自己顕示、特権意識、搾取性を特徴とする特性である。サイコパシー傾向は、浅薄な情動、共感性や罪悪感・良心の呵責の欠如、無責任さ、衝動性、拙い計画性・意思決定を特徴とする特性である。

生物の生存戦略は、短期戦略と長期戦略に分けることができる。長期戦略は、一人のパートナーとの間に少ない子どもをもうけ、一人の子供に多くの資源を投入し確実に成長させる戦略である。一方、短期戦略は多くのパートナーとの間に多くの子どもを作るが、あまりひとりひとりの子どもに資源を投入しない戦略である。ダークトライアド傾向の高い者は短期期間の恋愛を繰り返す傾向がある。

モテる人は社会的に高く評価されることが多い。ただし自分がいかにモテるかを他者に納得させることは容易ではない。最も簡単な方法は自分が親密な関係になった相手の人数を誇示することである。何人の相手にモテたかを自分の価値の指標とすると、一人の相手との長期戦略よりも、複数の相手との短期戦略をとらざるを得ない 。

ヤンキーやギャルは恋愛に積極的であり、男らしさや色っぽさを強調するファッションを好み、親密な関係になれそうな相手には積極的に声をかけることが多い。従って、ヤンキーやギャルなどのヤンチャな人たちは短期戦略恋愛傾向が強くなると予測できる。

本研究の目的は、ヤンチャな人たちのダークトライアド傾向と短期戦略恋愛傾向の関係を検討することである。

【方法】調査対象者　首都圏私立大学2校の大学生男女226名(男性43名、女性183名)。平均年齢19.26歳(SD=1.22)。

調査時期　2023年7月から10月。

使用尺度　日本語版ショートダークトライアド尺度（下司・小塩,2017)と短期戦略恋愛傾向尺度を使用した。短期戦略恋愛傾向尺度は本研究のために作成した尺度である。本研究では短期戦略恋愛傾向を、様々な機会を捉えて気に入った相手との性行為を目指す恋愛傾向と概念的に定義し、12項目の質問を作成した。また、ヤンキーやギャルは自分たちの不良行為を「ヤンチャ」と表現することが多い。ヤンチャな人たちであるかどうかを判断するために、「結構ヤンチャをしている、または過去にヤンチャしていた」「ギャル、ヤンキーが友達にいる」の2つの質問を設定した。回答方法はいずれも、「1：当てはまらない～5：当てはまる」の5件法である。

手続　心理学関連の授業を履修している学生を対象に調査を依頼した。Excelで作成した調査用紙をダウンロードしてもらい、回答記入後アップロードしてもらう形で回収した。

【結果】短期戦略行動傾向12項目の信頼性分析を行った。$\alpha = .878$であり、尺度として使用可能な高い内的一貫性があると判断できる。この12項目の合計点を項目数で割ったものを従属変数とした。

ヤンチャに関する2項目の質問の平均点で回答者を2分しヤンチャ群と非ヤンチャ群とした。またダークトライアドの3つの下位尺度の平均点で調査対象者をそれぞれ2分した。

ヤンチャの個人差とサイコパシー傾向の個人差を独立変数とした2要因分散分析の結果、ヤンチャ群の方が非ヤンチャ群より短期戦略恋愛傾向が高いことを示すヤンチャの主効果、サイコパシー高群の方が低群よりも短期戦略恋愛傾向が高いことを示すサイコパシーの主効果、それにヤンチャの主効果はサイコパシー高群で認められ、低群ではヤンチャによる有意差はないことを示す交互作用が認められた。

ヤンチャの個人差と自己愛傾向の個人差を独立変数とした2要因分散分析の結果も、ヤンチャの主効果、自己愛傾向高群は低群よりも平均値が高いことを示す自己愛の主効果、およびヤンチャの主効果は自己愛高群でのみ認められ低群ではヤンチャによる有意差はないことを示す交互作用が認められた。

ヤンチャの個人差とマキャベリアニズム傾向の個人差を独立変数とした2要因分散分析の結果認められたのは、ヤンチャの主効果だけであった。

ヤンチャの個人差とサイコパス傾向の個人差、自己愛傾向の個人差を独立変数とした3要因分散分析の結果、サイコパス傾向の主効果、自己愛傾向の主効果、それにサイコパス高群・自己愛高群は他の3群よりも短期戦略傾向が高いことを示すサイコパス傾向と自己愛傾向の2要因交互作用が認められた。

【考察】本研究結果から、短期戦略恋愛傾向と強く関わるパーソナリティは、ダークトライアドの中でもサイコパシー傾向と自己愛傾向であり、マキャベリアニズム傾向は影響しないことがわかった。

自己愛傾向の強い者は、自分は賞賛され愛されるべき特別な存在だと思いがちである。「愛される特別な自分」を確認するための道具として他者を利用するために、短期戦略恋愛傾向が強くなったのだと解釈できる。

サイコパシーとは他人に対する愛情や思いやり、恐怖などの感情の一部が欠落しており、道徳観念や倫理観に乏しく、自己中心的な振る舞いが見られる恒常的なパーソナリティ障害、あるいはそのようなパーソナリティ傾向のことである。サイコパシー傾向の強い者は、相手のことを考えないで自分の快楽の道具として他者を利用するために、短期戦略恋愛傾向が強くなったのだと解釈できる。

一方、マキャベリアニズムは、「目的のためなら手段を選ばない」思考法を特徴とすると言われる。サイコパスや自己愛の本質が自分の欲望のために他者を道具として利用する他者軽視と自己中心性であるのに対し、マキャベリアニズムの本質は「目的達成志向」にある。「目的のためならどんな悪辣な手段も正当化される」という考え方がマキャベリアニズムであるが、その本質は「悪辣な手段の正当化」ではなく「目的の達成」である。目的を達成するためには他者を道具として利用するが、目的がなければ他者を道具として利用しないと考えられる。そのため、短期戦力恋愛傾向とマキャベリアニズムは関係しなかったと解釈できる。

【利益相反】利益相反なし

（やまおか　しげゆき）

電車内痴漢被害時の対処行動の生起に関わる状況要因の検討

○大髙実奈[1]
([1]東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)
キーワード：痴漢　性犯罪　犯罪被害

【目的】東京都 (2023) の調査によると痴漢被害の 80%以上が電車で発生しており，女性の 41.1%に電車内や駅構内での痴漢被害の経験がある。しかし被害を警察に相談したのは 3.7%であり，めんどう，時間がない，たいしたことではない，犯人が捕まらないと思った等が理由として挙げられる。一方，実際にそれらの要因が通報を抑制するか検討した研究はない。本研究では，痴漢の標的とされやすい若年女性を対象として，場面想定法を用いた web 調査を行い，電車内痴漢時の環境や被害内容が被害時の行動に及ぼす影響について検討する。

【方法】調査会社に登録する東京・神奈川・埼玉・千葉・愛知・大阪・京都・兵庫在住の 18~39 歳女性のうち，電車通学や電車通勤の経験が 1 年以上ある 4,000 名を対象者に調査を行った (Figure 1) 。痴漢被害のシナリオは時間の有無，被害の程度，犯人同定の可否の 3 要因 2 水準の 8 条件で作成した (Table 1) 。シナリオを読んで以降の流れは，シナリオのような被害に遭ったと想定して，その時の気分 (TMS) とどのような行動をとるか (対処行動尺度) に回答させた。対処行動尺度は，過去の調査で被害者が取っていた行動などから 16 項目で作成した。対象者を電車内痴漢被害経験が多い者，電車内痴漢被害経験が少ない者，電車内痴漢以外の性被害経験のみある者，性被害経験のない者に分け，8 条件で被害経験，居住地や年齢が均等になるよう割付した。

Figure 1. 調査の流れ

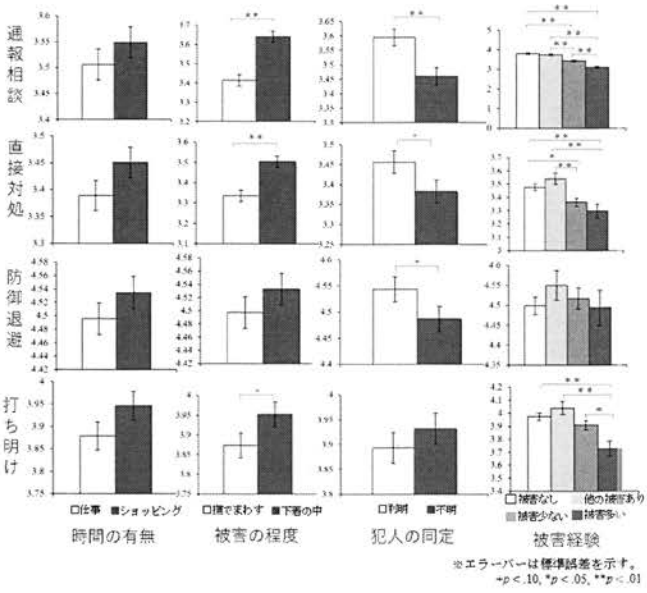


Table 1. 電車内痴漢シナリオ中の要因と水準

	時間の有無	被害の程度	犯人の同定
促進	一人でショッピングに行く時	お尻を撫でまわされた	後ろに男性が一人立っていた
抑制	仕事に向かう時	下着の中に手が入ってきた	人が多くてわからなかった

【結果】対処行動尺度について因子分析を行った結果，「警察等への被害申告(通報相談)」，「犯行を中止させようとする(直接対処)」，「自分を守ったり現場から離れたりする (防御退避)」，「身近な人に被害を話す (打ち明け)」に分類された。それぞれの因子得点を目的変数，シナリオの条件と被害経験を独立変数とした 4 要因の分散分析を行った結果を以降に示す (Figure 2)。通報相談因子については，被害の程度 (F (1, 3968) = 28.700, p < .01, η_p^2 = .007) と犯人の同定(F (1, 3968) = 10.1135, p < .01, η_p^2 = .003)，被害経験で有意差があった (F (1,3968) = 52.455, p < .01, η_p^2 = .038)。直接対処因子については，被害の程度(F (1, 3968) = 18,067, p < .01, η_p^2 = .005) と被害経験で有意差があった(F (1,3968) = 8,062, p < .01, η_p^2 = .005)。防御退避因子については有意な差の生じた要因はなく，打ち明け因子については，被害経験のみで有意差があった。分析には清水 (2016) の HAD を使用した。

Figure 2. 各因子を目的変数とした分散分析結果



【考察】本研究では若年女性を対象として場面想定法を用いた調査を行った。対処行動尺度の 4 因子について，シナリオの条件と被害経験を独立変数とした分散分析を行った結果，通報相談因子と直接対処因子について，被害が深刻な方が行動をとると考える女性が多かった。また，犯人がわかった場合のほうが警察等に申告する女性も多いことが示された。時間の有無はいずれの行動にも有意差がなく，「時間がないから通報しない」ということについて，被害者に大事な用事がなくても申告されにくいことが示唆された。また，防御退避因子は全体的に得点が高く，いずれの要因についても有意差がなかった。被害経験については，防御退避因子以外の因子において被害経験のあるほうが対処行動をとらないと考える傾向にあり，被害経験が対処行動を抑制していることが示唆された。さらなる分析として個人特性の影響も検討したい。

【利益相反】本研究について特筆すべき利益相反はない。

【引用文献】

小塩 真司他 (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み　パーソナリティ研究, *21,* 40-52.

清水 裕二 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

東京都 (2023). 令和 5 年度痴漢被害実態調査報告書 <https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/0000002189/R5chikan_report.pdf>

徳田 完二 (2011). 一時的気分尺度 (TMS) の妥当性 立命館人間科学研究, *22,* 1-6.

※本研究は日工組社会安全研究財団の助成を受けて実施した。

(おおたか　みな)

心霊現象に意味づけた経験の有無と犯罪不安との関連の検討

——一般健常群を対象としたパイロットスタディ——

○皿谷陽子[1]・今井田貴裕[1]
([1]人間環境大学心理学部)

キーワード：犯罪不安・心霊現象・群間比較

【目的】

犯罪被害に対する感情的反応である犯罪不安の知見は多い。犯罪不安は，個人にとって犯罪の何らかの側面に関連する環境の中に知覚された手がかりによって喚起される（Ferraro, & LaGrange, 2017）。例えば，マスメディアの報道する犯罪情報は犯罪不安を促進したりする可能性がある（鳶島, 2020）。他にも，犯罪不安の高い人々は身体的健康や精的健康が低いこと（Stafford et al., 2007）が報告されている。これらから，刺激に対して不安を感じやすさとして犯罪不安が生じる可能性があると考えられる。

ところで，犯罪不安を喚起しやすい場所は幽霊が出現しやすいと感じられる場所との類似点がある。例えば，犯罪不安の喚起しやすい場所として，暗い場所であることや人の気配がないこと周辺から死角になっていることなどが挙げられている（雨宮・横張, 2003）。これは心霊スポットの特徴と一致する（福西, 2019）。そのため，何らかの経験を心霊現象として意味づけた経験を有する人々は，多様な不安を感じやすいことから犯罪不安も高い可能性がある。

そこで，本研究では心霊現象に意味づけた経験を有する人々とそうでない人々の犯罪不安の比較を行い，心霊現象に意味づけた経験と犯罪不安の関連について検討を行う。

【方法】

調査協力者　平均年齢 19.18 歳（SD= 1.10）の大学生 272 名（女性 172 名，男性 100 名）の協力を得た。今井田他（2024）と同じデータセットであるが，使用尺度は重複しない。

尺度構成　犯罪不安を高校生版犯罪不安（藤井, 2009）により，不審者に対する不安と外出に対する不安，1 人になることに対する不安の 3 下位尺度得点を得た。選択肢は 5 件法（1. 全く不安を感じない ～ 5. とても不安を感じる）であった。次に，自由記述の質問として「あなたはこれまでに心霊体験をしたことがありますか？あると考えている場合できる限り詳細に記述してください。複数でも構いません。」として，回答に心霊現象に意味づけた経験のある人々を 1，そうでない人を 0 とコーディングした。

倫理的配慮　所属先の倫理審査委員会の承認を経た。

【結果】

まず，自由記述の質問の回答内容から，心霊体験に意味づけた経験のある人々（N= 44）とそうでない人々（N= 224）に群分けを行い，各尺度の基礎統計量を算出した。その結果，心霊体験に意味づけた経験のある人々の不審者に対する不安（M =3.27, SD = 0.80）と外出に対する不安（M =1.49, SD = 0.80），1 人になることに対する不安（M=1.97, SD = 0.88）と，心霊体験に意味づけた経験のない人々の不審者に対する不安（M =3.51, SD = 0.77）と外出に対する不安（M =1.75, SD = 0.85），1 人になることに対する不安（M=2.22, SD = 0.94）は同様の傾向を有することがわかった。

犯罪不安×群の混合要因の分散分析の結果，犯罪不安（$F(2, 540) = 380.36$, $p < .001$, $\eta^2_p = .59$）と群（$F(1, 270) = 5.56$, $p < .05$, $\eta^2_p = .02$）の主効果がいずれも有意であったが，犯罪不安×群（$F(2, 540) = 0.02$, $p = .974$, $\eta^2_p = .00$）の交互作用項は有意でなかった。このことから，心霊体験に意味づけた経験のある人々の犯罪不安は，そうでない人々よりも高いことがわかった。

【考察】

本研究の結果から，心霊現象に意味づけた経験を有する人々は，そうでない人々よりも犯罪不安が高いことが示された。これにより，犯罪不安を感じやすい人々は，何らかの刺激に対して心霊現象に意味づけたり，犯罪に遭遇する恐怖感を感じたりしやすいと考えられる。ただし，本研究では，心霊現象に意味づけた経験の有無と犯罪不安のみでの検討を行っている。犯罪不安は，自身が被害にあうと考える犯罪被害リスク認知（島田他，2004）が高いと犯罪不安も高くなる。他にも，特性不安といった個人の不安の感じやすさなどの影響も考えられる。今後，犯罪不安には個人要因が様々であることから，これらの特性も含めた上で，心霊現象に意味づけた経験の有無と犯罪不安の検討も今後必要である。

【利益相反】

利益相反のある企業は無い。

【引用文献】

雨宮 護・横 張真 (2003). ニュータウン内の公園・緑道における犯罪不安発生の実態　都市住宅学, 2003(43), 18-23.

Ferraro, K. F., & LaGrange, R. (2017). The measurement of fear of crime. In The fear of crime (pp. 277-308). Routledge.

藤井 義久 (2009). 高校生の犯罪不安と防犯意識に関する研究: 高校生版犯罪不安尺度及び防犯意識尺度開発の試み　学校メンタルヘルス, 11, 9-22.

福西 大輔 (2019). 現代における橋の怪異と地域社会に関する一考察: 人口流出にともなう 「心霊スポット」 の発生　熊本大学社会文化研究, 17, 277-289.

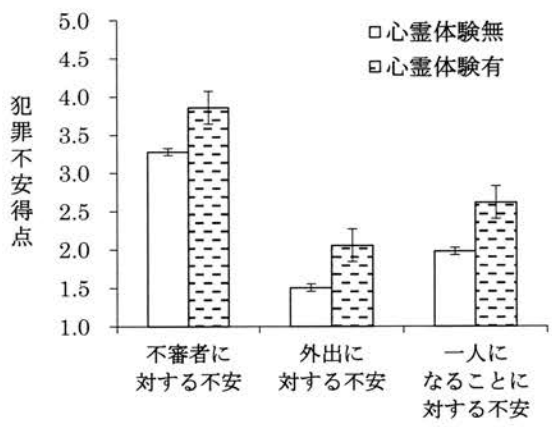
島田 貴仁・鈴木 護・ 原田 豊 (2004). 犯罪不安と被害リスク知覚——その構造と形成要因——　犯罪社会学研究, 29, 51-64.

Stafford, M., Chandola, T., & Marmot, M. (2007). Association between fear of crime and mental health and physical functioning. American journal of public health, 97(11), 2076-2081.

鳶島 修治 (2020). インターネットでのニュース接触が犯罪不安に与える影響　社会情報学, 8(3), 115-128.

（さらがい　ようこ・いまいだ　たかひろ）

Figure 1
分散分析の結果



注）エラーバーは標準誤差

カスタマーハラスメントと精神健康および働きがい・活力との関連

○島田恭子[1・2]　桐生正幸[1・2]
[1]東洋大学　[2]一般社団法人ココロバランス研究所

キーワード：カスタマーハラスメント、メンタルヘルス、ワーク・エンゲイジメント

【目的】

顧客からの悪質なクレーム、不当な要求など、いわゆる”カスタマーハラスメント“(以下カスハラ）が社会問題となっている。様々な業種業態で、顧客による過度なクレームや要求が、従業員の就業環境を著しく阻害し、心身の健康を損ない、働く意欲を削ぐ可能性が示唆されているものの、それらの関連について、日本人のデータをもとに、科学的な検証を行った研究は未だない。そこで本研究では、顧客関連ストレッサー尺度を用いて従業員のカスハラの程度を可視化し、彼らの精神健康（メンタルヘルス）および働きがい・活力との関連を検討することを目的とした。

【方法】

調査対象：日本最大の産業別組織 UA ゼンセンが実施した、「カスタマーハラスメント実態調査 2024」より、サービス業に従事する UA ゼンセン所属の 210 組合の組合員

有効回答数：33,133 名（男 12,330 名、女 20,338 名、その他 465 名）。年代別構成では、10 代：578 名、20 代：4,498 名、30 代：6,330 名、40 代：9,388 名、50 代：8,942 名、60 代：3,249 名、70 代：148 名である。

調査期間：2024 年 1 月 18 日～3 月 18 日

分析に用いた質問項目：

《カスハラの程度》日常的に困難な顧客対応の程度を測る指標として、顧客関連ストレッサー尺度日本語版より 11 項目、厚労省カスタマーハラスメント対応マニュアルより“繰り返し”、“長時間” などのキーワードを含む 4 項目、計 15 項目を、1 対応していない、から 5 いつも対応している、までの 5 件法で尋ねた。

《精神健康》心理的ストレス反応の指標として、Kessler6 を用いた。過去 30 日間の抑うつ、自己無価値感などの精神状態を 6 項目、5 件法で尋ね、5 点以上が軽度のストレス状態、13 点以上が重度精神障害相当であることが示されている。

《働きがい・活力》 “仕事にやりがいを感じ、熱心に取り組み、活力を得てイキイキしている”状態を測る指標として、ワーク・エンゲイジメント 3 項目版（0=全くない、6=いつも感じる、の 7 件法）を用いた。

分析：まず、カスハラの程度、精神健康、働きがい・活力のそれぞれで性差による平均値の違いについて、一元配置分散分析を行った。次に精神健康をカットオフ値で 4 群（ストレスほぼ無し群、軽度ストレス群、中度ストレス群、重度ストレス群）に分け、カスハラ得点との関連を、カスハラ得点を 3 群に分け、働きがい・活力との関連を、それぞれ一元配置分散分析で検討した。

統計解析は JMP Pro14 を用いた。

【結果】

カスハラの得点、精神健康、働きがい・活力の得点を性別（男性、女性、回答しない）で比較したところ、それぞれの得点には有意な性差が見られた。特に男性と女性を比較した場合、男性より女性は、カスハラ得点が低く、精神健康と働きがい・活力が高い傾向が明らかになった(図 1)。

また精神健康 4 群とカスハラ得点の関連では、心理的ストレス反応の値が高くなるにつれて段階的に、有意にカスハラ得点が上がることが示された(図 2)。

さらには、カスハラを高、中、低の 3 群に分け、働きがい・活力との得点を比較したところ、カスハラを受けるほど、働きがい・活力が低下することが、明らかになった(図 3)。

図 1. 性別ごとのカスハラ、ストレス、働きがい・活力の平均点(±標準偏差)

	カスハラ	ストレス	活力
男性 (n=12,330)	39.3 (±12.3)	7.06 (±5.6)	8.67 (±4.0)
女性 (n=20,338)	37.9 (±12.1)	6.11 (±5.2)	9.13 (±3.8)
回答しない (n=465)	39.6 (±13.0)	8.98 (±6.2)	7.79 (±4.3)

$p < .0001$

図 2. ストレス程度ごとのカスハラ得点

カスハラ得点	平均	標準偏差
ストレスほとんど無し (n=14,297)	34.477	11.272
軽度ストレス (n=8,475)	38.542	10.836
中度ストレス (n=5,845)	41.867	11.369
重度ストレス (n=4,516)	46.571	13.282

$p < .0001$

図 3. カスハラ程度ごとの働きがい・活力

働きがい・活力	平均	標準偏差
カスハラ低群 (n=8,311)	9.190	3.996
カスハラ中群 (n=16,899)	8.896	3.674
カスハラ高群 (n=7,923)	8.755	4.253

$p < .0001$

【考察】

本研究は、顧客関連ストレッサーである従業員のカスハラを測定し、メンタルヘルスおよび働きがい・活力との関係を科学的に検討した初の試みである。まず性差による検討では、女性が有意にカスハラ得点が低く、精神健康、働きがい・活力が高い結果となった。これは女性のサービス業従事者にはパートタイマーが多いため、男性に比べ責任が比較的軽く、カスハラを受けてもエスカレーションが可能なため、精神健康、活気が高い可能性があろう。また図 2 では、ストレスの程度が重いほど、カスハラ得点が高いことが示された。これまでカスハラによる従業員の心身への悪影響が推察されていたが、それをデータで証明する形となった。同じように、日常的にカスハラを受ければ受けるほど、仕事に対する働きがいや活力が低下することが示された。顧客による嫌がらせが日常的に対応者を苦しめることによって、彼らの働く意欲や活力までをも削いでいる可能性が示唆されよう。

今回は全体の傾向を把握する分析を行ったが、今後は業種業態別、年代別などで、カスハラのありようやストレス、働きがい・活力との関係をより細かく見ていくことで、必要な対象への具体的なアプローチを検討する材料とする必要がある。

【利益相反】本研究において利益相反はない。

【謝辞】本研究のデータは、UA ゼンセン流通サービス部門が行った「カスタマーハラスメント実態調査 2024」より得られたものである。関係各位に厚く御礼申し上げる。
（しまだきょうこ・きりうまさゆき）

業種業態によるカスタマーハラスメント類型と特徴

カスハラ行為者の属性，態度・言動と要求内容について

○桐生正幸[1・2]　島田恭子[1・2]
([1]東洋大学　[2](社)ココロバランス研究所)

キーワード：カスタマーハラスメント，類型化，対策

【目的】

2022年，厚生労働省が「カスタマーハラスメント対策企業マニュアル」を発表し，企業や自治体のカスハラ対策の動きが活発化している。これら動向に対し，応用心理学の知見を用いたアドバイスや対策マニュアル作りへの関与は，重要な社会貢献になるものと考えられる。この度，日本最大の産業別組織UAゼンセンが実施した，所属会員へのカスタマーハラスメント（以後，カスハラ）被害調査に参入する機会を得た。本報告では，直近2年以内で経験したカスハラ被害に関する質問回答を用い，業種・業種による類型化を試み，各特長を検討したので報告する。

【方法】

調査対象：UAゼンセンに所属する流通とサービス関連の210組合（15部門）の組合員である。

有効回答数：33,133名（男12,330，女20,338，その他465）年代構成は，10代578，20代4,498，30代6,330，40代9,388，50代8,942，60代3,249，70代148である。

調査期間：2024年1月18日～3月18日

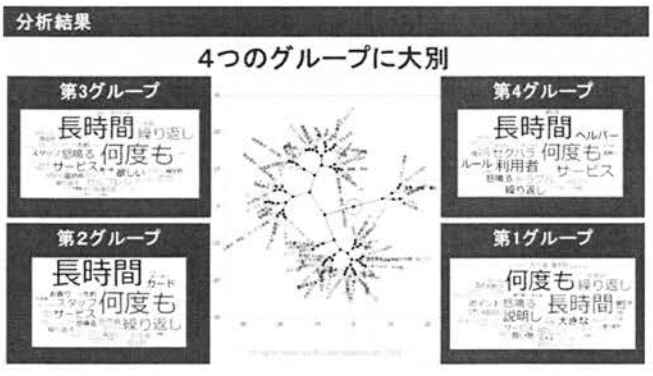
質問票：全21項目構成されており，前半は顧客関連ストレッサー尺度，Kessler6，ワーク・エンゲイジメントなどの質問，後半は直近2年以内で経験したカスハラ被害の状況などに関する質問である。作業は調査会社に委託した。

分　析：統計解析ソフトJMP Pro14を用いた。まず，「被害回数」「迷惑行為の内容」「カスハラのきっかけ」「カスハラの手段」「カスハラの要求内容」「所要時間」を従属変数とし，「部門（業種）」「対応者性別」「対応者年代」「雇用形態」「カスハラ行為者性別」「カスハラ行為者年代」を独立変数とした多重対応分析及びクラスター分析（Ward法）を行った。また，事例に関する自由記述における単語の出現頻度を調べるため，テキストエクスプローラによる解析を行った。

【結果】

「人材サービス」部門の回答者数が6名と少なかったため分析から除き，14部門の33,126名から被害経験のある15,507名のデータを分析対象とした。多重対応分析の結果(次元1，52.3％；次元2，10.1％)から，クラスター分析(Ward法)を行い，4つのグループに大別された（Fig.1）。

Figure 1　クラスター分析と各グループの高頻度ワード



まず，全グループとも，「長時間」「何度も」のワードの出現頻度が高い。流通，サービスに関連する業種・業態の「言動・態度」の特徴が示唆された。次に，各グループの特徴を基礎集計の結果を含め，以下の特徴を見出した。

第1グループ（GMS,スーパーマーケット，ドラッグ関連）：カスハラ行為者は60歳代の男性が，対応者は女性が多い。カスハラのきっかけは，例えばポイント制度に関すること，その要求は上司などからの謝罪を得ることである。

第2グループ（インフラ，ホテル・レジャー，家電，生活サービス，百貨店）：カスハラ行為者は50歳代の男性が多い。その言動には，理詰め，揚げ足取りといったものが多く，その要求は，現金の要求，土下座強要，過剰なサービスの要求といったものである。

第3グループ（フード，フードサービス，住生活関連，専門店）：カスハラ行為者は女性の割合が，対応者は男性の割合が，他グループと比較して多い，対面による苦情は，人格否定や威圧的である割合が他のグループより高い。その要求には支払拒否，景品要求といったものがある。長時間の拘束傾向がみられる。

第4グループ（パチンコ関連，医療・介護・福祉）：カスハラ行為者は60歳代，70歳代が多く，対応者は女性の割合が高い。対応者の被害経験の総回数が多い。セクハラに関する被害は他のグループよりも多く，カスハラ行為者による大声や威圧的といった言動の割合が高い。

【考察】

カスハラの様態については，業種・業態によって異なることが推測されてきたが，今回の分析により，その違いが明確になった。これら違いを想定しながら，各企業や店舗では，カスハラ対応マニュアルやガイドラインを作成することが有効であろう。そして，個々の特徴を分析しその結果を加味した，実用性の高い対策を検討する必要があると考える。

我々は，カスハラ事例の分析において，「態度・言動」（縦軸10段階評価）と「要求内容」（横軸10段階評価）を用いた，簡易な方法を開発している（Fig.2）。複数のメンバーにより，事前に収集したカスハラ事例を，この図の上に布置しながら，実態を俯瞰し傾向を把握してブレーンストーミング的に，その企業やお店におけるカスハラ認定のための線引きを行う方法である。その結果を，対策マニュアルに反映させることで，より具体的な対策が可能となると考えている。今後，実践結果を報告したい。

Figure2　カスハラ事例分析



【利益相反】本研究において利益相反はない。

【参考文献】

桐生正幸・島田恭子(2021)　接客対応者におけるカスタマーハラスメント被害経験の分析　現代社会研究，19,47-53.

（きりうまさゆき・しまだきょうこ）

高齢者による特殊詐欺体験中のリスク行為と性格特性の関連

生成 AI を活用した特殊詐欺訓練 AI ツールを用いた検証

○井手健太[1]　近野恵[1]　紺野剛史[1]　桐生正幸[2]
([1]富士通株式会社　[2]東洋大学)

キーワード：特殊詐欺，生成 AI，犯罪心理学

【目的】 著者らは特殊詐欺の被害を未然に防止するために，生成 AI を活用した特殊詐欺訓練 AI ツールを開発してきた(近野, 2023)．生成 AI によって特殊詐欺の会話パターンを再現したことで，高齢者が会話形式で特殊詐欺を疑似体験できる機能を実現した．

本論文では，特殊詐欺の疑似体験中に観察されるリスク行為と性格特性の関連性を分析する．本論文において，リスク行為とは，生成 AI に対して不用意な発言をしてしまうこととした．具体的には必要以上に個人情報を答えてしまうなどである．こうしたリスク行為と性格特性の関連を分析することで，特殊詐欺に対するリスクの推定に性格特性を活用できる可能性を検討する．

【方法】

実験システム 特殊詐欺訓練 AI ツールについて説明する．疑似体験機能として，生成 AI を活用して特殊詐欺の会話を自動で実施する．特殊詐欺の固有のキーワードや話の流れをプロンプトエンジニアリングによって生成 AI で再現し，疑似体験を実現する．音声認識，音声合成システムを組み合わせることで，発話による会話応答を可能にした(図 1)．

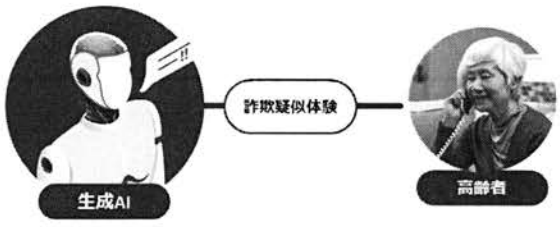


図 1.　特殊詐欺疑似体験のイメージ

実験方法 神奈川県川崎市在住の 65～80 歳の男女 30 名を対象に，上記の特殊詐欺訓練ツールの疑似体験機能を用いた実験を行った．

疑似体験では，生成 AI との会話に慣れるために，日常会話をまず実施し，その後特殊詐欺の会話を実施するようにした．特殊詐欺の疑似体験として，還付金詐欺と架空請求詐欺をそれぞれランダムな順序で実施した．疑似体験開始前には性格特性を記録するために，BigFive の短縮版である，日本語版 Ten Item Personality Inventory (小塩, 2012) を用いて実験参加者に対して回答を求めた．また，性別，年齢も基本情報として回答を求め記録した．

実験の性質上，参加者が精神的ストレスを感じる可能性があるため，全ての実験者にあらかじめ特殊詐欺についての実験であることを伝えたうえで，参加同意書に同意を得た．なお本実験は東洋大学社会学部の倫理委員会の審査による承認を得たうえで実施された．

分析方法 参加者ごとのリスク行為の有無を目的変数とし，性格特性を説明変数とするロジスティック回帰分析を実施した．目的変数の収集では，音声認識システムで記録した架空請求詐欺の会話データからリスク行為の有無を著者らで分類し，2 値化した．分類の基準を表 1 に示す．この分類基準に従って分類したところ，観察者間一致率は，90．1% となり，基準として十分に明確であることを確認した．

説明変数には BigFive の回答結果を外向性，開放性，協調性，誠実性，神経症傾向にそれぞれ得点化し使用した．その他基本情報として性別，年齢を用いた．

表 1.　リスク行為の有無の分類基準

分類対象	分類基準
AI トレーナーの発言「お名前，生年月日を，お願いできますでしょうか？」に対する回答	回答拒否した場合や，わからない，なぜ必要か聞く等，名前も生年月日も回答はしていない場合は 0 名前か生年月日のどちらか一方でも回答した場合は 1

参加者数が 30 名とデータサイズが小さいこと，BigFive 間での相関性の高さを考慮し，それぞれの性格特性についてモデルを分けて分析した．

【結果】 ロジスティック回帰分析の結果を表 2 に示す．外向性(extraversion)の係数がマイナスの値を示しており ($p<0.05$)，外向性の高さとリスク行為の少なさとの間に有意な相関があった．その他の変数については，統計的有意性が確認できなかった．

表 2.　ロジスティック回帰分析結果

	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4	Model 5
Intercept	5.45	6.43	5.94	5.47	7.17
age	0	-0.07	-0.06	-0.03	-0.06
gender	0.42	-0.45	-0.41	-0.5	-0.34
extraversion	-0.57*				
openness		-0.11			
agreeableness			-0.12		
conscientiousness				-0.29	
neuroticism					-0.28

*$p < 0.05$

【考察】 外向性が高い人の方が生成 AI に対してリスクのある不用意な発言をしないことが示唆された．高い外向性を持つ人は，コミュニケーション能力に優れ，不用意な発言を控えることができるため，特殊詐欺の状況において個人情報を話してしまう可能性が低いと考えられる．本論文の分析によって，外向性を活用することで，特殊詐欺に対するリスクを推定できる可能性が示された．

【利益相反】 本研究は富士通株式会社の研究費で実施した．

【引用文献】

小塩真司, 阿部晋吾, Pino Cutrone：日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み，パーソナリティ研究，2012.

近野 恵，池田 妃那，井手 健太，岩崎 翔，栗井 修司，紺野 剛史，桐生 正幸: 生成 AI を活用した特殊詐欺訓練ツールの検討, HCG シンポジウム, 2023.

(いで けんた・ちかの めぐみ・こんの たけし・
きりう まさゆき)

介護・福祉共生型サービスの満足度、およびその実態について

― 広島県の介護事業所における予備的調査 ―

○木村　友昭[1)]　伊坂　裕子[2)]
([1)]MOA 健康科学センター　[2)]日本大学国際関係学部)
キーワード：高齢者、認知機能、生活の質（QOL）

【背景・目的】

広島県内にある通所型介護事業所では、自立支援につながる介助法に加え、インド発祥のヨガ健康法や、日本発祥の岡田式健康法などの考えを取り入れ、自然食の提供をはじめ、いけ花、音楽、運動、舞踊など、多彩なプログラムを実施している。2017 年の本学会において、各種プログラムに高い癒し効果が見られたことが報告され、その後論文として取りまとめられた（堀島他、2019）。また、2021 年には、さまざまな認知機能の評価方法を比較検討したところ、通所介護事業所において、高齢者の認知機能を評価する方法として、「N 式老年用精神状態尺度（NM スケール）」が適していることが報告され、論文化された（木村他、2022）。

この介護事業所は、近隣の別の場所に移転し、高齢者だけでなく一般の障がい者（生活介護）も受け入れる、いわゆる介護・福祉共生型サービスに取り組み始めている。高齢者と一般の利用者が同じ施設内でサービスを受けることで、何らかの相互作用が生ずる可能性があるが、その実態は明らかではない。そこで、介護・福祉共生型サービスを利用している高齢者や障がい者の満足度や認知能力を評価し、当サービス利用者の実態をデータ化するため、調査を実施した。

【方法】

2023 年、通所介護事業所において、介護・福祉共生型サービスの利用者を対象に調査を実施した。事前に MOA 健康科学センター倫理審査委員会の承認を得、事業所のスタッフが利用者本人およびその家族に対し、研究内容、倫理的配慮、および個人情報の保護について説明を行った。研究参加に同意した利用者は、「10 項目版 MOAQOL 調査票（MQL-10）」、および「支援サービスの満足度についての質問票」に記入した。事業所スタッフは、研究参加者の認知機能について、NM スケールと「CANDy（Conversational Assessment of Neurocognitive Dysfunction）」で評価した。

MQL-10 は包括的な QOL を測定するために開発された尺度である。合計得点は 40 点満点で、高い得点は QOL が良好であることを示している（木村他、2009）。

支援サービスの満足度についての質問票（5 件法 9 項目）は、オリジナルであり、施設、スタッフなどの満足感、サービスの効果などをから構成される。合計得点は 45 点満点で、高い得点は、満足度が高いことを示している。

NM スケールの評価は、スタッフが参加者の日常行動を観察して行った。50 点満点で、48 点以上が正常、43 点以上が境界、31 点以上が軽度、17 点以上が中等度、16 点以下が重度の認知症と判定される（小林他、1988）。

CANDy の評価は、スタッフが参加者との日常会話を通して行った。30 点満点で、得点が高いほど、認知機能が低下していることを示す。6 点以上は、認知症を疑われる（大庭他、2017）。

統計解析は、SPSS ver. 20（IBM 社）で行い、尺度間の相関は、Spearman の順位相関で分析した。また、尺度の信頼性は Cronbach の α 係数、認知症判定の一致度はカッパ係数で確認した。

【結果】

高齢者介護利用者 33 人（男性 6 人、女性 27 人、平均年齢 85.2 歳）、および生活介護利用者 14 人（男性 3 人、女性 11 人、平均年齢 47.9 歳）が研究に参加した。

MQL-10 の合計得点は、高齢者で平均 26.3 点、生活介護で平均 22.5 点であった。また、支援サービスの満足度は、高齢者で平均 40.4 点（α=0.69）、生活介護で平均 40.6 点（α=0.84）であった。

支援サービスの満足度は、高齢者において、CANDy と負の相関（*-0.40*）、NM スケールと正の相関が（*0.48*）が見られた。また、CANDy と NM スケールの間には、強い負の相関（高齢者 *-0.90*、生活介護 *-0.68*）が見られた。

高齢者において、NM スケールでは、11 人が正常、6 人が境界、7 人が軽度、6 人が中等度、3 人が重度と判定され、また、CANDy では、20 人が認知症の疑いと判定された。NM スケールの境界から重度までを認知症の疑いとみなした場合、それらの一致度は 0.74 であった。

【考察】

介護・福祉共生型サービスに対する満足度は、高齢者、一般の障がい者とも非常に高く、QOL は高齢者の方が高かった。共生型による相互作用があるかどうかは不明であるが、少なくとも共生型によるネガティブな影響は生じていないと考えられる。QOL は自己評価なので、一般の障がい者が低いという結果は妥当であるが、認知機能が低下した高齢者は過大評価する傾向があるのかもしれない。NM スケールと CANDy は、ともにスタッフによる評価なので、認知症判定における高い一致度は、妥当な結果と考えられる。今後、スタッフや利用者から聞き取りを行うなど、質的な調査を併用して、共生型サービスの実態を明らかにしていきたい。

【謝辞】

共同研究者の広島大学医学部・烏帽子田彰名誉教授、および調査に協力いただいた事業所の堀島由利氏ほか、スタッフの方々、ならびに研究に参加された利用者の皆様に、心より感謝申し上げます。

【引用文献】

堀島他　2019 通所介護サービスにおける各種プログラムの実施と利用者への癒し効果　MOA 健科報，23, 71-78.

木村他　2022　高齢者の認知機能における各種評価方法の比較検討：広島県の通所介護事業所における調査結果より　MOA 健科報，26, 3-13.

木村友昭他　2009　大規模健康調査のための QOL 尺度開発とその妥当性の検証：10 項目版 MOAQOL 調査票（MQL-10）　MOA 健科報，13, 73-84.

小林敏子他　1988　行動観察における痴呆患者の精神状態評価尺度（NM スケール）および日常生活動作能力評価尺度（N-ADL）の作成　臨床精神医学，17, 1653-1668.

大庭輝他　2017　日常会話式認知機能評価（Conversational Assessment of Neurocognitive Dysfunction; CANDy）の開発と信頼性・妥当性の検討　老年精神医阿学雑誌，28, 379-388.

（きむら　ともあき・いさか　ひろこ）

大学生の心的外傷後成長に関連するライフスタイル因子について

○田中英明[1] 伊坂裕子[2] 伊藤令枝[2] 木村友昭[1]
1)一般財団法人 MOA 健康科学センター　2)日本大学
キーワード：心的外傷後成長、ライフスタイル、スピリチュアリティ

【目的】つらい出来事を経験した人が、それをきっかけに人間として成長することを心的外傷後成長（Post Traumatic Growth, PTG）と呼ぶ（Tedeschi, 1996）。個人が置かれた状況に対し、個人が適応することを通して自己と世界観の不一致が減少し成長となる。学生から社会人になる変化をはじめ人との関係性の変化など、人生のライフイベントにより個人の性格は変化するとされている。死別や人との別れなど喪失に基づくライフイベントは強くて持続的な変化を来すことが論じられている。本研究では過去5年以内に起きたつらい出来事に基づくPTG及び、つらい出来事の種類によるPTGの差の比較、また食意識、美術文化活動に対する意識、信仰やスピリチュアリティに関わる意識とPTGとの関連を調査することを目的に実施した。

【方法】国内の一般大学生に対し便宜的抽出法を用いてウェブ形式のアンケート(Survey Monkey)への協力を依頼した。研究趣旨、参加する上での注意点などを確認し、同意を得た上で調査を行った。スマートフォンあるいはパソコンを用いてアクセスの上入力を行ったが、一部の対象者は紙面を用いて実施した。質問項目は心的外傷後成長尺度(PTGI-X-J, 25項目)、中核的信念尺度（CBI-J, 9項目）、SOC-13（5件法）、過去5年以内に起きたつらい出来事、ライフスタイル関連項目（食意識、美術文化、6問）および宗教・スピリチュアルな特性に関する質問（6問）、性別、年代、学歴であった。本研究は、MOA健康科学センターの倫理審査委員会の承認を得て実施した。

分散分析を用いて、PTGI-X-Jの平均値をつらい出来事の種類別に比較し、次に、PTGI-X-Jのそれぞれ5つの下位尺度の平均値をつらい出来事の種類別に比較した。有意な結果を示した項目では更に事後解析を行った。

次に、PTGI-X-Jの下位尺度、年齢、性別、及びライフスタイル因子、SOC-13、CBI-Jの相関分析(表1参照)を行い、相関のある項目については、PTGI-X-Jの下位尺度のそれぞれを従属変数として、年代、性別を調整因子とし、食、美術文化、信仰スピリチュアルに関する質問についてそれぞれの質問結果を合計した得点を独立変数として、多変量解析を行った。

【結果】18歳から20歳代の研究参加者が合計315名おり、その内210名（男性152、女性53、答えたくない5）の欠損のないデータを有効とした。年代は10代が82.9%、20代が17.1%であった。参加者が体験した過去5年以内のつらい出来事は「対人関係トラブル」26.2%が最も多く「仕事・職場・学業の変化や問題」21.9%「その他」15.7%と「死別」15.2%が続いた。分散分析の結果、PTGI-X-Jの2つの下位尺度「新たな可能性」と「人生に対する感謝」において有意な差が示された。Games-Howellを用いた事後解析の結果、過去5年以内のつらい出来事として「仕事・職場・学業の変化や問題」を選択した学生は「死別」を選んだ学生より「新たな可能性」の領域において有意に得点が高い事が示された。「健康行動の変化や問題」を選んだ学生は「その他」の学生と比較して「人生に対する感謝」の得点が有意に高いことが示された。

相関分析の結果、食得点、美術文化得点、そして信仰・スピリチュアル得点がPTGI-X-Jの下位尺度と有意に相関した。表1に各ライフスタイル項目とPTGI-X-Jの相関の結果を示す。また、性別と年齢を調整因子とし、PTGI-X-Jの下位尺度を従属変数として多変量解析を行った結果、「他者との関係」(0.280, p<0.01)、「新たな可能性」(0.174, p<0.05)、「人間としての強さ」(0.189, p<0.01)、「精神性的変容」(0.184, p<0.01)、「人生に対する感謝」(0.195, p<0.01)は「食得点」と有意に関連し、「人生に対する感謝」は「信仰スピリチュアル得点」(0.159, p<0.05)と有意に関連した。

【考察】「新たな可能性」の領域の成長とは、出来事をきっかけに新たな可能性が生まれてくるような変化である。「仕事・職場・学業の変化や問題」を選んだ学生が「死別」を選んだ学生より「新たな可能性」の領域における成長が大きかったことは想定できる。「健康・行動の変化や問題」を選んだ学生が「その他」を選んだ学生より「人生に対する感謝」が大きいことが示されたが、脳を損傷した患者、またガン患者を対象とした研究ではPTGの下位尺度の中で「人生に対する感謝」が最も大きく表出した事が示されている(Silva, 2012)。病気など健康状態が変化した者が自覚しやすい項目であり、本調査においても同様の結果となった。

そして、「食への感謝」、「食の楽しみ」、「新鮮で自然な食」のそれぞれの頻度を合計した得点である食得点がPTGの5つの下位尺度全てと関連する事が示された。食得点を構成する「食への感謝」「食の楽しみ」「新鮮で自然な食」は日本人が大切にする食意識のベースと考える。さらに、日本人にとっての食とは、「自然の尊重」の精神を体現した「社会的習慣」であるとされている。このことを踏まえさらにPTGを推進するライフスタイルを検討することは有意義である。

本研究の限界としては、便宜的に抽出されたサンプルであるため導かれた結果を一般に適用する事が難しい。また横断研究のため、相互作用や正確な因果関係を示すことは出来ない。研究参加者によっては記憶が正確でない場合や、正直に回答が行われていない可能性も考慮しなければならない。

表1　ライフスタスタイル項目とPTGI-X-Jの相関分

	PTGI-X-J 下位尺度				
	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ	精神性的変容	人生に対する感謝
年齢		0.144*			
食得点	0.302**	0.208**	0.217**	0.238**	0.268**
美術文化得点				0.170*	0.237**
スピ宗教得点	0.188**	0.173*		0.255**	0.251**
CBI-J	0.436**	0.495**	0.414**	0.373**	0.459**
SOC-13			0.146*	0.181*	

ピアソン相関係数　*p<0.05　**p<0.01

【利益相反】本研究に開示すべき利益相反（Conflict of Interest; COI）はありません。

【参考文献】

1. Tedeschi, R. G., et al. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. Journal of traumatic stress, 9, 455-471.
2. Silva, J., et al. (2011). Enhanced appreciation of life following acquired brain injury: Posttraumatic growth at 6 months post-discharge. Brain Impairment, 12(2), 93-104.

（たなか ひであき・いさか ひろこ・いとう よしえ・きむら ともあき）

看護系大学における臨床判断育成のための教育方法について

－教員へのインタビュー調査の分析－

○近藤奈緒子[1]　松浦均[2]　古壕典洋[2]
([1]神奈川県立よこはま看護専門学校（星槎大学大学院教育学研究科博士後期課程）　[2]星槎大学大学院教育学研究科）

キーワード：看護系大学　臨床判断育成　教育方法

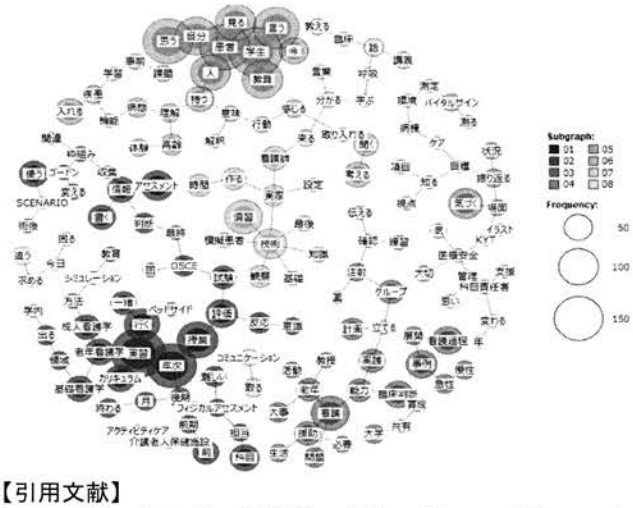
【背景と目的】 入院期間短縮化等による療養の場の拡大に伴い、チーム医療推進のもと、対象へ適切なケアが提供できる臨床判断能力を有した看護師が求められている。看護基礎教育では2022年度から新カリキュラムを実施しており、看護師養成機関における教育方法の開発を目指している。本研究では、看護師教育課程の改正に伴う3年課程看護師養成機関（看護系大学）における臨床判断を育成するための教育方法について明らかにすることを目的とする。

【方法】 1）**研究対象**：看護系大学で5年以上の教育経験がある専任教員5名。担当する看護学領域は、基礎看護学、成人看護学、老年看護学を主に担当する看護教員とした。研究対象者の選出は、機縁法（スノーボール）によるサンプリングを用いた。2）**データ収集方法**：インタビューガイド（「看護過程」を基盤としたうえで、「臨床判断」を行うための基礎的な力を育成するため、導入にあたっての意図や検討のプロセス、講義や演習における具体的な取り組み、講義・演習の臨地実習への活用）を用いた一人あたり60分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューは、研究参加者の承諾のもと、ZOOMによる動画撮影を行い、音声データから逐語録を作成した。3）**データ分析方法**：テキスト分析ソフトKH Coderオフィシャルパッケージ(Ver3.01)を用いて分析した。4）**データ収集期間**：2024年3月から同年5月　5）**倫理的配慮**：星槎大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号2023-17）を得て実施した。本研究において開示すべき利益相反（COI）はない。

【結果】 1）**研究対象者属性**：看護系大学教員5名。年齢は平均53.4歳、臨床経験年数は平均12.4年、看護基礎教育経験年数は平均18.0年、担当看護学は基礎看護学2名、成人看護学2名、老年看護学1名。2）**結果概略**：総抽出語数35,653語、出現回数10回以上の語は175語、抽出語の上位20語は次の通りである。（　）は出現回数。実習（188）、学生（180）、患者（154）、思う（153）、年次（153）、言う（133）、自分（108）、教員（105）、授業（102）、見る（100）、人（95）、看護（90）、演習（88）、行く（78）、気づく（69）、技術（69）、アセスメント（65）、評価（60）、看護過程（59）、事例（59）　3）**共起ネットワーク**（Figure1）：語の特徴を踏まえ、①各看護学カリキュラムにおけるアセスメントや判断力を促すための教育方法や評価　②事例を用いた看護過程展開と臨床判断能力育成に関する共有と模索　③学内での設定場面や臨床でのバイタルサイン測定場面から、気づきや振り返りを促進する　④疾患や病態の知識に基づいた対象理解　⑤臨床の看護師の動きや実際を想定した知識に基づく看護技術教育、を見出した。4）**クラスター分析**：出現パターンの似通った語の組み合わせについて、どのようなものがあったのか、グループを作り、以下9分類とした。①対象と関わる場面（バイタルサイン測定等）に教員や実習指導者が同行し、「今」起こっていることを学生が感じ考えることにより対象理解につなげる　②対象の生活や病態が理解できるよう、疾病の学習を授業や課題に含み看護援助へつなげる　③各看護学における実習を含む授業の配置　④学生が患者の多様な状況や場面から気づきを得、振り返りができるよう、シミュレーター等の教材の活用　⑤観察内容等の情報を記録し、その意味をアセスメントする困難さ　⑥科目担当者として講義や演習の構築及び授業評価や試験の運用　⑦臨床の看護師の動きや実際を想定し注射等の看護技術についてグループワークを通じ修得する　⑧看護過程に基づいた展開（計画・実践）と臨床判断能力育成に関する共有と模索　⑨OSCE（客観的臨床能力試験）における急性期・慢性期等事例を活用し解釈・判断の場を設ける、であった。5）**コーディングによるクロス集計**：Tanner（2006）の臨床判断モデルの4つのフェーズ（気づく・解釈する・反応する・省察する）を用いコーディングルールを設けた。4つのフェーズについて表していると思われる語句を共起ネットワークやクラスター分析の前後文章から読み込み、内容を表わしている語句をグループ化した。また、「対象を知る」、「観察・情報収集」を加え、一連の看護過程とともに抽出できるようにした。その結果、基礎看護学では「対象を知る」、「観察・情報収集」、「気づく」、「省察する」の項目が他の看護学より多く抽出され、成人看護学では、「解釈する」が多く抽出されたが、他の看護学との大差はなかった。老年看護学では、「反応する」という対象への看護実践を中心とした項目が抽出された。

【考察】 学内教育では、講義・演習において、患者の多様な状況等から気づきを得、振り返りにつなげること、そうした学習過程の基盤となる対象の生活や病態が理解できるよう、疾病について事前課題を課すなどの学習を強化していた。教育方法として、シミュレーターや模擬患者を用いたシミュレーションが多く、ロールプレイやOSCEなどが多用され、グループ単位での学習活動が多かった。臨地実習では、対象と関わる場面に教員や実習指導者等が同行し、「今」起こっていることを学生が感じ考えることにより対象理解につなげられるように教材化を図っていた。学内や臨地に共通し、対象と関わる場面を多く持ち、関わりの場面を通じ、観察を行い、気づき、生じている事象の意味を考えられるような指導を目指していた。今後は、各看護学での取り組みをもとに、臨床判断の基礎的な力の到達レベルを共有し、学生の解釈や判断を促す教育方法の検討がさらに求められると考える。

Figure 1　共起ネットワーク



【引用文献】

Tanner.C.A.（2006）.“Thinking Like a Nurse: A Research-Based Model of Clinical Judgment in Nursing”.*Journal of Nursing Education, 45 (6),* 204-211.

（こんどう なおこ・まつうら ひとし・こぼり のりひろ）

日本語版キュートアグレッション尺度作成の試み

○日髙舞子[1]
([1]東洋大学大学院 社会学研究科 社会心理学専攻)
キーワード：キュートアグレッション・攻撃欲求・感情調節

【目的】キュートアグレッション（cute aggresion）とは，かわいいものを見たときに生じる「ぎゅっと抱きしめたい」「つねりたい」というような攻撃的な欲求を指す（Aragón et al.，2015)。

Aragón et al.(2015)は，キュートアグレッションを「矛盾する感情表現（Dimorphous expressions)」の一種ではないかと推測した。矛盾する感情表現は，実際に経験した感情とは異なる表出のことであり，感情調節プロセスモデル(Gross，John，Richards，2000)では説明がしきれない感情調節方略の一つである。Aragón et al.(2015)は，キュートアグレッションを含む様々な状況下での矛盾する感情表現について，30項目の質問項目を用いて質問紙調査を行い，以上の推測が正しいか検証した。その結果，二つの因子が抽出され，キュートアグレッションに関する項目はポジティブな経験に対して生じるネガティブな感情表現と同じ因子になったことが示された。

しかしAragón et al.(2015)の行った質問調査には，課題点がある。それは，質問項目が「行動」と「感情表現・欲求」で統一されていない点である。キュートアグレッションはあくまでも「攻撃をしたいと思う」といった欲求であり，実際の行動に移したものではない。よって，行動と欲求が混在している質問項目では，キュートアグレッションについて正しく測定できない可能性がある。

そこで本研究では，これらの課題点を考慮して一部の質問項目を変更して調査を行うことを目的とした。またAragón et al.(2015)はキュートアグレッションに関する質問項目において赤ちゃんを対象とした質問を作成していたが，本研究では対象を愛玩動物（犬・猫）としているため，愛玩動物を対象としたキュートアグレッション項目も増やして調査を行った。

【方法】

参加者：18歳から63歳までの男女を対象として調査を行った。

フェイス項目：年齢，性別，ペット（犬または猫）の飼育経験の有無

質問項目：Aragón et al.(2015)が作成した矛盾する感情表現を測定する30項目から、一部項目の変更・削除・追加を行った25項目を使用した。それらについて，「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の6件法で回答を求めた。

【結果】矛盾する感情表現についての質問項目について，因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った後，因子寄与率が0.4以下だった項目を削除し，もう一度因子分析を行ったところ，三つの因子が抽出された（Table.1)。

クロンバックのα係数はどの因子においても0.8以上であった。

それぞれの因子について，第一因子を「キュートアグレッション」，第二因子を「ネガティブな経験に対するポジティブな感情表現」，第三因子を「ポジティブな経験に対するネガティブな感情表現」と名付けた。

Table1. 主因子法による因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
犬や猫を見ると対象の一部をつねりたくなる	**.808**	-.032	-.114	-.029	.601
犬や猫を見ると自分の手に力が入りそうになる	**.722**	.054	-.118	-.052	.522
赤ちゃんを見ると対象の一部をつねりたくなる	**.720**	.036	-.051	-.113	.537
犬や猫に対して「食べちゃいたい」と思うことがある	**.709**	-.013	.067	.309	.617
犬や猫を見ると手足をぎゅっとしたくなる	**.694**	-.184	.158	.006	.514
赤ちゃんを見ると自分の手に力が入りそうになる	**.691**	.094	-.180	-.225	.558
赤ちゃんを見ると手足をぎゅっとしたくなる	**.644**	-.068	.196	-.004	.497
赤ちゃんに対して「食べちゃいたい」と思うことがある	**.621**	.058	.136	.207	.521
絶望的な状況でも笑えると思う	-.010	**.809**	-.114	.169	.669
怒っている時は絶対に笑いたくない	-.103	**.807**	.026	.025	.606
悲しい状況で笑ってしまいそうになる	.079	**.784**	-.030	-.025	.663
嫌なことがあって落ち込んでいるときは、笑いたくならない	-.057	**.686**	-.130	.409	.594
不安になると笑ってしまいたくなる	-.005	**.661**	.105	-.232	.515
怒りのあまり笑いそうになる	-.053	**.654**	.177	-.201	.489
イライラしてるときにはあまり笑いたくない	.011	**.642**	.061	.122	.433
緊張から笑いそうになることがある	.139	**.537**	.041	-.388	.533
映画の最も幸せなシーンで泣きたくなる	-.088	-.035	**.795**	.041	.610
嬉し泣きをすることはない	-.031	.013	**.769**	.000	.580
自分の子どもが生まれたとしたら、泣くと思う	-.006	.013	**.745**	-.005	.552
長い間努力して何かを達成した時、涙が出そうになる	-.011	-.036	**.719**	-.112	.511
結婚式で誓いの言葉が交わされると泣きそうになる	.127	.107	**.530**	.044	.365
笑いすぎて涙が出そうになる	.074	.163	**.499**	.022	.318
ミュージシャンのライブに行って叫びたくなることはない	-.035	-.008	**.470**	-.148	.223
因子寄与	4.728	4.489	3.584	0.715	

【考察】因子分析の結果、3つの因子に分かれた。

この結果はAragón et al.(2015)とは異なるものであり，新たにキュートアグレッション因子が確認された。その要因としては，項目を変更し攻撃欲求にそろえたことが考えられる。また，日本国内と国外ではキュートアグレッションの潜在因子が異なる可能性も示されている。

今後の研究では，攻撃性や共感性との相関についても検討し，日本国内におけるキュートアグレッションの構造や生起プロセスについて解明することが必要だと考えられる。

【利益相反】本論文に関して，開示すべき利益相反（conflict of interest; COI）はない。

【引用文献】

Aragón, O. R., Clark, M. S., Dyer, R. L., & Bargh, J. A. (2015). Dimorphous Expressions of Positive Emotion: Displays of Both Care and Aggression in Response to Cute Stimuli. *Psychological Science, 26,* 259-273.

Gross, J. J., John, O. P., & Richards, J. M. (2000). The dissociation of emotion expression from emotion experience: Apersonality perspective. *Personality and Social Psychology Bulletin, 26,* 712–726.

(ひだか まいこ)

攻撃的ユーモアの受け取り方の性差について

――漫画による場面想定法を用いて――

○村田康徳　加藤佳子
（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

キーワード：ユーモア，性差，感情

【目的】

本研究では，いじめやハラスメントと関連する攻撃的ユーモアに焦点を当て，漫画による場面想定法により，攻撃的ユーモアの受け止め方の性差を明らかにすることとした。

コミュニケーションの一つであるユーモアの中でも攻撃的ユーモアは，いじめの態様別状況で最も多い「冷やかしやからかい、悪口や嫌なことを言われる。」やハラスメントにおける他者を揶揄する行為に該当し，現代の社会的課題と深く関連している。また性別におけるユーモアの表出や面白さの評定には差異があることが明らかになっており，同様に性差がユーモアの受け取り方においても観測されると考えられる。

そこで，本研究では攻撃的ユーモアの受け取り方の性差を明らかにすることを目指し,親和的意図，関係継続意思，肯定的感情および否定的感情について分析を行った。

【方法】

調査対象者： 大学生 179 名（男性：61 名，女性：118 名，平均年齢 20.61±1.54 歳）を対象にオンラインによる質問紙調査を実施した。

手続き：塚脇（2018）の研究に基づき，場面想定法による調査を実施した。全 6 コマから構成される漫画で次のようなストーリーが提示された。つまり架空の人物 A（攻撃的ユーモアの送り手）と B（受け手）が登場する場面を設定し，B が体育の授業で体育館に入るために靴を脱いだところ，靴下に穴が空いており，それを A が B に指摘するというストーリーである。漫画では，はじめに親密度（低親密度・高親密度）を示す図が示され，次に攻撃性の異なるユーモア（高攻撃性「君の人間性のように薄っぺらい靴下だね。」・低攻撃性「良いダメージ加工だね。」）が提示された。その後，質問紙調査を実施した。

調査内容：参加者には各ストーリーを読んだ後に B の立場として，次の内容について回答させた。

親和的意図：“A さんのセリフは，以下の意図がどの程度含まれていると思いますか？”と教示し「敵意的（1 点）―親和的（7 点）」の 7 件法で回答を求めた。

関係継続意思：“A さんのセリフを聞いて，あなたはどの程度関係を続けたいと思いますか？”と教示し「続けたくない（1 点）―続けたい（7 点）」の 7 件法で回答を求めた。

感情：“A さんのセリフを聞いて，あなたは以下の感情をどの程度感じますか？”との教示を与え，肯定的感情として「快調な」「嬉しい」を含む 6 項目（α＝.94），否定的感情として「むっとした」「かっとした」を含む 6 項目（α =.95）に「あてはらない（1 点）―あてはまる（4 点）」の 4 件法で回答を求めた。

分析方法：参加者間（親密度：低親密度・高親密度）×参加者内（攻撃的ユーモアの攻撃性；高攻撃性・低攻撃性）の 2 要因 4 条件の混合計画において 2 元配置分散分析をおこなった。

【結果】

男女ともに親和的意図，関係継続意思では攻撃性及び親密度による主効果が見られ，低攻撃性，高親密度において親和的意図が高く，関係継続意思も高かった。

肯定的感情，否定的感情では男女ともに攻撃性による主効果が見られ，攻撃性が低い方が肯定的感情は高く，否定的感情は低かった。

しかし親密度においては男女に違いが見られた。

すなわち，男性では肯定的感情で親密度による主効果および交互作用が見られ，単純主効果検定をおこなったところ，低攻撃性であれば，親密度が高いと肯定的感情が高かった。否定的感情については有意な効果は見られなかった。

女性では否定的感情で親密度の主効果および交互作用が見られ，単純主効果検定をおこなったところ高攻撃性の条件下であっても，親密度が高いと否定的感情が低かった。肯定的感情では有意な効果は見られなかった。

Table 1
親密度およびユーモアの攻撃性による各変数の平均値及び標準偏差と分散分析の結果（男性）

		低親密度		高親密度		合計		主効果		交互作用
		M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	攻撃性	親密度	
親和的意図	高攻撃性	2.7	1.5	3.6	1.8	3.1	1.7			
	低攻撃性	4.5	1.7	5.6	1.3	5.0	1.6	**	**	
	合計	3.6	1.3	4.6	1.3					
関係継続意思	高攻撃性	2.8	1.9	3.6	1.8	3.2	1.8			
	低攻撃性	4.1	1.7	5.4	1.3	4.7	1.7	**	**	
	合計	3.4	1.5	4.5	1.2					
肯定的感情	高攻撃性	1.4	0.5	1.7	0.7	1.5	0.6			
	低攻撃性	1.8	0.7	2.6	0.6	2.2	0.9	**	**	*
	合計	1.6	0.5	2.2	0.7					
否定的感情	高攻撃性	2.9	0.8	2.6	1.0	2.7	0.9			
	低攻撃性	1.8	0.9	1.5	0.5	1.7	0.8	**		
	合計	2.3	0.7	2.0	0.6					

*p<0.05,**p<0.01 （N＝61,低親密度=31,高親密度=30）

Table 2
親密度およびユーモアの攻撃性による各変数の平均値及び標準偏差と分散分析の結果（女性）

		低親密度		高親密度		合計		主効果		交互作用
		M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	攻撃性	親密度	
親和的意図	高攻撃性	2.5	1.5	3.5	1.6	3.0	1.6			
	低攻撃性	5.5	1.6	5.8	1.3	5.7	1.5	**	**	
	合計	4.0	1.2	4.6	1.2					
関係継続意思	高攻撃性	2.4	1.4	3.3	1.7	2.9	1.6			
	低攻撃性	5.0	1.9	5.9	1.2	5.5	1.6	**	**	
	合計	3.7	1.3	4.6	1.2					
肯定的感情	高攻撃性	1.3	0.6	1.5	0.6	1.4	0.6			
	低攻撃性	2.3	0.9	2.5	0.8	2.4	0.9	**		
	合計	1.8	0.6	2.0	0.6					
否定的感情	高攻撃性	2.9	0.8	2.4	0.8	2.7	0.8			
	低攻撃性	1.4	0.6	1.3	0.5	1.4	0.6	**	**	**
	合計	2.2	0.6	1.9	0.6					

*p<0.05,**p<0.01 （N=118,低親密度=56,高親密度=62）

【考察】

攻撃的ユーモアが引き起こす感情に関して男女の違いが見られた。すなわち男性では肯定的感情，女性では否定的感情において，親密度が高いと攻撃的ユーモアをよりポジティブに受け取る傾向が示唆された。単純主効果検定の結果は，親密度が高い相手からのユーモアでは特にそうした反応が起こることを示していた。攻撃的なユーモアが感情にどのように影響するかは，男性と女性で異なり，ユーモアの理解と感情の反応に性別が大きな役割を果たすことを示唆していた。

【利益相反】

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

塚脇 涼太(2018). 攻撃的ユーモアはポジティブな対人的機能をもつのか：相手との新密度と攻撃的ユーモアの攻撃度からの検討　対人コミュニケーション研究，(6)，13-28.

（むらた やすのり・かとう よしこ）

組織でのサポートはパワーハラスメントを低減させるのか？

—自尊感情の高い労働者の自己愛タイプに注目したインターネット調査—

○仙波亮一[1]
([1]京都橘大学経営学部)

キーワード：パワーハラスメント、自己愛タイプ、自尊感情、組織でのサポート

【問題と目的】

パワーハラスメント（以下パワハラ）低減策の検討には、パワハラの規定要因と、それを取り込んだモデルが必要であるが、それらに関する先行研究は管見の限り、見当たらない。一方、パワハラを攻撃行動と捉えると、個人が攻撃行動に至るプロセスを示したモデルに自己本位性脅威モデル（(Baumeister, Smart, & Boden, 1996)）がある。このモデルでは、自尊感情が高い人は、自己イメージが肯定的であるがゆえに、他者から否定的評価を受けると自我脅威を知覚し、攻撃行動を選択すると考えられており、仙波の一連の研究（2016, 2017, 2018, 2019）では、労働者の自己愛タイプによって、労働者のサポート認知が異なり、攻撃行動の選択に影響を及ぼすことが示唆されている。そこで、本研究では、自尊感情の高さに注目し、労働者の自我脅威の知覚がパワハラへ及ぼす影響を検討した上で、パワハラの低減について組織でのサポートの効果を探索する。

【方法】

2024年5月にインターネット調査会社に登録している、企業・団体に属する労働者 1,622 名に対して、アンケート調査を実施した。

調査項目

・**フェイスシート**：性別、年齢、職業

・**パワハラに関する項目（12項目，10件法）**：厚生労働省の職場のパワハラ6類型に基づき筆者が作成した。合計得点が高いほど、パワハラを選択する傾向にある。

・**自己愛人格目録短縮版（小塩，1998）（30項目，5件法）**：「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3因子で構成されている。因子得点が高いほど、そのタイプの自己愛が強い。

・**状態自尊心尺度（田端・池上，2011）（8項目，5件法）**：「performance」「social」の2因子で構成されている。合計得点が高いほど、自我脅威が強い。

・**自尊感情尺度邦訳版（山本・松井・山成，1982）（10項目，4件法）**：1因子で構成されている。合計得点が高いほど、自尊感情が高い。

・**部下のサポートの認知尺度（小牧,1994）（14項目，5件法）**「情緒的サポート」「道具的サポート」の2因子で構成されている。合計得点が高いほど、上司サポート認知が強い。

・**組織サポート尺度(Eisenberger *et al.*, 1986)（3項目,7件法）**：1因子で構成されている。合計得点が高いほど、組織サポート認知が強い。

分析方法

自尊感情の高さと自己愛による分類

労働者を自尊感情尺度の中央値で高低に分け、高群を分析対象とする。次に、自己愛尺度の因子得点の高さで労働者を優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性の3タイプに分類し、各自己愛タイプについて、パワハラを従属変数、性別、年齢、職業（第1ステップ）、自我脅威、組織でのサポート（上司サポート、組織サポート）（第2ステップ）、自我脅威と組織でのサポートの交差項（第3ステップ）を各ステップの独立変数として階層的重回帰分析を行う。なお、回帰分析においては、尺度の合計得点を用いる。

【結果】

主効果

優越感・有能感タイプにおいては、全ステップで回帰モデルが有意であり、全ステップで性別（β=.264, p<.01；β=.197, p<.05；β=.174, p<.05）、第2、第3ステップにおいて自我脅威（β=.342, p<.001；β=.204, p<.05）の有意な正の主効果が認められた。注目・賞賛欲求タイプにおいては、第2、第3ステップで回帰モデルが有意であり、また自我脅威の有意な正の主効果（β=.412, p<.001；β=.415, p<.01）と上司サポートの負の主効果（β=-.297, p<.05；β=-.384, p<.01）が認められた。さらに、第3ステップにおいては、組織サポートの有意な正の主効果（β=.258, p<.05）が認められた。自己主張性タイプにおいては、第2、第3ステップで回帰モデルが有意であり、自我脅威の有意な正の主効果（β=.372, p<.001；β=.407, p<.001）が認められた。

調整効果

優越感・有能感タイプにおいてのみ、第3ステップにおいて自我脅威×上司サポート×組織サポートの有意な正の調整効果（β=.251, p<.05）が認められた。

【考察】

まず、主効果については、自尊感情の高い労働者は自己愛タイプにかかわらず、自我脅威を知覚するとパワハラ傾向が高まり、自我脅威を知覚すると攻撃的な行動に向かうとする自己本位性脅威モデルを支持する結果となった。また、注目・賞賛欲求タイプは、上司サポート認知によってパワハラ傾向を弱め、組織サポート認知によってパワハラ傾向を強めることが示唆された。評価の主体が他者であるこのタイプは、上司の影響を受けやすく、上司から情緒的的及び道具的サポートを得られたことで安心感を持ち、パワハラ傾向が弱まったと考えられる。一方、組織が自分の考えを支持している場合には、それをプレッシャーに感じ、追い詰められて、パワハラに向かうと考えられる。

次に、調整効果については、優越感・有能感タイプにおいてのみ、上司サポートと組織サポートの調整効果が示された。このタイプは自分の能力に強い自信を持つがゆえに、サポート認知が行き過ぎると「サポートされなければいけない自分」が意識され、上司に対してパワハラに向かう可能性が示唆された。

本研究はJSPS科研費23K12553の助成を受けたものです。

（せんばりょういち）

「○○らしさ」の主観評価と機械学習を用いたデザイン一貫性の解析

下條朝也
（コニカミノルタ株式会社）

キーワード：消費者認知，パッケージデザイン，ブランド・アイデンティティ

【目的】商品のパッケージデザインはそのブランドアイデンティティ（以下「BI」）を反映し、消費者の購買行動に影響を与える。BI は企業の価値や特徴を視覚的に表現したもので、ロゴや色などで構成される (Kapferer, 1992)。これらの要素はブランドの価値やコンセプトを象徴し、消費者の感情や認識に影響を与える。パッケージの視覚的魅力が消費者の注意を引き、製品の品質評価を高めることが示されている (Creusen & Schoormans, 2005)。BI の一貫性は購買意欲やブランドロイヤルティの向上に寄与するが、時代やトレンドに応じて変化させる必要もある (Lindstrom, 2005)。

従来の研究では、パッケージデザインのどの要素が BI に寄与するかが検討されてきたが、この評価プロセスは評価者の主観に左右されやすく、再現性が低い (Beise-Zee, 2022)。本研究の目的は、機械学習を用いてパッケージデザインの要素を自動的に抽出し、それらが消費者のブランド認識に与える影響を定量的に分析することである。具体的には、パッケージデザインに基づいた分類モデルの中間層を Grad-CAM を用いて視覚化し、デザイン要素を抽出する。これらの要素を人間が BI の指標として注視する要因と比較し、その関連性を検証する。

【方法】本実験は、2 つの筆記具ブランド（以降「ブランド A」、「ブランド B」）のパッケージデザインを識別する分類モデルと、人間の視覚的認識との類似性を調査した。

Grad-CAM によるフィルタ視覚化　まずは、2 ブランドのパッケージデザインを識別する分類モデルを構築した。構築に用いたデータセットは、歴史が 100 年以上あり、確立された BI を持つと考えらえるブランドのパッケージ画像約 2000 枚を収集し、構築した。その際、ブランド名が表示されている場合は、該当箇所をマスキングした。このデータセットで、ImageNet で事前学習された VGG16 を学習し、ブランド A とブランド B のパッケージデザインを識別する分類モデルを構築した。データセットの 70%を訓練に使用し、残り 30%を検証に使用した。最終層の出力サイズを 2 に変更し、2000 回の訓練と検証を行った。その結果、両ブランドの識別精度は 85%を上回った。

そして、そのモデルの中間層を Grad-CAM を用いて視覚化し、分類に寄与する画像領域を特定した。Grad-CAM は、特定の出力クラスに関連する最終畳み込み層の特徴マップの勾配情報を使用して、入力画像の重要な領域をヒートマップとして表示する技術である。このヒートマップは、モデルが分類決定を行う際に注目した画像領域を示し、モデルの予測根拠を直感的に理解できるようにする。具体的には、VGG16 モデルの「block5_conv3」層のフィルタ出力を視覚化した。この層は畳み込み層の中でも出力に最も近い層であり、分類結果に大きな影響を与えると考えられる。フィルタ出力を視覚化することで、パッケージデザインのどの部分がブランド識別に重要であるかを明確にした。

人間の視覚的認識との比較　次に、AI モデルと人間の視覚的認識を比較するために実施された詳細な手順を説明する。本実験には 6 名の成人（女性 2 名、男性 4 名；年齢：39.8 ±7.9 歳）が参加した。参加者は正常な視力を持っており、ブランド A とブランド B のパッケージを 10 個ずつ提示され、各ブランドの BI を学習した。その後、参加者の頭部はモニタ画面から約 60cm 離れた位置に設置された顎置きで固定され、画像はモニタ画面全体に表示された。各参加者には、学習に使用されていないパッケージ画像 20 枚（各ブランド 10 枚ずつ）がランダムに提示され、各画像を 5 秒間注視するよう指示された。視線データは、カメラ（ELECOM UCAM-C750FBBK）とモニタ（I-O DATA KH240V-B）、視線計測ソフトウェア GazeRecorder を用いて収集された。参加者は、各画像がブランド A のパッケージであるかどうかの確信度を 0%（絶対にブランド A ではない）から 100%（絶対にブランド A である）で回答し、確信度が 70%を上回った際の視線データのみ分析に扱った。

【結果・考察】視線データから作成したヒートマップと Grad-CAM から得られたそれを比較し、人間の視覚的注意とモデルの判断の一致度を定量的に評価した。Jaccard 指数を使用して 2 つのヒートマップの類似性を測定した。Jaccard 指数は 0 から 1 までの値を持ち、値が大きくなるにつれて一致度が高くなる。視線計測データと Grad-CAM データのヒートマップを重ね合わせ、共通の注目領域のサイズと分布を定量的に評価した。具体的には、視線計測データから得られたヒートマップを視覚化し、Grad-CAM ヒートマップとピクセルレベルで比較した。画像をグレースケールで読み込み、Python スクリプトを用いてバイナライズした。これにより、共通領域（交差）と全体領域（合併）を計算し、Jaccard 指数を算出した。平均 Jaccard 指数は 0.30 であり、モデルと人間の視覚的認識には部分的に一致した（図 1）。

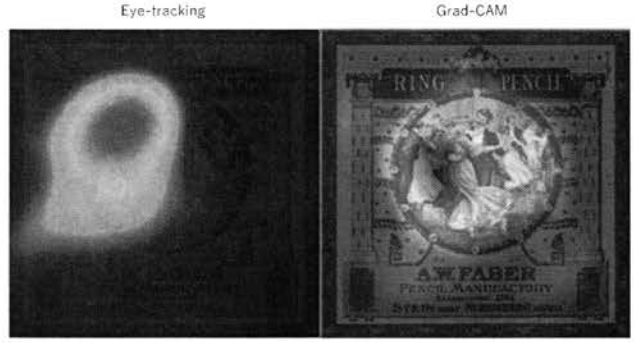


図 1. CNN 中間層の特徴量と視線データの比較例.

【利益相反】なし。

【引用文献】

Kapferer, J. (1994). *Strategic brand management: New approaches to creating and evaluating brand equity*. Simon and Schuster.

Creusen, M. E., & Schoormans, J. P. (2005). The different roles of product appearance in consumer choice. *Journal of product innovation management*, *22*(1), 63–81.

Lindstrom, M. (2005). Broad sensory branding. *Journal of Product & Brand Management*, *14*(2), 84–87.

Beise-Zee, R. (2022). Brand equity retention after rebranding: a resource-based perspective. *Journal of Brand Management*, *29*(2), 208–224.

（しもじょう あさや）

安全に関わる作業で陥りやすい認知バイアスや対策に関する知見の整理

○武内寛子[1]　寺澤孝彦[1]（非会員）　今井武文[1]（非会員）　和田一成[1]
（[1]西日本旅客鉄道株式会社　安全研究所）
キーワード：認知バイアス　判断の誤り　対策

【目的】2017年に発生した、新幹線の台車に亀裂がある状態で運転を継続した事例の調査報告書では、「列車の走行に支障がないだろう」という心理が正常性バイアスや確証バイアス等の「認知バイアス」の現れである可能性が指摘されている。また、エラー事例を社員自ら申告する報告用紙の中で「思い込み」と表現されるエラーも多く、認知バイアスは鉄道業務の様々な場面に影響する心理傾向であると言える。

認知バイアスに関する研究は数多く行われているが、上記のように産業場面では重大な事故を招きかねない現象である。そこで本研究では、産業場面で起こり得る認知バイアスに焦点を当て、これを対象とした先行研究を整理することとした。その際に、将来的に鉄道現場での認知バイアスを低減できるような対策の提案に繋げることを目指し、（1）安全に関わる作業で陥りやすい認知バイアスの傾向、（2）認知バイアスを低減する対策、の2点に関する考察を試みた。

【方法】認知バイアスに関する先行研究の中でも、対策について調査・考察している研究を中心的に収集した。その際に、理論的な観点から一般性の高い対策について考察している研究と、より実務に近い観点で対策を検討している研究の両者を調査した。後者の実務に根差した研究については、産業分野や安全に関わる分野として、鉄道、航空、自動車のドライバー、原子力、工場等の作業員の安全管理、医療、災害の7分野を選んだ。調査対象となった先行研究は、理論的な研究が2本、実務的な研究が25本である（なお、実務的な研究については、各産業場面における認知バイアスについて触れている研究のうち、陥りやすい認知バイアスや対策についても言及している研究を抽出、調査対象とした）。

【結果】

（1）安全に関わる作業で陥りやすい認知バイアスの傾向

上記の7分野の先行研究を対象とし、それぞれの文献内で影響が指摘されていた認知バイアスを抽出した。その中で、特に安全に関わる作業場面で陥りやすいと考えられる認知バイアスとして、複数の分野で影響が指摘されていた9つの認知バイアスを表1に示す。一番多く影響が指摘されていたのは確証バイアスであり、産業場面において対策が必要な課題であると認識されていることが伺えた。

また、これらの認知バイアスは表中に①②で示す2つの傾向としてまとめることができた。①は認知資源の節約のため手近な情報を利用するなどして思考のショートカットをしようとする傾向と言える。一方、②は自分に対する過信や、それによりリスクを過小評価する点が共通していると言える。

（2）認知バイアスを低減する対策

理論的な研究と実務的な研究の双方から知見を収集した結果、両者で提案されていた対策には共通するものも多く、「事前の教育」（認知バイアスの影響や対策について事前に教育することで洞察力を高めること）、「情報提供の工夫」（意思決定に必要な情報の充実やアクセシビリティの向上を図ること）、「熟慮するための思考法」（思考のマイルール（あえて反証する等）を持っておくことで安易な思考を防ぐこと）、「熟慮を促すための動機づけ」（アラームや他者の声かけにより熟慮が必要な場面であると気付かせること）、「他者による介入」（他者との会話等を通じて思考を深めること）、「ツールの活用等による認知負荷の軽減」（チェックリストの活用等により判断に伴う認知負荷を軽減すること）の6つのカテゴリーに分類することができた。

表1　複数の分野で影響が指摘されていた認知バイアス

No.	認知バイアス	内容	影響が指摘されていた文献数
1	**確証バイアス**	自分が立てた予想や人から与えられた予想が正しいかどうかを判断するときに、**予想を反証する情報ではなく、予想を確証する情報に注目し、それを重視しやすいこと**	13
2	**利用可能性ヒューリスティック**	特定の話題、概念、方法、決定を評価する際に、その人の心に**直接思い浮かぶ手短な事例に基づいて判断すること**	10
3	**楽観バイアス**	自分と同じような属性（性別、年代など）を持った他者よりも、**自分は不幸な出来事（犯罪、病気、災害など）に見舞われる可能性が低いと考えること**	9
4	**正常性バイアス**	自然災害や事故、事件などが予測される状況下にあっても、**「まだ大丈夫」「今回は大丈夫」など、都合の悪い情報を無視したり過小評価すること**	7
5	**アンカリング（調整と係留ヒューリスティック）**	先行提示された情報（アンカー）によって、後続提示された情報の判断が歪められること	7
6	**現状維持バイアス**	変化することで「何か得られるかもしれない」という期待よりも、「何か失うかもしれない」という不安の方が大きく、**非合理的に現状を維持しようとする傾向**	7
7	**コントロールの錯覚**	実際にはコントロールできていないことであっても、**あたかもコントロールできているかのように感じること**	5
② 8	**自信過剰バイアス**	**自分の知識や経験は非常に優れていると過信することにより、状況の正確な判断や対応ができなくなること**	5
① 9	**代表性ヒューリスティック**	ある事象が**典型例とどの程度似ているかや、当該のカテゴリーの代表的な特徴をどの程度備えているかといったことをもとにして**、その事象の生起頻度や生起確率を判断する方法	4

① 手近な情報を利用するなどにより、思考をショートカットしようとする傾向
② 自分に対する過信や、それによりリスクを過小評価する傾向

【考察】認知バイアスは様々な種類のものが提言されているが、安全に関わる作業においては①思考のショートカット傾向と②過信やリスクの過小評価傾向が見られやすいことが示唆された。また、①思考のショートカット傾向は誰もが同じように陥りやすい、いわば先天的な認知バイアスと言える一方で、②過信やリスクの過小評価傾向は過去の成功体験により強固になる側面がある、いわば後天的に増大する認知バイアスと言える。このことから、経験や作業への熟達度によって陥りやすい認知バイアスが異なる可能性が示唆された。

認知バイアス対策については6つのカテゴリーに分類されたが、時間的制約がある作業や単独作業においては実行が難しい対策も含まれていた。本研究ではまずは対策を広く抽出したが、鉄道現場への実装に向けては、どのような作業場面の思い込みエラーに対してどのような対策が可能であり効果が見込めるか、更なる検討が必要であると言える。

【利益相反】著者は西日本旅客鉄道株式会社の社員である。

【主要引用文献】Croskerry, P., Singhal, G., & Mameda, S. (2013). Cognitive debiasing 2: impediments to and strategies for change. *BMJ Quality & Safety*, *22*, 65-72.

（たけうち　ひろこ・てらさわ たかひこ・いまい たけふみ・わだ　かずしげ）

心理的安全性リーダーシップの現状

化学工場の課長に対する半構造化面接調査に基づく考察

○重森雅嘉[1]
([1]静岡英和学院大学短期大学部)

キーワード：心理的安全性，リーダーシップ，半構造化面接

【目的】

組織における心理的安全性の重要性の認識が高まっているが，実際に組織の心理的安全性を高める方法についての研究は少ない。本研究は組織の心理的安全性を高める方法を模索するため工場のリーダー（課長）に心理的安全性を高めるリーダーの行動に関して聞き取りを行い，心理的安全性を高める方法を検討する手掛かりを得ることを目的として行った。

【方法】

A化学プラント企業のB工場の10課のうちの6課の課長を対象に心理的安全性を高めるためのリーダーの自己評価項目(Edmondson, 2018)を元に著者が半構造化面接を行った。

被面接者：課長6名であり，平均年齢52.17歳（標準偏差3.54），平均就業年数30.00年（標準偏差3.45），当該課の平均年数2.38年（標準偏差1.91），平均課員数19.83名（標準偏差19.60，最少5名から最多45名）であった。

手順：本社の本研究担当部署の社員1名，A工場の本研究担当部署の社員1名と共に担当課の課長1名または2名に対し著者が心理的安全を高めるためのリーダーの自己評価項目(Edmondson, 2018)を元に各項目を課長が具体的に実践するための問題ややり方について聞き取りを行った。聞き取りは著者の所属大学の会議室で120分間行った。

【結果】

土台作成としての仕事の複雑さや課内・課間の連携など仕事のフレーミングや仕事の目的やヴィジョンなどの共有については，本社のホームページに載せられている自社製品のユーザーからの感想（ユーザーレポート）について話をする課長もいたが，基本的には普段の業務の中で改めて話す機会を持つことは難しい現状が明らかになった。

発言などの参加要請については，自分が正しいとは限らないことを口癖のように言っている課長もいれば，限定的であったり，難しいと感じている課長もおり，ばらつきが大きかった。また発言を促す仕組みについても聞くようにしているという課長と相手次第など限定的な課長もおり，また，聞く以上の仕組みについては明確な工夫がなされておらず，心理的安全性は全体に高くないようであった。

発言者に対する生産的対応については，傾聴はできておらずスキル訓練などがあれば受けたいという意見もあった。また発言に関する感謝もほとんど表明できていなかった。失敗対応に関してはヒヤリハット報告と回覧が主であり，そこからの学びについては明確ではない。また違反への制裁など境界を明示することについては日本の課長クラスの管理者には権限がなく厳格な対応が難しいことが明らかになった。

【考察】

土台作成に関しては普段の業務の中で話すのが難しいという意見が多かった。したがって，工場の教育のスケジュールの中に組み込むなどの機会を設ける必要があると思われる。

参加要請に関しては，意識的に行っている課長と行えていない課長の差が大きかった。会議のときにはまず問いかけるなど具体的な行動項目を作成するなど実践度の低い課長が具体的に行動に移せるような工夫が必要と考えられる。

生産的対応に関しては，課長に対する傾聴スキル訓練や感謝の言葉を述べる具体的な状況の提示や訓練，ヒヤリハット報告を元にした失敗学習の仕組みを導入する必要性が感じられた。また違反への制裁に関しては日本では課長にほとんど権限が与えられておらず的確な対応について検討する必要があることが示唆された。

【利益相反】

対象の企業から年間60万円の研究支援を受けている。

【引用文献】

Edmondson, A. C. (2018). The fearless organization: Creating psychological safety in the workplace for learning, innovation, and growth. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons. (野津智子訳，恐れのない組織，英治出版)

（しげもり　まさよし）

Table 1
心理的安全を高めるリーダーの自己評価項目(Edmondson, 2018)に基づいた半構造化面接調査の結果

			Z課	Y課(2課)	X課	W課	V課
土台作成	仕事のフレーミング	仕事の性質理解共有(複雑さ、相互依存、不確実性)	それぞれが個別業務	改めて言うことはない	余裕のある時に話	わざわざ言わない	若年者は相談箇所を把握していない
	目的を際立たせる	仕事の重要性共有(社会貢献、危機)	個別に話	ユーザーレポート	去年から話すことに	あまり話さない	企業理念への結びつきは今ひとつ
参加要請	状況的謙虚さ	すべての答えをリーダーは持っていない	口癖のように言っている	課長と課員では難しい	課長判断が正しいとは限らないと表明	1年目なので言っている	限られた人による指摘はある
		永遠の学び、謙虚であれ、好奇心を持て	口癖のように言っている	勉強会を企画	資格取得奨励	担当外の仕事にも興味を持つよう言う	年間教育計画、勉強会
	発言の仕組み	自己の意見の前に質問	相手次第	作業長、班長は不明	聞くようにしている	聞くようにしている	先に言いたいことを言わせる
		考えと懸念を引き出す仕組み			課内共有メール書き込む人は限定的		言わない人にはもう一度考えるようにいう
		心理的安全性と率直な対話(ダイアローグ)	言う人同士はできている	班長次第	課内共有メール書き込む人は限定的	ベテラン中心	
生産的対応	感謝を表す	傾聴および傾聴のサイン			できていない		
		提案者に感謝の表示	あまり言わない		言っていない	挨拶がわりに言っている	半分くらい
	失敗対応	失敗を恥ずかしいものではないとする	報告を求めている	ヒヤリハット回覧	ヒヤリハット回覧、自己経験披露	ヒヤリハット回覧	
		メンバー支援		作業長任せ	一緒にトラブル対応	しているつもり	個別に話す
	違反への制裁	やってはいけないことの明示	年に一度の工場教育	年に一度の工場教育	年に一度の工場教育	年に一度の工場教育	年に一度の工場教育
		明らかな違反に対する厳格な			やれていない		個別に注意

コンピテンシーモデルの構築におけるインタビュー技法

片岡　大輔
（株式会社日本能率協会マネジメントセンター）

キーワード：コンピテンシー　職務遂行能力　インタビュー技法

【目的】

1990 年代から日本企業の人事評価制度の改定において、「コンピテンシー」の導入が始まった。本報告は、その導入の経緯をレビューし、旧来の職能資格制度における職務遂行能力との共通点や相違点を整理するとともに、高業績者の行動を収集するためのインビュー手法について紹介を行う。

【本論】

1．コンピテンシーの人事評価制度への導入

我が国の民間企業においては、1990 年代までは、年齢（≒勤続年数）とともに賃金が増加する年功的な賃金制度を運用していた。このねらいは、成長を続ける市場においては、従業員を安定的に（直接）雇用し長期的に育成することが、適応的な人事戦略の一つであったためであると解釈できる。

そこでの人事制度は職能資格制度と呼ばれるもので、従業員の職務遂行能力を評価し処遇するものであった。月例給などの賃金を減額することは動機づけ上、不都合がある。したがって、勤続年数とともに賃金を増額するための根拠として、従業員個人の職務遂行能力は高まることはあれども、低まることはないように明示的・暗黙的に運用されていたと解釈できる。

1990 年代以降、いわゆるポストバブル（≒失われた○年の始まり）において企業は、年功的な賃金を提供し続けられなくなったと判断したようである。そこでは成果主義人事制度と呼ばれる新しい人事評価制度の導入が試みられ、年齢とともに増加する賃金の体系や配分を見直す中で、評価項目の再構成が行われた。この取り組みにおいて、従来の職務遂行能力を見直す機会となり、「コンピテンシー」概念の導入が始まったといえる（加藤（2020））。コンピテンシーは、多義的な概念であり、一律に定義することは難しい。各コンサルティングファームや研究者の定義を包括的にかつもっとも簡単に表現するとすれば、「成果をあげるための行動特性」といえる。

2．職務遂行能力とコンピテンシー

職務遂行能力とコンピテンシー項目（ここでは評価項目としてのコンピテンシーを、コンピテンシー項目と称する）の共通点としては、どちらも業績に関連する従業員の何らかの事項を評価しようとしていることがあげられる。

職務遂行能力の多くは、「○○力」といったかたちで表現される。これらは、観念的・思弁的に構成されたきらいがあり、かならずしも、心理尺度のような構成概念が定義され、信頼性・妥当性すなわち何らかのエビデンスが確認されたようなものではなく、心理尺度的な研究は不十分、もしくは研究の対象外であったと思われる。一方コンピテンシーについては米国において心理学者が研究の中心となり、実際の高業績者の成果をあげる上での行動を、インタビューや行動観察、質問紙法、エキスパートによる検討といった多様な方法を用いて収集分析している（Spencer, L., Spencer, S.（1993）.（梅津祐良, 成田攻, 横山哲夫(訳)(2011)）。高業績者とそうでない人との行動の違いを見出して分析するという点で、一種の基準関連妥当性に基づいた構成であると解釈できる。

職務遂行能力は先に述べたように、高まることはあれども、低まることはないように明示的・暗黙的に運用されていた。一方、コンピテンシー項目を人事評価で用いる場合、対象となる項目に相当する行動を十分にしている（≒コンピテンシーを十分に発揮している）年度もあれば、行動が十分でない（≒コンピテンシーを十分に発揮していない）年度があることが想定でき、賃金をコンピテンシーの発揮の程度に応じて上下させることも可能である。

3．コンピテンシーモデルの構築におけるインタビュー技法

コンピテンシーモデルの構築に特有な手法としての高業績者の行動の収集においてのインタビューがある。これはクリティカル・インシデント・メソッドもしくはビヘイビアル・イベント・インタビューとよばれるものに準じるものである。本報告者が実施している手順・質問等は次のようなものである。インタビューの対象者に対して、第１段階（自由発言段階）：「最近の成果の挙がった仕事にはどのようなものがありますか？　順を追って自由にお話しください。」　第２段階（質問段階）：（第１段階で聴取した内容で、とくに成果が挙がるかそうでないかという（クリティカルな）状況について）「○○という状況で、△△ということをしたとおっしゃいましたが、その時の経緯や、実際にどのような行動をとられたのかもう少し詳しく教えてください」（行動の詳細を確認する。例：○○という状況を□□というように認知し、△△という意図をもって、▽▽を相手に××という行動をとった）。「その行動はどのようなねらいがあったのですか」（目的・意図の確認）「とくに苦労されたことや工夫されたことはどのようなものでしたか」（その人固有の行動を探索する）。第３段階（吟味段階）：「○○という状況で、□□のような行動をとることは検討されましたか？」（想定していたコンピテンシー項目に相当するような行動をとることはあるのかを確認）　その他：「今後はどのような仕事をしていきたいですか？　何か準備をされていますか？」（今後の見通しを尋ねるとともに、将来に目を向けさせることによってインタビューをよい雰囲気で終了させる）　これらの段階は、個人実施の投影法における手法を援用したものである。

典型的には、１人の対象者当たり 60～120 分間程度の時間をかけて実施し、対象者の発言を記録し、状況・意図・行動のセットを行動項目として十数～数十個程度記述する。１つの対象職位・職種単位について十数名のインタビュー結果を得て、合計数百個程度の行動項目を収集し一覧表の形にまとめ、その内容を分析し、カテゴリーに分類して仮コンピテンシー項目とする。その後、質問紙による内容の確認、エキスパートによる検討等により仮コンピテンシー項目の修正／改良を行う。

実際の行動を分析して構成したコンピテンシーモデルの利点として期待できるとして、（１）成果を挙げるために具体的に何をしているのかを組織的に共有（≒見える化）できる　（２）人事評価において解釈や評価のばらつきが少なくなる　（３）人材の育成のフレームに適用できる　などがあげられる。これら実際の行動に基づいたコンピテンシーモデル構築の一連のプロセスは、企業の従業員にとどまらず、幅広く人材育成に活用できるものであると考える。

【引用文献】

古川久敬（編）（2002）. コンピテンシーラーニング　日本能率協会マネジメントセンター

加藤恭子（2020）コンピテンシー・モデリングに関する一考察～日本におけるモデリング・プロセスで生じる問題点～　経済集志 90, 1, 151-166

Spencer, L., Spencer, S.（1993）. Competence at work: models for superior performance. John Wiley & Sons.（梅津祐良, 成田攻, 横山哲夫(訳)(2011). コンピテンシー・マネジメントの発展（生産性出版）

（かたおか　だいすけ）

組織社会化過程における新規学卒者の同僚への自己呈示行動の役割

－縦断的データによる媒介モデルの検討－

竹内　倫和
（学習院大学経済学部）

キーワード：組織社会化、同僚への自己呈示行動、新規学卒者

【研究目的】

新規学卒就職者（以下、新規学卒者）は、入社後に組織に適応することの重要性がキャリア発達理論において指摘されている。すなわち、「組織社会化（organizational socialization）」の問題であり、組織社会化とは「新規参入者が組織の外部者から内部者への移行をしていく過程」（Bauer et al., 2007）と定義づけられる概念である。既存の組織社会化研究では新規学卒者の組織適応を促進する要因の特定が行われ、組織適応プロセスの解明に一定の貢献を果たしてきた（e.g., Takeuchi et al., 2021）。しかしながら、組織社会化研究として以下に示すような新たな視点に基づく検討の必要性を指摘することができる。

第1に、既存の組織社会化研究では、組織適応を促進する要因として、組織、個人、職場の各要因の検討がなされてきたが、近年の研究では職場要因の中でも上司や同僚といった組織内部者（organizational insiders）との関わりの中で、新規学卒者がどのように組織に適応していくのかを明らかにする必要性が指摘されている（e.g., Boulamatsi et al., 2021; Liu et al., 2022; 竹内, 2019; 2022）。

第2に、上司や同僚が新規学卒者の組織適応にいかなる役割を果たすのかに関する既存研究を概観すると、既存研究では新規学卒者を受け身の存在として捉えて検討するものが多く、新規学卒者の主体的な上司や同僚への働きかけが、上司や同僚のいかなる行動を引き出すのか、またそれら行動がその後の組織適応にいかに結びつくのかを明らかにする研究は極めて少ない点である。そのような中、Gross et al（2021）は、新規参入者の上司に対する自己呈示行動（self-presentation behavior）に着目し、新規学卒者による上司への働きかけが上司の行動にいかなる影響を及ぼすのかを検討している。しかしながら、職場における重要な組織内部者である同僚に対する新規学卒者の自己呈示行動が組織適応にいかなる影響を及ぼすのかについては明らかになっておらず、議論の余地が残されているといえる。

そこで、本研究では新規学卒者の同僚に対する自己呈示行動に着目し、その代表的概念である同僚への取り入り行動及び同僚への自己呈示行動が組織社会化過程においていかなる役割を果たすのかを明らかにすることを目的とする。とりわけ、図1のような分析枠組み及び仮説を設定し、新規学卒者の同僚への自己呈示行動から組織社会化結果へと至る影響過程について、新規学卒者に対して実施した縦断的調査データに基づき実証的検討を行う。

【方法】

（1）調査対象・方法

本研究は、民間上場企業に正規従業員として就職した大学卒及び大学院修了の新卒採用者を対象とする調査を実施した。この調査は、新卒採用者の入社時点から2ヶ月間隔で縦断的に行われた調査（入社時点のT1から2ヶ月間隔でT8調査まで）であるが、本研究では、新卒採用者の職場配属後の同僚に対する行動の影響を検討するものであるため、分析枠組みに示すような入社6ヶ月後に実施したT4調査から入社12ヶ月後に実施したT7調査までのデータを主として使用し、分析を行った。

入社6ヶ月後調査（T4調査）は、前回調査（入社4ヶ月後調査（T3調査））まで全て回答し、離職をしていない新卒採用者235人を対象に調査が実施され、離職者を除く174部の有効回答を得ることができた。入社8ヶ月後調査（T5調査）は、T4調査回答者174人を対象として実施され、離職者を除いた133部の有効回答を得た。入社10ヶ月後調査（T6調査）は、T5調査回答者133人に対して実施され、離職サンプルを除いた110部の有効回答を得た。入社12ヶ月後調査（T7調査）は、T6調査回答者110人を対象に実施され、離職者を除く93部の有効回答を得た（最終的な分析対象者）。

（2）測定尺度

同僚への自己呈示行動（T4調査）　同僚への取り入り行動は、Kumar & Bayerlein（1991）を参考にした6項目を用いた（α=.90）。同僚への自己呈示行動は、Kumar & Bayerlein（1991）を参考にした3項目を用いた（α=.87）。**同僚による育成的フィードバック（T5調査）**　Zhou & George（2001）を参考にした3項目を用いた（α=.88）。**キャリア成長（T6調査）**　Bedeian et al.（1991）を参考にした2項目を用いた（α=.85）。**組織社会化結果指標（T7調査）**　組織コミットメントは、Meyer et al.（1993）を参考にした6項目を用いた（α=.92）。転職意思はCammann et al.（1979）を参考にした2項目を用い（α=.90）、職務満足はCammann et al.（1979）を参考にした2項目を用いた（α=.74）。**統制変数（T1調査）**　性別（ダミー）、学歴（ダミー）、年齢を設定した。

【結果と考察】

分析枠組みに従い、本研究の仮説モデルに対して観測変数に基づく共分散構造分析を実施した。その結果、本研究の仮説モデルがデータとの高い適合度を有していることが確認された（NFI=.93; IFI=.96; CFI=.95; SRMR=.09）。以下、各パスについて検討を行う。

第1に、同僚への取り入り行動及び自己呈示行動と同僚からの育成的フィードバックとの関係において、取り入り行動が育成的フィードバックに対して有意な正の影響を及ぼしていることが明らかになった。しかしながら、同僚への自己呈示行動の有意な影響力は確認されなかった。従って、仮説1aは支持され、1bは棄却された。

第2に、同僚からの育成的フィードバックとキャリア成長との関係において、育成的フィードバックが有意な正の影響を与えることが確認された。従って、仮説2は支持された。

第3に、キャリア成長と組織社会化結果との関係において、キャリア成長が結果指標として設定した組織コミットメントと職務満足に対して有意な正の影響を及ぼし、転職意思に対しては有意な負の影響を及ぼしていることが示された。この結果から、仮説3は支持されたといえる。

最後に、同僚からの育成的フィードバック及びキャリア成長を介した同僚への取り入り行動から組織社会化結果に対する媒介関係を検証するために、ブートストラップ法（サンプル数=5000）による間接効果の検討を行った。その結果、上記の媒介関係における間接効果は全て有意であることが確認され、仮説4aは支持された。

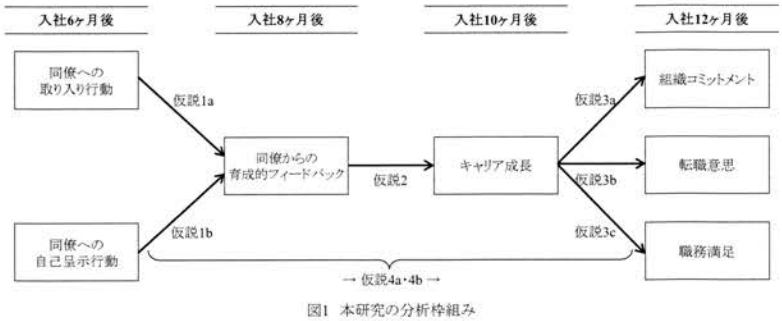


図1　本研究の分析枠組み

【利益相反】

開示すべき利益相反は特にありません。

（たけうち　ともかず）

アイデンティティを実感できる仕事の特性

—仕事に関する意識調査データの二次分析—

○能渡 真澄[1] 田中 圭[2] 能渡 綾菜[3]
([1]株式会社ビジネスリサーチラボ [2]聖徳大学心理・福祉学部 [3]筑波大学大学院人間総合科学研究科)

キーワード：アイデンティティの感覚，仕事の特性，二次分析

【目的】近年，人的資本経営やウェルビーイング経営，多様な働き方の支援など，労働者の強みの発揮や幸福を支援する機運が高まっている。労働者が幸せを実感し，強みを生かすために重要となるのがアイデンティティの感覚である。谷（2008）によれば，アイデンティティの感覚とは「私が私である」感覚であり，自分が自分である一貫性を持ち過去・現在・未来と自分が連続して繋がっている感覚（自己斉一性・連続性），他者から見られている自分の認識と本来の自分が一致している感覚（対他的同一性），自分が目指すべきものや望んでいるものが明確に意識されている感覚（対自的同一性），現実社会の中で自分自身を意味づけられる感覚（心理社会的同一性）で構成される。

経営学の領域では従業員のアイデンティティを取り上げた研究の蓄積があるが，そのほとんどは「自分は組織の一員である」というメンバーシップに焦点を当てたアイデンティティを扱っており，個人の「私が私である」感覚について取り上げた研究はほとんどない。そこで本研究は，「私が私である」アイデンティティの感覚に着目し，これを促進する仕事の特性を検討することで，労働者がより充実して働くには何が有効かを探る。

【方法】リクルートワークス研究所が2010年に実施した意識調査のデータを二次分析した*。この調査は4年制大学卒20～50代の労働者2000名を調査対象としており，本研究は正社員1200名（女性600名，$M = 39.59 \pm 11.11$ 歳）のデータを用いた。分析には，この調査で独自に構成された仕事の特性に関する設問Q20の36項目と，アイデンティティの感覚を測定する多次元自我同一性尺度（谷, 2001）を用いた。仕事の特性の質問は，「現在の仕事をしているなかで，下記のようなことはどの程度ありますか」の教示文のもと，様々な仕事の特性の文章に対して，よくある，ときどきある，どちらともいえない，あまりない，まったくないの5件法で回答するよう求めていた。多次元自我同一性尺度は，前述したアイデンティティの感覚4種を測定する尺度であった。

【結果・考察】初めに，仕事の特性36項目の背後にある概念を抽出するため，探索的因子分析を行った。平行分析の結果から5因子解を採用し，「自らリーダーシップを取る」など周囲を先導する項目からなるリーダーシップ因子，「色々試してみる」などあれこれ考えて実行に移す項目からなる創意工夫因子，「プレッシャーを感じる」など苦しい状況で働く項目からなる重圧因子，「顧客と同等に話をする」など顧客と直接交流する項目からなる顧客対応因子，「楽しさを感じる」などポジティブな感情や認識を持つ項目からなる楽しさ因子を抽出した。これら仕事の特性5因子とアイデンティティの感覚4下位概念は，それぞれに含まれる項目への回答値の平均得点を尺度得点として，分析に用いた（$\alpha s > .79$）。

次に，重回帰分析により仕事の特性と自我同一性の関連を検討した（Table 1）。アイデンティティの感覚4種をそれぞれ基準変数とし，仕事の特性5種を予測変数，さらに回答者の性別・年齢・社会人経験年数を統制変数として投入したモデルを分析した。その結果，楽しさを感じる仕事は全体的に有意な正の関連，重圧を感じる仕事は全体的に有意な負の関連がそれぞれ示された。楽しさを感じられるような仕事は，自分自身を見失ったり将来展望がなくなるような問題がなくアイデンティティの感覚が保ちやすいが，逆にプレッシャーの中で成果を追及される重圧が大きい仕事では，そのような問題が生じやすく，アイデンティティが損なわれるのかもしれない。一方，創意工夫する仕事は対自的同一性と心理社会的同一性との間に有意な正の関連，リーダーシップを発揮する仕事は自己斉一性・連続性を除いたすべての基準変数と有意な正の関連，顧客対応が求められる仕事は自己斉一性・連続性と対他的同一性との間に有意な負の関連が見られた。正社員は組織の一員としてのふるまいが期待される存在である。そのため，仕事の中でリーダーシップや創造性を発揮できることで，組織メンバーとしての将来や社会に向けた自分の可能性を実感できるのだと考えられる。しかし顧客対応は，慣れない相手との応対の中で自分を抑えて組織の一員としてふるまうことが要求され，自分を見失いやすく周囲から自分が理解されている感覚も損なわれるのかもしれない。

【利益相反】開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

谷 冬彦（2001）．青年期における同一性の感覚の構造　多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成　教育心理学研究，*49*(3), 265-273.

谷 冬彦（2008）．アイデンティティの捉え方　岡田努・榎本博明（編）自己心理学5 パーソナリティ心理学へのアプローチ（pp.6-21）金子書房

【*二次分析のデータについて】二次分析に当たり，東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「大卒20～50代の仕事における成長についての意識調査，2010」（リクルートワークス研究所）の個票データの提供を受けました。

（のと ますみ・たなか けい・のと あやな）

Table 1　重回帰分析の結果

予測変数＼基準変数	自己斉一性・連続性	対他的同一性	対自的同一性	心理社会的同一性	VIF
性別	.008	-.032	-.011	-.033	1.091
年齢	.090	.104	.202 **	.072	7.699
社会人経験年数	.031	-.016	-.087	-.035	7.746
リーダーシップ	.042	.157 **	.162 **	.166 **	2.149
創意工夫	.042	-.043	.230 **	.150 **	2.007
重圧	-.154 **	-.140 **	-.166 **	-.220 **	1.648
顧客対応	-.126 **	-.114 **	-.010	-.041	1.442
楽しさ	.273 **	.282 **	.153 **	.329 **	1.857
R^2	.113 **	.112 **	.195 **	.234 **	

注）** $p < .01$

「推し活」における活動実態とポジティブおよびネガティブ経験

－「推し活」におけるジャンルとHSP傾向の観点から－

○菅野智子[1]　山村豊[2]

([1]立正大学　[2]桜美林大学)

キーワード：推し活　推しジャンル　HSP傾向

【問題・目的】

推し活とは、一般に強く気に入った人や物を応援する、支えるといった活動全般を指す。菅野・山村(2023)によると、ヘビーな推し活は主観的に人生を変え幸福感にあふれる反面、経済的負担も大きく、社会的に望ましい人生ではないという葛藤が示された。また男性に比べ女性の方が「推し」に対して熱中し、恋愛感情や憧れを抱きやすいとの結果が得られた(菅野・山村,2024)。推しに対して憧れや生きがい、ときめきを感じ、人生が変わったという声も多く聞かれる。以上の点から、推している人や対象物が現実に接触できるか否か、(推しが3次元に存在するか2次元に存在するか)によっても推し活の活発さや推し活を通じた感情に差がある可能性がある。

推し活の活発さ感情は、対象から受け取る感覚の差や性差にも関連すると予測される。感覚の鋭さを示す気質の一つにHSP(Highly Sensitive Person)が挙げられる。HSPは「低感覚閾」「易興奮性」「美的感受性」に分けられ(高橋,2016)、男性より女性の得点が高いとされている。

本研究では推しジャンルとHSP傾向、性差による推し活の活発さと推し活を通じた感情について検討した。

【方法】

調査対象者　関東圏内の大学生214名（男性123名、女性91名、その他3名)、平均年齢18.86歳±0.96であった。

実施時期・場所　2023年4月から2023年11月にかけて関東圏内の大学の授業にて実施した。

質問項目　推し活については、菅野・山村(2023)が行った推し活に関する調査を元に、推し活に「費やす時間」、推しを「考える時間」、推しのために「使った金額」、推し活を通じて得た「ポジティブ体験」、「ネガティブ経験」の項目を用いた。

HSP傾向については高橋(2016)が作成したHighly Sensitive Person Scale(HSPS)の日本語版を用いた。全19項目、7件法で測定を行った。

手続き　調査対象者に承諾を得た上で、Google Formで作成した質問紙に回答を求めた。

【結果】

「推し活に関する調査」で「推し活をしている」と答えた121名を抽出し欠損値のない119名を分析の対象とした。

「自分の推しているジャンル」を回答してもらい、「機会があれば接触ができるか」を元に「3次元推し」と「2次元推し」に分類した。

HSPSの19項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、さらに因子負荷量が低い項目を除いて、再度、同様に因子分析を行ったところ、1因子が抽出された。

HSPSの尺度得点からZ得点を求め、高群と低群に分類した。

推しジャンルと推し活に「費やす時間」、推しを「考える時間」、推しに「使った金額」をそれぞれχ^2検定したところ、費やす時間(χ^2=12.40, df=4, p<.05)、考える時間(χ^2=12.65, df=7, p<.05)、使った金額(χ^2=12.42, df=6, p<.05)いずれも3次元推しより2次元推しの人の方が有意に高かった。

またHSP傾向においては、HSP傾向高い人ほど費やす時間(χ^2=9.45, df=4, p<.05)が長かった。

次に推しジャンルとHSP傾向を独立変数、推し活を通して経験したポジティブな経験とネガティブな経験をそれぞれ従属変数とした2元配置の分散分析を行った。その結果、ポジティブ経験($F(1, 115)$=6.16 (p<.05)とネガティブ経験($F(1, 115)$=4.78(p<.05)においてHSP傾向の高群がいずれも有意に高かった。ネガティブ経験においては2次元推しが3次元推しより高い傾向にあった($F(1, 115)$=2.96(p<.10)。

推しジャンルと性別を独立変数、推し活を通して経験したポジティブな経験とネガティブな経験をそれぞれ従属変数とした2元配置の分散分析を行った。その結果、ポジティブ経験における推しジャンルと性別の交互作用のみ有意差がみられた($F(1, 115)$=6.15 (p<.05)(図2)。

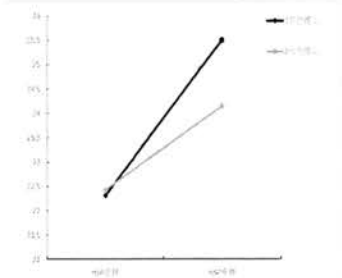


図1　推しジャンルとHSP傾向のポジティブ経験

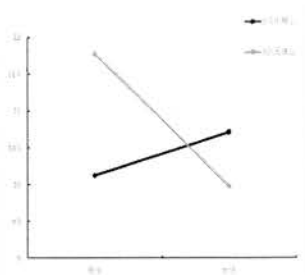


図2　推しジャンルと性別のポジティブ体験

【考察】

本研究の結果、3次元推しより2次元推しの人の方が全般的に活動時間も長く、使う金額も多かった。2次元のコンテンツのほうが3次元よりイベントサイクルが早く、供給も多いため推し活自体が忙しいと推測される。また2次元の場合、推しを3次元に「召喚」する必要があるため、推しについて想像したり散財したりと、よりヘビーな推し活になる。そのため金銭感覚や健康的な生活を失うといった、推し活中のネガティブな経験も必然的に増える傾向にあると考えられる。

またHSP傾向の高い人ほど費やす時間が長い傾向にあり、推し活を通じたポジティブ、ネガティブともに多く経験していた。おそらくHSPの特徴である「易興奮性」「美的感受性」が関わり、推し活へのポジティブ感情が高まる一方で、活動時間や機会が多い分、それに伴う代償としてネガティブな経験も多いことが示された。

ポジティブ経験において、女性では3次元推しが高く、男性では2次元推しが多かった。女性は実際にライブ等で推しを目と耳で経験し、他の人と分かちあうことで活力を得る一方、男性は現実世界より距離を置き、マイペースに推し活を楽しむ方がポジティブ感情を得やすいのかもしれない。本研究では3次元推しと2次元推しの人数に差があり、今後も人数を増やし、より多い人数での検討が必要である。

(すがのともこ・やまむらゆたか)

スマートフォン利用アプリによる適応・依存傾向の違い

― 中学生・高校生を対象にして ―

○三島 浩路
（中部大学 現代教育学部）

キーワード：スマートフォン依存，アプリ， 学校適応

【目 的】

中学生や高校生の多くはスマートフォンを日常的に利用しており，スマートフォンが日常生活に欠かせないツールとなっている生徒も多い。そうした生徒の中には，スマートフォンに依存する者もみられ，スマートフォンに依存した結果，生活リズムが乱れたり，学習活動に支障をきたしたりするなど，中学校・高等学校における生徒指導上の課題のひとつとなっている。スマートフォンは多様なアプリケーションを利用することができ，スマートフォンに対する依存の問題を考える際にも，どのようなアプリケーションを頻繁に利用しているのかにより，依存の傾向などが異なる可能性がある。

本報告では生徒が頻繁に利用しているスマートフォン用のアプリケーション（以降「アプリ」と表記）に着目し，生徒が頻繁に利用するアプリケーションの種類によって，依存傾向や学校適応感に違いがみられるのかを検討する。

【方 法】

1 **実施時期**：2022 年 6 月

2 **実施対象**：A県B市にある市立中学校 1 校と県立高等学校 1 校で調査を行った。調査協力者は 429 人（男性 179 人，女性 245 人，不明 5 人。中学生 82 人，高校生 347 人）であり，それぞれの分析に必要な項目に回答がなかった生徒は分析から除外したために，分析対象者は 389 人（男子 161 人・女子 228 人）である。

3 **調査の概要**

最頻利用アプリ：「スマートフォンで多く利用している順に以下の４つを並べてください」という教示文の後に，「LINE等によるコミュニケーション(「LINE」と表記)」・「TikTok・YouTube等の視聴(「視聴」と表記)」・「YouTube・Twitter等による情報発信(「発信」と表記)」・「ゲーム」の４つを挙げ，これらを「いちばん多い」「2番目に多い」等の順に記入する形式である。なお，今回の分析には，「いちばん多い」としてあげられた利用アプリ（以下「最頻利用アプリ」と表記）のみを使用した。

スマートフォン依存傾向：三島(2020a)が作成した６項目(例：家の中でもスマートフォンを肌身離さず持ち歩く。スマートフォンに依存していると思う）に５件法で回答する形式である。

学校適応感：三島(2020b)の学校生活に対する全般的な適応感覚を測定する「総合的適応感覚（例：学校に来るのは楽しい)」２項目，「友人関係（例：困ったことがあったら，友だちに相談する)」３項目，「学習適応（例：国語や数学など，学校で受ける授業は楽しい)」２項目の合計７項目に５件法で回答する形式である。

【結果と考察】

■最頻利用アプリによるスマホ依存傾向の違い(Table1)

最頻利用アプリ（4 種類）を独立変数，スマートフォン依存傾向尺度得点を従属変数にして分散分析を行った結果，アプリによる有意な違いがみられた($F(3, 385) = 3.26, p<.05$)。多重比較(*Tukey* の HSD)を行った結果，最頻利用アプリが「ゲーム」であった生徒は「LINE」であった生徒に比べて，依存傾向尺度得点が有意($p<.05$)に大きく，ゲーム系のアプリを頻繁に利用している生徒は依存傾向が強い可能性が示唆された。

■最頻利用アプリによる学校適応感の違い(Table1)

「総合的適応感覚」「友人関係」「学習適応」の尺度得点をそれぞれ従属変数とした分散分析を行った結果，「総合的適応感覚」($F(3, 385) = 4.57, p<.01$)および，「友人適応」($F(3, 385) = 2.99, p<.05$)に，アプリによる有意な違いがみられた。「総合的適応感覚」尺度得点について多重比較を行った結果，最頻利用アプリが「LINE」であった生徒は，それ以外の生徒に比べて「総合的適応感覚」尺度得点が有意($p<.05$)に大きかった。「友人関係」尺度得点を多重比較した結果，最頻利用アプリが「LINE」であった生徒は「発信」であった生徒に比べて，「友人関係」尺度得点が有意($p<.05$)に大きかった。

以上の結果から，頻繁に利用するアプリにより学校適応感に違いが生じる可能性があることが示唆された。

Table1 最頻利用アプリごとの依存傾向・学校適応感尺度得点の平均値とS.D.

最頻利用アプリ		LINE等	Tiktok等視聴	Youtube等発信	ゲーム
n		79	229	25	56
スマートフォン依存傾向	平均	2.68	2.93	2.92	3.10
	S.D.	0.84	0.80	0.84	0.84
総合的適応感覚	平均	3.98	3.65	3.34	3.52
	S.D.	0.86	0.89	1.03	1.10
友人適応	平均	3.72	3.61	3.23	3.46
	S.D.	0.77	0.80	0.94	0.76
学習適応	平均	3.94	3.83	3.84	3.84
	S.D.	0.67	0.64	0.76	0.67

【文 献】

三島浩路（2020a）．スマートフォン依存傾向に関連する要因－日常生活に対する主観的評価と自己意識との関連 応用心理学研究, 46(1), 1-10.

三島浩路(2020b)．スマートフォン依存傾向と学校適応の関連 （中部大学)現代教育学部紀要, 12, 41-46.

■本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号 21K03036）によるものである。

（みしま こうじ）

アタッチメントとマンガ読書に関する日中比較調査

マンガ読書を情動焦点型コーピングとして用いようとする意図やその頻度について

○中尾達馬[1]　李同归[2,3]（非会員）
（[1]琉球大学教育学部　[2]北京大学心理与认知科学学院　[3]行为与心理健康北京市重点实验室）

キーワード：アタッチメント　マンガ読書　日中比較

日本文化のことを考える際に，マンガやアニメがはじめに思い浮かぶという外国人は多い（Ro, 2019）。しかし，アタッチメントとマンガ読書との関連性について，実証的に検討した研究は数少ない（数少ない研究例：三宅・瀧下, 2000; Pimienta, 2022）。そのため，たとえば，次のような予測に対する実証的検討は，今までにほとんど行われていない：気晴らしの一環としてマンガを読む人は多い（白石，2024）。気晴らしは情動焦点型コーピングの一種である（高屋・長谷川，2010）。アタッチメント不安が高いほど，情動焦点型コーピングを行いやすい（Mikulincer & Shaver, 2016）。これらの知見を踏まえると，アタッチメント不安が高いほど，マンガを読む頻度が多い，あるいは，気晴らしの意図を持ってマンガを読むであろう。

そこで本研究の目的は，(a)マンガを読む頻度，マンガを読む理由，(b)アタッチメントスタイルによるマンガを読む頻度やマンガを読む意図の違い，における日中大学生の違いを明らかにすることであった。

【方法】

調査協力者　調査協力者は，沖縄県の大学に通う日本人大学生 158 名と北京の大学に通う中国人大学生 779 名であった。この内，恋愛経験のある者は，日本人大学生 84 名（M=18.9，男性 34 名，女性 50 名），中国人大学生 453 名（M=19.64，男性 314 名，女性 139 名）であった。

質問紙　質問紙は人口統計的質問（学部，学年，年齢，性別，恋人の有無）と以下の尺度から構成されていた。

マンガ読書頻度（日頃）（Pimienta, 2022）　日本語版・中国語版の作成は発表者たちが行った（1 項目・7 件法）。

アタッチメント不安・アタッチメント回避（以下，「不安」「回避」，ECR; Brennan et al., 1998）　日本語版は中尾・加藤（2004），中国語版は李・加藤（2006）を用いた（36 項目・7 件法）。

マンガ読書頻度（ポジティブ）：ポジティブな読書効果と関連するテーマやストーリーを含むマンガを読む頻度（白石，2024）　日本語版は白石（2024）を用い，中国語版は第 2 著者が中国語訳を行った（15 項目・5 件法）。

マンガ読書意図：抑うつ予防との関連が示唆されたマンガを読もうとする意図の程度（白石，2024）　日本語版は白石（2024）を用い，中国語版は第 2 著者が中国語訳を行った（9 項目・5 件法）。

手続き・COI　2024 年 5−6 月に web 調査を実施した。本研究に関して開示すべき利益相反はない。

【結果と考察】

はじめに，先行研究に基づき，各下位尺度得点（加算平均値）を算出した。α 係数は，日本人大学生＝.79—.96，中国人大学生＝.76—.97 と十分な内的整合性が得られた。

日本人大学生と中国人大学生を独立変数とし，マンガ関連尺度の得点を従属変数とする t 検定を実施した（Table 1）。その結果，日本人大学生は，中国人大学生に比べて，マンガ読書頻度（日頃，ポジティブ），マンガ読書意図（ポジティブ）の得点が有意に高かった。

Table 1 各下位尺度得点における日中比較

	日本		中国		
	M	SD	M	SD	t 値
マンガ読書頻度（日頃）	4.00	2.15	2.69	1.59	8.85
マンガ読書頻度（ポジティブ）	3.50	1.17	2.20	0.94	15.15
マンガ読書意図（ポジティブ）	2.81	1.15	2.43	1.03	4.12

注）Nは，日本＝157，中国＝779，t 検定の df は 934，t 検定の結果は全て p<.01 であった。

情動焦点型コーピングとしてマンガ読書を用いる頻度や用いようとする意図における日中の違いは，文化差ではなく，日頃マンガをどのくらい読むのかという日常的なマンガ読書習慣に左右されるという可能性がある。そこで，2 値変数（日本＝1，中国=2）とマンガ読書頻度（ポジティブ）やマンガ読書意図（ポジティブ）との偏相関係数を算出した（制御変数：マンガ読書頻度［日頃］）。その結果，0 次相関は，それぞれ r=−.44**，−.13**，−.28**，偏相関係数は，それぞれ r=−.36**，.03 であった。すなわち，日本人大学生は，中国人大学生に比べて，日頃のマンガ読書頻度を統計的に統制しても，マンガ読書を情動焦点型コーピングとして用いようとするし，実際にそうしていた。

恋愛経験のある日本人大学生と中国人大学生それぞれにおいて，アタッチメントスタイルと各下位尺度得点との間の相関係数を算出した（Table 2）。その結果，日本人大学生と中国人大学生は，共通して，「不安」とマンガ読書意図（ポジティブ）との間に有意な正の相関があった。したがって，本研究の予測は支持され，アタッチメントとマンガ読書との関連性においても，「不安」が高いほど，情動焦点型コーピングを行いやすいという先行研究の知見（Mikulincer & Shaver, 2016）と一致する結果が得られたと考えられる。

Table 2 日中におけるアタッチメントとマンガ関連尺度との相関

	日本		中国	
下位尺度	「不安」	「回避」	「不安」	「回避」
マンガ読書頻度（日頃）	.07	.08	.16**	.09*
マンガ読書頻度（ポジティブ）	.08	.09	.18**	.10*
マンガ読書意図（ポジティブ）	.29**	.22*	.26**	.05

注）Nは，日本＝82,中国＝453，**p<.01，*p<.05 であった。

Table 2 では，日本においてのみ，「回避」とマンガ読書意図（ポジティブ）との間に有意な正の相関が得られた。このことは，マンガ読書を日頃からよく行う文化圏であるからこそ，「不安」が高い人だけでなく「回避」が高い人においても，マンガ読書を情緒的コーピングとして用いようとする意図が高くなったのではないだろうか。

Main（1990）は，安定型が行うアタッチメント行動を「主要な一次的方略」，とらわれ型や回避型が行う過活性化方略や不活性化方略を「二次的方略」と読んだ。マンガ読書は，もしかしたら日中の大学生においては，「主要な一次的方略」がうまくいかない際に，「二次的方略」と併用して用いられる代表的な情動焦点型コーピングの一種なのかもしれない。

（なかお たつま・り とき）

保育所の預け時における子どもの不安低減要因についての考察

― 母親のアタッチメント傾向との関連を中心に ―

○山口舞
（東京大学大学院教育学研究科）

キーワード：預かり場面，登園場面，親子分離，アタッチメント

【目的】保育所における預け時（登園時における親子分離時のこと、以下分離時とする）は、親子ともに不安を抱きやすい場面であると筆者は考える。分離時の子どもに対する親の対応には、親自身の要因と子どもの要因だけでなく親子関係など、さまざまな要因が複雑に絡んでいる。本研究では、特に母親自身の要因に焦点を当てる。方法1では、母親自身の要因や分離時の状況を聴取し、整理していく。方法2では、客観的な指標を用いてアタッチメントとの関連を探る。母親のアタッチメントに着目しながら、子どもが親と分離する際の不安低減要因を考察することを目的とする。

前回の大会では、母親の言葉かけを中心に発表したが、今回はより総合的に子どもの不安低減の要因を探ったものを発表する。

【方法1】面接調査

調査対象：母親9名
調査時期：2023年1月～4月
調査方法：半構造化面接（対面またはzoom）
質問項目：子どもの特徴、保育所の分離時の状況、日頃の子育ての状況、母親の幼少期の記憶など
分析手続：逐語による言語データを分節化し、分類した

【結果1】

1）分離時の子どもの状況と母親の言葉かけ

子どもが後の行動を予測し、見通しがもてるような言葉かけは、多くの母親が使用しており、子どもの不安を低減。

2）分離時の子どもの状況と母親の感情

罪悪感や心配など、母親が涙を流すほど強い否定的感情をもつ場合、分離時の子どもの状況は不安定。

3）分離時の子どもの状況と日頃の子育ての状況

①スキンシップ

・子どもが不安な時（分離時など）にスキンシップをする場合、子どもの分離時の不安は低減。
・子どもとゆったり時間がとれる時（就寝前など）のみスキンシップをする場合、分離時の子どもの状況は不安定。

②家庭での遊び・生活

・母親にとって手間のかかる遊び（絵の具など）でも、子どものやりたい遊びを尊重する母親の場合、子どもの分離時の不安は低減。
・親やきょうだいの都合で子どもの遊びを制限することが多い場合、分離時の子どもの状況は不安定。

4）分離時の子どもの状況と母親の幼少期の記憶

・過去に、分離時の突発的で強い否定的記憶（事故による母親の入院など）の記憶をもつ母親の場合、現在の分離時の子どもの状況は不安定。
・過去に、分離時の日常的な否定的記憶（友だちとのトラブルによる行き渋りなど）の記憶をもつ母親の場合、現在の分離時の子どもの状況とは関連が見られない。

【考察1】

子どもの分離時の不安低減には、不安な子どもの心に思いを馳せて、親が敏感で応答的に対応することが大切であると感じられる。そしてそれは、分離時だけでなく日頃の子育ての中でも大切にしていく必要があるといえる。

【方法2】質問紙調査

調査対象：方法1の母親9名
調査時期：2023年1月～5月
調査方法：方法1終了後WEB上で質問紙を配布、回収した
使用尺度：ECR-GO［愛着測定尺度一般他者版］（中尾・加藤，2004）
分析手続：「見捨てられ不安」「親密性の回避」の得点を算出し、面接内容との関連性を探った

【結果2】

アタッチメント傾向が安定的な母親（「見捨てられ不安」「親密性の回避」の得点がともに中尾・加藤（2004）の一般平均よりも低い）の特徴について整理する。

1）分離時の子どもへの言葉かけのバリエーションが多い

調査対象者の中で相対的に最もアタッチメントが安定的な母親は、子どもが見通しをもてるような言葉かけのほか、「寂しいよね」など感情に共感する言葉かけや「幼稚園で昨日の遊びの続きができるね」など前日から翌日の幼稚園での遊びをつなぎ、期待感がもてるような言葉かけもしていた。

2）過去の否定的記憶を建設的な方法で現在に生かす

幼少期に「幼稚園に行きたくない理由を親が聞いてくれなかった」という否定的記憶をもつ母親は、その記憶を生かして現在は「子どもの気持ちを聞くこと」を子育てにおいて大切にしていた。子どもが分離を嫌がった際には気持ちを聞いて原因を把握し、すぐに対応することで不安を低減していた。

3）父親や他者を頼る（相談相手が複数存在する）

母親が家事・育児の負担に耐えられないことを父親に伝えて頼った結果、父親が変わった。母親の心に余裕ができた時期と、子どもの分離時の不安が低減した時期が一致していた。

【考察2】

母親のアタッチメントの安定性は、その時々の子どもの不安や周囲の状況に臨機応変に対応できる力、否定的記憶を教訓として現在の子育てに生かす力、他者をポジティブに信頼して助けを求める力と密接な関係があり、それらが保育所における子どもの分離時の不安低減にも繋がる場合があるようだった。

今回の発表では母親に焦点を当てたが、昨今は父親が保育所の送り迎えをするケースも多い。今後、父親の面接調査も実施し、父親から聴取した内容と父親のアタッチメント傾向との関連も合わせながら、さらに分析を重ねて検討する予定である。また、本発表では触れていないが、母親への面接調査では、分離時と合わせて再会時の状況（保育所の降園時において親子が再会する時）や保育者の対応に関する聴取も行なっている。それらの結果に関する分析も引き続き行なっていく。

【引用文献】

中尾 達馬・加藤 和生(2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究, *5*, 19-27.

（やまぐち まい）

幼児における身振りと空間認知能力が歌唱に及ぼす影響

○金山英莉花[1, 2]　内山伊知郎[3]
([1]同志社大学大学院心理学研究科　[2]独立行政法人日本学術振興会　[3]同志社大学心理学部)
キーワード：歌唱　身振り　空間認知能力　幼児

【目的】

幼児教育の歌唱活動では，子どもが思い思いの表現を楽しんでいるが，小学校の音楽の授業では歌唱の技能を身に着けることも重視される。しかし，幼稚園教諭や保育士は，音楽的な表現活動をする上で，幼児の個人差や能力の違いに指導や援助の難しさを感じている(横井，2011)。歌唱の技術が様々である幼児に対し，保育者はどのような支援ができるだろうか。

その支援の方法として音高の上がり下がりと一致した身振りがあげられる。幼児は旋律を知覚する際，絶対的な音高よりも音高の上がり下がりを手がかりとしている(Dowling, 1982)。また，Liao(2008)は5，6歳の幼児を対象に，旋律を歌う時身振りをすることで，正確な音程で歌唱できることを確認した。しかし，身振りの効果がどのような幼児に対してより効果的かは確認されていない。

音高の上がり下がりは空間的情報として処理され(Mikumo,1999)，空間認知能力が高い幼児の方が正確な音程で歌唱できることが確認されている(金山・内山，2023)。本研究の目的は，身振りが歌唱に及ぼす影響が幼児の空間認知能力によってどのように異なるかを検討することである。

【方法】

分析対象児　京都市内にある幼稚園の年長児55名（男児26名，女児29名，M = 6.39歳, SD = 0.27歳）を対象とした。

空間認知能力テスト　空間認知能力を測る課題としてWPPSI-Ⅲ知能検査の積木模様課題を用いた。40点満点で算出した。

歌唱テスト　参加児に動画を提示した。動画には身振りをする人物モデルが3回提示された。そのうち1，2回目は歌声も提示され，3回目は歌声を提示しなかった。参加児には，1回目は身振りをしながら歌声を聞き，2回目は身振りをし歌声を聞きながら同時に歌い，3回目は身振りをしながら1人で歌うよう教示した。3回目に参加児が歌った声を評定対象とした。参加児の声は録音し，後日評定を行った。

身振り　実験群は，音程が上がったら手が上，音程が下がったら手が下のように，音高の上がり下がりと一致した身振りであった。統制群は音高の上がり下がりと関係なく常に一定の位置で手を動かす身振りであった。

歌唱テスト評定　評定者は音楽学士号所持者2名であった。音高の上がり下がりが，提示した歌声と同じか否かを採点基準とした。1試行につき3点満点で，全4試行あり合計12点満点で採点した。2名の評定者のケンドールの一致係数を算出した結果，4試行すべてにおいて十分な値が確認された(W > .90 p < .001)。

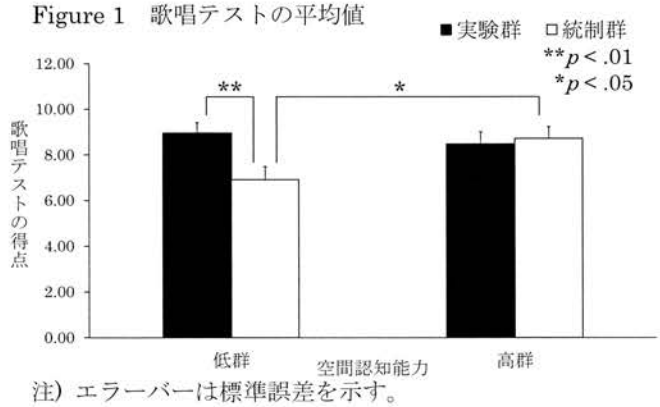
手続き　幼稚園の1室で1名ずつ行った。参加児とラポールを形成した後，空間認知能力テスト，歌唱テストの順番で行った。

【結果】

空間認知能力テストの平均点（M = 31.31）を基準に空間認知能力低群と高群に分け，空間認知能力と身振りを独立変数，歌唱テストの得点を従属変数とした2要因分散分析を行った（Figure 1)。その結果，身振りの主効果が有意傾向($F(1, 51) = 2.882$, $p = .096$, $\eta_p^2 = .053$)，交互作用が有意であった($F(1, 51) = 4.753$, $p = .034$, $\eta_p^2 = .085$)。空間認知能力の主効果は有意ではなかった($F(1, 51) = 1.600$, $p = .212$, $\eta_p^2 = .030$)。

単純主効果の検定の結果，空間認知能力低群における単純主効果が有意であり，統制群よりも実験群の方が歌唱テストの得点が高かった($F(1, 51) = 7.484$, $p = .009$, $\eta_p^2 = .128$)。また，身振り統制群における単純主効果も有意であり，空間認知能力低群よりも高群の方が歌唱テストの得点が高かった($F(1, 51) = 5.447$, $p = .024$, $\eta_p^2 = .097$)。

Figure 1　歌唱テストの平均値



注）エラーバーは標準誤差を示す。

【考察】

分散分析の結果，交互作用が有意であり，空間認知能力の低い幼児においては，音高の上がり下がりと一致した身振りをした方が，音高の上がり下がりを正確に歌えることが確認された。身振りをすると空間的な情報を正確に表現したり捉えたりすることができる(Kita et al., 2003; Alibali, 2005)。空間認知能力が低い幼児は旋律を正確に知覚するのが難しいが(Kanayama et al., 2023)，身振りをすることで正確な音高の上がり下がりで歌えたと考えられる。

また，音高の上がり下がりに関係ない身振りをした場合，空間認知能力が高い幼児の方が正確に歌えることも確認された。音高の上がり下がりと一致した身振りは，空間認知能力が高くても低くても効果がみられる可能性がある。

【注】

本研究は2022年度日本応用心理学会若手会員研究奨励賞を受賞した。

【謝辞】

本研究はJST科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 JPMJFS2145の支援を受けた。

【主な引用文献】

金山英莉花・内山伊知郎. (2023). 幼児における歌唱能力と空間認知能力の関連 応用心理学研究, *49*, 34-40.

Kanayama, E., & Uchiyama I. (2023) *The Effects of Gestures and Spatial Cognitive Ability, on Melodic Recognition Performance in Childhood* [Poster presentation]. Society for Research in Child Development 2023 Biennial Meeting, Salt Lake City, USA.

（かなやま えりか・うちやま いちろう）

幼児期の子どもたちの「願い」と自己認識

―― 保育群と支援群の「3つの願い」への応答をもとに ――

○横井川美佳[1]
([1]京都市児童療育センター「なないろ」)

キーワード：幼児期の発達，「3つの願い」，自己認識

【目的】 子どもたちの発達を支援するためのアセスメントの1つに，「3つの願い」がある．元来，児童精神医学の現場でKanner（1972）が投影法として導入したものであり，子どもたちの内面に迫る指標である．田中ら（1968）は，障害児支援の現場で用い，子どもの発達の水準を理解するための指標となりうることを指摘した．近年の「3つの願い」に関する先行研究は幼稚園児や大学生を対象としており，発達に支援が必要な子どもたちを対象としたものは見られない．

そこで本研究では，保育園児と発達支援事業所を利用する児を対象として「3つの願い」を実施し，現代の子どもたちの願いの現れ方とその発達的特徴について検討し，自己認識の発達的意義を考察することを目的とした．

【方法】〔対象〕 保護者から同意が得られた，幼保連携型認定こども園に在籍する幼児（保育群）54名（男児20名，女児34名，平均月齢4歳5か月，SD：13.1か月，2歳7か月～6歳5か月），児童発達支援事業所を利用している幼児（支援群）41名（男児33名，女児8名，平均月齢5歳5か月，SD:12.3か月，2歳9か月～6歳10か月）を対象とした．

〔手続き〕 ラポール形成後「3つの願い」を実施した．「もし3つお願い事が叶うとしたらどんなことをお願いする？」と尋ねた．1つ目の回答後，「1つ目は○○だね，2つ目は何かな？」と尋ね，3つ目まで同様に実施した．支援群では新版K式発達検査2020を実施し，発達指数（DQ）を算出した．

〔分析方法〕 藤崎・麻生（2018）の分類カテゴリーに倣い，回答を分類した．なお，本研究で特徴的だと考えられた「他者の幸福」及び「主述の転倒」は別のカテゴリーとした．

〔倫理的配慮〕 本研究は京都大学大学院人間・環境学研究科人間情報研究・動物実験倫理委員会で承認を受け，協力施設と保護者の同意のもと実施した．

【結果と考察】「3つの願い」の実施ができなかった対象児（保育群1名，支援群5名）は分析から除外し，保育群53名，支援群36名を分析対象とした（表1）．支援群の分析対象児の平均DQは，94.9（SD=12.9）であった．

表1　対象児の属性（分析対象数／同意数）

年齢	3歳群 (2:7-3:5)	4歳群 (3:6-4:5)	5歳群 (4:6-5:5)	6歳群 (5:6-6:5)	計(人)
保育群	10/10	19/19	14/14	10/11	53/54
支援群	0/1	8/9	5/7	23/24	36/41

〔願い事の回答数〕 3つの願い事をすべて答えたのは，保育群の3歳群では1名（10.0%），4歳群では5名（26.3%），5歳群では10名（71.4%），6歳群では9名（90.0%），また，支援群では，4歳群では2名（25.0%），5歳群では1名（20.0%），6歳群では17名（73.9%）であった（図1）．各年齢群の回答数を*Kruskal-Wallis*検定（*Dunn-Bonferroni*法）で分析した結果，保育群では4歳群と5歳群に有意差がみられた（$r=0.48$, $p=0.038$）が，支援群では5歳群と6歳群の差が有意傾向であった（$r=0.41$, $p=0.087$）．

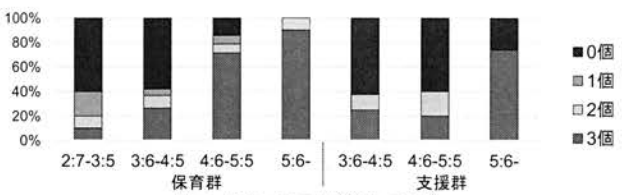


図1　願い事の回答数の割合

〔願い事の内容〕 願い事のカテゴリー分類の結果を表2に示した．表2では，3つの願いを尋ねられ，少なくとも1つで各カテゴリーを算出した人数とその割合を示した．

保育群では，「A.所有物」や「D-2 現実的欲求」など，実際に叶う可能性のある願いの回答者が50%を超えていた．また，5・6歳群になると「D-5人間関係」に関する願いを回答する児がいた．また，「お願い事」の質問に対して，片付けや手伝いなど，主述が逆転した「自分がお願いされること」の内容（Jに該当）の回答は保育群で複数見られた．

「好きなキャラクターになりたい」等D-4に該当する非現実的な回答は，保育群では10%代で推移するが，支援群では6歳群で21.7%であった．

表2 各群における「3つの願い」の回答カテゴリーの人数と割合

願い事のカテゴリー	保育群 3歳群	保育群 4歳群	保育群 5歳群	保育群 6歳群	支援群 4歳群	支援群 5歳群	支援群 6歳群
A. 所有物	3(30.0)	3(15.8)	3(21.4)	6(60.0)	1(12.5)	1(20.0)	9(39.1)
B. 社会的正義	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(4.3)
C. 将来・仕事	1(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(20.0)	4(17.4)
D. 個人的要求	1(10.0)	3(15.8)	7(50.0)	7(70.0)	0(0.0)	0(0.0)	9(39.1)
1. 一般的幸福	0(0.0)	0(0.0)	1(7.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(4.3)
2. 現実的要求	0(0.0)	1(5.3)	4(28.6)	5(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(26.1)
3. 自己変革	0(0.0)	0(0.0)	2(14.3)	2(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(8.7)
4. 自己の魔術的変化・考え	1(10.0)	2(10.5)	2(14.3)	1(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(21.7)
5. 人間関係	0(0.0)	0(0.0)	2(14.3)	3(30.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
E. 家や学校の環境の変化	0(0.0)	0(0.0)	1(7.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
F. 海外旅行・冒険・休暇	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
G. 恐怖からの回避	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(4.3)
H. その他	0(0.0)	4(21.1)	2(14.3)	0(0.0)	2(25.0)	0(0.0)	1(4.3)
I. なし・わからない	5(50.0)	10(52.6)	1(7.1)	0(0.0)	6(75.0)	4(80.0)	6(26.1)
J. 主述の逆転	0(0.0)	3(15.8)	2(14.3)	2(20.0)	1(12.5)	0(0.0)	0(0.0)
K. 他者の幸福	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(8.7)

※()内は保育群・支援群それぞれの年齢群の総数に対するパーセンテージを示す．

【考察】 保育群では4歳半以降に回答数が有意に増えており，内容も現実的な願いが多く見られた．現実と空想の理解や自己認識が深まり，目の前にない物事と結びつけて「願い」として伝える力がこの時期に飛躍すると考えられる．一方，支援群では6歳群でも非現実的な願いが聞かれ，「いま，ここ」にいる自分の認識を深める支援の必要性が示唆された．

一方，保育群で「お願い事」を「自分がお願いされること」と理解する児が複数いた．また，支援群ではDQに関わらず，年齢が上がっても願いを表出しにくい児が多くいた．質問の意図理解の難しさが原因だと考えられるが，その背景に，日常生活で「お願いされること」，つまり受動的な活動や大人の指示による行動の多さがあることが推察される．

子どもたちは自発的・能動的・主体的に取り組める課題や活動によって自己認識を深めることができる．保育や療育においては，自分自身の価値を実感して「こうありたい」という願いが生まれるよう支援することが重要であろう．

【引用文献】

藤崎亜由子・麻生武（2018）．就学前児はどのような「願い」を持っているのか―「3つの願い」という方法を用いて―．子ども社会研究，*24*，95-113.

Kanner, L. (1972). *Child Psychiatry: Fourth edition.* Springfield, Illinois: Charles C Thomas Publisher.
（黒丸正四郎・牧田清志（訳）．（1974）．カナー児童精神医学 第4版．東京：医学書院．）

田中昌人・田中杉恵（1968）．「精神薄弱児」研究の方法論的検討．財団法人大木会・心身障害者福祉問題総合研究所．

【利益相反】 本研究に関し，開示すべき利益相反はない．

（よこいがわ みか）

夫婦関係と幼児期のアタッチメント安定性との関連

○福田佳織[1]　森下葉子[2]　尾形和男[3]
([1]東洋学園大学　[2]文京学院大学　[3]放送大学)

キーワード：アタッチメント安定性　夫婦関係　幼児

【問題と目的】夫婦関係と親に対する子どものアタッチメント安定性間には関連が見られると言われる(例えば、福田, 2004；数井ら, 1996)。ただし、こうした研究は母子関係に焦点化されたものが多い。しかし、Lamb(2010)は、父親と子どもの相互作用が父親への子どものアタッチメントの質を決定づけると報告しており、近年では父親の子育て関与も高まっていることから、父子関係にも着目する必要性が高まっているといえる。そこで本研究では、父親、母親それぞれが認知する夫婦関係満足度が幼児のアタッチメント安定性とどう関連しているかを検討することを目的とする。

【方法】(1)**対象者**：関東圏在住で、離乳食開始期～生後9ヵ月に離乳食場面の観察後、幼児期にアタッチメント測定に参加した12家族24組(父子12組、母子12組)である。対象児の平均月齢は、コロナ禍前後の対象；26ヵ月、コロナ禍による調査延長後の対象；62ヵ月であった。父親は20代が2名、30代が6名、40代が4名、母親は20代が2名、30代が7名、40代が3名であった。(2)**調査期間**：2017年9月～2024年3月に調査を実施した（なお、2020年3月～2023年2月は調査中止)。(3)**調査手続き**：①離乳期の調査に参加した家庭に、対象児が2歳前後の時点（コロナ禍による調査延長ケースの対象児3名は4，5歳時点）で再度連絡し調査の了承を得た家庭に、第一および第二執筆者の2名で家庭訪問観察によるAQSを実施するとともに、夫婦関係満足度(MDAS)を含む質問紙調査を実施した。(4)**分析**：サンプル数が小さいため、父親、母親に対するAQSと父親、母親が認知する夫婦関係満足度との相関分析（偏相関分析）を行った。なお、対象児の月齢とAQS得点との相関は見られなかった(対母親 r=.-351, n.s.; 対父親 r=-.247, n.s.)が、対象児の月齢と夫婦関係満足度間には、母親認知の夫婦関係満足度との間に有意傾向の相関が見られた(r=-.511, p<.10)ため、偏相関分析の際に対象児の月齢を制御することとする。

【結果】(1) **父親・母親が認知する夫婦関係満足度**

夫婦関係満足度の平均値(SD)は、父親が129.25(23.48)、レンジ94～155、母親が120.58 (39.85)、レンジ43～169であった。夫婦間の差は、t=-.851(11), n.s.で有意差が見られなかった。

(2) 父親・母親が認知する夫婦関係満足度と幼児のアタッチメント安定性との関連

父親、母親それぞれが認知する夫婦関係満足度と幼児期の父親、母親へのアタッチメント安定性との相関分析を行ったところ、対父親、対母親アタッチメント安定性間に有意な相関(r=.617, p<.05)が見られたため、上記の対象児の月齢の他にそれぞれのアタッチメント安定性を制御した偏相関分析を行った。対父親アタッチメント安定性・対象児月齢を制御した、父親、母親認知夫婦関係と対母親アタッチメント安定性との偏相関分析においては、有意な相関は示されなかった(それぞれ、r=-.018, n.s.; r=.028, n.s.)。対母親アタッチメント安定性・対象児月齢を制御した、父親、母親認知夫婦関係と対父親アタッチメント安定性との偏相関分析においては、サンプル数の少なさから有意な相関は示されなかったものの(それぞれ、r=-.543, n.s.; r=.498, n.s.)、相関係数としては、ある程度の相関関係が示された。このことから、母親に対するアタッチメントに関しては、父親、母親が認知する夫婦関係による影響は見られなかったが、父親に対するアタッチメント安定性に関しては、父親が認知する夫婦関係満足度が低いほど、母親が認知する夫婦関係満足度が高いほど、アタッチメント安定性が高くなる可能性が示された。

【考察】本研究の結果の解釈として、下記の2つの可能性が考えられる。①父親が家事育児に多くのエネルギーを注いだことにより、父親の夫婦関係満足度は低下したものの、母親の満足度が高まった。そして、父親の育児への関与の高さが、幼児とのアタッチメント安定性を高める方向に働いたということである。育児期の夫婦関係研究に関する文献レビューを行った田中(2017)によれば、夫婦関係満足度は男女差があり，夫よりも妻の方が満足度は低下するが、結婚初期には夫の平日の家事育児時間、休日の家事育児時間が妻の満足度を上昇させるという。同様に、Amato et al., (2003)も、夫の家事分担の増加は妻の結婚満足度を高めるとしている。しかし、その一方で、夫の結婚満足度を低下させるとも指摘している。②もともと夫婦関係に満足していない夫が、子どもとの関係形成に注力した。そして、上記同様、父親が育児に多くのエネルギーを注いでいることが母親の夫婦関係満足度を高めたということである。Nakagawa [Kazui], Teti, & Lamb (1992)では、夫婦関係の満足度が低い傾向にある母親の子どものアタッチメントが相対的に高くなると報告している。同様のことが父親にも生起した可能性も否定できない。

しかしながら、父親の夫婦関係満足度が幼児と父親の相互作用の質を高める(Bernier, er al., 2014)とする研究もあることから、さらにケースを増やして分析を進めていく必要があると考えられる。

【利益相反】利益相反(conflict of interest; COI)なし。

【引用文献】

Amato, P. R., Johnson, D.R., Booth, A., & Rogers, S. J. (2003). "Continuity and change in marital quality between 1980 and 2000". Journal of marriage and family, 65(1), 1-22.

Annie Bernier, Véronique Jarry-Boileau, Carl Lacharité (2014). Marital satisfaction and quality of father-child interactions: the moderating role of child gender. The Journal of genetic psychology, 175(1-2), 105-117.

福田佳織. (2004). 母親の乳児に対する敏感性と夫婦関係，ソーシャルサポート，乳児の気質との関連. 学校教育学研究論集, 9, 1-13

数井みゆき・無藤隆・園田菜摘. (1992). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について　発達心理学研究, 7(1), 31-40

Lamb, M. E. (2010). How do fathers influence children's development? Let me count the ways. In M. E. Lamb (Ed.), The role of the father in child development (5th ed., pp. 1–26). John Wiley & Sons.

Nakagawa〔Kazui〕, M., Teti, D. M., & Lamb, M. E. (1992). An ecological study of child-mother attachment among Japanese sojourners in the United States. Developmental Psychology, 28, 584-592.

田中恵子. (2017). 育児期の夫婦関係研究に関する文献レビュー　大和大学研究紀要, 3, 3-9

（ふくだ かおり・もりした ようこ・おがた かずお）

2歳児クラスの幼児の気質と従順性と，母親としての自己効力感との関連

○岡村歩果[1]，内山伊知郎[2]
([1]同志社大学大学院心理学研究科　[2]同志社大学心理学部)
キーワード：自己効力感　気質　従順性　積み木遊び場面

【目的】

昨今の子育て現場では，母親は様々な困難を抱えながら育児を行っている。子どもの生得的な行動特徴である気質による育てにくさは，母親の育児ストレスや否定的な養育態度に影響を及ぼすことが指摘されており(園田, 2012)，子どもの持つ特性も母親の育児困難感の一因となっている。

親の抑うつの予防や育児負担感の低減には，子育てにおける自己効力感が有効であることが示されている(若本, 2013)。自己効力感とは，ある行動を遂行することができる，という自分の可能性の認知と定義されており，自己効力感が高いほど実際にその行動を遂行することができる傾向にある(Bandura, 1997)。

母親が自分の行動を遂行できるだろうという認知を高めるためには，子どもが母親の指示にどれだけ従うか，すなわち従順性が重要となる。幼児の従順性は片付け課題における従順行動・不従順行動の観察で評定することができる(坂上他, 2016)。

質問紙や面接によって幼児の気質と母親の自己効力感の関連を検討する研究は存在するが(eg, 村中, 2004)，幼児の行動評定による従順性という変数を加えた研究は行われていない。そこで本研究の目的は，2歳児クラスの幼児の気質と従順性と，母親としての自己効力感の3者の関連を検討することとする。

【方法】

分析対象者　京都市内にある幼稚園 2 歳児クラスの幼児 23 名(男児 10 名，女児 13 名，M = 37 ヶ月，SD = 3.05 ヶ月)とその母親(M = 37.1 歳，SD = 3.47 歳)を対象とした。

気質尺度　The Early Childhood Behavior Questionnaire (ECBQ) (Putnam et al., 2006)の超短縮版 36 項目を使用した。Negative Affect (負の情動)，Surgency(高潮性)，Effortful Control(エフォートフル・コントロール)の 3 次元で気質を捉えることができる。

自己効力感尺度　若本(2023)の MoSE 尺度 15 項目を使用した。MoSE は母親としての満足感，母親としての自己効力感，子育てに対する自己効力感の 3 つの下位尺度で母親としての自己効力感を捉えることができる。

従順性評定　子どもの従順性の指標として，坂上他(2016)における子どもの従順行動・不従順行動の評定を参考にした。片付けの要請や指示に従う「従順行動」，要請や指示に対する言語的・非言語的な拒否や主張をする「積極的不従順」，要請に応じず言語的・非言語的な主張もしない「消極的不従順」の 3 つのカテゴリーに分け，母親の指示に対する子どもの行動を評定している。分析対象となる，母親が子どもに片付けを指示した後の 60 秒を 10 秒ごとに分割し，各 10 秒間のうちもっとも優勢にみられた行動に 1 点を与え，各行動の評定値の合計を算出した。

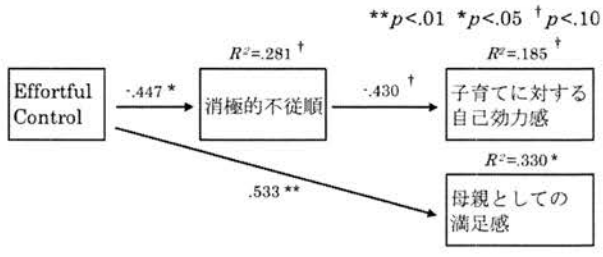
手続き　幼稚園の 1 室で母子 1 組ずつ行った。3 分間の積み木自由遊び時間の後，母親に子どもへの片付け指示を出してもらい，片付けの様子を録画した。次に母親に，気質質問紙と MoSE 尺度の計 51 問に回答してもらった。

【結果】

気質の 3 下位尺度のうち Surgency は信頼性係数が低い値であったために，また従順性の行動カテゴリーのうち積極的不従順は観測数が極端に少なかったために以下の分析から除外した。

気質から従順性そして母親の自己効力感への関連を調べるために，重回帰分析を行った(Figure1)。その結果，気質の Effortful Control から従順性の消極的不従順に有意な負の偏回帰係数がみられた(β=-.447, p <.05)。また，従順性の消極的不従順から子育てに対する自己効力感に有意な傾向のある負の偏回帰係数がみられた(β=-.430, p <.10)。さらに，気質の Effortful Control から母親としての満足感に有意な偏回帰係数がみられた(β=.533, p <.01)。

Figure1
重回帰分析の結果



【考察】

重回帰分析の結果，気質の Effortful Control が子どもの従順性，そして母親の子育てに対する自己効力感に関連する傾向がみられた。Effortful Control とはは顕現して継続中の反応を抑制したり，非顕在的な反応を開始したりする能力のことであり(山形他, 2005)，Effortful Control が高いと自分のやりたい行動を抑制して母親の指示に従順に従いやすいと考えられ，結果的に母親の自己効力感を高めることに繋がったのではないかと考えられる。

さらに，気質の Effortful Control と母親の自己効力感の一側面である母親としての満足感の間に有意な関連がみられた。MoSE における「母親としての満足感」は母親であることによって得られる充実感や満足などで構成される。充実感は自信，連帯，時間的展望などの要素から得られるとされており(大野, 1984)，Effortful Control の高さが母親の自信や連帯感を高め，母親の満足感を高めたのではないかと考えられる。

【利益相反】

本研究に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

【主な引用文献】

Rothbart, M. K. (2006)　Mary Rothbart's Temperament Questionnaires　Retrieved from https://research.bowdoin.edu/rothbart-temperament-questionnaires/

坂上 裕子・金丸 智美・武田(六角)洋子(2016). 片付け課題における 2 歳児の従順行動・不従順行動の経年変化: 2004・2005 年度と 2010・2011 年度の比較から　発達心理学研究, *27*, 368-378.

若本 純子(2013). 母親としての自己効力感 —尺度の作成と信頼性，内的・外的妥当性の検証—　家族心理学研究, *27*, 16-28.

(おかむらあゆか・うちやまいちろう)

和菓子の色彩と形状から探る四季の知覚

-幼児，成人，高齢者を対象とした発達的検討-

○伴碧[1]（会員）　内山伊知郎[2]（会員）
([1]大阪大学大学院基礎工学研究科 [2]同志社大学心理学部)

キーワード：幼児，和菓子，四季の知覚

【目的】

我が国の伝統文化である和菓子は，日本人を取り巻く四季などの環境の中で発展してきたものであり（村上，2015），色や形といった目から入る情報（視覚）に訴えることが大切だと指摘されている（堀，2008）。特に，きんとんや練りきり，こなしなどの和菓子は，季節によって種類・色・形・材料などが使い分けられ，また，それらを使って季節感を楽しむことができる（村上，2010）。しかし，和菓子の喫食頻度が減少傾向にある現在，我々は，和菓子を見て実際に四季を感じることが出来るのであろうか。

先行研究である伴（2023）は，上記を検討するために，幼児から高齢者までを対象に，オンライン上で和菓子の写真を提示し，写真から四季（春夏秋冬）を判断できるか調査を実施した。その結果，幼児でさえも，和菓子を見て四季を判断することが可能であることが明らかとなった。また，幼児が四季を知覚する手掛かりとして，和菓子の「形」よりも「色」が重要な要因であることが明らかとなった。

しかし，先行研究の問題点として，手法がオンライン調査であったことから，養育者が幼児の回答を入力しているため，幼児の率直な回答が拾えていない可能性があること，さらに，提示刺激である和菓子の写真のうち，夏の和菓子に「白」，冬の和菓子に「茶」という異なる季節を象徴する色が入っていたため，正答率が低くなった可能性が挙げられる。実際，四季の色彩に関して，20代の学生を対象に色と季節感との関係を検討した中村他（2006）は，春，夏，秋の3つの季節に対し，順に，ピンク系，青系，茶系，という色相をイメージする傾向があること，また，冬に対しては，白などの低彩度色をイメージすることを報告している。

そこで本研究では，上記の問題を改善するために，幼児と実験者による対面実験を行うことで，和菓子に対する四季の知覚について，幼児の率直な反応を取得できるようにした。さらに，提示刺激については，中村他（2006）を参考に，それぞれの季節を表す色の和菓子の写真を使用した。これらの改善を行ったうえで，幼児が和菓子の写真から四季（春夏秋冬）を知覚できるか検討を行った。また，和菓子の写真を見てその四季を回答する際に，「色」と「形」のどちらを手掛かりにしているかについても，条件を設け検討を行った。

【方法】

実験は，幼稚園の1室で実施された。幼児と実験者は対面に着席し，課題を実施した。実験者は17インチのディスプレイを用いて和菓子の写真を幼児に提示し，提示刺激ごとに「四季（春夏秋冬）のうち，どの季節だと思うか」，「なぜその季節だと思ったのか」について尋ねた。参加者は64名（男児30名，女児34名，平均年齢=5.87歳，SD=0.40歳）であった。

課題：四季（春夏秋冬）に応じた4種類の和菓子の写真を参加者に提示した。提示された和菓子の写真が，四季のうち，いずれの季節を表現しているか1つを参加者に選択させた。また，課題では下記の3つの条件を設けた。**統制条件**では，四季に応じた色合いと形の和菓子（e.g.，冬；白い雪だるま）がカラーで提示された。**色条件**では，同じ形の和菓子だが，四季によって色が異なる写真（e.g.，春；ピンク）がカラーで提示された。**形条件**では，四季によってモチーフが異なる写真（e.g.，春；桜）が白黒で提示された。

【結果・考察】

参加者に対して，四季に応じた和菓子の「色」と「形」の両方を提示した統制条件について，先行研究の正答率は70%から100%であったが，本研究においては45%から90%と低くなったことが示された（Figure 1）。この結果は，オンライン調査において養育者が幼児の回答を入力したことにより，幼児の率直な意見を拾えなかった可能性を示唆するものである。なお，統制条件において正答率が最も高かった「冬」については，幼児であっても季節がわかりやすい「雪だるま」がモチーフの和菓子であったため，それが示す季節の知覚が可能であったと考える。

次に，和菓子の色と形のどちらを手掛かりに四季を知覚しているかについて検討を行った。その結果，色条件および形条件ともに，正答率は50%以下であることが示された。二項検定の結果，特に形条件では，正答率が有意に低いことが示された（春：$p<.05$，秋：$p<.01$，冬：$p<.10$）この結果は，色という情報を排除すると，その季節の知覚が困難となる可能性を示唆するものである。さらに，提示刺激とは異なる季節を回答した幼児について，「なぜその季節だと思ったのか」という理由を尋ねたところ，提示刺激を誤って認識している子どもと（e.g.,春を表す提示刺激：桜を「岩」と認識），提示刺激が何であるかは理解しているが，回答する季節が異なる子ども（e.g.,冬を表す提示刺激：みかんであることは理解しているが「秋」と回答）がいることが明らかとなった。つまり，和菓子が想定している季節と，幼児の季節の知覚に乖離がある可能性がある。今後は，幼児の回答についてさらに分析を行うとともに，成人，高齢者を対象に同様の調査を実施することで，和菓子に対する四季の知覚について発達的検討を行う予定である。

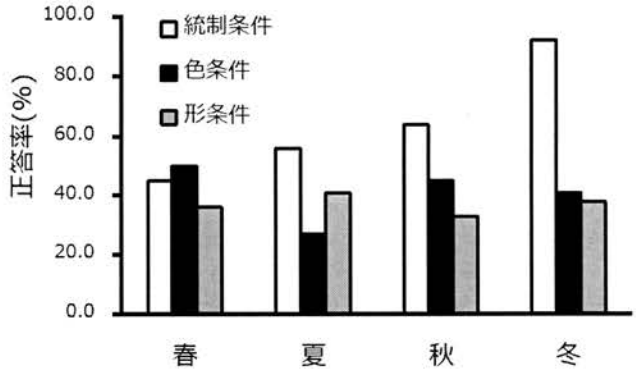


Figure1 各条件における幼児の正答率

【利益相反】

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

（ばん　みどり）

幼児期の鏡像反応における縦断的研究の発達的特徴について

発達に課題のある幼児の鏡像反応と発達検査課題との関係性

○高木玉江[1]
([1]大阪成蹊大学教育学部)

キーワード：鏡像認知、縦断研究、マークテスト

【問題】鏡像自己認知の研究は、鏡像自己認知の研究は、これまで自然観察の手法（Darwin,1877）に始まり、マークテストという手法を採用し、実験的に行われてきた(Gallup,1970)。 幼児期の定型発達児の生活年齢が、1 歳半ごろから2歳になると、鏡をみながら、マークテストに通過しすることが明かになってきた。

【目的】本研究は、幼児期初期において発達に課題のある幼児において、鏡像認知がどのように行われ、進んでいく過程が見られるのか、鏡像反応にも発達年齢との関係があり、発達年齢とともに、鏡像反応の経過も見られるのかということを検証するため、鏡像の反応と発達検査下位項目との関連性について焦点をあて、明らかにしていく。

【方法】対象児は、発達支援施設に通う幼児7名を対象に個別に実験をおこなった。参加児は乳児健康診断で発達の課題を指摘された幼児であり、継続的に発達支援施設に週 3 日から週 5 日通う幼児を対象に行った。生活年齢は、研究期間は、個別により、4 か月から 1 年 26 か月の期間を開け継続的に行った。

(1) 実験内容

職員と協力し、できるだけ対象児の遊びや保育活動を妨げないように配慮した。保護者にも、研究目的を説明し、ビデオ撮影と新版 K 式発達検査 2001 年度（以下新版 K 式発達検査）の課題を使用することを説明し、同意を得た上でおこなった。

(2) 分析手続きと方法について

分析として手続きは、鏡像反応について発達年齢の算出を行うため、発達検査の課題の下位項目を使用した。新版 K 式発達検査 2001 は、姿勢・運動領域の項目、認知・適応領域の項目と言語・社会領域項目の 3 領域中の 12 か月から 30 か月の下位項目を実施し、発達年齢（DA）を算出した

【結果】

発達に課題のある幼児 7 名の発達検査の下位項目が通過になっている項目を確認し、通過した発達検査下位項目から認知・適応領域、言語・社会領域、姿勢・運動領域の領域ごとに、発達年齢を算出し、全領域の発達年齢 *DA* を算出した。

参加児 7 名が、シールを取らない鏡像認知反応であった時の発達検査の結果から、認知・適応領域、言語・社会領域、姿勢・運動領域の発達年齢 *DA* を算出し、全領域の発達年齢 *DA* の算出をおこなった。また、鏡像認知反応の指標であるシールを取る鏡像反応を示した時に実施した発達検査下位項目の認知・適応領域、言語・社会領域、姿勢・運動領域の発達年齢 DA を算出し、全領域の発達年齢 DA を算出した。 7 名のシールを取る鏡像認知反応があった発達年齢の平均値と標準偏差を算出し、結果を示した。幼児個人の鏡像反応がなかった時と鏡像認知反応があった時の各領域の発達年齢を算出した。幼児の鏡像反応と発達検査を縦断的に実施した結果を示し、鏡像認知反応があった発達検査の結果と直前の発達検査結果を抽出し、各領域の発達年齢を比較した。シールを取ることができなかった鏡像反応の発達検査の各領域の発達年齢を示す。全領域の発達年齢の平均値は、M=20. 1、標準偏差は、*SD*=3. 67 だった。認知・適応領域の発達年齢の平均値は、*M*=21. 0、*SD*=標準偏差 4. 28、言語・社会領域の発達年齢の平均値は、*M*=17. 14、標準偏差は、*SD*=4. 03、姿勢・運動領域の発達年齢の平均値は、*M*=23. 7、標準偏差は、*SD*=6. 13 だった。

シールがとることができた鏡像認知反応の成立者7名の発達年齢の平均値は、*M*=25. 1*M*、標準偏差（以下*SD*）は、*SD*=4. 78 だった。認知・適応領域の発達年齢の平均値は、24. 7*M*、*SD* 4. 03、言語・社会領域の発達年齢の平均値は、23. 3*M*、標準偏差*SD* =6. 65、姿勢・運動領域の発達年齢の平均値は、28. 7*M*、標準偏差は、7. 3だった。

【考察】

発達の課題のある幼児を縦断的に鏡像自己認知反応が成立する時期と発達年齢についての連関をみてきた。これまでの高木(2024)発達の課題のある幼児の横断研究では、鏡像自己認知反応が優勢となる発達年齢は、21～22 か月ごろという結果を導き出し、発達に課題のある幼児も,DA が 18 か月から 24 か月頃になると、鏡像に映る自分を見て、気づき、額についているシールをとることができるということを見出している。今回の研究では、発達に課題のある幼児を縦断的に実施した 7 名の平均発達年齢は、25 か月と 2 歳過ぎという結果だった。少し年齢が高くなっているのは、姿勢・運動領域の発達年齢が 28 か月と高かったということも言える

。姿勢・運動領域の下位検査項目は、両足跳び(1:9 超～2:0)、飛び降り (2:0 超～2:3)、交互に足を出す(2:3 超～2:6) の項目は、階段を交互に足を出して、片足立ちで不安定な姿勢になっても左右に重心を移動させて、バランスや調整をとりながら階段を登れるということである。そして、身体の使い方のバランスの獲得や両足をそろえて飛び降りるという上肢と下肢の連関性と斜めの姿勢の獲得が、大きく関係している。このことから 1 歳半ぐらいから獲得していく、身体の連関性や、手指操作の巧緻性の獲得していくことが、鏡像自己認知反応に関係していると言える。また、認知・適応領域の発達年齢の平均は 24 か月、言語・社会領域は、23 か月となり、高木 (2023) と準ずる結果となった。別府(2000)、赤木(2003)が明かにしてきたように、鏡像自己認知が獲得できた幼児は、話し言葉を獲得している可能性があるとの見解と一致する結果であった。これは、鏡像自己認知が進むことで、ことばの獲得と三項関係の兆しもみられること、そして、物の永続性の獲得をしていることの重要性についても確認できた。

【利益相反】利益相反（conflict of interest; COI）はありません。

【引用文献】

別府哲,(2000),自閉症幼児における鏡像認知
高木玉江(2024).幼児期における鏡像認知の発達的特徴の抽出―発達に課題のある幼児の鏡像認知と発達検査課題との関係性について―,立命館産業社会論集,59 巻,4 号,pp.35-pp.48
田中昌人.（1987）. 人間発達の理論. 青木書店.
百合本仁子.(1981).1 歳児における鏡像の自己認知の発達.教育心理学研究,29,261-
Zazzo, R.（加藤義信訳）（1999）. 鏡の心理学 －自己像の発達－. ミネルヴァ書房.

（高木　玉江）

月経随伴症状の種類とコミュニケーションとの関係

女子大学生を対象とした検討

○蔵永瞳[1]　佐野未来[2]（非会員）
（[1]滋賀大学教育学部　[2]滋賀大学教育学部（在学当時））

キーワード：月経，女性の健康，コミュニケーション

【目的】 月経は，初経から閉経までの平均40年間，女性が1カ月に1回程度の頻度で定期的に経験する生理的現象である。月経前から後にかけては，頭痛，腹痛，腰痛などの痛みや，憂うつ，泣きたくなるなどの否定的感情，体重増加などの水分貯蓄，めまいなどの自律神経失調，判断力が鈍るなどの集中力低下といった月経随伴症状が経験されることがある（茅島他, 1995）。これらの症状のうち，どの種類の症状がどの程度の重さで生じるかには個人差がある。

また，月経に関わる話題はタブー視される傾向にある（杉田・新本, 2022）。月経に関わる情報交換の機会がないことは，個々人が得られる情報を少なく偏ったものにしてしまうおそれがある。

近年，「生理の貧困」が社会問題として取り上げられるようになり，月経に関わる話題に触れる機会は増える傾向にあるが，そういった中で当事者である女子大学生たちは，月経に関してどのようなコミュニケーションをとっているのだろうか。本研究では，月経随伴症状の種類とコミュニケーションとの関係について検討することで，現代における女子大学生の月経に関わるコミュニケーションについて検討する。

【方法】 調査は女子大学生を対象とし，WEBを用いて行った。調査ではまず，年齢を尋ねた。次に，月経に関わるコミュニケーションについて，①話す頻度（項目：あなたは会話の中で，月経について人に話すことがありますか），②聞く頻度（項目：あなたは会話の中で，月経について人から話を聞くことがありますか），③メディアを通して触れる頻度（項目：あなたはマスメディア（新聞・雑誌・テレビ・ラジオなど）で，月経についての情報に触れることがありますか）を「1.全くない」～「4.よくある」の4段階で尋ねた。

その後，回答者自身の月経随伴症状について尋ねた。具体的には，自身の月経周辺期に感じることのある身体的・精神的な症状について，特に重い症状で当てはまるもの全てにチェックをつけてもらった。症状の種類は茅島他（1995）を参考に，「痛み」，「否定的感情」，「集中力」など計8種類を設定し，それぞれ説明を記した。なお，本項目については，「症状がない，月経がない，あるいは症状が軽い」という選択肢も設定した。自身の症状について尋ねた後，その症状について人に話をする頻度を「1.全くない」～「4.よくあるの」4段階で回答してもらった。

【結果】 調査の結果，109名（年齢は平均19.365歳，標準偏差1.250）のデータが得られた。自身の月経随伴関連症状については，101名（約93%）が8種類いずれかの症状にチェックをつけていた。チェックがつけられた症状の数は，2種類が24名（22%）で最も多く，次に多かったのは4種類で23名（21%），その次は1種類と3種類でいずれも15名（14%）であった。重い症状として最も多く選択されたのは，痛み93名（85%）であり，否定的感情57名（52%），行動の変化53名（49%），集中力48名（44%），水分貯蓄43名（39%），自律神経失調28名（26%），気分の高揚10名（9%），コントロール5名（5%）と続いた。

月経に関わるコミュニケーションについては，月経について話す頻度が平均2.899（*SD*=0.804），聞く頻度が平均2.927（*SD*=0.778），触れる頻度が平均2.394（*SD*=0.794），自身の症状について話す頻度が平均2.734（*SD*=0.846）となった。これらの変数間における相関係数を算出した結果（Table 1），全体的に正の相関が有意であった。

月経随伴症状の種類とコミュニケーションとの関連を検討するため，従属変数を「話す」，「聞く」，「メディアで触れる」，「症状について話す」とし，8種類各症状における重い症状の有無を独立変数とするt検定を行った。その結果，「話す」頻度は，否定的感情の重い症状が有る人の方が無い人よりも有意に高かった（$t(107) = 2.374, p < .05$）。また，「メディアで触れる」頻度は，水分貯蓄の症状が重い人で意に高かった（$t(107) = 3.087, p < .01$）。「自身の症状について話す」頻度は，痛み（$t(107) = 2.891, p < .01$），自律神経失調（$t(107) = 2.230, p < .05$），否定的感情（$t(107) = 2.352, p < .05$）の症状の重い人で有意に高かった。

Table 1　各変数の相関

	話す	聞く	触れる
聞く	.728 **		
触れる	.295 **	.197 *	
症状話す	.641 **	.519 **	.296 **

** $p < .01$, * $p < .05$

【考察】 月経随伴症状についての回答から，多くの女子大学生が重い複数の症状を抱えていることが示された。月経に関わるコミュニケーションは，全体的に頻度が低かった。そして，月経についてよく話す人はよく聞く，メディアの情報にも触れる，というように，月経に関わる情報に関わる人と関わらない人に分かれる傾向が示された。

月経随伴症状とコミュニケーションとの関連については，まず，水分貯蓄の症状が重い人は，コミュニケーションの中でも「メディアで触れる」頻度のみが高かった。水分貯蓄については他者からではなく，メディアを介して情報収集しているのかもしれない。

そして，痛み，自律神経失調，否定的感情の症状が重い人は「自身の症状について話す」頻度が高かった。これらの症状は，頭痛や腹痛，めまい，泣きたくなるなど，他者と関わる中で自身の症状について説明が必要になる，説明の機会が生じやすいものと考えられる。また，否定的感情の症状が重い人は，月経について「話す」頻度が高かったことを上記の結果とあわせて考えると，否定的感情は月経随伴症状として特に話題に上ってきやすいものと推測される。

以上より，月経随伴症状に関わっては，症状の種類によって，会話中で話題にのぼりやすい程度が異なると考えられる。月経随伴症状の理解を求める際には，症状の多様性を考慮する必要があるだろう。

【利益相反】 本論文に関して開示すべき利益相反はない。

【引用文献】

茅島 江子・前原 澄子・江守陽子・桑名佳代子 (1995). 性周期と情動ストレス負荷による精神生理学的反応　母性衛生 *36*(1), 103-114.

杉田 映理・新本 万里子 (編) (2022). 月経の人類学―女子生徒の「生理」と開発支援　世界思想社

【付記】 本研究は，本論文は第二著者が令和5年度に滋賀大学教育学部に提出した卒業論文のデータの一部を第一著者が再分析し，執筆したものである。

（くらながひとみ・さのみく）

知能と英語力の暗黙理論が大学生の英語学習における困難への反応に及ぼす効果

○柳瀬真紀[1]　竹橋洋毅[1]
([1]奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科)
キーワード：暗黙理論，英語学習，動機づけ

【問題と目的】

英語学習は時に失敗や困難を伴う。大学生は英語学習において，英単語や文法の習得，長文読解など，様々な困難を経験してきていると言える。英語学習において，様々な困難を経験することを踏まえると，困難を乗り越えていく力を育むことは重要である。また，文部科学省（2019）は主体的な学びの観点として，粘り強く学習に取り組む態度を取り上げている。以上を踏まえると，英語学習において困難なことがあっても粘り強く取り組む力を育むことは重要な教育課題であると言える。

心理学の研究では困難への反応を規定する重要な要因として，物事の捉え方である暗黙理論（Dweck, 2012）に焦点を当てた研究が蓄積しており，近年は第二言語習得の領域でも議論され始めている。先行研究では，言語学習の困難と暗黙理論の関連について調査されている。しかしながら，学生が英語学習において直面する困難に，どのように反応しているのかは未検討である。困難への反応が暗黙理論とどのように関連しているのかは，学習者の心理を理解し支援するために重要であると言えるだろう。

そこで，本研究では，英語学習の困難への反応がどのように暗黙理論と関連するのかを検討することを目的とする。

【方法】

調査対象

18－22歳の大学生260名分が収集された。260名のうち，「日本語が母国語ですか」の項目で「いいえ」を選択した2名を除外し，258名を分析対象とした。本調査は所属大学の倫理審査委員会で承認を受けた。

調査項目

英語学習困難への反応尺度　自由記述の予備調査をもとに調査項目を収集し，本調査により「無力感」，「学習の困難感」，「回避的感情」，「現実逃避」，「促進的感情」，「困難への粘り強さ」，「外的帰属」，「学びの自己調整」の8つの因子からなる31項目の尺度を独自に作成した。学びの自己調整以外のα係数は.70以上であった。6件法。

知能観　及川（2005）の知能観尺度の「才能」という表現を「知能」に変えて使用した。項目は「私の中で，知能はほとんど変えることのできないものだと思う」などの3項目だった。6件法。

英語力観　及川（2005）の尺度に「英語の」という表現を追記し，英語力観の尺度を作成した。項目は「私は一定の英語の才能をもって生まれてきており，それを変えることは実際にはできない」などの3項目だった。6件法。

【結果】

知能観と英語力観が英語学習の困難への反応に及ぼす効果を検討するために，無力感，学習の困難感，回避的感情，現実逃避，促進的感情，困難への粘り強さ，外的帰属，学びの自己調整の8つの因子を従属変数とする重回帰分析を行った。この結果をTable 1に示す。無力感（$b = 0.34, SE = 0.08, \beta = .30, t(252) = 4.26, p < .001$）では，英語力観の効果が有意で，英語力観が固定的であるほど，無力感が高いという中程度の相関が示された。また回避的感情（$b = 0.20, SE = 0.09, \beta = .17, t(253) = 1.74, p = .02$）では，英語力観の効果が有意であり，英語力観が固定的であるほど，回避的感情が高いという小さな相関が示された。一方で，知能観の効果は全般的に見られなかった。

【考察】

重回帰分析の結果として，英語力観については，英語力観が固定的であるほど，無力感が高いという中程度の相関がみられた。Dweck（2012）によると，固定理論を持つ人は，無力反応や防御的な方略を導くとされていることから，先行研究と一致する知見であると言える。また，英語力観が固定的であるほど，回避的感情が高いという小さな相関もみられた。固定的英語力観を持っている人ほど回避的な感情を感じるため，行動が抑制されると考えられる。これは，無力感と同じパターンが見出されたと言える。

上述の通り，知能観と英語力観では英語力観の方が，困難に直面した時の無力感や回避的感情を予測することが示唆された。暗黙理論の対象とする特性と，結果の領域が対応していると，暗黙理論の効果が生じやすいことが示唆されており，本研究でも同様の結果が得られたと言える。

Table 1
英語学習の困難への反応を従属変数とした重回帰分析

	知能観			英語力観			adjust R^2
	β	95%CI		β	95%CI		
無力感	-.01	-.15	.13	.30 **	.16	.44	.08 **
学習の困難感	.02	-.13	.17	.12	-.03	.26	.01
回避的感情	.12	-.02	.26	.17 *	.03	.31	.06 **
現実逃避	.02	-.13	.16	.14	-.01	.28	.01
促進的感情	.07	-.08	.21	.07	-.05	.23	.01
困難への粘り強さ	.06	-.09	.20	-.17 *	-.31	-.03	.01
外的帰属	.16 *	.01	.30	-.08	-.22	.07	.01
学びの自己調整	.08	-.07	.22	-.01	-.15	.14	.00

注）βは標準化偏回帰係数を示す。　** $p < .01$, * $p < .05$

【利益相反】

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

Dweck, C. S. (2012). Implicit theories. In P. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology* (Vol. 2, 43-61). Sage.

文部科学省 (2019). 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）

及川 昌典 (2005). 知能観が非意識的な目標追求に及ぼす影響　教育心理学研究, *53*, 14-25.

（やなのせ まき・たけはし ひろき）

目標達成に向けた力の育成

—小学生を対象とした目標設定および学習方略の体験型講座の提案—

○磯友輝子　小林寛子
（東京未来大学モチベーション行動科学部）

キーワード：目標設定，学習方略，小学生

【目的】内発的動機づけから生じる行動には，その行動を自分ができると感じる感覚である自己効力感が関わる（Deci & Ryan, 1985）。自己効力感をもたらすのが成功体験であり（Bandura, 1977），自ら目標を立てて達成することが求められる。学校現場では，小学校学習指導要領（文部科学省, 2017）で，児童の興味・関心を生かした自主的，自発的な学習が促されるよう，児童が自ら課題や活動を選択する機会を設けるなどの工夫が求められている。また，「めあて」の設定など，目標達成に向けた力の醸成が期待される場面は多い。しかしながら，児童が目標の意義について考え，その設定方法や達成までの過程を学習したり，目標の進捗状況を振り返ったりする機会が設けられることは少ない（筆野・西岡，2019）。

そこで，本研究では，小学生を対象に目標達成に向けた力の育成をテーマとした体験型講座を提案し，その効果を検討する。講座は目標設定理論（Locke & Latham, 1984　松井・角山訳 1984）に基づく目標設定の仕方と，目標達成のための学習において，学んだ内容を定着させるのに有効な自己説明（e.g., Chi et al,1994）の学習方略の指導を中心とした構成とする。本講座で得た学びが，自発的な目標設定や効果的な学習方略の使用といった成果をもたらし，自己効力感や内発的動機づけの向上につながると考えられる。

【方法】研究参加者　東京都内の公立小学 4 年生 60 名を対象とした。研究への参加については，参加者および保護者，学校長ならびに担任教員に研究内容を説明した上で，許可を得た。なお，本研究は東京未来大学倫理審査委員会で承認を得た（承認番号 23-021）。

講座概要　以下に示す全 2 回の講座を授業の一環として全員参加で実施し，講座に参加しない対照群は設けなかった。

第 1 回：目標設定に関する講座　将来の夢，頑張りたい取組などを書き出す事前ワークを宿題として呈示した。講座では，目標と自己効力感の関係性を説明した上で，効果的な目標設定の仕方（最終目標を分割して短期的な目標を積み重ねること・具体的な目標を立てることなど）を紹介した。そして，事前ワークに記載した中から 1 つを選んで，それを達成するために適切な目標を立てるワークに取り組んでもらった。

第 2 回：学習方略に関する講座　第 1 回講座の 1 週間後に実施した。自らの目標に関わる学習活動を考えた上で，学習内容の意味を理解することや思考過程の正しさを意識することの重要性を解説し，そのような学習を促す方略として説明方略を紹介した。講座の最後に算数の計算問題を例に説明方略を体験するワークに取り組んでもらった。

効果測定　講座前後（事前・事後調査）で以下の項目(1)～(6)に回答を求めた。事後調査には感想も記述させた。(1)目標設定スキル（筆野・西岡，2019）のうち，達成への意志，達成への計画各 4 項目，(2)学習観（市川，1998；瀬尾，2007）のうち，意味理解志向，思考過程重視志向，丸暗記志向，結果重視志向各 3 項目，(3)学習方略（深谷他，2016）のうち説明方略 3 項目，(4)学習への自己効力感，(5)内発的動機づけ，(6)自己肯定感，。(4)~(6)は磯他（2017）から各 4 項目を用いた。

質問項目は児童が理解できる表現や平仮名表記に変え，自分にあてはまる程度を「1. まったくあてはまらない」～「4. とてもあてはまる」の 4 段階で評定させた。質問紙には他の項目も含まれたが本発表では報告しない。

手続き　事前・事後調査は WEB 調査とし，クラス担任の指示により学校から配布された児童用デジタル端末で回答させた。両講座は心理学を専門とする大学教員が実施した。

【結果と考察】信頼性分析は事前・事後調査に回答した各 55 名のデータを用い，事前・事後調査間の t 検定には両講座を欠席した者，事前・事後調査で欠損のある者を除いた 51 名のデータを用いた。

各変数の項目平均値と標準偏差，及び t 検定の結果を Table1 に示す。目標達成スキルのうち達成への計画において有意傾向の差が見られた。また，内発的動機づけと，学習観のうち思考過程重視志向は，事後調査が事前調査よりも有意に高く，一方で，丸暗記志向，結果重視志向は有意に低くなっていた。感想として，講座後，実際に 1 日単位の下位目標への分割を試みて遂行し，成果を感じたといった記述が見られた。また，学習しやすいようにどのように目標や計画を立てたらよいか考えるといった，両講座を関連づけて考えた様子も見られた。以上から，本講座を受講したことにより，目標達成に向けた計画を適切に立てられるようになり，適応的な学習観が形成されること，さらに内発的動機づけが高まるといった効果が示された。

しかしながら，成功体験の結果により向上することが予想される達成への意志や自己効力感，普段の生活の中での説明方略の使用については変化が見られなかった。それゆえ，学校生活の中で，定期的に目標の確認や修正を促したり，多様な教科で説明方略の事例を示したりするなどの，取組を継続させる方法を検討することが求められるであろう。

Table1 調査時期ごとの各変数の平均値と t 検定の結果

	事前調査		事後調査		t (50)
達成への意志（α=.69, 77）	3.12	(0.57)	3.13	(0.65)	0.14
達成への計画（α=.83, 86）	2.84	(0.80)	3.04	(0.73)	1.89 †
意味理解志向（α=.73, 81）	2.94	(0.74)	3.03	(0.80)	1.05
思考過程重視志向（α=.72, 73）	2.92	(0.72)	3.13	(0.68)	2.39 *
丸暗記志向（α=.67, 61）	2.89	(0.74)	2.49	(0.78)	-2.97 **
結果重視志向（α=.73, 72）	2.66	(0.81)	2.37	(0.86)	-2.53 *
説明方略（α=.84, 91）	2.69	(0.80)	2.82	(0.88)	1.16
自己効力感（α=.87, 91）	2.92	(0.71)	2.97	(0.77)	0.73
内発的動機づけ（α=.95, 94）	2.54	(0.99)	2.77	(0.96)	2.07 *
自己肯定感（α=.88, 88）	3.14	(0.70)	3.11	(0.73)	-0.50

α係数は事前，事後調査の順。事前事後調査の（　）内の数値は標準偏差。
†：$p<.10$，*：$p<.05$，**：$p<.01$

【利益相反】本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

◎本研究は，東京未来大学モチベーション研究所が東京都墨田区教育委員会事務局すみだ教育研究所から委託（令和 5 年度「学習意欲に関する共同研究の成果に基づいた取組」）を受けて行われた。

（いそ ゆきこ・こばやし ひろこ）

学校での諸経験が実習でのプロアクティブ行動に及ぼす影響

—職務的接続性の違いに着目した探索的検討—

○三保紀裕[1]・松尾智晶[2]（非会員）・寺田盛紀[3]（非会員）
（[1]京都先端科学大学経済経営学部・[2]京都産業大学・[3]京都先端科学大学客員研究員）

キーワード：インターンシップ，職業臨地実習，プロアクティブ行動

【問題と目的】本研究は大学・専門学校でのインターンシップ，職業臨地実習におけるプロアクティブ行動に対して，学校での諸経験（実習経験内容，授業履修経験，正課外活動）が及ぼす影響について検討したものである。プロアクティブ行動とは，組織適応に関わる主体的行動として捉えられるものである（Ashford & Black, 1996; Grant & Ashford, 2008; 尾形, 2017）。三保・松尾・寺田（2023）は，日本におけるインターンシップの効果を職場への初期適応という観点から捉えるにあたり，インターンシップにおけるプロアクティブ行動を指標とした縦断調査を行った。そしてプロアクティブ行動が入職後の初期適応過程，特に情緒的コミットメントに対してポジティブな影響を及ぼすことを明らかにした。しかし，(1)専門教育と関連したインターンシップと入職後配置職務との接続関係（本研究ではこれを職務的接続性と操作的に定義する）や，そもそもの問題として，(2)上述したプロアクティブ行動そのものに影響しうる諸経験がどのようなものであるかについて，十分に考慮できていなかった点，が課題であった。そこで本研究では，これら2点についての探索的検討を行うことを目的とする。

【方法】インターンシップを経験している大学3, 4年生，ならびに職業臨地実習を経験している3年制の専門学校生を対象にアンケート調査を実施した。14の大学・専門学校・企業（内定者）に協力頂き，246名（男性113名，女性129名，未回答4名）の回答を得た。年齢は30歳以上41名，それを除く平均年齢は21.9歳であった。なお，本研究では職務的接続性の高低による比較検討を行うが，職務的接続性の高い協力者の専門領域は看護・教育（幼児教育）・柔道整復であった。

測定変数として，実習での経験内容（9項目），授業履修経験（7項目），正課外活動経験（6項目），そして三保ら（2023）で使用した，実習におけるプロアクティブ行動を4側面から捉える項目（26項目）を使用した。

なお本研究の実施にあたり，京都先端科学大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号23EB01-2）を受けた。

【分析と結果】プロアクティブ行動の4側面を従属変数，実習での経験内容，授業履修経験，正課外活動経験を独立変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を適用した。調査協力者を職務的接続性の高い群，低い群に分け，それぞれについて分析を行った。接続性の高い群（職業系）は145名，低い群（非職業系）は101名であった。

分析結果（表1）をみると，職務的接続性の高低によって，実習におけるプロアクティブ行動に及ぼす影響には違いがあることが示された。例えば接続性の高い群では，授業履修経験の「スタディスキルに関すること」が，「フィードバック探索」を除く3つのプロアクティブ行動に対してポジティブな影響を及ぼしていた。また，「専門に関する実習・実験にむけた準備や復習」が「(情報収集）組織文化理解」と「フィードバック探索」に対してポジティブに影響していた点も特徴的であった。一方で接続性の低い群では，「専門分野のインターンシップや現場実習の準備や復習」が，「(情報収集）組織文化理解」を除く3つのプロアクティブ行動に対してポジティブな影響を及ぼしていた。

【考察】本研究の分析結果から，職務的接続性の違いは，プロアクティブ行動に対して異なる影響を及ぼしていることが明らかとなった。それは実習内容だけでなく，授業履修経験による影響，特に実習に向けた具体的準備がそれぞれ影響しているようであった。三省合意の改正（文部科学省・厚生労働省・経済産業省, 2022）により，インターンシップでは職場の社員によるフィードバックの必要性が明示されるようになったが，大学での事前事後授業のような準備・復習の重要性が改めて示された結果となった。ここでの結果は，実習におけるプロアクティブ行動をどう活性化させていくかという点で，実践への示唆をもたらすものであった。

【利益相反】本研究に関する利益相反（conflict of interest; COI）はない。

【付記】本研究は科学研究費補助金（22K02728）の支援を受けて実施されたものである。

（みほ　のりひろ・まつお　ちあき・てらだ　もりき）

表1　重回帰分析結果(ステップワイズ法)

		(情報探索)仕事の進め方		(情報探索)組織文化理解		ネットワーク構築		フィードバック探索	
		職業系	非職業系	職業系	非職業系	職業系	非職業系	職業系	非職業系
		β	β	β	β	β	β	β	β
実習での経験内容	会社・職場説明会	0.19 *			0.45 **	0.20 *			
	会社・職場見学								0.26 *
	アルバイト・パートと同じ内容の仕事								0.22 *
	経営者・会社の首脳陣による講義	0.18 *	0.24 *						
	問題解決型の課題提示			0.24 **					
授業履修経験	スタディスキルに関すること（レポートの書き方，プレゼンの方法，文献の調べ方など）	0.35 **		0.20 *		0.25 **			
	英語などの語学に関する学習		0.31 **		0.24 *				
	専門分野の実践的な授業（ゼミナール）の準備や復習（事後学習）						0.28 **		
	専門分野のインターンシップや現場実習の準備や復習		0.36 **				0.28 **		0.34 **
	専門に関する実習・実験に向けた準備や復習（事後学習）			0.22 *				0.30 **	
正課外活動	社会貢献活動をする（地域活動、ボランティアやNPO，国際的活動など）								0.30 **
	新聞記事・ウェブニュースを読む	0.22 **		0.29 **	0.28 **	0.17 *			
	サークル活動をする			0.15 *					
	自分の人生のキャリアモデル（著名人，会社の社長など）について学ぶ					0.17 †	0.36 **		
	R2乗	0.359	0.355	0.389	0.351	0.261	0.357	0.088	0.408
	調整済みR2乗	0.339	0.332	0.364	0.328	0.238	0.334	0.081	0.380

**: $p<.01$ *: $p<.05$ †: $p<.10$

工科系修士課程学生の修士課程進学における進学動機への知的好奇心，批判的思考態度および結果期待からの影響

高度専門技術者養成を目的とした私立大学における検討

○石田拓矢[1]　庄司正実[2]
([1]目白大学大学院心理学研究科　[2]目白大学心理学部)

キーワード：技術習得,将来のキャリア,心理学的特性

【目的】

工科系学生の良好な就職環境が継続しており修士課程への進学促進が課題となっている私立工科系大学においては新たな方策での修士課程への進学促進の検討が更に重要となっている。本研究の目的は高度専門技術者の養成を目的とした私立工科系大学大学院修士課程新入生の修士課程進学における「進学動機」への「知的好奇心」および「批判的思考態度」および「結果期待」からの影響を明らかにすることである。

【方法】

調査対象者は2024年4月に私立工科系大学大学院修士課程に入学した学生153名（男性128名，女性24名，不明1名，平均年齢22.6歳（*SD*=1.16））であった。質問項目は進学動機3項目（「取り組みたい研究テーマがあるので」，「技術力を身に付けるため」，「将来のキャリアのため」），西川・雨宮（2015）の知的好奇心尺度12項目，平山・楠見（2004）の批判的思考態度尺度33項目，結果期待5項目（「知識・技術を身に付けている」，「コミュニケーション能力を身に付けている」，「後輩への指導力を発揮している」，「学会等で発表している」，「希望する進路に内定している」）であった。「進学動機」への「知的好奇心」，「批判的思考態度」および「結果期待」からの影響については「進学動機」を従属変数として共分散構造分析を行って検討した。

【結果】

「進学動機」，「知的好奇心」，「批判的思考態度」および「結果期待」の回答において欠損値があるデータを除いた142名分のデータを分析対象として検討を行った。その結果，「取り組みたい研究テーマがあるので」を従属変数としたモデルでは十分な適合度を示さなかったためモデルの検討を断念した。「技術力を身に付けるため」を従属変数として検討したモデルについては，「知的好奇心」が「知識・技術を身に付けられる」，「学会等で発表できる」および「希望する進路に内定できる」という観測変数に影響を与える潜在変数である「結果期待」を経由して影響を与えていた（Figure1）。モデル適合度は，CMIN=13.350，CFI=.973，GFI=.971，AGFI=.924，RMSEA=.069であった。

「将来のキャリアのため」を従属変数として検討したモデルについては，「批判的思考態度」が「知識・技術を身に付けるため」および「希望する進路に内定できる」という観測変数に影響を与える潜在変数である「結果期待」を経由して影響を与えていた（Figure2）。モデル適合度は，CMIN=25.038, CFI=.946, GFI=.954, AGFI=.900, RMSEA=.081であった。

【考察】

「知的好奇心」の下位尺度である「拡散的好奇心」は新しいことに，「特殊的好奇心」は特定の事柄に取り組もうとする「心理学的特性」を測定する内容である。Figure1のモデルのように「知的好奇心」の高い学生は，専攻する分野における新たな専門知識や技術を身に付けて研究を行い，成果を学会等で発表できるようになることを期待して「技術力を身に付けるため」という「進学動機」を形成したと考えられる。Figure2のモデルのように「批判的思考態度」の高い学生は工科系学生の良好な就職環境であったとしても，将来のキャリアについての情報を熟考した上で，専攻する分野の専門知識や技術を身に付けることで希望する進路に進んで長く技術者として活躍できることを期待して，「将来のキャリアのため」という「進学動機」を形成したと考えられる。

Figure 1
知的好奇心，結果期待から進学動機（技術力を身に付けるため）への影響の共分散構造分析

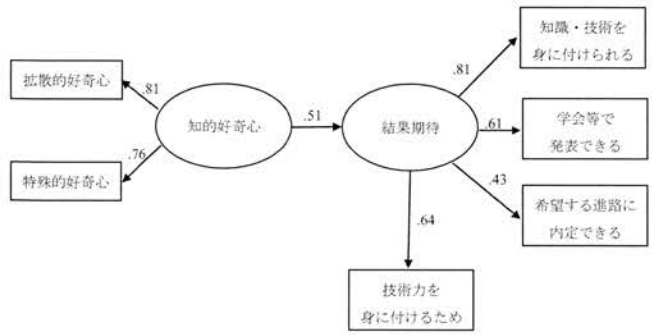
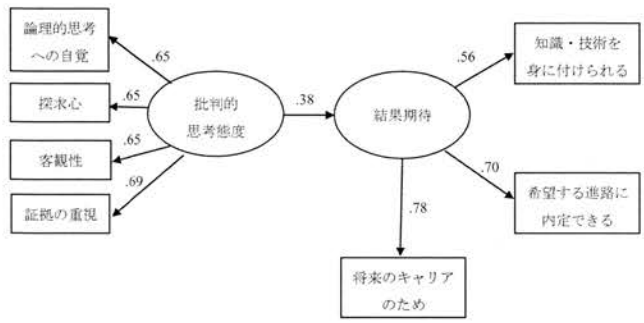


Figure 2
批判的思考態度，結果期待から進学動機（将来のキャリアのため）への影響についての共分散構造分析



注）Figure1および2は煩雑化を避けるため，誤差変数は略している。数字は標準化推定値。

【利益相反】

本研究の発表にあたり利益相反（conflict of interest; COI）はない。

【引用文献】

平山 るみ・楠見 孝（2004）．批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響 証拠評価と結論生成課題を用いての検討 教育心理学研究, **52**, 186-198. https://doi.org/10.5926/jjep1953.52.2_186

西川 一二・雨宮 俊彦(2015)．知的好奇心尺度の作成―拡散的好奇心と特殊的好奇心― 教育心理学研究, **63**, 412-425. https://doi.org/10.5926/jjep.63.412

(いしだ たくや・しょうじ まさみ)

教職課程における福祉教育のカリキュラム編成に関する基礎的研究（3）

－教職課程学生の特別支援教育等調査の特別支援教育等の項目を中心として－

○石橋　裕子[1)]　　林　幸範[2)]

1)帝京科学大学　　2)学研アカデミー保育士養成コース

キーワード：教職課程、カリキュラム、福祉

【研究の目的】

筆者らは、特別支援教育での被虐待児童の学習支援及び教職課程における虐待のカリキュラム化などについて検討してきた。その結果から、教職課程では、福祉に関連した教科はほとんどなく、また講義でもほとんど実施されていないことなどが明確となった。しかしながら、現在の学校教育では、「合理的配慮」など福祉の考え方での教育の実施が令和6(2024)年から義務づけられ、さらに、教職課程の再認定の際に公示された教職課程の「特別支援教育のコアカリキュラム」などによると、福祉対象となる児童・生徒に対象が拡大され、令和4(2022)年の『生徒指導提要』の改定では「児童虐待」が初めて個別の課題としてあげられている。だが、教職課程では、それらは、各教科の一部として教示されているのみで、トータル的な福祉関連教科は、保育士養成課程が併設されていない限り全くないのが現状である。このような現状から筆者らは、教職課程の教科の中に虐待などを中心に児童福祉関連授業をできる限り実施してきたが、補足的な授業でしかない。そこで、現在、教職課程のカリキュラムにも「福祉関連教科」を導入したカリキュラムの編成についての基礎的な研究を実施している。その一環として、「福祉関連教科」カリキュラム作成のための基礎データの収集として、昨年度は福祉関連事項・特別支援教育等について、本年度は特別支援教育等ついての学生調査を実施した。

本稿では、特別支援教育等ついて実施した学生調査の結果のうち「特別支援教育関連項目」について報告する。

【方法】

(1)授業時期…大学生：2024年。(2)授業対象…東京の二大学(122名(男性79名(64.8%)，女性42名(34.4%))：栄養学系9名，教員養成系113名）。(3)調査方法…授業の初回時にQRコードを読み込ませ授業内で実施、SNS(スマホ)で回答。(4)調査表の記入の説明(告知)…受講生に調査表の記入の説明を口頭で実施。①調査の記入の仕方・記入上の留意点。②調査の回答は任意、回答をしなくてもよい。回答をしたくない場合には、「回答したくない」にチェック(分析の際は「無回答」)。③調査項目などには正答がなく成績に関係しない。④結果は、授業方法の研究として学会や紀要などで公表するが、記入者が特定できないようにするなど。(5)回収…出席者全員。(6)分析項目…特別支援教育の①学校種ごとの対象者の存在(5段階評定)、②学校種ごとの必要性(6段階評定)・③対象児童生徒(24項目・複数回答)、④特別配慮が必要だと感じた者との関わり体験(3段階評定)。(%)は総数に対する割合。(7)凡例…囲込み数字50.0%以上で、丸数字は全項目の順位。比較差：＞10%以上、≒1%以上。学校種：「小学校等」は小学校・小中一貫校・義務教育学校、「中学校等」は中学校・小中一貫校・中等教育学校(前期課程)・義務教育学校、「高校等」は高等学校・中等教育学校(後期課程)。

【結果】

①学校種ごとの特別支援教育対象者の存在…対象者が「いた」のは、「小学校等(80.3%)」≒「中学校等(74.6%)」≫「高校等(23.8%)」≒「幼稚園・保育園(21.3%)」の順で、「大学」では41.0%がいると感じている。「いなかった」のは、「高校等(57.4%)」＞「幼稚園・保育園(33.6%)」＞「中学校等(18.9%)」≒「小学校等(10.7%)」の順で、「大学」では18.0%が「いる」と感じない。なお、「わからない・覚えていない」が、「幼稚園・保育園(44.3%)」「大学(41.0%)」。②学校種ごとの特別支援教育の必要性…小学校等(93.4%)≒中学校等(92.6%)＞幼稚園・保育所(77.0%)≒高校等(74.0%)＞大学(54.4%)の順で50%以上が必要性を感じている。③特別支援教育対象の児童生徒(24項目：複数回答)(表1参照)…50%以上は7項目で、「7.自閉症スペクトラム障害：ASD(86.1%)」「注意欠如・多動性障害：ADHD(84.4%)」≒「6.コミュニケーション障害(76.2%)」＞「5.限局性学習障害：LD(73.8%)」≒「3.主に情緒面に問題がある者(72.1%)」＝「11.身体障害(71.3%)」＞「15.心に問題を抱えている者(59.0%)」の順。④特別配慮が必要だと感じた者との関わり体験…学校体験活動・アルバイト・ボランティアなどで、特別に配慮が必要だと感じる者と関わったことが「ある」が73.8%、「ない」が26.2%。

表1．特別支援教育の対象になる児童生徒(複数回答)(総数＝122名)

項目	%
1.万引きや盗みなどの反社会的な行動をする者	21.3%
2.家出や放浪などの非社会的な行動をする者	22.1%
3.情緒不安、情緒表現の未成熟など、主に情緒面に問題がある者	⑤72.1%
4.虐待の疑いのある者＊	⑩37.7%
5.知的な遅れや視聴覚に障がいがなく、教育の環境は問題がないのに、読み・書き・計算など特定の領域で学習の遅れがみられる者(限局性学習障害：LD)	④73.8%
6.知的発達の遅れを伴わない状態で、コミュニケーションをとることが苦手だったり、言語発達に遅れがみられる者(コミュニケーション障害)	③76.2%
7.「自分の感情をコントロールする」「物事に集中する」「他人の表情から感情を理解する」などがうまくできない者(自閉症スペクトラム障害：ASD)	①86.1%
8.年齢や発達と不相応に、不注意、落ち着きのなさ、衝動などの問題が、生活や学業に悪影響を及ぼしている者(注意欠如・多動性障害：ADHD)	②84.4%
9.運動面で不器用さが著しく認められる者(発達性協調運動障害：DCD)	⑮23.0%
10.勉強がわからない者（知的能力障害：IDなど）	19.7%
11.身体にハンディキャップのある者(身体障害)	⑥71.3%
12.病気のある者	⑨40.2%
13.キレやすい者	⑬24.6%
14.不登校傾向のある者	⑧42.6%
15.心に問題を抱えている者	⑦59.0%
16.家庭環境に問題がある者＊	⑫32.0%
17.保護者に関心を持たれていない者＊	⑬24.6%
18.保護者が問題を抱えている者＊	⑬24.6%
19.兄弟姉妹が問題を抱えている者	15.6%
20.経済的に貧困である家庭の者＊＊	15.6%
21.外国籍や外国にルーツのある者＊＊	20.5%
22.ひとり親家庭の者＊＊	10.7%
23.性別違和（旧称・性同一性障害）の者	⑪33.6%
24.食べ物や花粉などにアレルギーを持つ者	6.6%
99.答えたくない	4.1%

注）＊：虐待関連項目　＊＊：福祉関連項目

【考察】

以上のことから、小・中学校では、特別支援教育の対象者が存在していたが多い、高校では存在しなかったが多いのは、高校入試の影響が考えられる。幼稚園や大学では、わからないが多くおり、前者では、そのような子どもたちを特別視することなく保育や教育を行っていることや、まだ学生の意識が弱かったことの現れといえよう。大学では、入試やコロナの影響が考えられよう。必要性に関しても、どの学校種でも必要性を感じている学生が多く、学校以外で配慮が必要と感じる者と関わったものが多いことなどから、現在、特別支援教育の基本的な考え方は浸透してきているといえよう。しかしながら、特別支援教育の対象者が「発達障害」関係の児童・生徒という狭い意味での定義に縛られており、対象の拡大には課題があるといえよう。

これらのことから、本調査は「特別支援教育」の授業開始時であるが、調査からは特別支援教育の浸透が確認できた。しかしながら、福祉関連の児童・生徒などを対象としにくいことなどから、福祉教育のカリキュラムの構築の重要性が示唆されたといえよう。

(ISHIBASHI Yuko, and HAYASHI Yukinori

教職課程における福祉教育のカリキュラム編成に関する基礎的研究（4）

－教職課程学生の特別支援教育等調査の虐待等の項目を中心として－

○林　幸範[1)]　　石橋　裕子[2)]

1)学研アカデミー保育士養成コース　　2)帝京科学大学

キーワード：教職課程、カリキュラム、福祉

【研究の目的】

筆者らは、特別支援教育での虐待児童の学習支援及び教職課程における虐待のカリキュラム化などについて検討してきた。その結果から、虐待に関して、教職課程ではほとんど教育が実施されていないことが明確となった。また、平成18(2006)年度に文部科学省が作成した「被虐待児資料」の福祉関連委員などの研究・著作などにおいては、教職課程における被虐待児童の発見から予防、教育現場での対応についての言及がほとんどなされていないことなどが明確となった。虐待はいじめなどと同様に子どもを取り巻く重要な問題の一つなので、筆者らは、教職課程の教科で虐待を中心に児童福祉関連授業を実施してきたが、限定的・補足的な授業でしかない。そこで、現在、教職課程のカリキュラムにも「福祉関連教科」を導入したカリキュラムの編成についての基礎的な研究を実施し、「福祉関連教科」カリキュラム作成のための基礎データの収集として、昨年度は福祉関連事項・特別支援教育等について、本年度は特別支援教育等ついての学生調査を実施した。ところで、平成24(2012)年に改正された『児童福祉法』は、『子どもの権利条約』の精神が基本となることが規定されている。そこで、本調査でも『子どもの権利条約』についても尋ねた。

本稿では、特別支援教育等ついて実施した学生調査の結果のうち「虐待関連項目」などについて報告する。

【方法】

⑴授業時期…大学生：2024年。**⑵授業対象**…東京の二大学(122名(男性79名(64.8%)，女性42名(34.4%))：栄養学系9名，教員養成系113名）。**⑶調査方法…**授業の初回時にQRコードを読み込ませ授業内で実施、SNS(スマホ)で回答。**⑷調査表の記入の説明(告知)**…『教職課程における福祉教育のカリキュラム編成に関する基礎的研究⑶』参照。**⑸回収**…出席者全員。**⑹分析項目…虐待関連**：①被虐待児の学校種ごとの存在(5段階評定)、②虐待の原因(15項目・複数回答)、③虐待発見時の対応(11項目・複数回答)、④虐待に対しての必要対応策(12項目・複数回答)、⑤子どもの権利条約関連(15項目・複数回答)。(%)は総数に対する割合。**⑺凡例**…囲込み数字 50.0%以上で、丸数字は全項目の順位。比較差：＞10%以上、≒1%以上。学校種：「小学校等」は小学校・小中一貫校・義務教育学校、「中学校等」は中学校・小中一貫校・中等教育学校(前期課程)・義務教育学校、「高校等」は高等学校・中等教育学校(後期課程)。

【結果】

①被虐待児の学校種ごとの存在…虐待または疑いがあるものが「いた」と感じたのは、「中学校等(17.2%)」≒「小学校等(12.3%)」≒「高校等(9.0%)」≒「幼稚園・保育園(5.7%)」＝「大学(いる：4.9%)」の順。「いなかった」のは、「高校等(49.2%)」≒「大学(いない：45.1%)」≒「小学校等(43.4%)」＝「幼稚園・保育園」「中学校等(各42.6%)」の順。「幼稚園・保育園」では「わからない」が 51.6%。　**②子どもの虐待の原因(15項目・複数回答)**…60%以上は、「2.保護者のストレス(94.3%)」≒「1.家庭の崩壊(92.6%)」≒「13.子育てのストレス(80.3%)」≒「9.経済的不安(74.6%)」≒「7.親子関係の変化(65.6%)」≒「12.保護者による子どもの私物化(63.1%)」＝「10.貧困(62.3%)」≒「3.保護者の意識)54.9%)」≒「8.道徳の崩壊(53.3%)」≒「11.体罰の肯定 50.8%)」の順の10項目。　**③子どもの虐待発見時の対応行動(11項目・複数回答)**…発見したときにとると考えられる行動の50%以上は2項目、上位5位は、「2.児童相談所に連絡(63.1%)」≒「5.児童相談所虐待ダイヤル「189」に連絡(54.9%)」＞「4.警察に連絡(38.5%)≒3.その子どもが通う学校などに連絡(36.1%)」≒「7.知り合いに相談(27.9%)」の順。　**④子ども虐待に対して必要な対応策(12項目・複数回答)(表1参照)**…50%以上は、6項目。　**⑤子どもの権利条約関連(15項目・複数回答)(表2参照)**…子どもの権利条約で大切と思うもの項目は、すべてが50%以上。

表1．虐待に対して必要だと考える対応策(複数回答)(総数＝122名)

項目	%
1.市区町村役所に通告（確実に伝える）	46.7%
2.市区町村役所との連携	45.1%
3.児童相談所に通告（確実に伝える）	①68.0%
4.児童相談所との連携	④59.0%
5.児童相談所虐待対応ダイヤル「189」へ通告（確実に伝える）	②66.4%
6.教員間の連携	⑤54.9%
7.虐待している保護者への援助	40.2%
8.虐待を受けている子どもへの援助	③61.5%
9.虐待を受けている子どもへの活動や学習支援などの方法の確立	⑥50.8%
10.特にない	0.8%
11.わからない	3.3%
13.その他	0.0%
99.答えたくない	0.8%

表2．子どもの権利条約で大切だと思う項目(複数回答)(総数＝122名)

項目	%
1.人と違う自分らしさが認められること	①86.9%
2.自分の考えをいつでも自由に言えること	②76.2%
3.疲れているときには休むなど、自由になる時間を持つこと	④74.6%
4.暴力や言葉で傷つけられないこと	⑦73.0%
5.人種、言葉、宗教などの違いで差別されないこと	⑥73.8%
6.自分の秘密が守られること	④74.6%
7.障がいのある子どもが差別されないで暮らせること	②76.2%
8.子ども自身の名誉が守られること	⑪69.7%
9.家族が仲良く、一緒に過ごす時間を持つこと	⑩70.5%
10.子どもが暴力や虐待を受けないこと	⑦73.0%
11.子どもからの自由な呼びかけでグループを作り集まれること	⑫63.1%
12.人間らしい豊かな教育を受けられること	⑦73.0%
13.子どもの知りたいことが隠されないこと	⑬55.7%
14.特にない	0.0%
15.その他	0.0%

【考察】

以上のことから、虐待またはその疑いがある子どもがいたと感じていたのは1割前後で、基本的には、同様な調査とほぼ同じような割合であった。虐待の原因については、子育てや経済的な家庭におけるストレスと、家庭の崩壊などをあげているが多い。さらに、自分が虐待またはその疑いがある子どもを発見した場合には、基本的に「189」を含め児童相談所に連絡をするのが多い。虐待に対しての対応策としても、児童相談所への連絡が上位を占め、次いで学習支援を含め子どもへの支援・援助をあげているが、特別支援教育の対象にあげている学生は少ない。このことから、虐待は、家庭で起こっているので原因は家庭にあり、さらに、発見をしたら児童相談所へ、が浸透しているといえよう。以前の同様な調査では、児童相談所ばかりではなく、上司に連絡をして、教員間などで対応というのがあったが、今回の調査では減っている。『子どもの権利条約』のどの項目も大切だと考えており、しかも、意見表明権を重要と考えている者が多い。現在、改正『児童福祉法』では、この意見表明権が重視され、施策の中核をなしている。だが、教育界では、この権利を行使させると、子どもは生意気になると思っている者が多い。また、『子どもの権利条約』は、第42条に広報の義務が規定されているが、「文部科学省」はカリキュラム化していない。

これらのことなどからも、福祉教育のカリキュラムの構築の重要性が示唆されといえよう。

(HAYASHI Yukinori, and ISHIBASHI Yuko)

大学生の親子関係とゲーム依存の関連

○澄岡美羽[1]　奥村由美子[2]
([1]帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2]帝塚山大学心理学部)
キーワード：ゲーム依存，親子関係，大学生，オンラインゲーム

【目的】 近年、デジタルゲームが若者のあいだで急速に普及した。その一方で、日常生活に支障をきたしてしまうほど、ゲームに依存してしまうことが社会問題化しており、米国精神医学会はDSM-5において、「インターネット・ゲーム障害」として掲げ、世界保健機関（WHO）は2019年に国際疾病分類ICD-11にて、「ゲーム障害」を新たな依存症として認定した。田中・福山（2020）は、ゲーム依存傾向が子どもの特性とゲームそのものの魅力との関係にのみによって形成されるわけでなく、社会環境や家庭環境、さらには発達に関わる親子関係の変化に影響を受けると述べており、親子関係とゲーム依存傾向の関連について焦点をあてた。また、田中・福山（2020）は、家族との会話機会の減少とゲーム依存の程度の相関が明らかになったと述べており、このことから、家族との会話機会の多さなどによってもゲーム依存傾向に違いがみられるのではないかと考えた。

そこで本研究では、大学生のゲーム依存の実態を調査し、ゲーム依存傾向の若者の親子関係に着目して分析することで、親子関係とゲーム依存の関連を明らかにし、ゲーム障害の予防のための子どもに対する親の関わり方を検討する。

【方法】 調査対象者は、近畿圏の大学に在籍する大学生122名（男性=50名、女性65名、回答しない7名、平均年齢 = 19.00歳、SD = 0.82）であった。Googleフォームにて質問紙を作成し、調査参加者の了承を得て、質問への回答を求めた。質問紙は、デモグラフィック項目、古賀・川島（2018）が翻訳した日本語版 Game Addiction Scale（GAS7-J）に加えて、「一日のゲームに費やす平均時間」、「よくプレイするゲームの種類」など全6項目を入れたゲーム依存傾向に関する項目、小高（2000）の「親―青年関係尺度」に加えて、「親との一日の会話の頻度」、「一か月間の親との外出の頻度」を入れた大学生から見た親子関係に関する項目で構成された。

【結果】 有意差がみられた項目の平均値および、標準偏差はTable 1 の通りであった。まず男女差がみられるかどうか調べるために、対応のない t 検定を行った。その結果、親子関係尺度において「親への服従」については、女性の方が男性よりも平均得点が有意に高かった（$t(113) = 2.07$, $p < .05$）。ゲーム依存傾向においては、男性の方が女性よりも平均得点が有意に高かった（$t(113) = 2.16$, $p < .05$）。

次に、ゲーム依存尺度の回答傾向によって「高い依存度群」（12名）、「中程度の依存度群」（13名）、「依存傾向が低い（ほとんどない）群」（97名）の3群に分け、対応のない一元配置分散分析を行った。その結果、親子関係尺度において「親との情愛的な絆」については有意な主効果が認められ（$F(2, 119) = 3.94$, $p < .05$）、Tukey法による多重比較を行った結果、「中程度の依存度群」が「依存傾向が低い群」と「高い依存度群」よりも有意に低かった。「一日のゲームに費やす平均時間」についても有意な主効果が認められ（$F(2, 119) = 20.04$, $p < .001$）、Tukey法による多重比較を行った結果、「高い依存度群」が「中程度の依存度群」と「依存傾向が低い群」よりもゲーム使用時間が有意に長かった。

また、「ゲーム依存傾向がほとんどない群」（97名）と「ゲーム依存傾向がある群」（25名）の2群に分け、対応のない t 検定を行った。その結果、親子関係において「親との一日の会話の程度」について、「ゲーム依存傾向がほとんどない群」の方が「ゲーム依存傾向がある群」よりも会話の程度が有意に高かった（$t(120) = 2.00$, $p < .05$）。

Table 1　有意差がみられた項目の平均値および標準偏差

尺度	群分け	平均値	標準偏差
ゲーム依存傾向	男性	14.72	6.72
	女性	12.17	5.89
親への服従	男性	7.00	3.91
	女性	8.43	3.47
親との情緒的な絆	高	15.83	4.04
	中	11.92	4.97
	低	15.10	3.92
一日のゲームに費やす時間	高	5.83	3.61
	中	3.04	2.03
	低	1.71	1.97

【考察】 一日のゲームに費やす時間が長いほどゲーム依存傾向が高くなることが示唆され、親が子どもの一日のゲーム使用時間を減らしていくことがゲーム依存の予防に繋がるのではないかと考えた。家族との会話機会の減少とゲーム依存傾向の関連がみられたことからも、些細なことでも、家族とのコミュニケーションの時間を設けることによって、ゲーム依存の予防、および一日のゲーム使用時間の減少につながることが考えられる。

【利益相反】 利益相反なし。

【引用文献】

田中 大介・福山 寛志 (2020). 保護者評定による子どものデジタルゲームの利用実態と保護者の意識に関する調査 子どもの発達・学習研究センター年報, *6*, 71-83.

古賀 佳樹・川島 大輔 (2018). 日本語版 Game Addiction Scale（GAS7-J）の作成と妥当性の検討 日本パーソナリティ心理学会, *7*, 175-177.

小高 恵 (2000). 親―青年関係尺度の作成の試み 南大阪大学紀要, *3*, 87-96.

（すみおか　みう・おくむら　ゆみこ）

英語学習における動機づけ始発方略尺度の作成

○山内春佳[1]　谷口淳一[2]　森泉慎吾[2]
([1]帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2]帝塚山大学心理学部)
キーワード：動機づけ，動機づけ始発方略，英語学習

目的

本研究では、英語学習における動機づけ始発方略を特定し、測定尺度の作成を行うことを目的とした。

藤田（2020）の非英語専攻学習者の英語学習に対する意識調査では、学習の必要性を感じていながらも実際に勉強している学生は少ないという結果が得られている。そのため、英語の学習をしようと思っても、実際の行動につながっていない英語学習者は多いのではないかと考えられる。

「学習する」という行動を起こすためには、何かしらのきっかけや動機がなくてはその行動を起こすことはできない。赤間（2015）は、「行動を開始するために自身を動機づける際に使用する方略を動機づけ始発方略、活動の持続のために動機づけを維持する際に使用する方略を動機づけ維持方略」と定義している。本研究では、効率的な英語学習について検討するにあたり、学習行動を起こすために必要とされる動機づけ始発方略に注目する。

動機づけの始発方略について扱った研究は少ない（伊藤・神籐, 2003; 赤間, 2015）。伊藤・神籐（2003）の自己動機づけ方略尺度では動機づけ始発方略と維持方略が分けられていない。また、赤間（2015）の動機づけ始発方略尺度では方略の使用場面を設定していない。そのため、本研究では英語学習場面に特化し、より詳細な動機づけ始発方略を測定する尺度を作成する。

方法

【予備調査】

予備調査では、英語学習の動機づけ始発方略を特定するために、実際に使用されている方略を自由記述で収集した。

近畿圏内の大学生133名（男性34名、女性96名、回答したくない3名、平均年齢19.48歳、*SD* = 1.34）を分析対象とした。

調査参加者には、「英語学習をやらなくてはならないが、どうしてもやる気にならない、行動を起こすことができないようなとき、どのようにやる気を出しているか、またはやり始めているか」について、実際に普段していることを自由記述形式で思いつく限り回答するよう求めた。

得られた回答について、動機づけに関する先行研究を参考にしながら、研究代表者と社会心理学を専門とする大学教員の2名により分類を行った。内容の類似している項目をまとめ、“やる気が出ないことがない”という動機づけの始発を必要としない内容の項目や、“英語学習をやらない” という動機づけの始発方略ではない項目は除外し、30項目が抽出された。さらに、久保（1997）と赤間（2015）を参考に項目を追加し、7方略35項目を本調査で扱うこととした（達成報酬方略、学習後想像方略、不利益回避方略、価値づけ方略、抵抗軽減方略、環境調整方略、メディア活用方略）。

【本調査】

調査参加者：過去1年間に英語学習を行った人で、英語学習をやらなくてはならないが、どうしてもやる気にならないことがあった近畿圏内の大学生152名（男性44名、女性104名、回答したくない4名）に対して調査を行った。回答者のうちDQS項目で正しい回答が得られなかった人を分析から除外し、147名（男性41名、女性102名、回答したくない4名、平均年齢18.59歳、*SD* =0.80）を分析対象とした。

手続き：「英語学習をやらなくてはならないが、どうしてもやる気にならない、行動を起こすことができないようなとき、どのようにやる気を出しているか、またはやり始めているか」について、予備調査で得られた35項目に対し、“1. 全くしない”“2. ほとんどすることはない”“3. あまりしない”“4. たまにすることがある”“5. 頻繁にすることがある”“6. いつもしている”の6件法で回答を求めた。調査はオンライン調査フォームで行った。

結果・考察

平均値が2.0以下を示した4項目を削除し、31項目に対し、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。スクリー基準および解釈可能性から因子数を4に指定し、因子負荷量が .40 未満の項目、複数の因子に .30 以上の負荷量を示した項目を削除し、分析を繰り返した。その結果、最終的に4因子22項目が採用された。第1因子は、“英語学習が将来の役に立つと考えるようにする”“生きていく上で英語は必要だと考えるようにする”など、学習後想像方略と価値づけ方略の項目が混ざって含まれており、英語学習をすることの価値を考えることで学習を始発する項目であった。そのため“価値づけ方略”と名付けた。第2因子は、“英語学習をやらなかったときに生じる問題を考えるようにする”“英語学習をやらなかったときのデメリットを考えるようにする”など、英語学習をやらなかったときに生じる不利益を考えることによって学習行動を始発する項目であった。そのため“不利益回避方略”と名付けた。第3因子は、“休憩を取ってから英語学習を始める”“他のやるべきことを全て終わらせてから英語学習を始める”など、英語学習を始める前に英語学習以外のことをすることによって、英語学習をすることへの抵抗を軽減させる項目であった。そのため“抵抗軽減方略”と名付けた。第4因子は、“英語学習が終わった後にやりたいことを考えるようにする”“英語学習が終わった後にできる楽しいことを考えるようにする”など、英語学習をした後に自分に与える報酬を考えることによって学習行動を始発する項目であった。そのため、“達成報酬方略”と名付けた。環境調整方略とメディア活用方略の項目は残らなかった。

今回得られた4方略は赤間（2015）の動機づけ始発方略でも似た方略が存在する。しかし、赤間（2015）ではみられた社会的方略は、英語学習場面ではみられなかった。そのため、社会的方略は別の行動の始発で使用される方略であるのではないかと考えられる。

【利益相反】本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

(やまのうちはるか・たにぐちじゅんいち・もりいずみしんご)

交通場面に対応した手つなぎと保護者の養育スタイルとの関係

－ 手つなぎの意味の多義性に基づく考察 －

○大谷　亮[1]
([1]（一財）日本自動車研究所自動走行研究部)

キーワード：歩行中の手つなぎ，交通安全，親子関係

【目的】歩行中の親子の手つなぎは，子どもの交通事故防止や自立の促進（手をつながないことで子どもの行動の自由度が高まること），さらには身体的接触を通した情緒的結びつきなどの多義的な意味を有する（大谷・栗山，2021）。この点から，保護者には交通場面の危険性や子どもの発達段階などに対応した手つなぎの遂行が求められる。歩行中の手つなぎは，保護者の養育スタイルが影響すると報告されているが（大谷，2024），交通場面の危険性に対応した手つなぎと保護者の養育態度との関係について調査した例はみられない。

本研究では，危険性が異なる交通場面を対象にして，場面の差に対応した手つなぎと保護者の養育スタイルとの関連を調査した。

【方法】上記の目的を検討するため，web アンケート調査を実施した。調査協力者（協力者）は，3 歳以上 10 歳以下の最年長児（対象児）をもつ保護者 1,200 名（男女同数 600 名：平均年齢 38.9 歳，標準偏差 4.2 歳，23 歳から 45 歳に分布）であった。調査では，交通事故の危険性が異なる 2 種類の場面（危険大場面と危険小場面）を CG で提示し，同場面を歩行する際に，対象児と手をつなぐと思うかを 7 件法（1. 全くそう思わない，2. そう思わない，3. あまりそう思わない，4. どちらでもない，5. ややそう思う，6. そう思う，7. とてもそう思う）で回答するよう協力者に求めた。また，統制性（家族（社会）の規範や規則に従うように求める側面）と応答性（子どもの要求などに同調し個性などを意図的に育む側面）の 2 次元の養育態度が，手つなぎに影響を及ぼすとの報告（大谷，2024）があることから，本研究では，これらを測定する中道（2013）の尺度を用いた。本尺度は 22 項目から構成され，4 件法（1. ぜんぜんあてはまらない，2. あまりあてはまらない，3. だいたいあてはまる，4. ぴったりあてはまる）で答える形式であった。調査は，（一財）日本自動車研究所が定める実験倫理委員会の承認を得た上で，2023 年 1 月に実施した。

【結果】養育スタイルについて，中道（2013）を参考にして，統制性と応答性の各得点が平均得点以上か否かによって，「権威的（統制性高/応答性高）」，「権威主義的（同高/同低）」，「許容的（同低/同高）」，および「放任的（同低/同低）」の 4 群に協力者を分類した。また，場面の差による手つなぎについて，危険大場面と危険小場面の手つなぎの各得点が中央値以上か否かにより手つなぎ傾向にあるか否かを判断し，「有無（危険大場面：手つなぎ傾向大/危険小場面：手つなぎ傾向小）」，「有有（同：傾向大/同：傾向大）」，「無無（同：傾向小/同：傾向小）」，「無有（同：傾向小/同：傾向大）」の 4 群の行動に分けた。場面の差による手つなぎと養育スタイルとの関連を調べた結果（Tab. 1 の全体），両者に有意な関連がみられ，効果量は小と判定された。残差分析の結果，権威的態度は「有無」「有有」が有意に多く，「無無」「無有」が少なかった。一方，放任的態度は逆の結果が示された。また，権威主義的態度は「有無」が多かった。さらに，許容的態度は「有有」が多く，「無無」が少なかった。なお，対象児の年齢の影響を調べるため，3 歳児，7 歳児，および 10 歳児の結果を抽出して確認したところ，10 歳児では，場面の差による手つなぎと養育スタイルとの間に有意な関連は認められず，効果量が小と判定された。一方，3 歳児と 7 歳児では有意差がみられ，両者とも，放任的態度は「有有」が少なく，「無無」と「無有」が多かった。ただし，いずれも効果量は小と判定された。

【考察】以上の結果から，有意差がみられた内容に着目すると，全体的な傾向として，危険性の高い交通場面では，権威的，権威主義的，および許容的態度の保護者は手をつなぐ傾向がみられ，子どもの交通事故防止の点から考えると，適応的な行動を行っていると推察される。一方，放任的態度の保護者は，子どもの年齢が低い場合に，危険性の高い場面でも手をつながない傾向がみられた。この点から，子どもの交通事故防止のためには，放任的態度の保護者に対して，手つなぎの重要性を伝達する取り組みが有用と考えられる。次に，危険性の低い交通場面では，権威主義的態度の保護者は手をつながず，許容的態度の保護者は手をつなぐ傾向が示された。また権威的態度の保護者は，同場面において，手をつなぐ保護者とつながない保護者が存在した。危険性の低い交通場面における手つなぎは，子どもの自立の点からすると手をつながないことが適応的と推察されるが，身体的接触を通した情緒的結びつきの点から考察すると，手をつなぐことが適応的とも考えられる。今後，危険性の低い交通場面における手つなぎ遂行の有無について保護者から理由を聴取し，同場面における手つなぎの意味を理解し，養育態度との関連を解釈することが必要である。なお，本研究では効果量が小さいとの結果が得られていることから，保護者の養育態度以外の要因にも着目した検討が重要である。

【利益相反】本研究に開示すべき COI はない。

【引用文献】

中道圭人．（2013）．父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響．静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇），63，pp109-121.

大谷亮．（2024）．養育態度のタイプが歩行中の保護者の監視に及ぼす影響．発達心理学会第 35 回大会発表論文集，6PM1-P-PS03.

大谷亮・栗山あずさ．（2021）．保護者の愛着や養育傾向が歩行中の子どもの監視に及ぼす影響．交通心理学研究，37，pp1-15.

【謝辞】本研究は，一般社団法人日本損害保険協会 2023 年度自賠責運用益拠出事業の一部をまとめたものであり，ここに記して感謝申し上げます。

（おおたに あきら）

Tab. 1 養育スタイルと場面の差による手つなぎとの関係

注）残差分析の結果，期待値より度数が多かった箇所（+），期待値より度数が少なかった箇所（−）。

	全体（N=1,200）				3歳児（N=153）				7歳児（N=142）				10歳児（N=96）			
	χ^2 (9) =159.86, p<.01, V=0.21				χ^2 (9) =35.41, p<.01, V=0.28				χ^2 (9) =19.19, p<.01, V=0.21				χ^2 (9) =11.79, n.s., V=0.20			
	権威	権威主義	許容	放任	権威	権威主義	許容	放任	権威	権威主義	許容	放任	権威	権威主義	許容	放任
有無	100+	55+	32	58−	7	6	6	7	17	9	2	9	5	4	1	4
有有	234+	82	70+	136−	26	14	20	22−	23	11	5	13−	7	2	1	7
無無	52−	39	17−	166+	0−	0	1	16+	8	5	2	18+	11	12	4	29
無有	28−	18	17	96+	6	1	4	17+	3−	4	0	13+	1	0	0	8−
合計	414	194	136	456	39	21	31	62	51	29	9	53	24	18	6	48

無信号横断歩道での一時停止に関わるドライバー特性の地域差

○森泉慎吾[1]　臼井伸之介[2]
([1]帝塚山大学心理学部　[2]大阪大学)

キーワード：ドライバー，地域差，一時停止

【目的】 日本自動車連盟（JAF）が毎年実施している無信号横断歩道における一時停止についての実地調査によれば，調査開始の 2016 年から一貫して「長野県」が最上位である。森泉・臼井（2021）は，長野県での一時停止率の高さについて，長野県民に見られる他者への感謝の傾向（Honda, 2020）がドライバーの一時停止に影響する可能性を指摘した。一方で，この研究では，比較対象となった一時停止率が相対的に低い A 県と長野県との間の，感謝の傾向以外の地域差（例えば，性格等のドライバー属性）について検討が不十分であった。そこで本研究では，長野県のドライバーの個人特性や交通安全に関する心理的傾向について，森泉・臼井（2021）の研究で見られた無信号交差点での一時停止の違いに影響するかどうかを検討することを目的とした。

【方法】研究参加者　長野県および上記 A 県在住のドライバーに対して，(株) サーベイリサーチセンターを経由して研究参加を依頼し，計 330 名から有効なデータを回収した（長野県 170 名，A 県 160 名）。平均年齢は 41.88 歳（*SD* = 10.01），平均免許取得年数は 22.69 年（*SD* = 10.17）であった。

質問票の構成

(1) 無信号横断歩道での一時停止　森泉・臼井（2021）と同様，「40 km/h で走行中に無信号横断歩道に近づいた際に横断しようとしている歩行者がいた場面」を想定させ，一時停止の見込みについて，0 から 100%までの数値で回答を求めた。歩行者までの距離は「100m」とした。また，同じ状況にて，自分が歩行者だったとき，相手のドライバーはどの程度停止してくれると思うかについても同様に回答を求めた。

(2) 感謝に関する項目　交通場面にて他者から感謝を示された経験について 3 項目（例．無信号横断歩道にて，あなたがドライバーとして道を譲った際に歩行者から感謝の意思を示される（頭を下げる，手を挙げる）こと）について，当てはまる程度を 7 件法で評価を求めた

(3) 交通行動の個人差に関する項目　駒田他（2008）の日本語版 Driving Behavior Questionnaire を参考に，日常運転時の「危険エラー」2 項目（例．幹線道路から横道に入る時に，横断している歩行者に気がつかなかった），「違反」3 項目（例．夜遅く，あるいは早朝に，わざと制限速度を無視した），「非危険エラー」3 項目（例．立体駐車場の中の，どこに車を止めたか忘れた）について，それぞれの分類の構成項目にどの程度当てはまるかを 6 件法で回答を求めた。また，森泉・臼井（2011）の Risk Propensity Questionnaire より，違反や交通事故との関連が示されている「状況的敢行性」6 項目（例．歩行時，赤信号でも車が来なければ渡る）について，どの程度当てはまるかを 5 件法にて回答を求めた。いずれも，それぞれの構成項目の平均を尺度得点とした。

(4) パーソナリティ　並川他（2012）の BIG FIVE 尺度短縮版より，「外向性」（例．無口な）「誠実性」（例．いい加減な）「情緒不安定性」（例．不安になりやすい）「開放性」（例．多才の）「調和性」（例．短気）の計 29 項目について 7 件法にて回答を求めた。構成項目の平均を尺度得点とした。

(5) その他項目　性別，年齢，免許取得年数等を尋ねた。

手続き　先の調査会社を通じて，Google フォームで作成した質問票について，研究参加に同意した者に回答を求めた。実施時間は約 15 分であった。本研究は，帝塚山大学研究倫理委員会より承認を得て実施された（承認番号：04-40）。

【結果と考察】 無信号横断歩道での一時停止率について，地域（長野／A 県），立場（ドライバー／歩行者）を独立変数，一時停止率を従属変数とする 2 要因散分析を行った結果，交互作用効果が有意であった（$F(1, 328) = 11.24$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .03$）。単純主効果の検定の結果，自身がドライバーの立場の場合の一時停止率に有意な地域差は見られなかったが（A 県 $M = 80.61$, 長野県 $M = 81.98$, $p = .60$），自身が歩行者の立場の場合には，A 県（$M = 41.30$）と比較して長野県（$M = 52.71$）では一時停止をされる率が有意に高かった（$p < .001$）。

Table 1 は，長野県と A 県での，測定変数の平均・標準偏差および多変量または一変量分散分析の検定結果である。測定変数にて有意な地域差が見られたものは，「ドライバーとして歩行者から感謝されること」「歩行者としてドライバーに感謝すること」であり，いずれも A 県と比較して長野県の得点が高かった（順に，$F(1, 328) = 10.91$, $p = .001$, $\eta_p^2 = .03$; $F(1, 328) = 7.13$, $p = .008$, $\eta_p^2 = .02$）。

本研究より，長野県における無信号横断歩道での一時停止の高さについては，ドライバーの性格や安全態度の問題ではなく，ドライバーと歩行者の間で交わされる感謝によって形成された互恵性が影響する可能性が示唆された。

Table 1
測定変数の地域差

測定変数	長野県 (n = 170) 平均値	*SD*	A県 (n = 160) 平均値	*SD*	備考
感謝に関する項目					
ドライバーとして歩行者から感謝されること	**4.96**	±1.33	**4.43**	±1.57	Willks $\lambda = .96$, $p = .004$, $F(3, 326) = 4.47$, $\eta_p^2 = .04$
歩行者としてドライバーに感謝すること	**5.56**	±1.27	**5.16**	±1.50	
他車から感謝されること	4.91	±1.24	4.76	±1.36	
交通行動に個人差に関する項目					
危険エラー ($\alpha = .78$)	2.08	±0.99	2.08	±0.97	
違反 ($\alpha = .78$)	2.05	±1.04	2.21	±1.10	Willks $\lambda = .99$, $p = .236$, $F(3, 326) = 1.42$, $\eta_p^2 = .01$
非危険エラー ($\alpha = .59$)	2.21	±0.82	2.33	±0.92	
状況的敢行性 ($\alpha = .73$)	3.19	±0.55	3.07	±0.61	$F(1, 326) = 3.58$, $p = .059$, $\eta_p^2 = .01$
パーソナリティ					
外向性 ($\alpha = .90$)	3.74	±1.29	3.76	±1.20	
誠実性 ($\alpha = .83$)	4.26	±0.98	4.10	±0.84	
情緒不安定性 ($\alpha = .89$)	4.60	±1.21	4.65	±1.24	Willks $\lambda = .99$, $p = .46$, $F(5, 324) = 0.93$, $\eta_p^2 = .01$
開放性 ($\alpha = .84$)	3.80	±1.00	3.68	±0.91	
調和性 ($\alpha = .85$)	4.18	±1.07	4.17	±0.83	

【引用文献】 ※誌面の都合上，以下のみ掲載する
森泉 慎吾・臼井 伸之介 (2021). ドライバーへの感謝が無信号横断歩道での一時停止に及ぼす影響―質問紙調査による検討―　日本応用心理学会第 87 回大会論文集, 76.

【利益相反】 COI 関係にある企業等はありません。

（もりいずみ しんご・うすい しんのすけ）

脅威喚起は列車乗降時における隙間転落への意識変容を促すか

防護動機理論にもとづく啓発メッセージの効果検証

○前田　楓[1]　橋本博文[2]
([1]立教大学現代心理学部心理学科　[2]大阪公立大学大学院文学研究科)

キーワード：防護動機理論、リスク認知、社会実装

【目的】

本研究の目的は、鉄道利用時における列車とホームの隙間転落に関する安全啓発をより効果的なものとするための手立てを検討することにある。

鉄道利用時の安全性向上に関する取り組みの一つに、列車とホームの隙間に転落する事故を防ぐための啓発活動がある。過去3年間にわたるデータについての分析結果によると、列車とホームの隙間に転落してしまう人たちのうち、10歳未満の子どもが相対的に多い事実が示されている。この事実を踏まえ、西日本旅客鉄道株式会社や大阪市立デザイン教育研究所等は現在、保護者や子ども自身に隙間転落への危険性を意識してもらうことを目的とする「こども隙間転落防止プロジェクト」を展開している。

前田・橋本（2023）は、当該プロジェクトが展開された直後に、メッセージの受け手に対して恐怖を喚起する「脅威アピール」の有効性を説明する防護動機理論（Rogers, 1983）を踏まえた知見をもとに、隙間転落に対する脅威評価と対処評価が、実際の隙間転落への対処行動につながるか否かを検討している。その結果、隙間転落に関する脅威のアピールに加え、保護者に「子どもに隙間転落させないための自信」を持たせるような安全啓発がより効果的である可能性が示されている。本研究では、前田・橋本（2023）の研究知見を踏まえつつ、列車とホームの隙間転落について、その脅威に関するメッセージと、そうした脅威への対処に関するメッセージのそれぞれが、人々の隙間転落に対する行動にどのような効果をもたらすかを検討するための実験研究を実施する。

【方法】

調査対象者　大阪環状線利用者かつ10歳未満の子どもがいる保護者342名（平均年齢40.31歳、男性227名、女性114名、不明1名）を対象とした。

実験条件と手続き　まず、対象者を4つの条件（統制群・脅威強調群・対処強調群・脅威＋対処強調群）にランダムに割り当て、条件ごとに異なる内容のシナリオを読ませた後に、列車とホームの隙間転落に関する調査に回答してもらった。脅威強調群（n = 86）では、参加者に「お子様の隙間転落による被害は深刻で、小さな子どもであれば誰にでも起こる可能性がある」など、列車とホームの隙間転落に関する危険性に関する文章を読ませ、対処強調群（n = 87）の参加者には「隙間転落の危険性をお子様に伝える、乗り降りの際にはお子様と手をつなぐ、あるいは、隙間をまたぐときの合言葉などを決めておいてお子様自身が安全に乗り降りできる状況をつくっておく」など隙間転落を未然に防ぐための対処に関する文章を読ませた。脅威＋対処強調群（n = 85）では、脅威強調群と対処強調群の両方の文章を読ませた。統制群の参加者（n = 84）には、何も読ませず調査に回答してもらった。

質問項目　前田・橋本（2023）と同様に、列車とホームの隙間転落に対する危険性認知を測定するため「あなたのお子様が列車とホームの隙間に転落する危険性はどの程度あると思いますか」という項目を7件法で尋ねた。また、隙間転落への対処行動を測定するための尺度についても7件法で回答を求めた。具体的な質問項目の内容は、「列車とホームの隙間が危ないということを子どもに伝えようと思う」「列車に乗り降りするときには、子どもと手をつなごうと思う」など計7項目であった。

【結果】

まず、条件ごとに隙間転落の危険性認知得点が異なるか否かを検討するため、危険性認知を従属変数、実験条件（統制群・脅威強調群・対処強調群・脅威＋対処強調群）を独立変数とする一要因分散分析を行った（Figure 1）。その結果、条件の主効果は有意であった（F (3, 338) = 8.12, p < .001, 偏 η^2 = .07）。多重比較の結果、統制群と脅威強調群（t (338) = 4.76, p < .001）、脅威強調群と対処強調群（t (338) = 3.29, p < .01）、統制群と脅威＋対処強調群（t (338) = 2.72, p < .05）の間に有意な差が示された。この結果は、隙間転落の危険性認知については脅威強調群の得点が他の群と比較して高いことを示すものである。続いて、隙間転落への対処行動（α = .95）についても同様の分析を行った結果、条件の主効果が有意であった（F (3, 338) = 5.51, p < .01, 偏 η^2 = .05）。多重比較の結果、統制群と脅威＋対処強調群（t (338) = 3.01, p < .05）、脅威強調群と脅威＋対処強調群（t (338) = 3.69, p < .01）の間に有意な差が示された（Figure 1）。

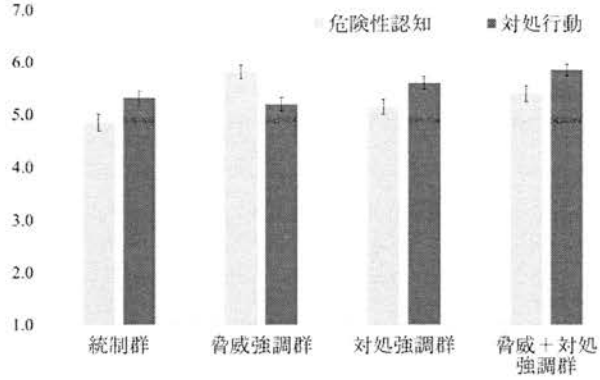


Figure 1. 危険性認知と対処行動の得点

【考察】

Figure 1に示す通り、子どもが隙間に転落してしまう危険性それ自体を認識させるためには「隙間転落の危険性」を強調したメッセージを提示することが有効であるものの、隙間転落への対処行動意図を高めるためには、脅威の強調に加えてそうした脅威を防ぐための対処も併せて伝えることが重要である可能性が示された。条件ごとの得点パターンをみれば、隙間転落の危険性のみの強調した群の対処行動の得点が最も低い水準にあり、脅威のみを強調しても列車とホームの隙間転落の安全啓発には十分ではない可能性がある。これらの知見を踏まえた啓発物を実際に作成、駅構内に掲示し、その啓発物による人々の意識変容を今後詳細に分析する必要がある。

また、これまでは保護者を対象とする研究知見を積み上げてきたが、保護者とその子どもが隙間転落に関する危険性や対処法を共有することが効果をもつ可能性もある。両者のペアデータを収集できるよう、「こども隙間転落防止プロジェクト」の幼稚園等でのイベント時にインタビューや調査を実施することも今後の課題である。

【利益相反】

本研究について、報告すべき利益相反に関する事項はない。

（まえだ かえで・はしもと ひろふみ）

高齢歩行者のセルフ・レギュレーション（安全ゆとり歩行）

○松浦常夫[1]
([1]実践女子大学名誉教授)

キーワード：高齢歩行者、セルフ・レギュレーション、安全ゆとり歩行、SOC 理論

【目的】筆者は、高齢運転者のセルフ・レギュレーションの枠組みとしてバルテスの SOC 理論（補償を伴う選択的最適化理論）を適用した（Matsuura, 2010; 松浦, 2008;2020)。高齢歩行者の安全ゆとり歩行にもこれが適用可能かどうかを調べることが本研究の目的である。そのために、SOC 理論の枠組みで安全ゆとり歩行（歩行者の安全歩行のための対処や工夫）を分類する。

SOC 理論は、高齢になると生理的な機能の低下や社会的役割が減少して、成長よりも衰退の方が多くなるが、こうした中で獲得を最大にし、喪失を最小にするにはどうしたら良いかという問題に対処するために、次の３つの戦略を考えたバルテスの理論である(Baltes & Baltes, 1990。

① 活動の領域や範囲をしぼること（選択 S: selection)
② 最大の力が発揮されるよう、使える資源を活用したり、手段を採用したりする（最適化 O: optimization)
③ 活動のレベルを維持するために、今までとは別のやり方を探したり、他の人や機関の助けを借りたりする（補償 C: compensation)

参考までに高齢運転者のセルフレギュレーション（安全ゆとり運転）の枠組みを以下に示す（松浦, 2008;2017;2020)。

表１　安全ゆとり運転の分類

安全ゆとり運転		SOC理論	記述数
時期	種類		
運転前の対処	運転制限	選択	102
	運転準備	最適化	29
運転行動	速度抑制	補償	131
	注意集中	補償	44
	防衛運転	補償	39
	その他	補償	142

【方法】

対象　昭和自動車学校の企業講習参加者、焼津シルバー人材センターの登録者、中野シルバー人材センターの登録者の計 414 名に対して質問紙を配布した。このうち、歩行に及ぼす加齢の影響等に対する対処や工夫についての自由回答に回答した 205 名を分析対象とした。年齢は 65 歳以上が 82%、男性が 68%を占め、運転免許保有者は 95%いた。

分析項目　質問紙調査の項目には他の項目も含まれていたが、ここでは年齢、性別、免許有無と運転頻度、および歩行時の加齢の影響等に対する対処や工夫（安全ゆとり歩行）についての自由回答を分析対象とした。

安全ゆとり歩行についての自由回答の分類手続きは、
①３つの対象施設ごとに、自由記述をした人の自由記述文をエクセルに転記した。
②施設ごとに、自由記述をした人の文章を読んで、表１の安全ゆとり運転の分類に準じて、対処や工夫を歩行前の制限、歩行前の準備と歩行中の安全ゆとり志向行動に分けた。
③施設ごとに、これら分類を修正して大、中分類を作った。
④施設ごとに多少異なった分類項目を統一して、３つの施設の回答を１つにまとめた。また小分類も加えた。

【結果と考察】

表２　歩行のための対処や工夫（安全ゆとり歩行）の分類

大分類	中分類	小分類	人数（延べ）
Ⅰ歩行前の対処			
1 制限・選択			
	時間帯	夕方や夜間の歩行を控える	11
	天候	雨天時は歩かない	1
	道	坂道でないコースを選ぶ等	4
		小計	16
2歩行前の準備			
	反射材、ライト	夜は反射材や懐中電灯を持って歩く	15
	眼鏡・コンタクト	メガネやサングラスをかける	7
	履物	歩きやすい靴をはいて歩く	9
	服装持ち物	夜は白っぽい服装をする	3
		両手は常に空けておく	3
		杖を使う	2
	出発時間	早目に出発	2
	体調	体調が良いときに歩く	2
	その他		2
		小計	45
3 日頃の準備	広い歩幅	大股で歩く	10
	早歩き	早歩きをする	10
	歩く習慣	ふだんから歩くようにしている	3
	ストレッチ・体操習	ふだんからストレッチや体操をしている	4
	その他		2
			29
Ⅱ歩行中の対処			
4 歩き方	歩行速度	ゆっくり歩く	15
		危ないところは早足で歩く	3
	歩行姿勢	姿勢良く歩く	5
	足の運び方	足をつま先を上げて歩く,かかと着地	3
	休憩	休みながら歩く	4
	その他		6
		小計	36
5 通行場所			
	歩道	歩道を歩く	10
	横断歩道	信号のある横断歩道を歩く	4
		横断歩道を歩く	3
	右側通行	道の右側を歩く	6
	通行位置	道路の端・隅を歩く	4
	回り道	回り道しても安全な方を選ぶ	2
	その他		3
		小計	32
6 つまづき転倒注意			
	段差	段差に気をつける	11
	凹凸	路面の凹凸に気を付ける	5
	足元	足元を見て歩く	5
	転倒	転倒しないように注意する	5
		小計	26
7 注意・確認			
	周囲への注意	周りをよく見て注意して歩く	16
	自動車	車に気をつける	8
	信号	信号に注意し、点滅したら渡らない	7
	音	後方からなどの音に注意する	4
	歩きに集中	わき見や考え事をしないで歩く	3
	視力低下、見ずらさ	視力が低下しているので、よく見て歩く	3
		夕方は見ずらいのでとくに注意する	2
		標識が見ずらいので注意して見る	2
	安全確認	横断するときは左右をよく確認する	10
		安全を確認する	5
	交通事故	交通事故にあわないようにする	3
	安全第一	安全第一をこころがける	3
	その他		12
		小計	78
		合計（その他の対処を除く）	262

安全ゆとり歩行は、歩行前の選択、歩行前の準備、日頃の準備、歩き方、通行場所、つまずき転倒注意、および注意・確認の７つに大きく分類された。これは SOC 理論が高齢歩行者の安全ゆとり歩行にも適用可能であることを示す。ただし、分類内容は運転の場合と少し異なっていて、たとえば、選択は少なく、準備が多かった。また、予想に反し、安全ゆとり歩行の分類分布や実行率に年齢差は見られなかった。

【利益相反】なし

【引用文献】

松浦常夫（2017）．高齢ドライバーの安全心理学．東京大学出版会.
松浦常夫（2022）．高齢ドライバーの意識革命　安全ゆとり運転で事故防止．福村出版.

（まつうら　つねお）

無信号交差点出会い頭事故の道路交差角と高齢運転者の特性

○矢野伸裕
（科学警察研究所交通科学部）

キーワード：鈍角と鋭角，衝突時の衝撃度，認知範囲

【目的】 2本の道路が交わる角度が直角ではない交差点の場合，鋭角と鈍角の交差角が存在する。一般に，運転者の視点では鋭角で交差する道路の交通は視認しにくく，一方，鈍角で交差する道路の走行車両同士が衝突した場合，衝撃度が大きくより重い事故になりやすいと考えられる。しかし，道路交差角と事故の関係についてはこれまでほとんどデータがない。本研究では，車両相互の無信号交差点出会い頭事故について，事故当事車両が走行してきた道路の間の交差角と第1当事者の年齢層との関連について分析を行った。

【方法】 本研究では，千葉県内の交通事故データベース（人身事故のみ），千葉県警が独自に収集している事故当事者の進行方向方位角データ，全国デジタル道路地図データベース（DRM；一般財団法人日本デジタル道路地図協会）を使用した。まず，各事故について，発生地点の緯度経度情報と事故当事者の進行方向方位角データから，DRM上で該当する交差点と，1当および2当の事故当事車両がそれぞれ走行していた道路リンクを照合して特定した。そして，2つの道路リンクの間の交差角（以後、事故交差角）を各リンクの道路方位角データから算出した。なお，DRM上で交差点や道路リンクを特定できなかった場合はその事故を分析から除いた。また，交差角が5°未満と175°以上となった場合は照合・特定の不良としてその事故を分析から除いた。

本研究では、2014～2023年に千葉県内で発生し，以下の3条件を満たす事故を対象とした。

- 無信号交差点で発生した自動車同士の出会い頭事故
- 交差する道路を1当2当がそれぞれ直進
- 1当側に一時停止規制あり

以上の3条件のもとであれば，事故になり得る道路リンクの組み合わせは基本的には鋭角と鈍角が同数になると考えられる。しかし，一部に例外的な道路状況での事故が含まれるため，厳密には同数とはならない。

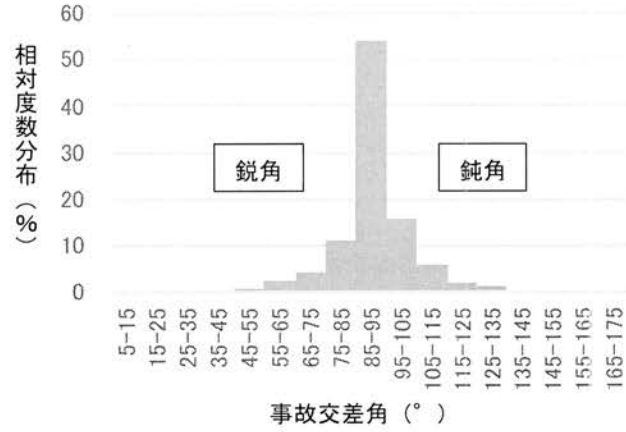
【結果】 分析対象の事故件数は4,449であった。それらの事故交差角の相対度数分布を示したものが図1である。交差点として最も一般的なほぼ直角の85°～95°の事故交差角を除くと，全体的には，鈍角領域のほうが多かった。

次に，事故交差角5°～75°を鋭角，105°～175°を鈍角とし，鋭角，鈍角それぞれの事故が占める割合を1当運転者の年齢層別に示したものが図2である。なお，高齢になるほど衝撃耐性が低く小さい衝撃でも怪我をして人身事故として計上されやすくなるという影響を除くため，1当運転者には損傷がなく2当運転者のみ損傷したという事故（2,676件）に限定して分析を行った。75歳未満は，図1と同様，鋭角よりも鈍角の事故の割合が大きい。これに対し，75歳以上では逆に鋭角の割合が大きかった。年齢層と事故交差角（鋭角／鋭角以外）の3×2表のカイ二乗検定を行ったところ有意差が認められた（$\chi^2(2)=0.625$, $p<0.05$, Cramer's $V=0.05$）。調整済み残差分析により，75歳以上は65歳未満より鋭角の事故が多いことが示された。

【考察】 図1の結果について，全体的には鋭角より視認しやすいはずの鈍角のほうが事故が多かった理由として，鋭角での衝突と比べて鈍角での衝突はより正面衝突に近いために衝突時の衝撃度が大きく，人身事故になりやすいことが考えられる。したがって，人身事故に至らない程度の物損事故を含めて分析すれば異なる結果になる可能性もある。また，視認しにくい鋭角の道路リンクを確認するために注視先がその方向に偏りやすく結果的に鈍角の道路リンクに対する確認が不十分になる可能性も考えられる。

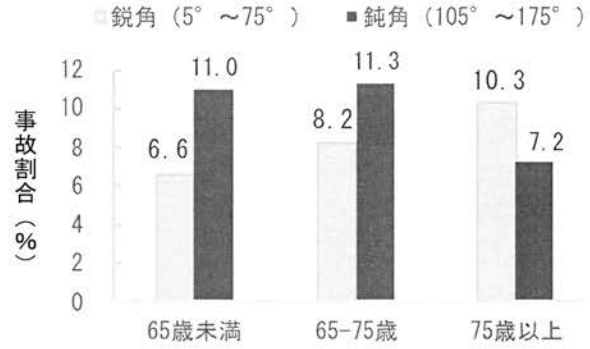
一方，75歳以上の高齢運転者では，75歳未満とは逆に，鋭角のほうが事故が多く，また鋭角での事故の割合も65歳未満より大きいことが確認された。視認しにくい鋭角の道路リンクを確認するためには運転者は身体を大きく回転させる必要であるが，高齢者の場合身体の動きが不十分なことや，視野の狭窄などによる認知範囲の狭さが鋭角の道路リンクを走行する車両の見落としや認知ミスにつながっていることが考えられる。

図1　事故交差角の相対度数分布（%）



注．分析対象の事故は4,449件。

図2　事故交差角が鋭角および鈍角である事故が占める割合（%）



注．分析対象の事故は2,676件。1当側損傷なし，2当側損傷ありの事故に限定

【利益相反】本研究に関し開示すべきCOIはありません。

（やの　のぶひろ）

乱数生成課題に反映される視空間特性について

拮抗する形態知覚と空間知覚

○板垣文彦[1]　須永範明[2]　鹿内菜穂[3]（非会員）
[1]国立病院機構東京医療センター・臨床研究センター　[2]日本大学文理学部　[3]亜細亜大学経営学部

キーワード：視空間イメージ，乱数生成課題，ワーキングメモリ

【目的】一桁の数を用いてランダムに音声生成させる乱数生成(Random Number Generation: RNG）課題は,ワーキングメモリの中央実行系を反映する課題であるが,数を音声で生成するという音韻性に加えて,その視空間特性を明らかにできれば,音韻ループと視空間スケッチパッドを備えたワーキングメモリ全体の課題として発展させることができる．過去にRNG 課題における視空間特性はさまざまな側面から指摘されてきた．板垣(1991)は,ロールシャッハ・テストにおいて形のある良形態の反応を多く生成する割合の高さ（F＋%）とRNG 課題で生成された数系列に含まれる自然数対の割合の少なさの関係を報告している．Loetscher ら(2007)は RNG 課題(Mental Dice Task)において人間が小さい数を選択する傾向(Small Number Bias: SNB)を左空間への注意と関連づけたが,Bachmann ら(2010) は,言語流暢性に対するデザイン流暢性の優位性が SNB に反映されることを報告している．また,須永ら(2017)は RNG 課題遂行後に数表象イメージを内省報告させ,それが個人の物体イメージの鮮明さに関連していると述べている．本研究では,視空間イメージの鮮明さに関する質問紙を用いて,乱数指標との関連を検討する．

【方法】実験参加者：（大学生 33 名,男性 19 名,女子 14 名）
乱数生成課題：1～9 までの数を使用して主観的にランダム性と生成速度のバランスをとって音声生成することを求めた．
条件：RNG 課題は 150 秒間,立位姿勢で閉眼条件・開眼条件（2.5m 先の固視点を提示）の 2 条件で実施した．閉眼・開眼を確認するため音声データを動画で記録した．条件の順番は被験者間でカウンターバランスをとった．
質問紙：視覚イメージの個人差を測定するため,視覚的イメージスタイル質問紙(川原ら,2009)を用いた．この質問紙では物体と空間との鮮明さを評価する 2 つの下位尺度がある．「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた．
分析手続き：RNG 課題では以下の 4 指標を用いた．ACN% (Ascending Counting Number%):上昇系列の自然数対頻度の割合(e.g. 1-2,2-3,...8-9), ②DCN% (Descending Counting Number%):下降系列の自然数対頻度の割合(9-8,8-7,...2-1),③WCN%(Whole Counting Number%): ACN%と DCN%の和,④AM (Average Magnitude)：生成された数すべての平均マグニチュード（値が小さいほど SNB 傾向を意味する）．

【結果】物体イメージ評定に男女差はなかったが（38.53 vs 38.14),空間イメージ評定は男性が女性よりも有意に高かった(29.26 vs 22.57, p<.05)．RNG 指標の AM に関しては閉眼条件に比較して開眼条件で有意に値が低く,小さい数を生成しやすいという SNB が生じている(5.02 vs 4.94, p<.05)が,この傾向は閉眼条件の女性の AM の大きさに起因している (5.09 vs 4.94)．その他の RNG 指標には有意差はなかった．表 1 に示したように物体・空間のイメージ評定には閉眼条件での RNG 課題指標との相関はなかった．一方,開眼条件で空間イメージと ACN%間に有意な相関が認められた(r=.53,p<.01)．男女別に見ると,この関係性は男性でのみで確認された(r-.52,p<.05)．一方で男性の物体イメージは ACN%と有意な負の相関を示している(r=-.50,p<.05)．

表 1．　乱数生成課題指標と物体・空間イメージの鮮明さ評定の相関

		閉眼条件				開眼条件			
		AM	ACN%	DCN%	WCN%	AM	ACN%	DCN%	WCN%
全体(n33)	物体イメージ	-0.06	-0.01	0.08	0.04	0.04	-0.27	0.12	-0.11
	空間イメージ	-0.05	0.27	0.11	0.30	-0.03	0.53 **	-0.08	0.32
男性(n19)	物体イメージ	0.05	-0.26	0.08	-0.15	0.24	-0.50 *	0.09	-0.34
	空間イメージ	0.20	0.29	0.20	0.37	0.24	0.52 *	-0.30	0.23
女性(n14)	物体イメージ	-0.20	0.29	0.07	0.28	-0.32	0.03	0.14	0.13
	空間イメージ	-0.03	0.19	0.00	0.15	-0.48	0.46	0.00	0.27

* p<.05, **p<.01

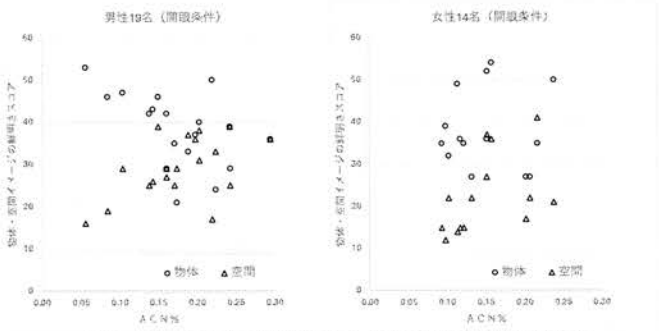


図 1．視空間イメージの鮮明さと上昇自然数系列生成の割合

【考察】本研究では RNG 課題条件として開眼条件を組み込んだことで,人間の視空間特性と自然数系列頻度との関係が明らかになった．閉眼条件では視覚情報が遮断されることで心的数直線が比較的容易に維持できていたと考えられるが開眼条件ではそれが難しくなり,上昇系自然数の発声によって数直線イメージが修復されている可能性を示唆している．男性ではそれが同時に物体イメージの低下に関係しているが,図 1 左では極端に ACN%が 10%未満の男性参加者が存在することで空間イメージと物体イメージの拮抗関係が引き起こされているといえる。RNG 課題には他にも思考的男女差を指摘する報告(板垣ら,2015）があり、今後、ワーキングメモリ全体の構造を網羅する統合的な分析が求められる．

【利益相反】本研究に利益相反は無い．

【引用文献】

板垣文彦(1991). 乱数生成における思考過程―注意,拡散的思考,創造性の関連について―, 日本大学人文科学研究所研究紀要, **41**, 167-179.

Loetscher,T.・Brugger,P. 2007 Exploring number space by random digit generation. *Experimental brain research*, **180**, 655–665.

Bachmann, V., Fischer, M.H., Landolt, H.P., Brugger, P. (2010). Asymmetric prefrontal cortex functions predict asymmetries in number space. Brain and Cognition, 74, 306-311.

須永範明・板垣文彦・伊藤憲治 2017 乱数生成課題における表象イメージ空間を探る第 8 回 21 世紀科学と人間シンポジウム大会発表論文誌.

川原正広・松岡和生 2009 視覚的イメージスタイル質問紙作成の試みイメージ心理学研究, **7**, 19-31.

板垣文彦・Turk,D.J 2014 数表象空間の 3 次元性と男女差　日本認知心理学会第 12 回大会発表論文集.

板垣文彦,若林明雄,乱数生成課題に反映されるシステマイザー特性と男女差,日本心理学会第 79 大会発表論文集 12, 思考・言語, 2015.

（いたがきふみひこ・すながのりあき・しかないなお）

催眠の一般的な使用場面・用途についてのイメージ

―自己組織化マップを用いた追加的検討―

○中谷智美[1]　福井義一[2]　今井田貴裕[3]　磯和壮太朗[4]　堀　孝司[1]　大浦真一[5]
([1]甲南大学大学院人文科学研究科　[2]甲南大学　[3]人間環境大学　[4]名古屋芸術大学　[5]東海学院大学)

キーワード：催眠イメージ，テキストマイニング，自己組織化マップ

【目的】

催眠は，有用な心身のケア技法であるにも関わらず，わが国における一般のアクセシビリティは著しく低い。その一因に，催眠についての誤解や偏見（一柳, 2006）といった不適切な催眠イメージが催眠への忌避的態度を形成している点が指摘される。その解決には，催眠イメージを適切に修正し，催眠態度を改善する心理教育プログラムを開発する必要がある（Fukui & Nakatani, 2024; 中谷他, 2022）。そのためには，催眠イメージの異なる側面を特定し，それぞれの催眠態度との関連を明らかにすることが先決であろう。

こうした試みとして，アダルト・ビデオのタイトルと説明文（中谷・福井, 2022, 2023）や，Yahoo!知恵袋に投稿された催眠を含む相談内容（福井他, 2024; 中谷他, 2024）を対象とした研究から，催眠は心理的ケアに適用されるだけでなく，娯楽作品において面白おかしく描写されていることや，猥褻行為に悪用するイメージが蔓延していることなどが分かった。また，大学生から収集された4つの催眠イメージ（一般的な利用場面・用途，催眠状態期待，催眠で可能な行為，自身が催眠者である場合の利用場面・用途）についての自由記述回答の計量テキスト分析からは，催眠イメージの中核には自他の「操作的イメージ」があることや，催眠イメージと催眠態度の対応関係において性差が存在することが分かった（福井他, 2022a-c; 中谷他, 2022a-g, 2023; Nakatani et al., 2022）。

しかしながら，自由記述回答を対象に催眠イメージの構成要素を検討したこれらの研究では，表記ゆれの統一が不十分であったことに加えて，共起ネットワーク分析しか実施されていなかったという2つの問題点があった。共起ネットワーク分析では，共起関係を有する語のネットワークを抽出できるが，語やネットワーク相互間の距離や関係性，さらには自由記述データ全体のパターンや構造を把握することができないという方法論上の問題がある。

そこで，本研究では，以前の研究で扱った4つの催眠イメージのうち，「催眠の一般的な使用場面・用途」についてのイメージを取り上げ，1）データの事前整理をより洗練させた上で，共起ネットワーク分析をやり直すとともに，2）全体的なパターンや構造を把握するために，自己組織化マップを適用し，共起ネットワーク分析の結果と比較した。

【方法】

協力者：自由記述回答が得られた大学生220名（男性62名，女性158名）のデータを使用した。平均年齢は19.48歳（*SD*=1.24）であった。データには，一連の研究（例，中谷他, 2022a, c; Nakatani et al., 2022）と一部重複がある。

尺度構成：催眠の一般的使用場面・用途についての質問に対する自由記述回答を得た。質問票には，本研究で使用されなかった尺度も含まれていた。

手続き：調査は，第2～4著者の担当する講義の一環として実施された。質問票調査実施後，データの研究利用と，同意の有無による不利益の非生起性等について説明し，同意が得られた者のみのデータを使用した。

【結果】

共起ネットワーク分析からは，1：恐怖や痛みの軽減と苦手の克服，2：他者操作，3：記憶の消去や想起，4：精神疾患の治療，5：ショーにおける披露，6：心理的問題や悩みの解決，7：本音の聴取，8：テレビのバラエティ番組用，9：鎮静化，10：制御の10の共起ネットワークが得られた。加えて，自己組織化マップからは，1：記憶の消去や想起とパフォーマンス，2：カウンセリングとマジック，3：ショーなどのエンターテイメントと心理療法，宗教，4：恐怖の軽減と企画，5：テレビのバラエティ番組用，6：苦手の克服，7：鎮痛と精神的治療，使途不明，8：鎮静化，9：心理的問題の解決，10：医療や詐欺，11：催眠療法と犯罪，洗脳，12：睡眠とトラウマ，13：他者操作の13のクラスターが得られた。2つの分析結果をFigure 1に並べて示した。

【考察】

共起ネットワーク分析では，娯楽関連（5, 8）の語と治療関連（1, 4, 6, 9）の語が別々の共起ネットワークを構成したのに対して，自己組織化マップでは，両者が混在するクラスターが多く見られた（2, 3, 5, 10, 11）。さらに，娯楽関連語と犯罪関連語が混在するクラスターも見られた（10, 11）。これらのことから，娯楽や治療，犯罪などのイメージが，同じ文脈で語られていると考えられる。このことは，人々は催眠が治療に用いられるという漠然としたイメージを有しているものの，その詳細な内容は未知であり，娯楽や犯罪への適用と同列にみなしている可能性が示唆される。これが，治療的催眠イメージが必ずしも肯定的な催眠態度と対応しない（福井他, 2022b; 中谷他, 2022c, e, g）ことの一因なのかもしれない。

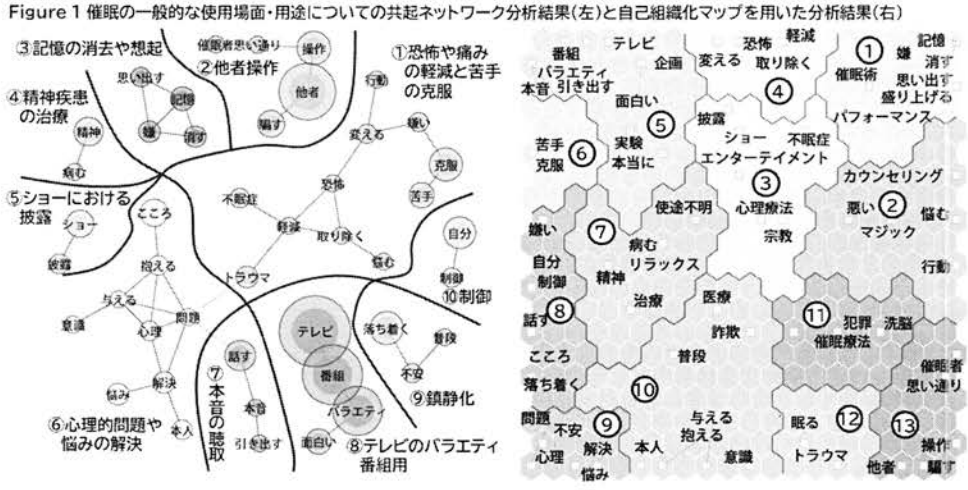
【利益相反】

この発表に関連し，開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。

【引用文献】

中谷 智美他（2022）．催眠状態期待の修正を意図した心理教育による意識的・非意識的催眠態度の変化―大学生を対象とした予備的研究―　甲南大學紀要 文学編, 172, 151-171.
（なかたに ともみ・ふくい よしかず・いまいだ たかひろ・いそわ そうたろう・ほり たかし・おおうら しんいち）

Figure 1 催眠の一般的な使用場面・用途についての共起ネットワーク分析結果(左)と自己組織化マップを用いた分析結果(右)



飽きたと感じたときに見ていた刺激への評価の個人差

単純接触パラダイムによる検討

○富田瑛智[1]　栗延孟[2]（非会員）
（[1]帝塚山大学心理学部　[2]浦和大学社会福祉学部）

キーワード：単純接触効果，飽き，飽きやすさ傾向

【目的】

過度な繰り返し場面では飽きが生じ，繰り返し接触した対象へのポジティブな評価（Zajonc, 1968）が低下するとされている（Montoya et al., 2017）。しかし，富田・栗延（2021）は，過度な繰り返し場面で刺激を見なくなる参加者はいるが，参加者が刺激を見続けていた場合は刺激へのポジティブな評価が維持されることを示している。過度な繰り返し提示場面でのポジティブ評価の低下は，「飽き」ではなく刺激を見なくなる（注意を向けなくなる（Yagi et al., 2009））ために生じる可能性がある。

ただし，富田・栗延（2021）では参加者にいつ「飽き」が生じたのか明らかでなかった。つまり，参加者が刺激に「飽きて」ポジティブ評価が低下したため，見なくなったのか，実験環境に「飽きて」見なくなったのか明らかでなかった。そこで，富田・栗延（2024）では参加者に飽きを感じた時点でキー押しを行ってもらい，「飽き」を感じる前と「飽き」を感じた後に提示された刺激への好ましさ評定値の比較を行った。その結果，実験全体に「飽き」は感じていたにもかかわらず，すべての刺激条件が新規刺激よりポジティブに評定されていた。つまり，参加者が実験環境に「飽き」を感じていても，刺激へのポジティブ評価の低下は生じないといえる。

本研究では，富田・栗延（2024）の結果が個人特性としての飽きやすさ傾向（BP: Boredom Proneness）（Farmer & Sundberg, 1986）の影響を受けるのか検討した。富田・栗延（2022）では，BP 得点が高い（飽きやすさ特性が高い）参加者ほど，過度な接触場面で刺激を見なくなることが示されている。しかし，BP 得点が高い参加者は，実験環境に「飽きて」刺激を見なくなったのか，刺激に「飽きて」刺激が嫌になり見なくなったのか，明らかでない。そこで，本研究では BP 得点の低い参加者と BP 得点の高い参加者で刺激に「見飽きた」と判断した前後の刺激への評価が変化するのか検討した。

【方法】

参加者　クラウドソーシングサービスで募集し指示の通りに参加した成人 76 名（女 28 名男 48 名）であった。平均年齢は 44.66 歳（SD = 9.02）であった。

手続き　参加者はオンラインで実験に参加した。参加者は無意味輪郭図形 64 枚（富田ら, 2013）の中から 18 枚（「事前刺激」6 枚，「判断まで刺激」6 枚，「判断前後刺激」6 枚）を実験開始直後に 12 回ずつ繰り返し見た。これらの刺激が提示された後，参加者は刺激に「見飽きた」と感じたタイミングでキー押しを行った。参加者が「見飽きた」と回答するまでは「判断まで刺激」，「判断前後刺激」が指定回数に達するまで繰り返し提示された。参加者がキー押しを行うと，引き続き「判断前後刺激」が 12 回ずつ繰り返し提示された。「判断前後刺激」の提示が終了すると，実験の途中評価として，提示された刺激を引き続き見たいか，実験は興味深いか，実験を続けたいか，飽きてきたかの 4 問の項目（7 段階評定）が順次表れ，参加者はこれらに回答した。回答が終わると新たな 6 枚の刺激（「判断後刺激」）が 12 回ずつ提示された。刺激提示が終わると，参加者はここまでに提示された刺激と新規の刺激 6 枚（「新規刺激」）の合計 30 枚の刺激に対して 7 段階の好ましさ評定を行った。好ましさ評定までに提示された刺激の提示回数は「新規刺激」が 0 回，「事前刺激」が 12 回，「判断まで刺激」が事前の 12 回と参加者が「見飽きた」と判断するまでの数回の合計（12 回＋数回），「判断前後刺激」は事前の 12 回と「見飽きた」と判断するまでの数回と判断した後の 12 回の合計（24 回＋数回），「判断後刺激」は実験の途中評価後の 12 回であった。すべての刺激に対する評定の後，参加者は実験全体への印象に関する項目，BP 尺度への回答を行った。

【結果】

刺激条件（5 水準：新規刺激，事前刺激，判断まで刺激，判断前後刺激，判断後刺激）と BP 尺度得点（低，高）の 2 要因を独立変数とし，刺激への好ましさ評定値を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果，刺激の条件の主効果（$F(4, 296) = 13.93$, $p < .001$, $\eta_p^2 = 0.16$）と刺激の条件×飽きやすさ傾向尺度得点の交互作用の傾向（$F(4, 296) = 2.36$, $p = .053$, $\eta_p^2 = 0.03$）が得られた。

刺激の条件ごとに BP 得点の高さの主効果が得られるか単純主効果の検定を行ったところ，判断後刺激のみ有意であり（$p = .017$），BP 得点が高い参加者より低い参加者で評定値が高かった。また，BP 得点高群と低群のいずれも刺激条件の単純主効果が有意であり（$ps < .001$），いずれも新規刺激に比べ残りの刺激条件の評定値が高かった。

【考察】

「見飽きた」と判断し具体的にどの程度飽きているかを評価した後に提示された刺激（判断後刺激）への好ましさ評定値は BP 得点が低い参加者に比べ BP 得点が高い参加者で低かった。BP 得点が高い参加者は，自身が「見飽きた」と感じた後に新たに表示された刺激へのポジティブ評価を減じる可能性が示された。しかしながら，BP 得点の高さにかかわらず，新規刺激以外の刺激は新規刺激よりもポジティブに評価されていたことから，BP 得点の高さによるポジティブ評価の低下の効果は小さいといえる。またポジティブ評価が低下した刺激の繰り返し提示回数は 12 回であり刺激提示回数として過度とはいいがたい。本研究において生じた「飽き」は，それが生じた時点で，刺激が過度に繰り返されているかではなく，繰り返される環境や状況に生じていることを示す。そして，環境や状況への飽きによるネガティブな評価の一部が，提示されている刺激に般化する可能性がある。

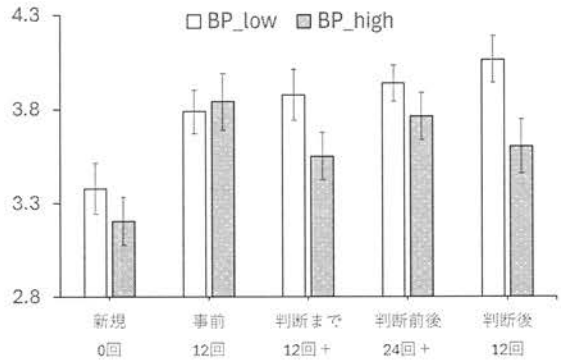


図　各刺激条件への好意度評定値の平均値

【利益相反】本研究には利益相反は無かった。

（とみた　あきとし・くりのぶ　たけし）

心霊信奉尺度の作成

信頼性と妥当性の検討

○今井田貴裕[1]・皿谷陽子[1]
([1]人間環境大学心理学部)

キーワード：心霊信奉尺度・信頼性・妥当性

【目的】

心霊現象に意味づけた経験を心理臨床実践で扱うことがある（e.g., O'Keeffe et al., 2019）ため，心霊信奉に関するアセスメントが必要となることがある。しかし，心霊信奉に関する知見は少なく（Plante, & Schwartz, 2021），わが国特有の文化的影響を考慮したアセスメントツールも存在しない。

また，心霊経験を有する人々の背景に解離傾向の高さや解離性障害があるとされている（岡野, 2015）。解離とは，思考・感情などの心的過程が切り離されることにより一時的または持続的に人格の統合性が失われる体験（田辺, 1994）である。解離に由来する体験を心霊現象の体験と意味づけることにより心霊信奉が高じる可能性があること（今井田，印刷中）を考慮すれば，心霊信奉の収束的妥当性を検討するために解離傾向との関連を検討する必要がある。

そこで本研究では，わが国の臨床実践で活用可能な心霊信奉尺度を作成し，心霊信奉と解離傾向の関連を検討した。

【方法】

調査 1　平均年齢が 19.32 歳（*SD* = 1.24）の一般大学生 336 名（女性 173 名・男性 163 名）の協力を得た。自由記述の質問（「1. あなたの幽霊のイメージをできる限り詳しく教えてください」,「2. あなたの幽霊が出ると思う場所の具体例を教えてください」,「3. 幽霊が出る条件について，できる限り詳しく教えてください」）を含む質問票調査を実施した。

調査 2　平均年齢 19.56 歳（*SD* = 1.18）の大学生 254 名（女性 142 名・男性 112 名）の協力を得た。調査 1 で作成された心霊信奉を問う項目群を含む質問票調査を実施した。

調査 3　平均年齢 19.18 歳（*SD* = 1.10）の大学生 272 名（女性 172 名・男性 100 名）の協力を得た。心霊信奉や解離傾向（田辺, 1994）を含む質問票調査を実施した。

倫理的配慮　所属先の倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

調査 1 で得られた自由記述のデータについて，回答の重複や表現などを修正し 24 項目に集約した。同項目群の回答方法は 5 件法（1. そう思わない ～ 5. そう思う）とした。

調査 2 で得られたデータから，心霊信奉に関する 24 項目に対する項目別の基礎統計量の検討と探索的因子分析を実施した。基礎統計量の検討から不備のある項目は抽出されなかった。次に，因子構造を推定した結果，MAP 分析で 3 因子解が示された。そこで，3 因子解での探索的因子分析（最尤法・オブリミン回転）を実施した。因子負荷が.40 以下の項目を削除し続けた結果，最終的に 20 項目（Table 1）となった。第 1 因子が霊障信奉（α = .88），第 2 因子が霊魂信奉（α = .91），第 3 因子が悪霊信奉（α = .90）に関する項目群で構成されており内的整合性も良好であった。以上を心霊信奉尺度と命名した（Table 1）。

調査 3 で得られたデータから，心霊信奉尺度に対する確認的因子分析と心霊信奉と解離傾向の関連を検討した。適合度（$\chi^2(167) = 595.30$, $p < .001$, CFI = .90, GFI = .82, AGFI = .77, RMSEA = .10, AIC = 686.30）は良好と言い難かった。高次因子モデル（$\chi^2(167) = 595.30$, $p < .001$, CFI = .90, GFI = .82, AGFI = .78, RMSEA = .10, AIC = 681.30）と一般因子モデル（$\chi^2(150) = 462.80$, $p < .001$, CFI = .92, GFI = .85, AGFI = .78, RMSEA = .08, AIC = 582.80）の適合度は後者の方が良好であった。相関分析の結果，解離傾向は，霊障信奉（$r = .18$, $p < .001$）と弱い有意な正の相関が，霊魂信奉（$r = .05$, $p = .460$）および悪霊信奉（$r = .04$, $p = .485$）と無相関がそれぞれ確認された。

【考察】

心霊信奉尺度の内的整合性や確認的因子分析の結果は良好であった。しかし，霊障信奉と解離傾向の相関は弱く，それ以外は無相関であった。これは，本研究の対象が健常群であり，心霊現象に意味づけた経験を有する人々は健常群で 1 割程度であること（今井田，印刷中）や高い解離傾向を有する人々が健常群に少ないことが原因であろう。今後，臨床群で心霊信奉と解離傾向の関連を検討する必要がある。

【利益相反】

利益相反関係にある企業は無い。

【引用文献】

今井田 貴裕. (印刷中). 心霊現象として意味づけた経験と包括的解離傾向，超自然現象信奉，催眠態度の関連――一般大学生を対象としたパイロットスタディ―― 臨床催眠学.

岡野 憲一郎. (2015). 解離性障害をいかに臨床的に扱うか. 精神神経学雑誌, *117*(6), 399-412.

O'Keeffe, C., Houran, J., Houran, D. J., Dagnall, N., Drinkwater, K., Sheridan, L., & Laythe, B. (2019). The Dr. John Hall story: a case study in putative "Haunted People Syndrome". *Mental Health, Religion & Culture*, *22*(9), 910-929. https://doi.org/10.1080/13674676.2019.1674795

Plante, T. G., & Schwartz, G. E. (2021). Introduction to a special issue on prayer and communication with the divine, the sacred, the departed, and the demonic in spiritually oriented therapy. *Spirituality in Clinical Practice*, *8*(3), 161-163. https://doi.org/10.1037/scp0000277

田辺 肇 (1994). 解離性体験尺度と心的外傷体験との関連――日本版 DES の構成概念妥当性の検討―― 催眠学研究, *39*(2), 1-10.（いまいだ たかひろ・さらがい ようこ）

Table 1
心霊信奉に関する項目に対する探索的因子分析の結果

No	項目内容	F1	F2	F3	h^2	*M*	*SD*
霊障信奉							
20.	海・川・池のような水辺に幽霊が出る	**.70**	.12	−.04	.58	2.91	1.19
24.	夜に幽霊が出やすい	**.68**	−.03	.03	.47	3.71	1.24
21.	心霊スポットでは霊障が起こる	**.66**	.27	−.06	.68	3.22	1.21
13.	幽霊は怖い	**.63**	.02	−.04	.39	3.65	1.26
23.	幽霊は弱った心に付け込んでくる	**.59**	−.05	.07	.36	2.58	1.24
19.	事件や事故のせいで，幽霊が存在する	**.57**	.06	.14	.48	3.07	1.20
6.	幽霊は恐ろしいと考えている	**.57**	−.05	.16	.41	3.34	1.30
16.	幽霊は危害を加えてくると思う	**.54**	.15	.11	.50	2.87	1.14
霊魂信奉							
15.	怨霊は存在する	−.10	**.90**	.30	.91	3.10	1.23
14.	地縛霊は存在する	−.01	**.80**	.27	.83	3.07	1.21
10.	悪霊は存在する	.19	**.67**	.15	.76	3.22	1.24
8.	守護霊は存在する	−.04	**.67**	.26	.56	3.23	1.26
R 18.	幽霊は錯覚である	.10	**.65**	−.20	.47	3.16	1.17
R 17.	幽霊は想像上のイメージである	.10	**.59**	−.22	.40	3.07	1.26
R 7.	幽霊は存在しない	.23	**.59**	−.10	.53	3.31	1.30
悪霊信奉							
4.	幽霊はこの世に未練があると思う	.29	−.02	**.66**	.71	3.63	1.23
12.	幽霊は生前に心残りがあるから存在する	.17	.24	**.63**	.73	3.43	1.24
5.	幽霊は怨念を抱えている	.27	−.03	**.63**	.64	3.22	1.19
11.	幽霊は生に執着心があるから存在する	.22	.15	**.59**	.65	3.06	1.18
2.	幽霊は死んだときの恨みが強いから存在する	.26	.16	**.47**	.54	2.87	1.36
	因子寄与	7.97	6.80	4.99			

注）Rは逆転項目

高校生の自殺リスクと自我同一性および インターネット行動に関する研究

～抑うつ・不安・防衛機制・多次元自我同一性とインターネット行動の視点から～

○岸　竜馬[1]　滝谷寿美（非会員）[2]　塚本伸一[3]
([1]福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター　[2]桜の聖母短期大学　[3]東京未来大学)

キーワード：自殺リスク，自我同一性，インターネット行動

【目的】自殺者数は小中高ともに増加している。高等学校においては自殺要因の半数以上が「不明」であり，高校生のる自殺は原因がわからず予測のつきにくいものである。

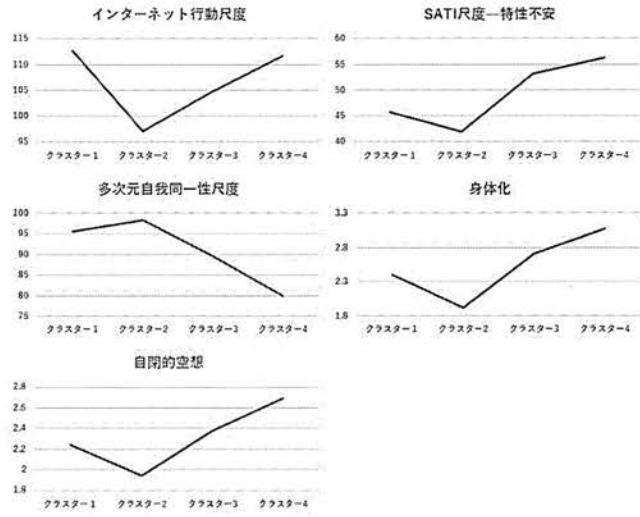
自殺の背景要因には，もともと個人が持っている素因もまた１つの要因となり得る。その素因の１つとして，行動抑制システム（Behavioral Inhibition System：以下，BIS）と行動接近システム（Behavioral Approach System：以下，BAS）の個人差があり，自殺との関連については，BISが高く，かつBAS-Driveが低い場合に，最も希死念慮を抱きやすいとされる。ストレス葛藤状況に対処するためにとりやすい特徴的スタイルとして防衛機制がある。ストレス場面において精神的な辛さを言語化できず身体症状として訴える防衛機制の「身体化」が，自殺リスクを予測する可能性が考えられる。または現代の青年が心理的葛藤や苦痛を回避するため防衛機制の「自閉的空想」を用いてインターネット行動に没頭し仮想空間に引きこもろうとするのではないか，と考え，心理的苦痛の対処としての防衛機制とインターネット行動の高さが自殺リスクを予測し得る可能性も想定される。

そこで本研究では，高校生の自殺リスクと関連する心理的特徴および行動的特徴の把握を目的として，質問紙調査を実施することとした。

【方法】調査対象：A県の高校生507名
調査実施期間：2023年4月～7月
実施質問紙；BIS/BAS 尺度日本語版（高橋ら，2007）
インターネット行動尺度短縮版（藤・吉田，2009）
多次元的自我同一性尺度（MEIS）（谷，2001）
The Defense Style Questionnaire 日本語版（中西，1997）
STAI 状態—特性不安尺度（特性不安項目のみ使用）（遠山ら，1976）

【結果】BISとBAS-Driveの得点を用いたクラスター分析結果から，クラスター1：BIS中位×BAS-Drive高位タイプ（134名），クラスター2：BIS中位×BAS-Drive低位タイプ（118名），クラスター3：BIS高位×BAS-Drive低位型の潜在的リスクタイプ（174名），クラスター4：両高型の顕在的リスクタイプ（81名）の4群となった。分散分析の結果，インターネット行動について，クラスター1が2と3よりも有意に高かった（それぞれ$p<.001$）。クラスター4も2と3より有意に高かった（それぞれ$p<.001$，$p<.05$）。STAI尺度については，クラスター4は他クラスターよりも有意に高かった（それぞれ$p<.001$，$p<.001$，$p<.05$）。多次元自我同一性尺度において，クラスター1は3と4よりも有意に高かった（$p<.001$）。クラスター2も3と4よりも有意に高かった（$p<.001$）。防衛機制「身体化」については，クラスター2は3と4よりも有意に低く（$p<.001$），クラスター4は1よりも有意に高かった（$p<.001$）。防衛機制「自閉的空想」では，クラスター4が1と2よりも有意に高かった（それぞれ$p<.05$，$p<.001$）。

【考察】クラスター4の両高型は，インターネット行動に積極的だが，不安が強く自我同一性は低く，身体化や自閉的空想という防衛機制で不安に対処しやすいと思われ，自殺のリスクに関しては顕在的リスク群と考えられた。クラスター1のBIS中位×BAS-Drive高位タイプは，クラスター4同様



にインターネット行動に積極的だが，不安は低く自我同一性も高かった。これらのことから，一概にインターネット行動が自我同一性の拡散に影響するのではなく，自殺の顕在的リスク群の自閉的空想の手段としてインターネット行動にのめりこむタイプと，適応的なインターネット行動を行うタイプがあると推察され，インターネット行動そのものと自殺リスクが関連するのではなく，インターネット行動にのめりこむ心性と自殺リスクの関連が示唆された。クラスター2のBIS中位×BAS-Drive低位タイプは，自我同一性が最も高かった。クラスター3のBIS高位×BAS-Drive低位型の潜在的リスクタイプは，クラスター4に次いで不安が強く自我同一性は低く，身体化や自閉的空想という防衛機制で不安に対処しやすい結果であった。また，インターネット行動はクラスター1と4よりも低かった。クラスター3はクラスター4の顕在的リスク群よりも身体化やインターネット行動が目立ちにくいため，自殺の潜在的リスクが見逃されやすい群として注視していく必要があると思われる。

【利益相反】開示すべき利益相反はない。

【引用文献】

藤　桂・吉田富二雄(2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響：ウェブログ・オンラインゲームの検討より　社会心理学研究，25，121-132.
中西公一郎(1998). The Defense Style Questionnaire 日本語版（DSQ42）－日本での防衛機制研究のために－　社会学研究科紀要　47，27-33
谷　冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成－ 教育心理学研究，49，265-273.
高橋 雄介・山形 伸二・木島 伸彦・繁桝 算男・大野 裕・安藤 寿康(2007). Gray の気質モデル　パーソナリティ研究，15, 276-289.https://doi.org/10.2132/personality.15.276
遠山尚孝,千葉良雄,末広晃二(1976). 不安感情—特性尺度(STAI)に関する研究　日本心理学会第40回発表論文集,891-892.

（きし　たつま・たきや すみ・つかもと　しんいち）

ACTにおける言語化による価値の明確化プロセスの効果に関する研究

○洞出 翼[1]　河越 隼人[2]（非会員）
([1]帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2]帝塚山大学心理学部）
キーワード：Acceptance &Commitment Therapy(ACT)，価値観の明確化，価値観

【目　的】

Acceptance and Commitment Therapy(ACT)とは人生において避けることのできない苦悩をありのままに受入れ，自身が本当に大切にしている価値観に従事することを目指す心理療法である。そんなACTには個人の価値を明確化するプロセスがあり，通常「ACTにおける価値の説明」，「価値の言語化」，「順位付け」の3つの過程で実施される。しかし，この過程それぞれの効果については，未だ十分な検討がなされておらず，価値の明確化プロセスの更新や最適化にはまだまだ議論の余地がある（坂野・武藤,2012)。そこで本研究はACTにおける価値の明確化のプロセスにおいて，その過程の1つである「順位付け」を省略し，言語化までの過程を実施した場合の効果を検証することを目的とした。

【方　法】

実験参加者　近畿圏の大学に通う大学生30名（男性7名，女性22名，回答なし1名，平均=19.93歳，*SD*=1.08歳)。

尺度構成

日本語版 Valuing Questionnaire (VQ)（土井他,2017）

「前進」と「障害」の2因子から構成される。「前進」は個人的価値の自覚や価値と行動の一致度合いを測定し，「障害」は価値へ向かう行動への干渉の大きさを測定する。

Values Clarification Questionnaire (VCQ)（齋藤他,2017）

「動機付け」他3因子から構成されるが，本実験では価値の明確さの確認のために「動機付け」因子のみ用いた。

価値観評価スケール（Wilsonsandoz, et al., 2010）

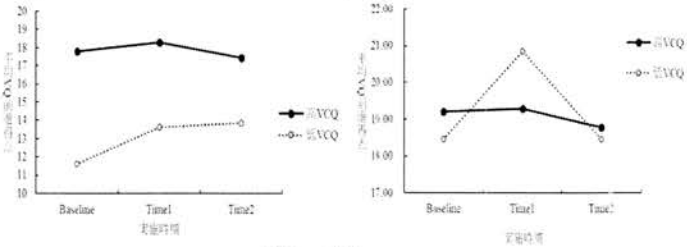
12の価値領域について，自身の価値観を短文で記述する尺度である。本研究では日本人大学生に適切でないと判断した領域を除外した9項目で価値の明確化を行った。

実験手続き　参加者にVQテストを実施し(Baseline)，その後，価値の説明と言語化を行う。終了後，VCQテストを実施し，その後1週間後(Time1)と1か月後（Time2）に再びVQテストを実施し，回答を得る。

【結　果】

VQ両得点に実施時期の差がみられるか調べるために1要因の分散分析を実施したところ，両得点共に有意な差は見られなかった。そこで，価値の明確さの確認に用いた，VCQ得点の中央値を基準にVCQ高低2群に分け，混合計画分散分析を実施した（Figure 1)。結果，VQ前進得点において，群間の主効果が見られた。単純効果の検定の結果，高群には実施時期による差は見られず，低群にはBaselineとTime 1,Time 2の間に有意な差が見られた。一方で障害得点には交互作用及び各要因の主効果は見られなかった。しかし，低群の障害得点の変動については言及する必要があると考え，実施時期による差を比較したところ，BaselineとTime 1間に有意傾向，Time 1とTime 2間に有意な差が見られた。

Figure 1
VCQ両群別の実施時期ごとのVQ両得点の変動



【考　察】

分析の結果，まず高群が低群より前進得点が高い点について，高群は普段から自身の価値と行動の一致度が高く，より現実的な価値をまとめられたと考えられる。また，その影響により，価値の言語化だけでは，普段の生活と大差なく，VQ両得点共変化が見られなかったと考えられる。一方で低群は普段から価値については意識しておらず，まとめた価値に対する，実感が薄かった可能性がある。しかし，その結果，価値の言語化だけでもその恩恵を受けられたと考えられる。ただし，障害得点は前進得点に伴い上昇がみられる。これは価値が明確化された分，障害の存在が浮き彫りになったことが原因と考えられる。ただ，1か月後に低下しており，これは障害への馴れの影響と考えられる。このことから，順位付けが無くとも，価値の方向性さえ明確ならば，長期的には，障害得点が低下することが明らかとなった。以上のことから，順位付けを省略し，言語化だけを実施した場合，普段から価値を意識しない人々には一定の効果が見られるが，一時的に障害得点の上昇もみられることが明らかとなった。

本研究の課題として，サンプルサイズが小さいという点や統制群を設置しなかった点，価値の説明における教示文の修正の必要性などが挙げられる。今後はこれらの点に注意しつつ，再度検証する必要があるであろう。

【利益相反】

本研究に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

土井 理美・坂野 朝子・武藤 崇・坂野 雄二 (2017). 日本語版Valuing Questionnaire(VQ)の信頼性と妥当性の検証，行動療法研究 *43*, 83-94.

齋藤 順一・柳原 茉美佳・嶋 大樹・岩田 彩香・本田 暉・大内 佑子・熊野 宏昭 (2017).価値観の明確化尺度の作成および信頼性と妥当性の検討，行動療法研究,*43*, 15-26.

坂野 朝子・武藤 崇 (2012). 「価値」の機能とは何か：実証に基づく価値研究についての展望，心理臨床科,*2*, 69-80.

Willson, K.G.・Emily K. Sandoz, and Jennifer Kitchens. (2010) The Valued Living Questionnaire: Defining and measuring valued action within a behavioral framework. *The Psychological Record,60*,249-272.

（ほらで つばさ・かわごし はやと）

思春期の子を持つ母親の悩み

○井梅由美子　大橋　恵　藤後悦子
（東京未来大学こども心理学部）

キーワード：子育て　中学生　困り感

【目的】

思春期は友人関係における葛藤や進路の問題等，心理的な危機になりやすい時期である。一方，親にとっても思春期の子どもとの関わりは難しい時期である。小学生高学年から高校にあたるこの時期には，身体の成長とともに心の成長も著しく，親との距離感も変わっていく。この時期は，幼児期からの親子関係の問い直しが行われることも多く（田中, 2009）場合によっては，子どもの側の激しい反発等親子間の葛藤も生じやすい。しかし，乳幼児期の育児不安や子育ての悩みを扱った研究は多い一方で，思春期の親を対象とした研究はわずかである（渡邉，2018；三浦，2014）。

そこで本研究では，思春期の子を持つ母親を対象に調査を実施し，この時期の子育てにおける困難を明らかにすることを目的に調査を実施した。

【方法】

調査対象者：中学生の子を持つ母親 200 名。平均年齢は 45.5 歳（*SD*=4.93，32-59 歳）であった。

研究方法：調査会社に委託し，オンライン調査を実施した。

質問項目：①回答者本人の年齢，学歴，勤務形態等デモグラフィック項目，②子の中学受験の有無，子の現在の所属，③中学生の子を育てる上で悩んでいること（選択肢から 3 つ以上を選択するよう求めた）④③で選んだ項目について，自由記述にて具体的な内容の記載を求めた。⑤子の発達の課題の有無，専門家への相談歴等（2 件法）。⑥母親の養育態度に関する尺度（加藤他, 2014）20 項目（5 件法）。

倫理的配慮：参加は自由意思であること，匿名性が担保されていること，学術的な利用のみ行うこと等を説明した。

【結果と考察】

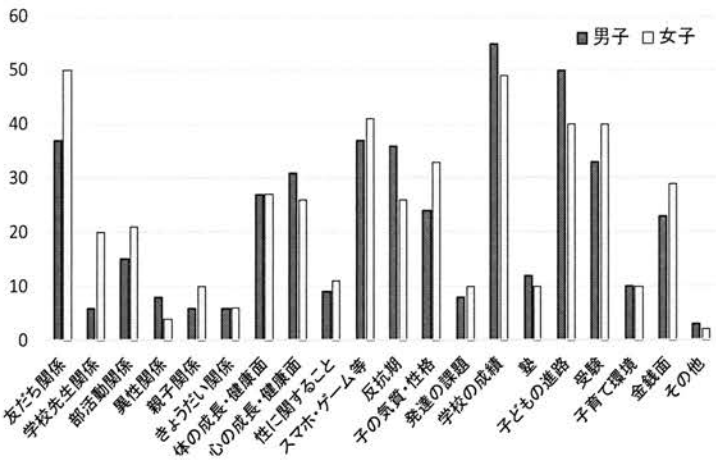
基礎統計量

回答者本人の勤務形態は，会社勤務 61 名，パート・アルバイト勤務 72 名，専業主婦 62 名，無職 3 名，その他 2 名であった。中学生の子の性別と学年は，男子 100 名(1 年 29 名，2 年 40 名，3 年 31 名)，女子 100 名（1 年 38 名，2 年 29 名，3 年 33 名）であった。子の所属は，公立中学校 174 名，私立/国公立中学校 25 名，その他 1 名であった。

子育てにおける悩み

「中学生のお子さんを育てているうえで気になっていること，悩んでいることについて，以下から 3 つ以上選択して下さい」と尋ね，悩みについて選択を求めた。結果を Figure 1 に示す。選択された悩みの回答総件数は 901 件（男子 436 件，女子 465 件）であった。男子について最も多く選択されていた項目は，「学校の成績」で 55 件，次いで「子どもの進路」の 50 件であった。3 番目には「友だち関係」，「スマホ・ゲーム」が同数で 37 件挙がっていた。女子では，最も多く挙がったものが「友だち関係」で 50 件，次いで「学校の成績」で 49 件，3 番目に「スマホ・ゲーム」で 41 件であった。

Figure 1
母親の子育てにおける悩み・困り事（男女別 縦軸は件数）



子の発達の課題の有無

子どもの発達の課題の有無について「発達の遅れで気になることがあった」，「発達の遅れがあるのではないかと幼稚園・保育園や学校から指摘されたことがあった」，「専門機関（保健センターや教育センター，医療機関など）やスクールカウンセラーに相談したことがあった」など 6 項目を用いて尋ねた。6 つの項目のうちどれか 1 つでも「有」と回答した者は 63 名(31.5%)，1 つも該当がなかった者は 137 名(68.5%)であった。男女別にみると，男子の母親で 36 名(36.0%)，女子の母親で 27 名(27.0%)が「有」と回答していた。χ^2 検定の結果，出現率に有意差は見られなかった。

母親の養育態度の男女差と学年差

因子分析の結果，先行研究と同じく 3 因子（「受容・子ども中心」「統制」「非一貫性」）が得られた。各下位尺度得点を算出し，性別と学年の 2 要因分散分析を行ったところ，「非一貫性」で性別の主効果が認められた（$F_{(1,194)}=4.01$, $p<.05$）。男子親の方が女子親よりも一貫性のない養育態度を示していた。他 2 因子については，性差，学年差共に見られなかった。

以上の結果から，男女ともに「成績」や「進路」はこの時期の母親の多くが抱える悩みのようである。一方，「友だち関係」についても関心が高く，特に女子親では一番の悩みであった。さらに「スマホ・ゲーム」も男女ともに多く挙がっていた。また，子との関わり方について，男子に対して，より一貫性のない関わりとなりやすいなど男女差が見られた。思春期は心身の成長による男女の違いが大きくなることから，母親の関わりについても差が見られるようになるのであろうか。今回探索的に調査を行い，この時期の母親の悩みを検討したが，性別以外の子どもの属性や母親側の要因，また悩みの質的な内容も含めてより詳細な検討を行い，母親の求める支援を明らかにすることは，今後の課題である。

【利益相反】記すべき利益相反はない。

【引用文献】

加藤道代・黒澤泰・神谷哲司(2014). 幼児期から青年期の子どもをもつ親の養育態度の検討　小児保健研究, *73*, 672-679.

三浦正江(2014). 中学生の親を対象とした認知行動理論に基づく親トレーニング・プログラムの実践　学校メンタルヘルス, *17*, 50-59.

田中千穂子(2009). 母と子のこころの相談室 改訂新版　山王出版.

渡邉 賢二(2018). 思春期の子どもをもつ母親の養育ストレスと心理的ストレス反応,養育態度との関連　皇學館大学教育学部学術研究論集, *1*, 137-147.

（いうめ ゆみこ・おおはし めぐみ・とうご えつこ）

長期目標への取り組みが自己嫌悪感に与える影響

○白樫花奈[1]　河越隼人[2]（非会員）
([1]帝塚山大学大学院心理科学研究科 [2]帝塚山大学心理学部）
キーワード：自己嫌悪感，目標，大学生

【目的】

自己嫌悪感は，客観的事実はどうであれ，否定的な感情や事象が自分自身に由来するとし，自分が自分自身を嫌だと感じる，私的自意識(水間，1996)と定義されている。その一方で，自己嫌悪感は青年へ否定的影響をもたらすと同時に肯定的影響をもたらしうるともされている(元好，2005)。また，自己嫌悪感は人並みさや平穏無事さ，他者との調和を感じていないことに比べ，自身が達成や獲得を感じていないことの方が強く関わる(福田・水口,2021)。

これらのことから，達成や獲得のために行われることが多い目標設定，目標への取り組みに着目した。目標設定は人間の課題遂行にあたって強い動機づけ効果を持つ(三浦,1996)。以上のことから，本研究では目標への取り組み方が自己嫌悪感にどのように影響するのかを検討することを目的とした。

【方法】

自己嫌悪感の測定　自己嫌悪感を測定する尺度として，元好(2005)の自己嫌悪感体験尺度を使用した。自己嫌悪感を感じる場面についての場面項目が 25 項目，自己嫌悪感が生じた時に感じる感情を表す感情項目が 17 項目，自己嫌悪感を感じた際の対処行動に関する対処行動項目が 16 項目ある。場面項目および感情項目は 6 件法，対処行動項目は 5 件法で回答を求めた。

長期目標に関する尺度　長期目標への取り組み方を測定する尺度として日本語版グリット尺度(竹橋他，2019)を使用した。第 1 因子は「興味の一貫性」因子，第 2 因子を「努力の粘り強さ」因子と設定されている。興味の一貫性因子は同じ目標に長きにわたり努力し続ける粘り強さに関するものである。努力の粘り強さ因子は，目標に対して努力し続ける粘り強さに関するものである。回答は 5 件法である。グリットが高い人は，現行目標に意義を見出し，代替目標に目もくれずに，高水準の努力をし続けるが故に，達成感を成し遂げると考えられている(竹橋他，2019)。

調査対象者　近畿圏の大学生 92 名(男性 26 名，女性 65 名，その他 0 名，平均年齢＝18.78，SD=0.92)が参加した。対象者に自己嫌悪感体験尺度とグリット尺度の質問について回答を Google フォームで求めた。

【結果】

グリット尺度の結果においては、興味の一貫性因子が全て逆転項目であったため、全て処理を行った。そして、自己嫌悪感体験尺度の各因子の得点とグリット尺度の得点で被験者内二要因分散分析を行った。グリット尺度における興味の一貫性因子と努力の粘り強さ因子の交互作用においては自己嫌悪感体験尺度のいずれの因子でも有意ではなかった。また，努力の粘り強さ因子における主効果も自己嫌悪感体験尺度のいずれの因子においても有意差は見られなかった。

一方，興味の一貫性因子における主効果は，直接的な自己評価低下場面因子(F(1,87)=5.58，p<.05)，自己に対する怒り因子(F (1,87)=4.46，p<.05)，単純自己嫌悪感因子(F(1,87)=4.82, p<.05)，自己受容姿勢因子(F(1,87)=4.34, p<.05)，抑うつ的対処因子(F(1,87)=4.06, p<.05)において有意であった。この自己嫌悪感体験尺度の 4 因子それぞれの得点と興味の一貫性因子の得点の関係を比較すると，4 因子全てにおいて興味の一貫性因子の得点が平均値より高い群の方が，興味の一貫性因子の得点が低い群より高いという結果が見られた。

【考察】

まず，主効果があった自己嫌悪感体験尺度の 4 因子についてそれぞれ考察を行う。

直接的な自己評価低下場面因子は，自分の理想や他人との比較において，それよりも自分に能力がないと感じる状況，あるいは自己の嫌悪すべき側面に目が向く状況を指すとされている。興味の一貫性因子の得点が高い方が直接的な自己評価低下場面因子の得点が高いことから，同じ目標に長きにわたり投入する情熱が大きいほど現れやすいと考えられる。

自己に対する怒り因子は，自分に対する腹立ちや怒りといった感情を表しているとされている。このことから，同じ目標に長きにわたり努力を投入する情熱が大きいほど自己に対する怒りを感じやすいということが考えられる。

単純自己嫌悪感因子は，自己嫌悪感という感情状態を端的に表しており，自己嫌悪感の中核的な要素を示しているとされている。このことから，同じ目標に長きにわたり努力を投入する情熱があるほど自分がいやになるなどといった自己嫌悪感の中核的な要素は大きいということが考えられる。

自己受容姿勢因子は，嫌悪的側面をもつ自己に対してあきらめを感じつつも，そういう自分も自己として認めていこうとする姿勢を表している。このことから，同じ目標に長きにわたり努力をする情熱があるほど，嫌悪的側面をもつ自己を認めていこうとする姿勢がよく表れるということが考えられる。

抑うつ的対処因子は，自己嫌悪を感じた時に，落ち込んだり引きこもったりするといった抑うつ的な対処法で対応する傾向を表しているとされている。このことから，同じ目標に長きにわたり努力を投入する情熱があるほど，自己嫌悪感を感じた時に落ち込んだり引きこもったりするという抑うつ的対処法で対応する傾向があると考えられる。

以上のことから，目標達成のための情熱が大きいと元好(2005)によって作成された自己嫌悪感体験尺度の一部の感情が生じ，自己嫌悪感が高まるということが分かった。

【利益相反】

本研究において利益相反はない。

【引用文献】

速水 敏彦・水口 啓吾 (2021). 幸福感が自己嫌悪感に及ぼす影響－人生満足感と協調的幸福感による対比的検討－感情心理学研究, *29*, 3.

三浦 麻子 (1996). 課題遂行におよぼす目標設定と自律性の効果　大阪大学人間科学部紀要, *22*, 111-132.

水間 玲子 (1996). 自己嫌悪感尺度の作成　教育心理学研究, *44*, 296-302.

元好 理恵 (2005). 自己嫌悪感体験尺度作成の試み　大阪大学教育学年報, *10*, 145-156.

竹橋 洋毅・樋口 収・尾崎 由佳・渡辺 匠・豊沢 純子 (2019). 日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討　心理学研究, *89*, 580-590.

（しらかし かな・かわごし はやと）

大学生における援助要請スタイルと愛着及びソーシャルサポートの関連

○松原 小夏[1]　永野 浩二[2]（非会員）
（[1]帝塚山大学大学院 心理科学研究科　[2]追手門学院大学 心理学部）
キーワード：援助要請スタイル，愛着スタイル，ソーシャルサポート

【目的】

個人が抱える問題を自身の力では解決できない場合に必要に応じて他者に援助を求めることは重要であり，援助要請行動と呼ばれる（永井,2017）。永井（2013）は，援助要請の質に注目し，援助要請を援助要請過剰型（以下，過剰型），援助要請回避型（以下，回避型），援助要請自立型（以下，自立型）の3つのスタイルに分類している。本研究では，援助要請スタイルをもたらす要因として，愛着に注目する。先行研究では，愛着不安から回避型と過剰型への影響，愛着回避から回避型への影響が確認されている（永井,2017）。また，ソーシャルサポートは他者からサポートを受け取るという性質から，援助要請との関連が深いことが示されている（片受，2016）。他者からのソーシャルサポートが援助要請につながると考えられる。以上を踏まえて，愛着スタイルと援助要請スタイルの関連，ソーシャルサポートが援助要請スタイルに及ぼす影響を検討することを目的とする。

【方法】

調査対象者　近畿圏内の大学生159名を対象とした（男性66名，女性90名，その他3名）。

質問紙の構成　(1)フェイスシート：性別，年齢(2)愛着スタイル：アダルト・アタッチメント・スタイル・尺度日本語版（古村他，2016）「私は，その人に個人的なことを相談する」等9項目，5件法(3)援助要請スタイル：援助要請スタイル尺度（永井，2013）「悩みを抱えたら，それがあまり深刻なものでなくても，相談する」等12項目，5件法(4)ソーシャルサポート：新大学生用ソーシャルサポート尺度（片受・大貫，2014）「あなたの努力や心がけを評価してくれる」等23項目，5件法

【結果】

各変数間で相関分析を行った（Table1）。愛着回避は回避型との間に正の相関がみられ，過剰型との間に負の相関がみられた。また，過剰型と各ソーシャルサポートに正の相関，回避型と各ソーシャルサポートに負の相関がみられた。

愛着スタイルと援助要請スタイルで重回帰分析を行った。その結果，愛着回避は過剰型において$\beta=-.44$（$p<.01$），回避型において$\beta=.51$（$p<.01$）であり，有意な影響がみられた。自立型においては$\beta=-.13$（$p<.10$）であり，有意傾向が確認された。愛着不安は回避型において$\beta=.32$（$p<.01$）であり，有意な影響がみられた。過剰型において$\beta=.11$（$p<.10$）であり，有意傾向が確認された。

ソーシャルサポートと援助要請スタイルで重回帰分析を行った。その結果，評価的サポートは過剰型において$\beta=.41$（$p<.01$），回避型において$\beta=-.44$（$p<.01$）であり，有意な影響がみられた。情報・道具的サポートは過剰型において$\beta=.29$（$p<.01$），回避型において$\beta=-.50$（$p<.01$），自立型において$\beta=.36$（$p<.01$）であり，有意な影響がみられた。

Table1 各変数間の相関分析の結果

		1	2	3	4	5	6	7
1	愛着回避	−						
2	愛着不安	0.27**	−					
3	援助要請過剰型	-0.66**	-0.09	−				
4	援助要請回避型	0.67**	0.33	-0.57**	−			
5	援助要請自立型	-0.09	0.03	-0.02	-0.01	−		
6	評価的サポート	-0.47**	-0.23**	0.41**	-0.41**	0.09	−	
7	情報・道具的サポート	-0.59**	-0.15†	0.50**	-0.57**	0.24**	0.71**	−
8	情緒・所属的サポート	-0.60**	-0.23**	0.45**	-0.54**	0.15*	0.67**	0.71**

** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

【考察】

今回の研究で，愛着スタイルと援助要請スタイルには関連があることが示された。愛着回避が高い者は他者に依存することや親密な関係を避けることが分かり，自身の力で解決できない状況であっても他者に援助を求めることができないと考えられる。愛着不安が高い者は，他者に援助を求めることをためらうことが分かった。これは，他者から拒絶されることを恐れるためだと考えられる。ただし，過剰型との間には有意傾向がみられた。その背景としては，他者から見捨てられることを恐れる要因がある可能性が考えられる。

また，ソーシャルサポートと援助要請スタイルにも関連があることが示された。ソーシャルサポートは援助要請につながると考えられる。特に，評価的サポートは過剰型と関連があり，情報・道具的サポートは自立型と関連があることが示された。よって，自身で問題を解決することが困難である場合に適切な援助要請を行うために，助言や指示など問題に対する具体的な支援を提供することが効果的であると考える。

【利益相反】

本研究に関して，開示すべき利益相反はない。

【引用文献】

片受靖・大貫尚子（2014）．大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討―評価的サポートを含む多因子構造の観点から―立正大学心理学研究年報，*5*, 37-46.

片受靖（2016）．新大学生用ソーシャルサポート尺度と精神的健康、援助要請スキルの関連についての研究．立正大学心理学研究紀要，*14*, 65－70.

古村健太郎・村上達也・戸田弘二（2016）．アダルト・アタッチメント・スタイル尺度（ECR-RS）日本語版の妥当性評価．心理学研究，*87*（3），303－313.

永井智（2013）．援助要請スタイル尺度の作成－縦断調査による実際の援助要請行動との関連から．教育心理学研究，*61*, 44-55.

永井智（2017）．援助要請スタイルと愛着および適切な援助要請行動の関連の検討．立正大学心理学研究紀要，*15*, 25－31.

（まつばら こなつ・ながの こうじ）

大学生の心理的敏感さとレジリエンス及び首尾一貫感覚との関連

○下茂翔太朗[1]　永野浩二[2]（非会員）
（[1]帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2]追手門学院大学心理学部心理学科）
キーワード：心理的敏感さ，二次元レジリエンス要因，首尾一貫感覚

【目的】

ストレスの感じやすい要因に心理的敏感さがある。心理的敏感さという心理的不適応に陥りやすいリスクを抱えている人々は心理的な困難を乗り越える力はあるのだろうか。ストレスの予防要因であるレジリエンスとの関連は見られているが，困難を乗り越える要因の首尾一貫感覚との関連は見られていない。

研究1では心理的敏感さとレジリエンス，首尾一貫感覚の関係性について質問紙調査を行い，以下の仮説の検討を行う。
仮説1：心理的敏感さが低い人ほど首尾一貫感覚が高くなる。
仮説2：資質的・獲得的レジリエンス要因が高い人ほど首尾一貫感覚が高い。

研究2ではインタビュー調査を用いて心理的な傷つきから回復する過程やその要因の検討を行う。

【方法】

研究1

調査対象者：大学生188名を対象とした。

尺度と手続き：調査では心理的敏感さ・レジリエンス・首尾一貫感覚を測定する尺度と自由記述に回答することを求めた。心理的敏感さの測定には個人用感覚感受性尺度(船橋, 2013)を7件法，レジリエンスは二次元レジリエンス要因尺度(平野, 2010)を5件法，首尾一貫感覚はSOC 13項目7件法改編版(志渡・澤目・上原・佐藤・池森・長谷川, 2011)を7件法で回答を求めた。自由記述では過去の心理的に困難な経験，それを乗り越えることができたか，面接の同意についての回答を求めた。

研究2

調査対象者：自由記述にて乗り超えることができたと回答し，面接の同意が得られた2名を対象とした。調査対象者は先行研究を参考に心理的敏感さの得点が上位・下位20%に属する対象者を敏感群，非敏感群とした。

調査内容:調査は半構造化面接によるインタビューを実施した。実施前にライフラインチャート(橋本・石村, 2016)の記入を求めた。質問内容は「自由記述の内容や時期，その時期の気持ち，考えたこと，乗り越えた要因，乗り越えたことで変わったこと，この経験は自分にとって良いものだったか」であった。また，同意を得て録音し，実施後に逐語記録を行った。

【結果】

各尺度の記述統計を算出した（Table1)。

各尺度の相関分析を行った(Table2)。各尺度の相関分析を行った結果，心理的敏感さと首尾一貫感覚に負の相関が見られた。資質的レジリエンス要因と首尾一貫感覚に正の相関が見られたが，獲得的レジリエンス要因には相関が見られなかった。また，両レジリエンス要因と首尾一貫感覚の下位因子で重回帰分析を行った。標準偏回帰係数では把握可能感と社交性に正の影響が見られ(β = .18, p < .05)，処理可能感と楽観性，自己理解に正の影響が見られた(β = .24, p < .01；β = .19, p < .05)。

研究2では困難を乗り越える要因に他者からの助けが挙げられた。過程では問題への対処行動や情報収集が見られた。また，困難な経験の振り返りでは両者が良い経験であったと捉えており，2名のライフラインチャートに上昇傾向が見られた。

Table1 各尺度の記述統計

N =188	平均値	中央値	SD
心理的敏感さ	113.83	114.00	25.83
資質的レジリエンス要因	36.39	37.00	8.41
獲得的レジリエンス要因	32.99	34.00	5.62
首尾一貫感覚	45.35	44.00	9.78

Table2 各尺度の相関関係

N=188

	1	2	3	4
1. 資質的レジリエンス要因				
2. 獲得的レジリエンス要因	.11			
3. 心理的敏感さ	-.07	-.01		
4. 首尾一貫感覚	.17 *	.06	-.20 **	

** p < .01, * p < .05

【考察】

研究1では仮説1を支持する結果が見られた。先行研究から心理的敏感さが高い人はストレスを感じやすい特性があるためだと考えられる。しかし，仮説2を完全に支持する結果ではなかった。首尾一貫感覚が高く，獲得的レジリエンス要因が低いまたは首尾一貫感覚が低く，獲得的レジリエンス要因が高い人がいた可能性が考えられる。各尺度の下位因子での重回帰分析では社交性，楽観性，自己理解が困難を乗り越える要因に影響を与える可能性が見られた。

研究2では困難を乗り越える要因に「他者の助け」が影響する可能性が示され，心理的敏感さによる違いは見られなかった。インタビュー調査の各群の参加者が乗り越えた経験を想起したためだと考えられる。

【利益相反】

本研究に関して，開示すべき利益相反はない。

【引用文献】

船橋 亜希（2013). 成人用感覚感受性尺度作成の試み，中京大学 心理学部研究科・心理学部紀要, *12*(2), 29-36.

橋本 知佳・石村 郁夫（2016). ひきこもり状態から回復への認知過程：家族への認知中心に，東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究 Bulletin of clinical psychology, *16*, 113-123.

平野 真理（2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み ——二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成，パーソナリティー研究, *19*(2), 94-106.

志渡 晃一・澤目 亜希・上原 尚紘・佐藤 厳光・池森 康裕・長谷川 聡（2011). 首尾一貫感覚(SOC)と抑うつ症状との関連：高等教育機関に所属する学生を対象として，北海道医療大学看護福祉学部紀要, *18*, 43-48.

（しも　しょうたろう・ながの　こうじ）

アバター×心理カウンセリング

～リアルタイムキャプチャを用いた心理カウンセリングの事例発表～

○岩﨑和子[1)]　来田宣幸[1)]
([1)]京都工芸繊維大学)

キーワード：アバター　心理カウンセリング　事例研究

【問題の所在】

心に悩み苦しみを抱え心理援助が必要である人が、心理専門家（以下、カウンセラー）の適切な心理援助を受けられていない（以下、サービスギャップ）。

【背景】

ICT 技術が進歩し、クライエントとカウンセラーをオンライン会議システムで繋いで行う心理カウンセリング（以下、オンラインカウンセリング）が商業化されている。従前に比べて、カウンセリングルームへの移動時間と移動費用を省くことができるので、サービスギャップを解消するために有益である、と指摘されている。

【先行研究】

私は、クライエントが使用するカメラ付き PC（以下、クライエント PC）とカウンセラーが使用するカメラ付き PC（以下、カウンセラーPC）を別室に置き、HDMI ケーブルを通じて Skype®で繋ぐ実験環境において、クライエント PC にカウンセラーの表情をそのまま表示させる条件（以下、実表情条件）、老婆のアバターを表示させる条件（以下、アバター条件）、何も表示させない条件（以下、音声条件）で、イヌバラ法を用いた模擬カウンセリング実験を行った。ここでは、クライエントが自己への対話をもたらしやすいのかという観点で評価し、音声条件＜アバター条件＜実表情条件という結果が得られ、オンライン会議システムをもちいた心理カウンセリングの有効性が実証されたが、相応しいアバターの容姿、相応しいカウンセリングの種類などの今後の研究課題も示された（岩﨑和子,2023)。



そこで、私は、オンライン会議ツール Google Meet®、リアルタイムキャプチャ、Animaze®のフクロウの姿のアバターを組み合わせて用いて、カウンセリングを行い、自己への対話をもたらし、心理カウンセリング方法として有用であることを確認した（岩﨑和子, 2023)。

【方法】

その後、実証実験として、臨床心理士の資格保有者 1 名が 20～70 代の男女、12 名のクライエントに対して、この実験環境で、実際の心理カウンセリングを約 40 分間、合計 3 回行ない、各終了後にカウンセリング中に感じたことに対する 10 項目の質問に回答後、反構造化面接を用いて 5 分間程度印象について回答を求め、受けた印象をデータ分析し、有用性を明らかにした。

ここでは、4 事例をあげて、上記の方法での心理カウンセリングの有用性を報告することを目的とする。

［事例 a］20 代,女性,大学生

情緒不安定や睡眠障害の訴え→対人関係の悩み（バイト先の後輩との関係・同じゼミのグループ間）→自分の性格やこだわりに目が向き、不満に感じ、酷く苦しくなっていく自分自身への洞察が見られた。自宅で寛ぎながら話せた、アバターのキャラクターが人を意識せずに、率直に悩みが話しやすかった、と振り返った。



［事例 b］20 代,女性,大学院生

修士論文のストレス、就職内定先からの課題など、期日に追われることに、心が疲弊していた。アバターのカウンセラーに話すことでカタルシスが起き、アバターのフクロウの姿のキャラクターに癒されて、心のバランスを取ることができた、と振り返った。

［事例 c］30 代,女性

家族関係や仕事、転職についての悩みから始まり、高校時代に受けた性的虐待がいかに自分の人生に影響を与えているかということに、気づいていった。日頃から対人緊張があり、対人関係が苦手で、対面に伴う心理的障壁が高い自分にとって、オンラインでしかもフクロウの姿のアバターだったから、人と話しているという抵抗が低かった、いつもの自分のリラックスする場所で、自分のことをゆっくり話す時間を持てたことは自分を省みる大きな要因であった、と振り返った。

［事例 d］70 代,男性

はじめに何も悩みは無い、すべてに満たされていると言っていたが、自分の考えやアバターを用いた心理カウンセリングの印象を話すうちに、仕事関係の悩みから始まり、自分自身の課題と不安が明確になっていった、と振り返った。

【考察】

アバターに対する違和感は当然あるものの、さほど時間がかかることなく慣れ、話し始めるとカウンセラーの傾聴や受容共感的態度がカウンセリング効果をもたらし、次々と自分の話に集中していったことが伺えた。さらには、PC 画面にカウンセラーのリアルの表情が映らず、フクロウの姿のアバターでは、カウンセラーの細かな反応を伺えないので、自分自身に集中していくことができた、と思われる。

今回は 3 回を超える実験を行っていないので、さらに回数を重ねた場合のカウンセリング効果の変化や、アバターの種類を変えた場合のカウンセリング効果などを、今後検討したい。

【利益相反】

ありません

【引用文献】

1) Effect of counseling using an embodied agent Journal of Technology Vol22,No1,1-7,2022

2) 対面型およびリモート型の心理カウンセリングの利用状況と利用意向, 日本応用心理学研究第 48 巻第 3 号 192-193, 2023

（いわさき　かずこ・きだ　のぶゆき ）

神経性やせ症患者へのマインドフルネス介入の効果の検討

～ 脳機能の観点から ～

○野田智美
京都大学医学部附属病院精神科神経科

キーワード：マインドフルネス、神経性やせ症、機能的磁気共鳴画像

【目的】神経性食欲不振症（AN）は、太ることへの強い恐怖、極端なやせ、身体イメージ障害を特徴とする重篤な精神疾患である。AN は精神疾患の中で最も死亡率の高い疾患であるが、有効な治療法はまだ確立されていない。AN は、歪んだボディイメージに伴う歪んだ自己意識に苦しんでいる（Kaye et al., 2009）。一部の研究者は、ボディイメージの障害は AN 患者における身体不満足の動因であり、AN 発症の危険因子であると考えられている（Glashouwer et al., 2019）。ボディイメージの障害には内受容感覚が関与する可能性がある。内受容感覚とは、身体内部から発信される刺激に対する感受性のことであり。先行研究では、内受容感覚の気づきが、健常者（Tsakiris et al., 2011）および AN 患者（Zucker et al., 2013）における歪んだ身体認知と関連していることが確認されている。健常者を対象とした研究からは、マインドフルネスを用いた介入によって内受容感覚への気づきが高まり、感情調節にも変化をもたらすことが示唆されている（Jacquemot et al., 2020）。しかし、AN 患者を対象としたマインドフルネス介入の研究は非常に限定的であり、AN 患者においてもマインドフルネスが内受容感覚や感情調節に変化をもたらすかは不明である。また、自記入式の心理尺度のみでは本人の主観的評価を捉えることが出来る一方で、客観的な評価が困難である。そこで本研究では、AN 患者を対象に、マインドフルネス介入プログラムを実施し、主観的指標としての心理尺度と同時に、機能的磁気共鳴画像検査（functional Magnetic Resonance Imaging: fMRI）を用いてその神経相関を検討することを目的とした。

【方法】21 名の神経性やせ症患者（制限型 11 名、過食排出型 10 名、平均年齢：37.1 歳、標準偏差：11.77 歳、年齢範囲：22～59 歳、平均罹病期間：18.81 年）。を対象に 4 週間のマインドフルネス介入を行なった。研究に参加した AN 患者は週 1 回、合計 4 回（90 分／1 回）のセッションに参加し、期間中は 5 分間の集中瞑想と 10 分～20 分のボディスキャンが日々のホームワークとして課された。プログラムの前後に fMRI 検査を実施した。fMRI 課題には感情調節課題を用いた。この課題は、体重に関連した不安を誘発するようにデザインされており、嫌悪刺激として５０グラム～3 キロまで体重が増加することを想像するよう教示した後、感情調節方略として AN 患者は感情を受け入れる ACCEPT 条件、身体感覚を観察する BODY 条件、いつもと同じように過ごす SAU 条件の 3 つのうち試行ごとに擬似ランダムに方略が提示された。同じくプログラムの前後に STAI（State Trait Anxiety Inventory）を用いて不安を、MAIA（Multidimensional Assessment of Interoceptive Awareness）を用いて内受容感覚を測定した。脳画像は、SAU 条件をベースラインとして ACCEPT vs SAU、BODY vs SAU のコントラストを用いて解析を行なった。ACCEPT vs SAU の結果については既に報告済みであり（Noda et al., 2023）、本稿では BODY vs SAU の結果を報告する。

【結果】心理尺度の t 検定の結果、STAI の下位尺度である「特性不安」において介入後に有意な低下が認められた（$t = 2.44$, $P = 0.01$; ボンフェローニ補正後の有意水準 $P = 0.025$）。MAIA においては、下位尺度のうち「身体感覚のへの信頼」の得点が介入後の有意な上昇を認めた（$t = -2.71$, $P = 0.01$; ボンフェローニ補正後の有意水準 $P = 0.01$）。脳画像解析の結果、介入後の身体感覚観察中の脳活動においては上前頭回の有意な活動上昇、および扁桃体の有意な活動低下を認めた（クラスターレベルのファミリーワイズエラー補正, $P = 0.05$）（Figure 1, Table 1）。

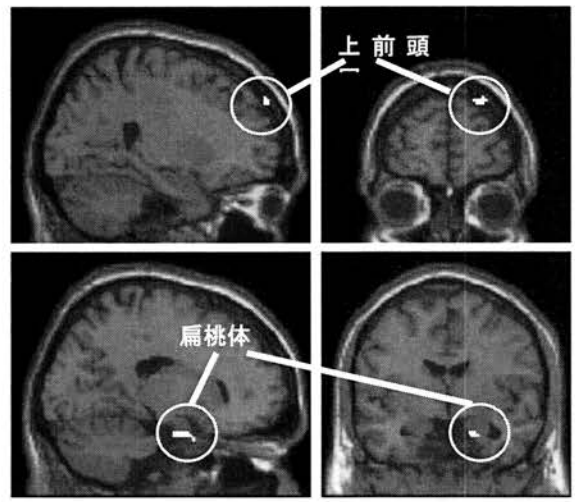


Figure 1 上段）介入後に活動上昇が認められた領域
下段）介入後に活動低下が認められた領域

Table 1 BODY 条件における介入前後の比較

領域	L/R	MNI 座標 X	Y	Z	Z 値
介入後 > 介入前					
上前頭回	R	26	58	40	3.76
介入前 > 介入後					
扁桃体	R	18	-4	-24	3.73

【考察】マインドフルネス介入後の上前頭回の活動上昇は AN 患者の注意制御機能の向上と、扁桃体の活動低下は感情調節機能の改善と関連すると考えられる。特性不安の低下や身体への信頼感の回復と合わせて考察すると、AN 患者におけるマインドフルネスの有用性が示唆される。

【利益相反】開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

1. Kaye, W.H., J.L. Fudge, and M. Paulus, New insights into symptoms and neurocircuit function of anorexia nervosa. Nature Reviews Neuroscience, 2009. 10(8): p. 573-584.
2. Glashouwer, K.A., et al., The role of body image disturbance in the onset, maintenance, and relapse of anorexia nervosa: A systematic review. Clinical Psychology Review, 2019. 74: p. 101771.
4. Tsakiris, M., A.T.-. Jiménez, and M. Costantini, Just a heartbeat away from one's body: interoceptive sensitivity predicts malleability of body-representations. Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences, 2011. 278(1717): p. 2470-2476.
5. Zucker, N.L., et al., Subjective experience of sensation in anorexia nervosa. Behaviour research and therapy, 2013. 51(6): p. 256-265.
6. Jacquemot, A.M.M.C. and R. Park, The role of interoception in the pathogenesis and treatment of anorexia nervosa: a narrative review. Frontiers in psychiatry, 2020. 11: p. 281.
7. Noda, T., Isobe, M., Mishima, R., Tose, K., Kawabata, M., Aso, T., ... & Murai, T. (2023). Neural correlates of a mindfulness-based intervention in anorexia nervosa. BJPsych Open, 9(1), e22.

（のだ ともみ）

保健室登校の高校生の時間的展望の特徴

—サークル・テストによる分析—

○和田万紀[1]　小野村樹美[2]　須永範明[3]
([1]日本大学法学部　[2]神代高等学校　[3]日本大学文理学部)

キーワード：時間的展望　保健室登校の高校生　サークル・テスト

【目的】 本研究は保健室登校と教室登校の高校生の時間的展望の特徴をサークル・テスト(Cottle, 1967) を用いて検討することを目的とする。サークル・テストは，自分の過去，現在，未来を表す３円を自由に描き，３円の大きさ，重なり等の視覚的特徴を指標として，時間的優位性，時間的関連性など時間的展望を検討する投影的方法である。

小野村・和田・須永(2024)は，保健室登校の高校生と高校新入学生の時間的展望の調査から，保健室登校の生徒は肯定的・否定的過去展望と未来展望に新入学生との差はないが，現在展望が新入学生よりも低評価であることを示した。

そこで本研究では，保健室登校と教室登校の高校生にサークル・テストを行い、時間的展望の特徴の差を検討する。

【方法】　**調査対象と倫理審査**　2022 年 4 月-12 月に X 高等学校保健室登校 8 名，教室登校 25 名に調査を行った。日本大学大学院社会情報研究科倫理委員会(承認番号 HP21S008)，高等学校，教育委員会，保護者と本人の承諾を得た。

手続き　A4 用紙に縦横各 16 cmの枠組みを作成した紙を個別に配布して実施した。用紙の枠組みの内側に，自分の過去，現在，未来を表す３円を鉛筆で自由に描くように教示した。

分析　各自が描いた３円について日潟(2012)を基に，時間的関連性として原始型，接合型，含包型、交わり型，また時間的優位性として３円の最大の円の時制，さらに交わり型は各時制の円のどれが交わるかについて，保健室登校群と教室登校群の 2 群間の人数の割合を分析した。

【結果】 サークル・テストに描かれた３円の特徴を，時間的関連性，時間的優位性，各時制の交わりに関して，保健室登校群 8 名と教室登校群 25 名の 2 群間での人数の差について Fisher の正確確率検定を行った(Table 1)。

時間的関連性は３円を個別に描く原子型と交わり型に有意差が認められた。含包型は傾向差が認められた。保健室登校群は，原子型を描く方が多く，円の交わりや包含はない。接合型は 2 群間に有意差はなかった。円の交わりは，過去現在，現在未来の交わりに両群間に有意差が認められた。いずれも保健室登校群は円の交わりが無く，教室登校群は交わりが有る方の人数が多い。過去未来と過去現在未来の交わりは両群に有意差は無く，無い方の人数が多かった。

時間的優位性として最大の円については，過去・現在・未来の全てに両群間に有意差は無かった。過去と現在は両群共に最大円として描かない人数が多く，未来を最大円に描く人数と描かない人数は，両群ともほぼ半数となった。３時制の内の２時制が同じ大きさとなる場合は両群共なかった。

【考察】 サークル・テストの視覚的特徴を指標として，保健室登校と教室登校の高校生の時間的展望の特徴を検討した。まず過去現在未来を表す３円の特徴として、保健室登校群は３つの時制の交差も包含もなかった。しかし教室登校群は過去現在と現在未来の交差が認められた。保健室登校群は３時制がばらばらな状態で，現在を中心に現在と過去及び現在と未来の関連性が無い。また保健室登校群の時間的優位性は，教室登校群と差がなく，両群共に未来が最大となるのは群内の半数となっている。保健室登校群は時間的優位性については教室登校群と差は無いが，過去現在未来の３時制の時間的関連性が低く，各時制を切り離してとらえていることが特徴である。小野村ら(2024)の結果を総合すると，保健室登校群の時間的展望は過去現在未来という時間の統合がされず，否定的な現在展望の中にあるが，教室登校群同様に未来指向の傾向が示唆される。

【利益相反】利益相反はありません。

【引用文献】

Cottle, J. (1967). The Circles Test: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. Journal of Projective Techniques & Personality Assessment, 31(5), 58-71. https://doi.org/10.1080/0091651X.1967.10120417

日潟 淳子 (2012). サークル・テストによる中年期の時間的展望の検討　カウンセリング研究, 45, 1-10.

小野村 樹美・和田 万紀・須永 範明 (2024). 中学の登校傾向が高校入学時の時間的展望と精神的健康に与える影響 —中学登校群の高校適応促進要因—　応用心理学研究, 49, 236-237.

(わだ まき・おのむら じゅみ・すなが のりあき)

Table 1　時間的関連性、時間的優位性、円の交わりの人数とFisherの正確確率検定

	時間的関連性								時間的優位性						円の交わり							
	原始型		接合型		交わり型		包含型		未来		現在		過去		(過・現)		(現・未)		(過・未)		(過・現・未)	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
保健室登校8名	6	2	2	6	0	8	0	8	4	4	3	5	1	7	1	7	0	8	0	8	0	8
教室登校25名	3	22	5	20	12	13	9	16	12	13	6	19	3	22	16	9	17	8	8	17	6	19
Fisherの正確確率検定	p=.002		p=1.000		p=.030		p=.073		p=1.000		p=.651		p＝1.000		p=.017		p=.00092		p=.152		p=.296	

教育発表

教育発表要旨

教育発表 8月27日(火)

1) ポスター番号:1B-9

アイシャドウの色印象とアイシャドウの派手色選好者のメイク行動と性格傾向に関する検討

羽富 千夏[1], 森川 実柚[1], 児玉 みくる[1], 渡邉 祐太[1], 後藤 衣月[1], 九島 紀子[1]
([1]ビューティ&ウェルネス専門職大学)

発表要旨:

本研究では、どのような色のアイシャドウを人々が派手だと感じるのか、また、派手だと評価された色のアイシャドウを使用したいと考える人たちのメイク行動や性格傾向を検討することを目的とした。予備調査では、大学生 174 名(M=19.77, SD=2.95)を対象にアイシャドウ 10 色を施したマネキンの写真10 枚を提示し、派手さの評定を求め、上位 5 色(赤・紫・緑・青・黒)を派手色として、その後の調査で使用した。調査 1 では、大学生 364 名(M =19.40, SD=.94)を対象に、予備調査で派手色と評価されたアイシャドウの色をどの程度してみたいか、またメイク行動や性格傾向について回答を求めた。その結果、提示したアイシャドウの色各々について、してみたい群としたくない群間でメイク行動や性格傾向に違いが見られた。調査 2 では、大学生 196 名(M=18.75, SD=1.68)を対象に、マネキンへのアイシャドウの塗布方法をより自然なグラデーションへ変更し、また人物へのアイシャドウを施した写真を提示した。その結果、提示したアイシャドウの色各々について、してみたい群としたくない群間においてメイク行動や性格傾向に違いが見られた。

2) ポスター番号:1B-10

バストサイズについての誤情報による自尊感情操作が高級品に対する女性の購買意欲に及ぼす影響

西村 美音[1],三木 綾華[1], 福井 義一[1]
([1]甲南大学)

発表要旨:

ペニスのサイズについての誤情報によって自尊感情が低下した男性は,その補償のために高級スポーツカーに対する購買意欲が高まるという。本研究では,同様の手法で,バストサイズについての誤情報により女性の自尊感情を操作して,女性向け高級品に対する購買意欲の変化を検討した。女子大学生 193 名を対象に,2 種類の誤情報(平均バストサイズ,男性が好むバストサイズ)のいずれかで自尊感情を操作(維持,低下)した後,3 種類の高級品(ブランド鞄,アクセサリー,エステ体験)のうちいずれかに対する購買意欲を評価させた。分析の結果,平均値の誤情報により自尊感情が低下した女性のエステ体験に対する購買意欲は,男性が好むバストサイズの誤情報により自尊感情が低下した女性よりも有意に低く,むしろブランド鞄への購買意欲が高い傾向が見られた。女性の自尊感情の補償方略は,誤情報の内容に左右されることが分かった。平均値の誤情報は異性よりも同性からの目を意識させるため,エステ体験によって異性から見た身体的魅力を高めるよりも,自身の身体的魅力と直接的には無関係なブランド鞄の所持によって付加価値を高める方略が選好された可能性が示唆された。

3) ポスター番号：1B-11

対人距離における認知的負荷と感情覚醒が及ぼす影響

小松 駿[1]，土屋 遥菜[1]，佐藤 寛晟[1]，時田 学[1]
([1]日本大学)

発表要旨：

これまでの対人距離の規定因として，青野（2003）は，性や年齢，パーソナリティなど個人的要因や社会的関係，物理的環境，人種・民族・文化差などがあり，近年は応用的研究も増えていると言及している。ただ、性格や方略などと違って変化の激しい認知や感情などの内的要因の検討はいまだ少ない。一方、対ロボットでは対象との距離（快適距離）については、作業記憶負荷は感情覚醒の高まりとコントロール感の低下を媒介して影響し、その大きさは小さいことが示されている（Benedikt et al, 2022）。対人と対ロボットとでは、パーソナルスペースの大きさや形状が多少異なるが、実験参加者と刺激対象があり、その両者の距離を伸縮して、その変化に伴う気づまりや不快感を測定するという全体的な実験モデルは刺激対象が違うだけで近似していると言える。よって、対人においてもそれら要因は作用する可能性があり、その影響の大きさも違う可能性もある。そこで、本研究では対人距離における認知的負荷と感情の影響をstop-distance法で測定し、対人距離に対するその影響の有無およびその大きさを明らかにすることを目的とする。

4) ポスター番号：1B-12

外見に対する満足度が気分や状態自尊感情に及ぼす影響

須藤 美歩[1]，中谷 智美[2]，福井 義一[1]
([1]甲南大学，[2]甲南大学大学院人文科学研究科)

発表要旨：

外見が心理状態を左右することが知られている。本研究では，外見を化粧や髪型，服装といった日々変動する要素と，顔や体型といった固定した要素に分け，気分や状態自尊感情に及ぼす影響を検討した。変動要素に対するその日の満足度と，固定要素に対する普段の満足度，調査時の気分と状態自尊感情を問う質問票調査を大学生女子に実施し，調査日に化粧をしていた111名のデータを用いた。外見に対する満足度を用いたクラスタ（CL）分析から，9つのCLが得られた。全ての満足度が最も高いCL9と全ての満足度が平均よりやや高いCL5では，状態自尊感情得点が非常に高かったが，全ての満足度が最も低いCL8と髪型に対する満足度だけが平均よりやや高く，他は平均よりきわめて低いCL3，体型に対する満足度だけが平均的で他は平均よりやや低いCL4では，非常に低かった。加えて，CL8と4では否定的気分得点が対照的であった。また，CL9と8では，状態自尊感情得点が対照的であったにも関わらず，否定的気分得点はいずれも低かった。外見の変動要素と固定要素が否定的気分と状態自尊感情にそれぞれ異なる影響を及ぼすサブグループの存在が見出された。

5) ポスター番号：1B-13

大学生におけるソーシャルメディアが平均以上効果に与える影響
——平均的他者の抽象性を考慮して——

山﨑 裕巳[1]，橋場 綾香[1]，時田 学[1]
([1]日本大学)

発表要旨：

精神的健康と自己認知の関連において、客観性が高くバランスのとれた自己認知ではなく、肯定的な方向に偏った自己認知こそが自己認知の基本的な有り様であるという論が展開されてきた。(Taylor & Brown、1988)。Alicke (1985)が示した平均以上効果は、そのような肯定的な方向に偏った自己認知を実証する現象の 1 つと考えられる(田端、2005)。平均以上効果の研究として田端(2005)は、学校生活のある 2 時点における平均以上効果を検討するため、平均的他者の抽象性を 3 群に分けて比較をした結果、学校生活の 2 時点における効果は見られず、最も抽象性が高いとされた群は平均以上効果が生じやすいという結果を得ている。しかし近年、平均的他者の抽象性は、ソーシャルメディアの発達により変化していることが予想される。そこで、本研究では、田端(2005)で効果が確認できなかった 2 時点の条件については設定せず、追研究を行い、3 群の平均的他者について経年変化が見られるかを確認するとともに、ソーシャルメディアに関する群を設定しソーシャルメディアについても条件に加えた上で大学生の平均以上効果について検討する。

6) ポスター番号：1B-14

大学生の好む SNS 広告を分析する

浅岡 陽[1]，齋藤 拓心[1]，佐々木 大輔[1]，前田 直太郎[1]，宮 優作[1]，井上 裕珠[1]
([1]日本大学)

発表要旨：

近年 SNS における広告宣伝の投稿が増え、企業の広告だと分からないように商品やサービスの宣伝を行う、いわゆるステルスマーケティングが問題となってきた。2023 年にステルスマーケティングを規制する法改正がなされ、消費者に分かりやすい方法で広告だと明示することが義務づけられた。SNS における広告においては、「広告」「PR」「宣伝」「プロモーション」などの単語がハッシュタグ(#)の後ろに記されることが多い。ただし、ハッシュタグに用いられた単語によって広告認知の程度や、ブランド好感度、購買意欲が変わりうることが指摘されている (Evans, et al., 2017)。本研究では、どのようなハッシュタグを用いればブランド好感度や購買意欲が高まりやすいのかを知るために Evans et al. (2017)を日本人大学生を対象として追試することを目指し、そのためにまずは、日本人大学生がどのような広告を SNS 上で好んで見ているのかを把握することを目的とした。日本人大学生の好む SNS 上での広告のハッシュタグや広告のカテゴリー、投稿者の影響力などを分析し、発表当日に報告する。

7) ポスター番号：1B-15

VRを用いた高ストレス環境が感覚へ与える影響
——触覚・痛覚閾値の変化に着目して——

瀬川 育実[1]，前野 紗幸[1]，永石 高敏[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨：

近年、Virtual Reality（VR）を用いた研究が多く報告されている。VR とは、現実に類似した体験を人工的に実現させることを目指す技術のことである。VR による現実に近いリアルな体験を再現できる点に関心が寄せられ、心理学を始めとした様々な分野で VR の有効性について検討されている。本研究では、VR を体験させることで実験参加者の痛覚と触覚にどのような影響を与えるのかについて検討した。具体的には、実験参加者を２群に分け、VR 群の実験参加者に高ストレス映像を VR で視聴させ、統制群の実験参加者には心理的変化の少ないと想定される映像を VR で視聴させた。各群において VR の映像視聴前と後に、触覚（触二点閾）レベルおよび痛覚レベル（低周波刺激）を測定し、その変化について比較した。その結果、VR群は統制群に比べて、痛覚が過敏になることが明らかになった。しかし、触覚については群間に差がみられなかった。これらの結果から、VR によって痛覚過敏が生じることが示された。また、本研究では触覚の測定方法に不備があったため、手続きを改善したうえで今後さらなる VR の有効性を検討するための研究を行う必要がある。

8) ポスター番号：1C-15

体重測定による心理的健康への影響

石黒 加菜[1]，川田 悠介[1]，清水 純花[1]，余語 優大[1]，井上 裕珠[1]
([1]日本大学)

発表要旨：

日本の社会問題として、若者の誤ったダイエット法や偏った食生活でのストレスによる栄養不良や拒食症などが挙げられる。この社会問題の原因の一端に、SNS が存在する可能性がある。近年、SNS の急速な普及により、個人が簡単に不特定多数から情報の取得が可能になった。しかしその一方、影響力の高い者から情報を得ることは必ずしも良い影響をもたらすとは言えない。近年の SNS において、影響力の高い者は総じて顔立ちが整っていたり、「スタイルが良い」と考えられる傾向にある。このような者たちの情報を見続けることで、自尊心の低下などのリスクがあり、結果的に前述の通り、ストレスによる栄養不良や拒食症が起こってしまう可能性が考えられる。そこで本研究では、SNS の利用実態(利用頻度、不満度)と批判的思考態度、ストレスの関連を示唆した都築ら(2018)と、体重の測定による自分の身体に過度に注目することが心理的健康や幸福に悪影響を及ぼす可能性があることを示唆した Andrea Mercurio & Brandi Rima (2011)の２つに焦点を当て、日本人大学生を対象として研究を実施した。得られた結果を当日報告する。

9) ポスター番号：1D-3

サステナビリティ化している高級ブランドの浸透
——誇らしさと感謝感情によってロコミは増加するのか?——

伊藤 哲平[1]，川村 直輝[1]，對馬 明日香[1]，花輪 礼奈[1]，井上 裕珠[1]，
([1]日本大学)

発表要旨：

従来ファッション業界は長年環境負荷の高い産業として知られてきたが、近年では環境負荷をかけないような製品作りを行うなど、サステイナビリティ（持続可能性）の実現を目指す試みが増加している。そのような動きは高級ブランドにも当てはまり、「サステナブル・ラグジュアリー」運動として知られている。ただし、サステイナブルな高級ブランドは、「持続可能性」と「高級さ」の本質に対立的な意味があるため、消費者に受容されにくいことが指摘されている。サステイナブルな高級ブランドの販売を促進するにはどのような方法があるのだろうか。Septianto et al.(2020)は、誇りと感謝をアピールすることが、サステナブルな高級ブランドの販売促進に効果的であることを示した。誇りはサステナブルな高級ブランドの「高級」な側面に影響を与え、感謝はサステナブルな高級ブランドの「サステナビリティ」の側面を高めるという。本研究では、Septianto et al.(2020)を日本人大学生において追試し、日本においても同様の知見が得られるのかどうかを検討することを目的とする。

10) ポスター番号：1D-7

Dark Triad が自己愛的甘えに及ぼす影響

小鹿 柚祐[1]，今井田 貴裕[1]
([1]人間環境大学)

発表要旨：

自己愛的甘えは一方的で要求がましい態度（稲垣, 2007）であり，反社会的なパーソナリティである Dark Triad の 3 要素（マキャベリアニズム，サイコパシー，ナルシズム）を併せ持つほど高じると考えられる。そこで本研究では，Dark Triad が自己愛的甘え（配慮の要求: NA1，許容への過度の期待: NA2，屈折的甘え: NA3）に及ぼす影響を検討した。平均年齢 19.45 歳の大学生 245 名のデータを対象に，Step 1 に性別と年齢を，Step 2 に Dark Triad を，Step 3 と 4 に Dark Triad の一次と二次の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。マキャベリアニズムとナルシズムは NA1（β = .28 ～ .39）を，マキャベリアニズムとサイコパシーは NA2（β = .20 ～ .27）を，Dark Triad は NA3（β = .23 ～ .34）をそれぞれ有意に促進した。NA3 に対する Dark Triad の二次の交互作用項が有意になったことから単純傾斜の検定を実施した。その結果，Dark Triad の要素を併せ持つほど NA3 が高じたため，仮説が支持された。

11) ポスター番号：ID-13

ママ活の実態と背景要因を探るための基礎研究

大門 渚紗[1]，桐生 正幸[1]
([1]東洋大学)

発表要旨：

近年流行している「パパ活」と対を成す存在として「ママ活」というものが存在する。「パパ活」は、若い女性が年上の男性と食事やデートをする対価として金銭を受け取る行為とされているが、「ママ活」も同様に、若い男性が年上の女性と食事やデートをする対価として金銭を受け取る行為である。

しかし、その実態は「パパ活」と男女逆転したということに限らず、「ママ活」特有の実態や背景要因が存在することが考えられる。特に、性行為に対してのパパ活女子、ママ活男子の意識は大きく異なることが予想される。また、それぞれの抱えるリスクや「パパ活」、「ママ活」に対する認識も異なっているだろう。

男女平等やジェンダー役割意識について関心が高まる世間に対して、「ママ活」にはどのような事情が存在しているのか、その実態について事例研究、インターネット掲示板などを利用した研究を行い、明らかにすることを本研究の目的とする。

12) ポスター番号：ID-14

大学生における電車内痴漢への被害意識について

出塚 恭央[1]，桐生 正幸[1]
([1]東洋大学)

発表要旨：

警視庁警察庁生活安全局生活安全企画課（2023）「令和 4 年中の迷惑防止条例違反（痴漢・盗撮）に係る検挙件数の調査結果」によると、痴漢による検挙件数の約42%が「電車等」で検挙されている。また、東京都（2023）「令和5年度痴漢被害実態把握調査」では、電車内の痴漢について、被害者の視点から周囲が気づいた場合が 1 割程度ではあるものの、周囲の介入した場合、約 9 割で被害が止まるという結果が示されている。

さて、痴漢行為は主に各都道府県の条例が適応されるものの、東京都の条例では公共の場において身体に触れる行為、盗撮、その他卑猥な言動とされており、昨今話題となった「息吹きかけ痴漢」をはじめ、痴漢と即座に判断できない行為も存在する。

そこで本調査では、痴漢を「相手の意図に反して性的な言動や行為等のわいせつな行為により他人に迷惑をかける者」（曹・高木,2005）と定義し、大学生を対象に電車内の同乗者を直接ふれる以外の行動について、大学生の被害意識について検討することを目的とする。"

教育発表 8月28日(水)

13) ポスター番号:2A-4

同乗者がペーパードライバーのハザード知覚に及ぼす影響

村田 亮[1], 森泉 慎吾[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

ペーパードライバーのハザード知覚(危険の予測力)は教習生と変わらないとされる(中井, 2021)。ペーパードライバーは、運転への自信のなさゆえに、自身よりも運転スキルの高い者が同乗者として存在する場面では、運転時の危険の発見を同乗者に期待することで、単独走行の場合よりもハザード知覚が低下する可能性がある。本研究では、ペーパードライバーのハザード知覚が同乗者の有無で異なるかを実験的に検討する。

実験では、「免許取得後一年が経過し、日常でほとんど運転しない者」をペーパードライバーとする。2 名同時に実施し、実際の運転場面で危険を発見するハザード知覚テストを同一モニターで行う。その際、一方の参加者は「同乗者」とし、かつ運転頻度は高いと虚偽の教示を行う。同乗者なし条件では、参加者 1 名でハザード知覚テストを実施する。

運転頻度が相対的に高い者を「熟練群」として比較対象に設定し、同乗者の有無でハザード知覚テストの得点が異なるかを検討する。ペーパードライバー群は、自身より運転頻度の高い同乗者がいる場合、同乗者からのサポートを期待し、同乗者がいない場合よりもハザード知覚テストの得点が低いと予想される。

14) ポスター番号:2A-5

運転免許の有無と自転車事故のリスク認知との関連

菅 春妃[1], 森泉 慎吾[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

自転車運転者が第 1 当事者となった事故件数は近年増加傾向にある(警察庁, 2024)。自転車は、気軽に乗れるために法規遵守の意識が薄い(沼田他, 2011)。そのため、特に運転免許を持たない者は自転車が車両であるという意識が低く、自身が加害者となるリスクを低く見積もる可能性がある。そこで本研究では、自転車走行時における他の交通参加者との事故リスク推定が、運転免許の有無によって異なるかを検討することを目的とする。

23 歳から 40 歳以下の自転車運転者のうち、日常的に自転車を利用する者をクラウドソーシングにて募集し、Web 形式での質問紙調査を行う。見通しの悪い交差点を通行する自転車目線の動画を提示し、その状況での事故リスクに関連する質問項目について尋ねる。具体的には、その状況に存在しうる対象(自動車、自転車、歩行者など)との衝突確率および被害の程度の推定、過失割合の見積もりなどを求める。運転免許を持たない自転車運転者の加害意識が低いならば、動画内での状況にて歩行者より自動車と衝突する確率を高く推定するとともに、歩行者との衝突に伴う過失割合は、運転免許所有者と比較して低く見積もられると予想される。

15) ポスター番号:2A-15

恋愛に対するネガティブな態度の規定因の検討 (1)
——好きな季節と運動経験、運動能力に注目して——

池内 智美[1], 北方 夢渚[1], 高橋 佑吉[1], 橋本 惇平[1], 増尾 蓮斗[1], 谷口 淳一[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

本研究では、好きな季節および運動経験や運動能力と、恋愛回避と恋愛不安から構成される恋愛に対するネガティブな態度(谷口・金政, 2014)との関連を検討した。夏や冬が好きな人は、春や秋が好きな人に比べて(仮説 1)、運動能力が高いほど(仮説 2)、高校までに運動部に所属していた人の方が(仮説 3)、高校までに団体競技をしていた人の方が(仮説 4)、それぞれ恋愛回避も恋愛不安も低いだろうとの仮説を検証した。18 歳~39 歳の独身の人を対象にオンラインにて調査を実施し、回答に不備のなかった 297 名(平均年齢=32.63 歳(*SD*=4.93)、男性 171 名、女性 123 名、性別無回答 3 名)を分析対象者とした。1)季節を独立変数とする分散分析を行った結果、恋愛回避、恋愛不安ともに有意な主効果は見られず、仮説 1 は支持されなかった。2)運動能力は恋愛回避、恋愛不安と有意な負の相関を示しており、仮説 2 は支持された。3)運動部に所属していた人の方が恋愛回避も、恋愛不安も低くなっており、仮説 3 は支持された。4)団体競技の経験によっては、恋愛回避も恋愛不安も有意な差は見られず、仮説 4 は支持されなかった。

16) ポスター番号:2A-16

恋愛に対するネガティブな態度の規定因の検討 (2)
——現在の生活への満足度に注目して——

池田 梨乃[1], 上垣 晴奈[1], 鈴井 秀章[1], 丹澤 実夢[1], 西平 愛美[1], 谷口 淳一[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

本研究では、現在の生活への満足と、恋愛回避と恋愛不安から構成される恋愛に対するネガティブな態度との関連を検討した。恋人がいると恋人以外との交流に制限がかかってしまうため、恋愛面以外の生活が充実している場合、恋愛を避けるのではないかと考えられる。そのため、現在の生活に満足しているほど、恋愛回避が高くなるだろうとの仮説を設定し、検証した。18 歳~39 歳の独身の人を対象にオンラインにて調査を実施し、297 名を分析対象者とした。生活への満足度は、主観的健康観尺度(SUBI:藤南他,1985)を用いて測定した。SUBI について因子分析を行ったところ、「一般的幸福感」、「友人関係」、「健康」、「社会的関わりの欠如」の 4 因子が抽出された。相関分析を行ったところ、「一般的幸福」、「友人関係」、「社会的関わりの欠如」と恋愛回避との間に有意な負の相関がみられた。一般的幸福感が高く、友人関係に満足しているほど、恋愛回避が低くなっており、仮説は支持されなかった。ただし、社会的関わりが欠如していないと思っているほど、恋愛回避が高くなっており、「社会的関わりの欠如」については仮説が支持された。

17) ポスター番号:2A-17

恋愛に対するネガティブな態度の規定因の検討 (3)
——束縛拒否と自尊心、充実感に注目して——

大林 夕真[1], 北村 詩織[1], 原木 優透[1], 平松 航汰[1], 谷口 淳一[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

本研究では、束縛されることへの態度、自尊心、充実感と、恋愛回避と恋愛不安から構成される恋愛に対するネガティブな態度(谷口・金政, 2014)との関連を検討した。「束縛されるのが嫌な人ほど、恋愛回避が高いだろう(仮説 1)」、「自尊心が低いほど、恋愛不安が高いだろう(仮説 2)」、「充実感が高い人ほど、恋愛回避が高いだろう(仮説 3)」という 3 つの仮説を検証した。18 歳~39 歳の独身の人を対象にオンラインにて調査を実施し、回答に不備のなかった 297 名(平均年齢=32.63 歳(SD=4.93)、男性 171 名、女性 123 名、性別無回答 3 名)を分析対象者とした。1)束縛拒否と恋愛回避との間に有意な正の相関がみられ(r =.35)、仮説 1 は支持された。2)自尊心と恋愛不安との間に有意な負の相関がみられ(r =-.62)、仮説 2 は支持された。3)充実感と恋愛回避との間に有意な負の相関がみられ(r =-.19)、仮説 3 は支持されなかった。以上より、束縛されることが嫌な人ほど、また現在の生活への充実感が低い人ほど、恋愛を回避しており、自尊心が低い人ほど、恋愛に不安を抱いていることが示された。

18) ポスター番号:2B-3

男女の友情関係が成立する人の特徴
——外向性と衝動性に注目して——

市成 将士[1], 児玉 天馬[1], 下田 樹菜[1], 藤田 詩月[1], 溝口 梨里花[1], 山津 慶[1], 谷口 淳一[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

本研究では、男女の友情関係が成立する人としない人の性格の相違について、外向性と衝動性に注目して検討する。外向的な人は積極的に様々な人と関わり、コミュニケーション能力も高いため、同性関係、異性関係に関わらず交流関係を広げやすいと考えられるため、男女の友情関係を成立させやすいと考えられる(仮説1)。また、衝動性が高い人は、後先のことを考えず、理性を保てないので、恋に盲目になりやすく、異性を恋愛対象として見てしまうため、男女の友情関係は成立させにくいと考えられる(仮説2)。大学生 150 名程度を対象に web 形式で調査を実施し、以上の仮説について検証する。外向性は並川他(2012)の Big Five 尺度短縮版から外向性の 5 項目、衝動性については滝聞・坂元(1991)の認知的熟慮—衝動性尺度の 10 項目にそれぞれ回答を求める。異性との友情関係の成立については、「友情関係が成立していると思える異性があなたにはいますか?」という質問で確認する。調査結果については大会当日に報告する。

19) ポスター番号：2B-4

2種類のプライドが他者との関わりに及ぼす影響
――嫌なプライドと熱血なプライド――

髙田 あい[1]，二宮 万美[1]，樋口 礼華[1]，山田 遥登[1]，吉田 一翔[1]，谷口 淳一[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨：

本研究では、人と比べて見栄を張る嫌なプライド(≒競争心)と、自分自身と見つめ合う熱血なプライド(≒自尊心)という2つのプライドが、他者との関わりに及ぼす影響を検討する。嫌なプライドを持っている人は他者と自分を比較し、負けたくないという思いが強いため、相手をネガティブに見てしまい、他者に対してスティグマや偏見を持ってしまうと考えられる。そのため、嫌なプライドを持っているほど、他者に対する偏見が強いだろう(仮説1)。熱血なプライドを持っている人は、自分自身に価値をおいているため、自分のことを知って欲しいと思い、さまざまな他者と関わるため、交友関係が広がると考えられる。そのため、熱血なプライドを持っているほど、交友関係が広いだろう(仮説2)。大学生150名程度を対象にweb形式で調査を実施し、以上の仮説について検証する。他者への偏見については、高齢者への偏見に焦点を当て、原田他(2004)の日本語版 Fraboni エイジズム尺度(FSA)短縮版に回答を求める。交友関係については、一宮他(2013)の対人コミュニケーション尺度を使用する。調査結果については大会当日に報告する。

20) ポスター番号：2B-5

視覚的要素とキャラクターの印象
――まんがタイムきららの作品群における「きららしさ」の研究――

安井 亮太[1]，来田 宣幸[1]
([1]京都工芸繊維大学)

発表要旨：

まんがタイムきららの作品群は、キャラクターの容姿がその性格を反映するという共通した特徴がみられる。例えば、明るい性格のキャラクターは暖色の髪と瞳を持ち、一方、落ち着いた性格のキャラクターは寒色の髪と瞳を持つ傾向にある。この傾向は他の作品群にもみられるが、物語が人間中心で展開されている点が他の作品群と大きく異なり、この作品群の雰囲気は特に「きららしさ」と呼ばれることもある。しかし、「きららしさ」を形成する具体的な要因については十分に解明されていない。

そこで、本研究は「きららしさ」の印象を形成する要因を明らかにすることを目的とする。具体的には、キャラクターの視覚的要素がキャラクターの印象にどのように影響するかを検討するため、きららしい絵柄のイラストを用いて、髪の色と瞳の色の違いが印象に与える効果を比較する。この分析により、キャラクターの視覚的印象がどのように形成され、それが視覚的要素にどのように影響を与えるかを明らかにすることが期待される。

21) ポスター番号:2B-6

現代の大学生の購買行動に関する意思決定
——文脈効果の検討——

山中 葵[1], 吉村 玲香[1], 富田 瑛智[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

ある商品を購入するとき、その周りにある商品の影響はどれくらいあるのだろうか。2 つの選択肢からどちらかを選択するとき、片方の選択肢に類似する第 3 の選択肢の存在によって本来選択しない方を選ぶことがあり、これを文脈効果という。日本人大学生を対象とした意思決定の文脈効果についての先行研究は 20 年以上過去に行われており,現代の大学生でも,同様の結果が得られるか不明である。本研究では,先行研究の追試を行い、現代の大学生でも同様に文脈効果がみられるか検討する。予備調査として大学生が購買意欲を持つ商品に関する調査と、それらの購入に際し重視する属性の調査を行う。その結果に基づき、それぞれの商品において重要視される 2 属性を操作し、対照的で選択率がほぼ等しくなるような選択肢を設定する。各文脈効果条件において、その効果がみられるような第3選択肢を設定する。各選択肢をモニターに表示し、実験参加者に最も購入したい商品の番号を入力させ、その際の反応時間を測定する。また、その後で選択の確信度を申告させる。これらによってそれぞれの文脈効果がみられるかどうかと、選択までの反応時間、選択の確信度を調査検討する。

22) ポスター番号:2B-7

待ち時間を分けることにより知覚時間は短くなるのか?

中野 真佳[1], 水垣 萌苗[1], 富田 瑛智[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

店内に空席があるにもかかわらず,店外で待たなければならない飲食店が時々ある。なぜ店内で待たせないのだろうか。店内外で待つ時間が区切られていることに意味があるのだろうか。待ち時間は Dubé-Rioux, et. al.(1989)により事前プロセス(入店後注文するまで),プロセス中(注文後,食事を終えるまで),事後プロセス(支払いを終えてレストランを出るまで)に分類されている。この定義に従うと,本研究で着目する待ち時間は事前プロセスとプロセス中の一部(料理が提供されるまで)と言え,事前プロセスの待ち時間はプロセス中より長く感じるとされている(Maister, 2005)。また,店外で待たせる時間を作ることは知覚時間を伸ばすことになり,待ち時間を長く知覚させることになる。一方で,待ち時間を区切ることが知覚時間に与える影響は検討されていない。そこで,本研究では待ち時間を分割することで知覚時間は短くなるのか検討する。具体的には,店内外でそれぞれ待たせる条件は,店内で直接待たせる条件に比べて,知覚される時間が短くなるのか検討する。加えて,待ち時間に関するフィードバックの有無についても検討を行う。

23) ポスター番号:2C-14

炭酸水と水におけるフレーバーの違いが印象に与える影響
——感性評価を用いた香料の効果検証——

丸山 花音[1], 来田 宣幸[1]
([1]京都工芸繊維大学)

発表要旨:

人間が飲食時に感じる食品への印象は、味覚そのものの他にも多くの情報が関係しており、その中でも嗅覚情報は味覚情報と強いつながりがあることが知られている。嗅覚情報による印象変化を利用した飲料としてフレーバー炭酸水がある。現在、フレーバー炭酸水を含む炭酸水飲料はその需要を伸ばし続けているが、売り上げの上昇率に対して市場に出回っている種類は多くはない。炭酸水のフレーバーを増やすためには、まず炭酸水と相性の良いフレーバーを探すことが不可欠である。特に炭酸水は他の飲料と比較してシュワシュワとした刺激が特徴であり、この刺激が生み出す感覚や印象を確認するために水との比較を行う必要がある。そこで、本研究では、炭酸水と水に現在飲料として親しまれている香料を付加し、得られる印象を比較することを目的とする。本研究は、嗅覚情報が炭酸水の味覚印象に与える影響を明らかにし、より多様なフレーバーの炭酸水を開発するための基礎的な知見を提供することを目指している。

24) ポスター番号:2C-15

XR による自宅トレーニング支援システム

吉尾 陸汰[1], 来田 宣幸[1]
([1]京都工芸繊維大学)

発表要旨:

近年、現実の風景にデジタル情報を重ね合わせたり、仮想の世界に入り込んだりする XR 技術が進化し、多くの企業や団体がその活用方法を模索している。本研究では、XR の活用方法の提案にあたって、自宅での筋力トレーニングを試みて挫折する人が存在することに着目した。そこで運動初心者のトレーニングフォームの改善と意欲向上を目的として XR とモーションキャプチャを組み合わせた自宅でのトレーニング支援システムを提案する。具体的にはモーションキャプチャで肩、腰、膝などの動きを三次元的に取得し、そのデータをリアルタイムで XR 空間に表示する。これにより、運動者は自分の動きを視覚的に確認しながらトレーニングを行うことができる。このシステムにより、挫折や怪我の回避が期待され、より効果的なトレーニングが可能となる。発表ではプロトタイプの作成過程を報告し、具体的な効果評価に向けた実験計画案作成のパイロット研究の進捗状況を報告する予定である。

25) ポスター番号:2C-16

筆記具の書字動作における個人特性
——ペンの三次元モーションデータを用いて——

杉山 聡一[1], 来田 宣幸[1]
([1]京都工芸繊維大学)

発表要旨:

手はヒトの体の部位の中でも動作させることのできる筋肉や骨、関節が多く存在しているため、複雑な動きに対応しやすく、特に精密に自由自在に動かすことができる部位である。手で行う動作の中で書く動作は日常生活に欠かせない。書く動作には個人に恒常性がみられることが知られ、書字中のペンの動きには個人の経験による癖が観察されると考えられる。そこで、本研究では書字行動におけるペンの動きに着目し、3 次元モーションキャプチャを用いて座標を収集し、ペンの動作の個人特性について検討する。

26) ポスター番号:2D-1

テレビゲームでフロー体験は引き起こされるのか?
——フロー尺度・生理指標・主観的時間を用いて検討——

東原 早千絵[1], 清水 柊花[1], 永石 高敏[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨:

フロー効果とは、ある行為に対して時間感覚と自我の意識が喪失されるほど、完全に没頭している状態を表す。本実験では、没入感が高いと考えられるテレビゲームをプレイすることでフロー効果を引き起こすことができるのかについて検証した。具体的には、操作による没入や視覚的な没入が高くなると推測できるアクションゲームをテレビゲーム群では実施した。先行研究によると、鏡映描写を用いることでフロー状態になることが示されており、テレビゲームによるフロー状態の有無を明らかにするための比較として鏡映描写群を設けた。また、テレビゲーム群および鏡映描写群のフロー状態の有無を検討するために映像を視聴する統制群も設定した。従属変数としては、フロー体験に関する尺度、生理指標(心拍数)、主観的時間感覚の 3 つを用いて、フロー効果について多角的な視点で検討した。その結果、フロー体験尺度においてテレビゲーム群と鏡映描写群との間に有意な差がみられたが、それ以外の従属変数ではいずれも差がみられなかった。そのため、本研究ではテレビゲームによるフロー効果を確認することができなかった。今後、実験手続き等を改善して、再検討する必要がある。

27) ポスター番号：2D-2

メイクの濃さが与える印象と外見と内面の不一致による印象の変化について

久保 光里[1]，玄 彩楓[1]，永石 高敏[1]
([1]帝塚山大学)

発表要旨：

今日では様々なメイクが存在し、性格の推測や対人魅力などにおいてメイクを手がかりに することがある。例えば、中川（2022）は Big Five 性格特性を測定する TIPI-J を改変したものを用い、ヘアメイクアップ顔から推測される性格とその対人魅力の関係について検証した。その結果、メイクの定番色や自然色からなるヘアメイクアップ顔は協調性や勤勉性、情緒安定性が高いと推測され、対人魅力が高いと評価されることを示した。また、メイクの非定番色を含むヘアメイクアップ顔は外向性や開放性が高いと推測され、対人魅力は低いと評価されることも示した。このように人はメイクによってその人物の印象形成を行うことが明らかになっている。しかし、メイクによる外見の印象と内面（行動パターン）の不一致が生じた際、人に対する印象や魅力がどのように変化するのかについてはあまり明らかになっていない。そこで本研究では、顔画像に濃いメイクと薄いメイクを施したものを作成し、その 2 種類の画像を用いてその外見に対する印象、その顔画像の人物に関する内面情報の提示後の印象を測定し、メイクの濃淡が印象に与える影響および内面情報による印象変化について検討した。

28) ポスター番号：2D-15

Yahoo!知恵袋への質問内容から読み取る心理専門職のイメージ
——臨床心理士と公認心理師の比較——

江見 かほり[1]，澤田 戒[2]，中谷 智美[2]，福井 義一[1]
([1]甲南大学，[2]甲南大学大学院人文科学研究科)

発表要旨：

わが国において、心理専門職の有資格者数の割にその活用状況が低調である背景に、情報・知識不足や否定的イメージ等が想定されるが、質問票調査による把握は困難である。本研究では、代表的な心理専門職の資格名である臨床心理士や公認心理師の語を含む Yahoo!知恵袋に投稿された相談内容に計量テキスト分析を実施し、心理専門職の一般的イメージの把握を試みた。国立情報学研究所の IDR データセット提供サービスにより、Yahoo!知恵袋データ第 3 版から公認心理師（141 件）と臨床心理士（362 件）を含む相談を分析に使用した。共起ネットワーク分析の結果、公認心理師を含む相談は、資格取得に関するものが大部分を占めたのに対して、臨床心理士を含む相談には、それ以外にも心理専門職によるサービスを利用した経験から得られた疑問や不安、不信感を表明するものも散見された。本研究から、公認心理師は資格制度が始まったばかりで、まだ一般に浸透していないことが伺えたのに対して、臨床心理士は活用こそされているものの、その対応への疑問や不信感などが投稿されていることから、専門家としての社会的信頼性が未確立である現状が伺えた。

索引（研究発表）

【ア】

アニーシャ・ニシャート	アニーシャ・ニシャート	…… 42
井梅 由美子	イウメ ユミコ	…… 35, 36, 91
異儀田 はづき	イギタ ハヅキ	…… 9
伊坂 裕子	イサカ ヒロコ	…… 49, 50
石井 秀宗	イシイ ヒデトキ	…… 27
石田 拓矢	イシダ タクヤ	…… 75
石橋 裕子	イシバシ ユウコ	…… 76, 77
磯 友輝子	イソ ユキコ	…… 16, 73
磯和 壮太朗	イソワ ソウタロウ	…… 86
板垣 文彦	イタガキ フミヒコ	…… 85
井手 健太	イデ ケンタ	…… 48
伊藤 将史	イトウ マサシ	…… 40
伊藤 令枝	イトウ ヨシエ	…… 31, 50
稲野辺 奈緒子	イナノベ ナオコ	…… 28
稲葉 佑貴	イナバ ユウキ	…… 12
井上 航人	イノウエ コウト	…… 4
井上 雄貴	イノウエ ユウキ	…… 1, 2, 3, 5
井上 裕珠	イノウエ ユミ	…… 17
今井 武文	イマイ タケフミ	…… 56
今井田 貴裕	イマイダ タカヒロ	…… 45, 86, 88
岩﨑 和子	イワサキ カズコ	…… 95
上田 真由子	ウエダ マユコ	…… 13
臼井 伸之介	ウスイ シンノスケ	…… 81
内田 誠也	ウチダ セイヤ	…… 34
内山 伊知郎	ウチヤマ イチロウ	…… 65, 68, 69
遠藤 まな	エンドウ マナ	…… 26
王 晋民	オウ シンミン	…… 22
大浦 真一	オオウラ シンイチ	…… 86
大門 耕平	オオカド コウヘイ	…… 29, 40
大髙 実奈	オオタカ ミナ	…… 44
大谷 亮	オオタニ アキラ	…… 80
大橋 恵	オオハシ メグミ	…… 35, 36, 91

大森 哲至　オオモリ テツシ …… 12
大森 美路子　オオモリ ミチコ …… 12
尾形 和男　オガタ カズオ …… 67
岡村 歩果　オカムラ アユカ …… 68
奥村 由美子　オクムラ ユミコ …… 78
小野村 樹美　オノムラ ジュミ …… 97
小畑 周介　オバタ シュウスケ …… 11

【カ】

柿本 敏克　カキモト トシカツ …… 20
角山 剛　カクヤマ タカシ …… 16
片岡 大輔　カタオカ ダイスケ …… 58
加堂 生織　カドウ イオリ …… 37
加藤 佳子　カトウ ヨシコ …… 38, 53
金山 英莉花　カナヤマ エリカ …… 65,
軽部 幸浩　カルベ ユキヒロ …… 1, 2, 3, 4, 5
河越 隼人　カワゴシ ハヤト …… 90, 92
岸 竜馬　キシ タツマ …… 89
来田 宣幸　キダ ノリユキ …… 8, 29, 40, 95
木村 友昭　キムラ トモアキ …… 49, 50
桐生 正幸　キリウ マサユキ …… 46, 47, 48
九島 紀子　クシマ ノリコ …… 19
蔵永 瞳　クラナガ ヒトミ …… 71
栗延 孟　クリノブ タケシ …… 87
黄 瑶　コウ ヨウ …… 23
小島 亜未　コジマ アミ …… 38
小林 寛子　コバヤシ ヒロコ …… 73
古壕 典洋　コボリ ノリヒロ …… 51
近藤 奈緒子　コンドウ ナオコ …… 51
近藤 三由希　コンドウ ミユキ …… 27
紺野 剛史　コンノ タケシ …… 48
権野 めぐみ　ゴンノ メグミ …… 40

【サ】

佐野 未来	サノ ミク	…… 71
皿谷 陽子	サラガイ ヨウコ	…… 45, 88
澤田 戒	サワダ カイ	…… 37
ザン・ソニア	ザン・ソニア	…… 21
鹿内 菜穂	シカナイ ナオ	…… 85
重森 雅嘉	シゲモリ マサヨシ	…… 57
静間 健人	シズマ タケト	…… 14
島田 恭子	シマダ キョウコ	…… 46, 47
下條 朝也	シモジョウ アサヤ	…… 55
下茂 翔太朗	シモ ショウタロウ	…… 94
謝 新宇	シャ シンウ	…… 23
庄司 正実	ショウジ マサミ	…… 75
白樫 花奈	シラカシ カナ	…… 92
新里 知佳野	シンザト チカノ	…… 1, 2, 3, 5
菅野 智子	スガノ トモコ	…… 61
須永 範明	スナガ ノリアキ	…… 85, 97
澄岡 美羽	スミオカ ミウ	…… 78
仙波 亮一	センバ リョウイチ	…… 54
相馬 敏彦	ソウマ トシヒコ	…… 23

【タ】

大本 浩司	ダイモト ヒロシ	…… 15
髙井 美莉衣	タカイ ミリイ	…… 7
高木 玉江	タカギ タマエ	…… 70
髙橋 一公	タカハシ イッコウ	…… 16
滝谷 寿美	タキヤ スミ	…… 89
竹内 倫和	タケウチ トモカズ	…… 59
武内 寛子	タケウチ ヒロコ	…… 56
竹橋 洋毅	タケハシ ヒロキ	…… 72
田中 圭	タナカ ケイ	…… 60
田中 共子	タナカ トモコ	…… 24
田中 英明	タナカ ヒデアキ	…… 34, 50
谷口 淳一	タニグチ ジュンイチ	…… 79
谷田 林士	タニダ シゲヒト	…… 25

種ケ嶋 尚志	タネガシマ ヒサシ	…… 6, 7
玉越 勢治	タマコシ セイジ	…… 15
田宮 憲	タミヤ ケン	…… 12
近野 恵	チカノ メグミ	…… 48
塚本 伸一	ツカモト シンイチ	…… 89
寺澤 孝彦	テラサワ タカヒコ	…… 56
寺田 盛紀	テラダ モリキ	…… 74
土居 正人	ドイ マサヒト	…… 10, 26
鄧 娟	トウ ケン	…… 24
藤後 悦子	トウゴ エツコ	…… 16, 35, 36, 91
時田 学	トキタ ガク	…… 33
富田 瑛智	トミタ アキトシ	…… 87
富永 日向子	トミナガ ヒナコ	…… 18

【ナ】

中尾 達馬	ナカオ タツマ	…… 63
中谷 智美	ナカタニ トモミ	…… 37, 86
永野 浩二	ナガノ コウジ	…… 93, 94
中村 早希	ナカムラ サキ	…… 15
中山 雅斗	ナカヤマ マサト	…… 8
波平 乃衣	ナミヒラ ノイ	…… 10
野田 智美	ノダ トモミ	…… 96
能渡 綾菜	ノト アヤナ	…… 30, 60
能渡 真澄	ノト マスミ	…… 30, 60

【ハ】

橋本 育美	ハシモト イクミ	…… 6
橋本 博文	ハシモト ヒロフミ	…… 82
林 幸範	ハヤシ ユキノリ	…… 76, 77
伴 碧	バン ミドリ	…… 21, 69
日高 舞子	ヒダカ マイコ	…… 52
日向野 智子	ヒュウガノ トモコ	…… 16
福井 義一	フクイ ヨシカズ	…… 37, 86
福田 佳織	フクダ カオリ	…… 67
藤田 主一	フジタ シュイチ	…… 1, 2, 3, 4, 5, 31, 39

古澤 伸晃　フルサワ ノブアキ …… 1, 2, 3, 5
古屋 健　フルヤ タケシ …… 9, 28
細野 文雄　ホソノ フミオ …… 20
洞出 翼　ホラデ ツバサ …… 90
堀 孝司　ホリ タカシ …… 37, 86

【マ】

前田 楓　マエダ カエデ …… 82
松浦 常夫　マツウラ ツネオ …… 83
松浦 均　マツウラ ヒトシ …… 51
松尾 智晶　マツオ トモアキ …… 74
松原 小夏　マツバラ コナツ …… 93
三島 浩路　ミシマ コウジ …… 62
三保 紀裕　ミホ ノリヒロ …… 74
村田 康徳　ムラタ ヤスノリ …… 38, 53
本村 明嘉　モトムラ ハルカ …… 34
百田 尚史　モモタ ナオヒト …… 1, 2, 3, 5
森泉 慎吾　モリイズミ シンゴ …… 79, 81
森下 葉子　モリシタ ヨウコ …… 67
森本 康太郎　モリモト コウタロウ …… 41
森 祐貴　モリ ユウキ …… 8

【ヤ】

八木沢 誠　ヤギサワ マコト …… 1, 2, 3, 5
柳瀬 真紀　ヤナノセ マキ …… 72
矢野 伸裕　ヤノ ノブヒロ …… 84
山岡 重行　ヤマオカ シゲユキ …… 43
山極 和佳　ヤマギワ ワカ …… 16
山口 舞　ヤマグチ マイ …… 64
山田 瑶人　ヤマダ ヨウト …… 12
山内 春佳　ヤマノウチ ハルカ …… 79
山村 豊　ヤマムラ ユタカ …… 61
山本 睦　ヤマモト チカ …… 32
山本 ちさと　ヤマモト チサト …… 40
横井川 美佳　ヨコイガワ ミカ …… 66

【ラ】
李 同帰　リ トキ …… 63

【ワ】
和田　一成　ワダ カズシゲ …… 56
和田　万紀　ワダ マキ …… 97

索引（教育発表）

【ア】

浅岡 陽 …… 102
池内 智美 …… 107
池田 梨乃 …… 107
石黒 加菜 …… 103
市成 将士 …… 108
出塚 恭央 …… 105
伊藤 哲平 …… 104
上垣 晴奈 …… 107
江見 かほり …… 113
大林 夕真 …… 108

【カ】

川田 悠介 …… 103
川村 直輝 …… 104
北方 夢渚 …… 107
北村 詩織 …… 108
久保 光里 …… 113
玄 彩楓 …… 113
小鹿 柚祐 …… 104
児玉 天馬 …… 108
児玉 みくる …… 100
後藤 衣月 …… 100
小松 駿 …… 101

【サ】

齋藤 拓心 …… 102
佐々木 大輔 …… 102
佐藤 寛晟 …… 101
清水 柊花 …… 112
清水 純花 …… 103
下田 樹菜 …… 108
菅 春妃 …… 106
杉山 聡一 …… 112
鈴井 秀章 …… 107
須藤 美歩 …… 101
瀬川 育実 …… 103

【タ】

大門 渚紗 …… 105
高田 あい …… 109
高橋 佑吉 …… 107
丹澤 実夢 …… 107
對馬 明日香 …… 104
土屋 遥菜 …… 101

【ナ】

中野 真佳 …… 110
西平 愛美 …… 107
西村 美音 …… 100
二宮 万美 …… 109

【ハ】

橋場 綾香 …… 102
橋本 惇平 …… 107
羽富 千夏 …… 100
花輪 礼奈 …… 104
原木 優透 …… 108
東原 早千絵 …… 112
樋口 礼華 …… 109
平松 航汰 …… 108
藤田 詩月 …… 108

【マ】

前田 直太郎 …… 102
前野 紗幸 …… 103
増尾 連斗 …… 107
丸山 花音 …… 111
三木 綾華 …… 100
水垣 萌苗 …… 110

溝口 梨里花 …… 108
宮 優作 …… 102
村田 亮 …… 106
森川 実柚 …… 100
【ヤ】
安井 亮太 …… 109
山﨑 裕巳 …… 102
山津 慶 …… 108
山田 遥登 …… 109
山中 葵 …… 110
余語 優大 …… 103
吉尾 陸汰 …… 111
吉田 一翔 …… 109
吉村 玲香 …… 110
渡邉 祐太 …… 100

【指導教員】

井上 裕珠 日本大学 …… 102, 103, 104
今井田 貴裕 人間環境大学 …… 104
来田 宣幸 京都工芸繊維大学 …… 109, 111, 112
桐生 正幸 東洋大学 …… 105
九島 紀子 ビューティ＆ウェルネス専門職大学 …… 100
谷口 淳一 帝塚山大学 …… 107, 108, 109
時田 学 日本大学 …… 101, 102
富田 瑛智 帝塚山大学 …… 110
永石 高敏 帝塚山大学 …… 103, 112, 113
福井 義一 甲南大学 …… 100, 101, 113
森泉 慎吾 帝塚山大学 …… 106

日本応用心理学会第90回大会 賛助団体等御芳名

本大会を開催するにあたり、以下のとおり、諸団体・企業の皆さまからご協賛および多大なご支援を賜りました。深く感謝し、御礼申し上げます。

アイブリッジ株式会社
オムロン ソーシャルソリューションズ株式会社
株式会社 北大路書房
株式会社 企業開発センター
株式会社 クロス・マーケティング
高齢者交通研究会
株式会社 三京房
トビー・テクノロジー株式会社
株式会社 ナカニシヤ出版
株式会社 奈良事務機
公益社団法人 奈良県トラック協会
一般社団法人 京都工場保健会
一般社団法人 奈良県安全運転管理者協会
一般社団法人 日本自動車連盟
株式会社 日本文化科学社
福村出版 株式会社
八尾自動車教習所
山城自動車教習所

（敬称略・五十音順）

2024年7月吉日

日本応用心理学会第90回大会
谷口 淳一

日本応用心理学会第 90 回大会委員会

大会委員長	谷口 淳一	帝塚山大学心理学部
大会副委員長	中地 展生	帝塚山大学心理学部
大会事務局長	森泉 慎吾	帝塚山大学心理学部
大会副事務局長	富田 瑛智	帝塚山大学心理学部
大会委員	奥村 由美子	帝塚山大学心理学部
	水野 邦夫	帝塚山大学心理学部
	近藤 隆夫	帝塚山大学心理学部
	山口 祐子	帝塚山大学心理学部
	河越 隼人	帝塚山大学心理学部
	式部 陽子	帝塚山大学心理学部
	永石 高敏	帝塚山大学心理学部
	森田 健一	帝塚山大学心理学部
顧問	森下 高治	帝塚山大学（名誉教授）
	蓮花 一己	帝塚山大学（名誉教授）
後援・協力	帝塚山大学	

日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集

発 行 日　2024 年 8月26日
発 行 者　日本応用心理学会
第 90 回大会委員長 谷口 淳一
〒631-8585
奈良県奈良市学園南 3-1-3



からだがかたどる発達

人・環境・時間のクロスモダリティ

根ヶ山光一、外山紀子 編著

■A5判／並製／464頁　◎定価4,400円

他者と関わる基盤となるからだの発達を通して、こころや物理的・社会的環境との関わりを多面的に考察する。



子どもを「まもる」心理学

健やかな育ち・ウェルビーイング・心と安全

出口保行、藤後悦子、
坪井寿子、日向野智子 編著

■A5判／並製／264頁　◎定価2,860円

様々な心理学的見地から、子どもの健やかな心身・幸福・安全・幸せな未来をいかに「まもる」のかを考える。

Now Printing
8月刊行予定

AEDPスーパービジョン・実践ガイドブック

カウンセラーの孤独を打ち消し勇気を引き出すアプローチ

ナターシャ・ブレン、ダイアナ・フォーシャ 著
岩壁 茂、花川ゆう子、山崎和佳子 監訳

■A5判／並製／236頁　◎定価3,080円

治療的関係で孤独感を解消し、癒やし体験を引き出すAEDP心理療法のスーパービジョン方法論を徹底解説。



アーティスト・クリエイターの心の相談室

創作活動の不安とつきあう

手島将彦 著

■A5判／並製／280頁　◎定価2,640円

音楽・美術・演劇・動画などに携わるアーティスト・クリエイターの悩みに、経験豊富なカウンセラーが回答。



老年臨床心理学ハンドブック

日本老年臨床心理学会 企画　長嶋紀一 監修　**2024年9月上旬刊**
山中克夫、松田 修、黒川由紀子 統括編集
扇澤史子、長田久雄、小野寺敦志、加藤伸司、北村世都、佐藤眞一、志村ゆず、下垣 光、内藤佳津雄、西村嘉子 編集

■B5判／上製／736頁　◎定価30,800円

多領域にわたる応用・実践研究を網羅し、超高齢化社会に対応する臨床心理学の概念を第一線の専門家が詳説。

Now Printing
8月刊行予定

自閉症は英語がお好き！？

自閉スペクトラム症のことばと社会とメディアの進化

松本敏治 著

■四六判／並製／216頁　◎定価1,980円

メディアからの言語習得はありえないという批判がある。新たな海外の事例やこれまでの調査から融合をはかる。集大成の第3弾！



「共に生きる」未来をひらく発達支援

むぎのこ式子ども・家庭支援40年の実践

北川聡子、古家好恵、小野善郎 編著

■四六判／並製／282頁　◎定価1,980円

「むぎのこ式支援」から、障害のある子どもたちの自己実現を可能にする、ウェルビーイングが保障される多様性尊重の社会を考える。



児童学とは何か

児童学の方法論・対象・方法をめぐる
ヴィゴーツキーの四つの論文を読む

ヴィゴーツキー 著　中村和夫 編・訳

■A5判／並製／172頁　◎定価2,750円

新たに選出・新訳したヴィゴーツキーの論文と講義から、児童学に対する彼の理論的営為の一端を明らかにする。



「心の理論」の発達 空間的視点取得から社会的視点取得

そのプロセスと臨床的視点

小沢日美子 著

■A5判／並製／172頁　◎定価2,640円

他者理解の認知発達を空間的視点取得と社会的視点取得の側面から捉え、その発達過程に生じる臨床的課題に言及。



心理臨床実践において「伝える」こと

セラピストのこころの涵養

髙橋靖恵 著

■A5判／並製／160頁　◎定価2,530円

心理臨床の基本である「伝える」とは何か。40年にわたる心理臨床実践者、33年にわたる大学教員としての思考。



私たちはなぜスマホを手放せないのか

「気が散る」仕組みの心理学・神経科学

アダム・ガザレイ、ラリー・D・ローゼン 著
河西哲子 監訳　成田啓行 訳

■A5判／並製／368頁　◎定価3,850円

最新の心理学と神経科学の研究成果から、スマホやSNSにハマる仕組みとその影響を和らげる処方箋を紹介。



教育相談の展望とロール・プレイングの体系

見守る姿勢・つながる対話・つなげる心理劇のエッセンス

安藤嘉奈子 著

■A5判／上製／268頁　◎定価2,860円

教育相談とロール・プレイングを含む心理劇について、教職課程における実践と研究を促進するための基礎を提示。



自閉 もうひとつの見方

これが私だと思えるように

バリー・M・プリザント、トム・フィールズ-マイヤー 著
長崎 勤 監訳
吉田仰希、深澤雄紀、香野 毅、
長澤真史、遠山愛子、有吉未佳 訳

■A5判／並製／412頁　◎定価3,630円

自閉症者支援の第一人者による名著の増補改訂版。変わりゆく自閉とアイデンティティの考え方を反映させた。



AAIDD知的障害マニュアル（第12版）

定義・診断・分類および支援体系

ロバート・L・シャロック、ルース・ラッカソン、マーク・J・タッセ 著
公益社団法人日本発達障害連盟 日本語版監修
橋本創一、宮本信也、小澤 温、霜田浩信 日本語版編集

■B5判／上製／130頁　◎定価9,900円

アメリカ知的・発達障害協会によるマニュアル最新版の日本語版。知的障害の統合的アプローチに結びつける。

福村出版 | 〒104-0045 東京都中央区築地4-12-2　◎定価は税込み価格です。
TEL 03-6278-8508 FAX 03-6278-8323 https://www.fukumura.co.jp

【医科診療報酬点数 280 点】

P-Fスタディ

成人用第Ⅲ版
青年用
児童用第Ⅲ版

2024 年 8 月　発刊

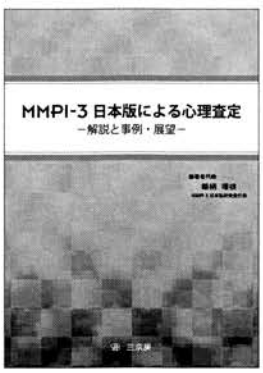
学生用（高校生・大学生）

【医科診療報酬点数 280 点】

MMPI 3 日本版

Minnesota Multiphasic Personality Inventory-3

新刊 MMPI-3 日本版による心理査定－解説と事例・展望－



2024 年 6 月　公開

解釈支援システム（解釈レポート自動作成）

SKB 三京房

TEL 075-561-0071　FAX 075-525-1244

問い合わせ・資料請求フォーム：https://www.sankyobo.co.jp/form3.html

株式会社三京房は MMPI-3, MMPI の日本公式ライセンシーです。

北大路書房

〒603-8303　京都市北区紫野十二坊町12-8
☎075-431-0361 FAX 075-431-9393
https://www.kitaohji.com（価格税込）

〈生活－文脈〉理解のすすめ

－他者と生きる日常生活に向けて－　宮内　洋，松宮朝，新藤　慶，打越正行著　四六・208頁・定価2970円
生身の身体を伴った，生活する人間を，同じく，生活する人間が理解するとはどういうことか？　乳幼児期の食（共食の体験），青年期の労働（沖縄のヤンキー），成人期の政治行動（市町村合併），老年期の社会関係（孤独・孤立）をとおして考える。

体験と経験のフィールドワーク

宮内　洋著　A5・160頁・定価2420円　フィールドでの人間関係や調査者としての苦悩，フィールドワーク上のトラブルといった従来語られなかったセンシティブな問題を抽出し，真正面から向き合った待望の入門書。心理学，社会学，教育学，民俗学，社会福祉学等の質的調査，フィールドワークに向かう人へ。

人はいかに学ぶのか

－授業を変える学習科学の新たな挑戦－　全米科学・工学・医学アカデミー編　秋田喜代美，一柳智紀，坂本篤史監訳　A5・396頁・定価4620円　『How People Learn（邦題：授業を変える）』から20年の間で明らかになった知見に基づき再構成された最新版。脳科学・神経科学，動機づけ研究や文化等多様な切り口から人の「学び」に迫る。

授業を変える

－認知心理学のさらなる挑戦－　米国学術研究推進会議編著　森　敏昭，秋田喜代美監訳　A5・340頁・定価4180円　人はいかに学ぶのだろうか。この疑問にこたえようとする認知心理学の研究成果をもとに，すぐれた授業実践のあり方を問う。研究と実践の橋渡しを見事に成功させた「授業を変える学びの認知心理学」。

時間概念と空間概念の発達

－古典的ピアジェ課題の新たな展開－　松田文子，岡崎善弘，日下部典子著　A5上製・116頁・定価5940円
時間と空間の概念形成は子どもから大人になる間にどのような発達の道筋を辿るか。ピアジェ課題に端を発する比較判断の課題を用いた実験からその様相を明らかにした，一連の研究の集大成。

ピアジェに学ぶ認知発達の科学

J．ピアジェ著　中垣　啓訳　A5・240頁・定価3080円　数あるピアジェ理論の解説書の中で，ピアジェ自身が自分の理論を解説した唯一の書。全ページに訳者による注釈と詳細な解説を配した，ピアジェ理論を知るために最初に読むべき定番的な教科書であり，研究者にとっても意義深い書である。訳者による小論も掲載。

サッカー選手・指導者のためのメンタルガイド

松山博明編著　堀野博幸，松竹貴大，夏原隆之，永野智久著　四六・288頁・定価2860円　サッカーの指導者と選手に向けて，モチベーションやピークパフォーマンスを高める方法，意思決定能力を養うトレーニング法，怪我やバーンアウトへの心理的対処法，チームビルディングの考え方など，スポーツ科学に基づく知見をわかりやすく紹介。

コーチング心理学ガイドブック

S．オリオーダン，S．パーマー編著　徳吉陽河監訳　A5・336頁・定価4620円　心理学に基づくコーチングの基礎や研究等を紹介。信頼関係の築き方やアセスメント等の主要トピックから，会社やスポーツなどでの応用，コーチング心理学の限界と未来まで包括的に解説。個人と組織の持続的成長やウェルビーイング向上に貢献したい実践家・研究者必読の書。

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ 心理学と仕事〔全20巻〕完結！

シリーズ監修　太田信夫
●A5判・148～232頁・定価2200～2530円

1 感覚・知覚心理学	2 神経・生理心理学	3 認知心理学	4 学習心理学	5 発達心理学
6 高齢者心理学	7 教育・学校心理学	8 臨床心理学	9 知能・性格心理学	10 社会心理学
11 産業・組織心理学	12 健康心理学	13 スポーツ心理学	14 福祉心理学	15 障害者心理学
16 司法・犯罪心理学	17 環境心理学	18 交通心理学	19 音響・音楽心理学	20 ICT・情報行動心理学

心理検査専門出版　日本文化科学社

SDSキャリア自己診断テスト
原版出版社　PAR
原　著　者　J. L. Holland
日本版作成者　HCR グループ

VPI 職業興味検査 第3版
原版出版社　PAR
原　著　者　J. L. Holland
日本版作成者　独立行政法人労働政策研究・研修機構

GHQ精神健康調査票
原版出版社　GL Assessment
原　著　者　David Goldberg
日本版作成者　中川泰彬、大坊郁夫

BDI™-IIベック抑うつ質問票
原版出版社　Pearson
原　著　者　Aaron T. Beck, Robert A. Steer
Gregory K. Brown
日本版作成者　小嶋雅代、古川壽亮

MMSE-J精神状態短時間検査
原版出版社　PAR
原　著　者　Marshal F. Folstein, Susan E. Folstein
Paul R. Mchugh, Gary Fanjiang
日本版作成者　杉下守弘

レーヴン色彩マトリックス検査
原版出版社　Pearson
原　著　者　J. C. Raven
日本版作成者　杉下守弘、山崎久美子

S-M社会生活能力検査 第3版
編　　者　上野一彦、名越斉子
旭出学園教育研究所

ASA旭出式社会適応スキル検査
監　修　者　肥田野直
著　　者　旭出学園教育研究所

SRS-2 対人応答性尺度
原版出版社　WPS
原　著　者　John N. Constantino
Christian P. Gruber
日本版作成者　神尾陽子

Bayley™-III乳幼児発達検査
原版出版社　Pearson
原　著　者　Nancy Bayley
日本版作成者　中澤潤、田中恭子、岩田欧介
松井三枝、片桐正敏、柿本多千代

WPPSI™-III 知能検査
原版出版社　Pearson
原　著　者　David Wechsler
日本版作成者　大六一志、渡辺弥生

WISC™-V 知能検査
原版出版社　Pearson
原　著　者　David Wechsler
日本版作成者　上野一彦、石隈利紀、大六一志
松田修、名越斉子、中谷一郎

WAIS™-IV 知能検査
原版出版社　Pearson
原　著　者　David Wechsler
日本版作成者　上野一彦、石隈利紀、大六一志
山中克夫、松田修

WMS™-Rウエクスラー記憶検査
原版出版社　Pearson
原　著　者　David Wechsler
日本版作成者　杉下守弘

DN-CAS認知評価システム
原版出版社　PRO-ED
原　著　者　Jack A. Naglieri, J. P. Das
日本版作成者　前川久男、中山健、岡崎慎治

Vineland™-II適応行動尺度
原版出版社　Pearson
原　著　者　Sara S. Sparrow
Domenic V. Cicchetti, David A. Balla
日本版監修者　辻井正次、村上隆
日本版作成者　黒田美保、伊藤大幸、萩原拓、染木史緒

SP感覚プロファイル
原版出版社　Pearson
原　著　者　Winnie Dunn
日本版監修者　辻井正次
日本版作成者　萩原拓、岩永竜一郎、伊藤大幸、谷伊織

ご購入は、弊社心理検査販売代理店をご利用ください。　www.nichibun.co.jp

Cross Marketing
株式会社 クロス・マーケティング

＼最高の論文には高品質な調査を！／

クロス・マーケティングの
学術調査
（アカデミックリサーチ）

- ☑ 学術案件年間300本以上！業界最大規模の実績！
- ☑ 500万人超！業界最大規模のアンケートモニター
- ☑ 学界に嬉しい！完全カスタマイズ可能な「オーダーメイドアンケート」
- ☑ まずはご相談から！先生方の望むサービスを組み合わせたオーダープランニング！

お問合せはこちら

0120-198-022 academic@cross-m.co.jp クロス・マーケティング 学術調査

人々の健康を通じて
人類の福祉に貢献する



すべての世代の方々が一生涯にわたって
健康を保ちながら人生を楽しんでほしい。
それが私たち京都工場保健会の願いです。

心理職募集

**京都工場保健会は働く人々の健康管理を支援し、企業そして社会の発展に寄与する産業保健活動に日々邁進致しております。
産業メンタルヘルス領域にご興味ある臨床心理士の方、
京都工場保健会カウンセラーとして活動しませんか？
お問い合わせは下記メールアドレスまで。
MAIL：oike-jimu@hokenkai.jp**

一般財団法人
京都工場保健会

〒604-8472 京都市中京区西ノ京北壺井町67番地
TEL：075-802-0131（代表）

■普通・二輪・準中型・中型・大型・大特・けん引・普通二種・中型二種・大型二種

山城自動車教習所



〒610-0301 京都府綴喜郡井手町多賀西北河原49　京都府公安委員会指定

お問い合わせ・お申し込みは　ヤ マ シ ロ ヨ イ

通話料無料 0120-804641

携帯からは 0774-82-2165 ※携帯電話からは通話料が必要です

WEB仮申込みもご利用いただけます
仮申込みはこちらから→

受付時間
AM9:00~PM8:00 〈日曜日・祝日・水曜日〉AM9：00~PM5：00

やさしい指導に自信があります　■普通一種免許・普通二種免許・高齢者講習・原付講習

山城田辺自動車学校



〒610-0322 京都府京田辺市普賢寺中島4-9（同志社大学田辺校地南隣）　京都府公安委員会指定

お問い合わせ・お申し込みは　サ ン キ ュ ー ヤ マ シ ロ

通話料無料 0120-398046

携帯からは 0774-63-6600 ※携帯電話からは通話料が必要です

WEB仮申込みもご利用いただけます
仮申込みはこちらから→

受付時間
AM9:00~PM8:00 〈日曜日・祝日・水曜日〉AM9：00~PM5：00



月刊自動車管理

A4判・32頁・本文モノクロ刷（ダウンロード資料はカラー対応）
1部定価858円（税込・送料別）・年間購読料8,580円（税込・送料込）

安全運転管理・運行管理および事故処理等に関する専門情報誌です。運転者や車両管理に携わる管理・監督の実務に役立つ情報を満載し、ドライバー、初任管理者からベテランの管理者まで幅広くご活用いただけます。



ホームページの読者専用ページから、運転者教育に役立つカラー資料をダウンロードしていただけます！

ご注文・お申し込みは

株式会社 企業開発センター
〒541-0052 大阪市中央区安土町1-8-6（大永ビル）　TEL 06（6264）1660・FAX 06（6264）1670
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-32-8（YKBサニービル）　TEL 03（3341）4915・FAX 03（3351）5120
〈ホームページからもご注文いただけます〉 https://www.kigyo-kc.co.jp/

INNOVATION STARTING
FROM
THE OFFICE



奈良からはじまる、中小企業のGDX伴走支援

奈良からはじまる中小企業のGDX伴走支援

奈良事務機

〒630-8451　奈良県奈良市北之庄町736-1
TEL 0742(61)0721　FAX0742(62)1813
https://www.narajimuki.co.jp

株式会社奈良事務機は
2022年12月より
株式会社フォーバル(東証8275)の
子会社になりました。

— 全国1300万人のWeb調査モニター保有のアンケートツール —

心理学研究の心強い味方

Freeasy
フリージー

7割以上の研究者様に**年度をまたいで継続利用**いただいています

【 学術調査で継続利用される理由 】

理由1 | 国内最大規模の**全国1300万人のWeb調査モニター**を保有
筑波大学と共同開発のアルゴリズム(特許取得)によって**調査モニターの品質向上**

理由2 | **9つの基本属性や特定の対象者への絞り込み**ができ、さらに自身で回答者の保有が可能。**縦断調査**やグループ分け調査など、学術調査を自身でハンドリング

理由3 | フォーマットに沿って、自身で作成したアンケートを**最短即日アンケート開始**
1日で30,000人以上の回答データをスピーディに回収

理由4 | ツールの**導入費用・ランニング費用は0円**で、**設問数×回収数×10円**のシンプルな料金体系。**業界最安値500円**からWeb上でアンケート調査を手軽に

理由5 | **回答者の匿名性**が保たれていることが前提に、**倫理審査の基準**に沿って、**指定の同意文**を自身で設定したうえでの調査実施が可能

【 こんなお悩みありませんか？ 】

研究費
- ☑ 少しでも調査にかかる研究費を抑えたい
- ☑ 予算に合わず調査会社に依頼できない

サンプルサイズ
- ☑ 調査対象者が確保できないが、大量サンプルを集めたい
- ☑ 学内以外の対象者から回答を集めたい

時間
- ☑ 校務の隙間に自身で効率よく調査したい
- ☑ 提出期限が迫っており、明日にはデータを集めたい

ほんの少しでも該当する方は、まずはアカデミックページをご覧ください

詳しくはこちらから！▸▸▸

学術調査をストレスフリーに
Freeasy
050-1790-3717
アイブリッジ株式会社
Freeasy 事務局

フリージー　アカデミック　検索

https://freeasy24.research-plus.net/academic

すいすい学べる認知行動療法
―行動療法の基本と認知療法、マインドフルネス
松野航大・嶋大樹・原真太郎 著　2530円

要説パーソナリティ心理学
―性格理解への扉
鈴木公啓 編
歴史・概念を確認し、幅広い領域、テーマからその性質や特徴を解説。　2860円

恋愛はどこまで科学できるのか
―恋の不思議に迫る9つのアプローチ
斉藤慎一 著
恋愛に関する重要研究を解説。　2420円

アイデアをもたらす思考
―創造的認知を新製品・サービス開発へ応用する
磯野誠・高橋佳代・島田善道 著
効果的にアイデアを創出する方法をインタビューや実験から明らかにする。　3300円

やさしく学べる心理統計法入門【再増補版】
―こころのデータ理解への扉その3
鈴木公啓 著
基礎が身につく好評テキスト。　2970円

コミュニケーション・デザインのこころ戦略
―対人コミュニケーションの最適化
大坊郁夫 編
相手を知るための心理学。　3520円

発達の理論
―発達の多様性の理解と支援に向けて
小山正 著
人間発達の多様性に着目。理論を発達支援の実践につなげることをめざす。　2750円

児童生徒理解のための教育心理学【第2版】
古屋喜美代・関口昌秀・荻野佳代子 編
教室で出会う事例を導入として基礎事項を実践的に解説。　2530円

現代中国の子育てと教育
―発達心理学から見た課題と未来展望
矢藤優子・吉沅洪・孫怡 編
発達心理学的調査を基にした日中の研究者による最新の研究成果。　4400円

個人と組織のための男性育休
―働く父母の心理と企業の支援
尾野裕美 著
調査から提言を行う。　3300円

触覚　*The Tactile Senses [2nd Edition]*
E・H・ウェバー 著／田﨑權一 訳
ウェーバー・フェヒナーの法則に結実する広範な考察。重量感覚、痛覚、温度感覚などを追究した古典、待望の翻訳。　4400円

コミュニケーションの社会心理学
―伝える・関わる・動かす
岡本真一郎 編
最先端の研究を幅広く解説。　3520円

社会性の発達心理学
長谷川真里・佐久間路子・林創 編著
重要テーマを第一線の研究者が解説。基本を学びたい読者にも、深く知りたい読者にも有用なアドバンステキスト。　2860円

友人グループと学校適応の心理学
―中学生における「スクールカースト」という現象に注目して
水野君平 著　5500円

高齢者による次世代の育児・教育
―「生きる力」を育むネットワークからソーシャルキャピタルへ
諏澤ひろえ 著　4400円

地域からみる女性のライフ・キャリア
―主体的に働き方・生き方を選択できる社会の実現のために
小倉祥子 著
全国調査から分析する。　3080円

関係の世界へ
―危機に瀕する私たちが生きのびる方法
ケネス・J・ガーゲン 著／東村知子・鮫島輝美・久保田賢一 訳
一番やさしい社会構成主義入門。　2420円

心のメモランダム
―人生における33の発見
長尾博 著
日本の臨床心理学発展の時代にその門戸を叩いた臨床心理学者の自伝。　1980円

チーム・ダイナミックスの行動科学
―組織の生産性・安全性・創造性を高める鍵はどこにあるのか
山口裕幸 編著　3630円

認知行動療法のストラテジー
学校心理学プラクティス②
―行動修正法・行動形成法・認知再構成法・おまじない法
中村恵子 著　2640円

精神障がいのある人を排除する社会でよいのか
―国際比較調査からみる人間の価値
樋口麻里 著
国際比較調査から提言。　6600円

金融行動の心理学
―金融心理尺度の開発と応用
佐々木美加 著
金融に対する意思決定はどのような心理プロセスで行われるか。　2200円

司法心理臨床実践
心の専門家養成講座⑩
河野荘子 編
警察、少年鑑別所、家庭裁判所、刑務所などでの有効な心理臨床とは。　3520円

ひかり輝くものを求めて
ハル・モリシタ 著
現代人の来し方と行く末を見つめ、また生き方を問う。　1980円

ナカニシヤ出版
TEL 075-723-0111　〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095　https://www.nakanishiya.co.jp/　〔税込価格〕

Tobiiのアイトラッカーをあなたの実験にも。

アイトラッキング研究の最新の動向がわかる！

Annual Research Report 2023 を是非ご覧ください。



レポートのダウンロードはこちらから

どんどん使いやすくなっている Tobii のアイトラッカー



発達心理

- 赤ちゃんの認知 / 理解 / 感情の発達過程を定量化
- 親と子の共同注意
- 発達障害児と健常児の視線の違い



スポーツ心理

- アスリートの注意・意思決定を可視化
- トレーニングプログラムの強化・改善
- パフォーマンス評価



リーディングの研究

- 読みのプロセスを「見る」
- 読みやすい文章、読みにくい文章の判断
- 第二言語学習者の視線



教育に関する研究

- 教員 / 生徒がなにを見ているか
- 教材や板書の評価
- 授業中 / 学習中の視線

tobii

トビー・テクノロジー株式会社

〒141-0031　東京都品川区西五反田7-7-2 SG スクエア 3F

https://www.tobii.com/ja　sales.jp@tobii.com　03-6420-3990

トラックドライバーの働き方改革に
ご理解ご協力をお願い申し上げます。



公益社団法人　奈良県トラック協会